

山口大学東アジア研究科
博士論文

苗族社会における刺繍と社会関係をめぐる文化人類学的研究
—1950年代以降の中国貴州省黔东南州雷山县西江村を中心として—

楊 梅竹
YANG MEIZHU

目 次

序 章.....	1
1. 研究の糸口.....	1
2. 調査地の概要.....	2
2.1 中国貴州省黔东南州苗族侗族自治州と苗族.....	2
2.2 雷山県.....	4
2.3 西江鎮の苗族.....	6
2.4 西江鎮の自然環境.....	7
2.5 西江苗族の歴史.....	8
2.6 西江鎮の観光発展.....	10
3. 先行研究の概観.....	11
3.1 文化人類学における物質研究の現状.....	11
3.2 苗族刺繍に関する先行研究の概観.....	13
3.3 本論の課題と研究意義.....	15
4. フィールド調査の概要.....	16
5. 問題提起.....	20
第1章 糸からの苗族刺繍研究.....	22
1.1 はじめに.....	22
1.2 苗族社会における刺繍と糸をめぐる研究の現状.....	23
1.3 刺繍糸と刺繍.....	26
1.3.1 西江の刺繍技法と製作過程.....	26
1.3.2 苗族女性の刺繍道具箱.....	30
1.3.3 刺繍糸と刺繍技法.....	32
1.3.4 糸で刺繍を評価する苗族女性.....	34
1.3.4.1 刺繍した糸を揃える.....	34
1.3.4.2 刺繍糸の色の選択.....	36
1.3.4.3 刺繍糸の締め加減.....	37
1.3.5 刺繍糸の色で年代を推測する.....	38
1.4 糸から苗族刺繍を紐解く.....	39
1.4.1 刺繍の価値基準の1つ——刺繍糸.....	39
1.4.2 機械製作と手工製作.....	40
1.5 糸・刺繍・刺繍製作者.....	43
1.5.1 糸の残量により変わる刺繍の色彩構成.....	43
1.5.2 市販の糸で決まる刺繍の色彩構成.....	46
1.6 まとめ.....	47
第2章 苗族刺繍の母系伝承について（技法を中心に）.....	50
2.1 はじめに.....	50
2.2 調査地の概要.....	50
2.2.1 坐家について.....	50
2.2.2 西江苗族刺繍伝承に関する時代背景（1960年代から2019年まで）.....	51
2.3 苗族の刺繍伝承に関する研究の現状.....	52
2.4 西江の苗族刺繍の伝承.....	54

2.4.1	刺繍の種類.....	54
2.4.2	刺繍紋様の伝承.....	55
2.4.3	刺繍技法の伝承.....	56
2.4.3.1	母娘伝承の事例.....	56
2.4.3.2	同時代の女性による伝承の事例.....	59
2.4.3.3	刺繍教室による伝承の事例.....	62
2.4.4	刺繍伝承が置かれている現状.....	63
2.5	母娘伝承を再考する.....	65
2.5.1	母娘伝承と同時代伝承.....	65
2.5.2	刺繍する女性の小群体.....	69
2.6	まとめ.....	70
第3章	苗族の刺繍に関するジェンダー観.....	72
3.1	はじめに.....	72
3.2	ジェンダー論からみた刺繍に関する研究の現状.....	72
3.3	男性と刺繍との関係.....	75
3.3.1	刺繍製作における男性.....	75
3.3.1.1	刺繍の製作過程に参加.....	75
3.3.1.2	刺繍製作過程に参加している男性.....	78
3.3.1.3	刺繍時間を確保する男性.....	79
3.3.2	製作完成した刺繍と男性.....	80
3.3.2.1	女性が自分で使用する刺繍.....	81
3.3.2.2	次世代へ伝承される刺繍.....	82
3.3.2.3	販売用の刺繍.....	84
3.4	考察.....	86
3.4.1	男性の刺繍製作への参与.....	86
3.4.2	刺繍の所有と経営.....	87
3.4.3	男性の消極的な支持.....	87
3.4.4	男性のシャドーワーク.....	88
3.5	まとめ.....	90
第4章	苗族女性の婚姻における衣装の再考.....	92
4.1	はじめに.....	92
4.2	苗族の婚姻と衣装に関する先行研究.....	92
4.3	西江苗族の衣装.....	96
4.3.1	日常着—ウーゲン.....	96
4.3.1.1	ウーゲン.....	96
4.3.1.2	市販のウーゲン.....	97
4.3.1.3	ウーゲンの製作.....	98
4.3.1.4	ウーゲンの着用.....	99
4.3.2	晴れ着—ウーベイ・コーテェイ.....	100
4.3.2.1	ウーベイ.....	100
4.3.2.2	コーテェイ.....	101
4.3.2.3	晴れ着の製作.....	102
4.3.2.4	晴れ着の保存と着用.....	104
4.4	西江苗族の婚姻.....	105

4.4.1	結婚式.....	105
4.4.1.1	結婚式の流れ.....	105
4.4.1.2	結婚式で衣装の展示.....	107
4.4.2	坐家.....	110
4.4.2.1	坐家をした世代.....	110
4.4.2.2	坐家をしなくなった世代.....	111
4.4.2.3	坐家を知らない世代.....	112
4.5	考察.....	114
4.5.1	苗族の衣装.....	114
4.5.2	西江の学校教育・刺繍・坐家.....	114
4.5.3	文化資本としての刺繍の衰退.....	117
4.5.4	社会関係資本を確認する場.....	118
4.6	まとめ.....	120
第5章	苗族社会の財である刺繍と衣装の交換.....	123
5.1	はじめに.....	123
5.2	苗族女性の財（財産）である刺繍と衣装.....	124
5.2.1	苗族女性にとっての「財産」とは.....	124
5.2.2	財としての苗族刺繍と財の交換に関する研究の現状.....	124
5.3	西江の苗族社会における刺繍の交換.....	126
5.3.1	民族衣装の着用.....	127
5.3.2	刺繍品の取引交換（他人の刺繍品を収集し販売する2人の苗族女性）.....	129
5.3.2.1	小規模経営店.....	130
5.3.2.2	刺繍品を買わない観光客との取引交換.....	132
5.3.2.3	大規模経営店.....	132
5.3.3	刺繍品の贈与交換.....	133
5.3.3.1	販売店に出さない刺繍品（秘蔵している刺繍品）.....	133
5.3.3.2	刺繍品の対内的交換と対外的交換.....	134
5.3.3.2.1	現地の人に対するウーゲンとウーベイの貸借.....	134
5.3.3.2.2	外部の人に対するウーゲンとウーベイの交換.....	136
5.4	苗族女性にとっての刺繍の交換.....	136
5.4.1	刺繍品と貨幣の交換.....	136
5.4.2	親疎関係による交換.....	137
5.6	まとめ.....	138
終章	140
1.	論文の各章の要約.....	140
2.	時間を示すモノとしての刺繍.....	142
3.	文化資本としての刺繍から社会関係資本としての刺繍へ.....	144
4.	刺繍により構築・再構築される人間社会.....	146
5.	刺繍と市場経済.....	154
6.	社会の変容と刺繍の変容.....	156
むすび	157
参考文献	160
中国語文献（著者名の中国語読みアルファベット順）	160

日本語文献（著者名の五十音順）	168
英語文献（著者名のアルファベット順）	173
付録 1 苗語表（筆者作成）	176
付録 2 李 YW（1939 年生、男性、羊排村）のライフヒストリー（筆者作成）	181
付録 3 宋 H（1963 年生、女性、東引村）のライフヒストリー（筆者作成）	184
付録 4 西江刺繍伝承の時代背景（筆者作成）	185
付録 5 宋 H の刺繍時間.....	188
付録 6 宋 H 夫婦の日常（筆者作成）	190
付録 7 録音資料 李 YW（1939 年生、男性、羊排村）と宋 H（1963 年生、女性、東引村）夫婦との会話.....	195
付録 8 録音資料 穆 XH（40 代、男性、控拝村）との対話	197
付録 9 録音資料 宋 H（1963 年生、女性、東引村）との会話	200
付録 10 録音資料 宋 H（1963 年生、女性、東引村）との対話.....	204
付録 11 録音資料 李 a との会話（1970 年生、女性、平寨）	211
謝辞.....	240

序 章

1. 研究の糸口

本論は中国西南部に位置する貴州省黔东南州苗族侗族自治州雷山県西江鎮の西江村¹を調査地として、ムー（Humb）と自称する苗族の人々、そして彼ら/彼女らの手工芸として見られてきた刺繍²を文化人類学的に考察するものである。本論でいう刺繍は布地に色系で紋様を縫い表す技術、またはその縫い表したものを指す。刺繍をする苗族の女性は1枚の布地に紋様を縫い付けたものを漢語で繡片³と呼ぶ。そして繡片を子供の帽子、おんぶ紐、衣装などに縫い付けて装飾する。本論では繡片で装飾したものを刺繍品と表記し、とくに衣装を強調する場合、刺繍服や刺繍の衣装と表記する。

本論では刺繍が持つ物質性をモノ論の観点から再検討する。中国また苗族社会が社会的・経済的に変動しつつある時代において、刺繍というモノを介して人は、あるいは人というアクターを介して刺繍は、いかなる関係・状態を構築・再構築しているのかを明らかにする。

はじめに本論で主たる論点となるモノ論が文化人類学の分野において提起されるようになった背景を確認しておきたい。19世紀末から20世紀の半ばにかけて、第2次産業革命が浸透し、近代化が進む一方、人間を中心とし、自然を客体とし、人間の認識能力によって物事を解釈できるというモダニズムが主張されてきた[Berman 1982]。一方、1960年代以降は、芸術、建築、デザインなどの分野を中心に、進歩主義や主体主義を重視するモダニズムを批判するポストモダニズムの潮流が現れた。ポストモダンの研究の影響を受け、「主体と客体の脱中心化」という主題に対し、いわゆる「存在論的転回」が文化人類学を席卷するようになる。多くの研究者において存在論的転回の定義は異なるが、その代表的論者の1人であるブルーノ・ラトゥールは「アクターネットワーク理論」において、人（実験者）とモノ（実験器具）の対称性から人間中心主義的であった近代の虚構性を批判的に議論した[ラトゥール 2008]。このような状況において、人間だけでなく、非人間の主体性を強調する脱人間中心主義の物質研究が現れた。本研究もこのような研究の流れをくみ、人間と非人間の両方が主体と客体になり得るという視点に立つ。

2000年代以降、中国各地では急速な観光開発が進められてきたが、代表的な苗族地域である貴州省黔东南州雷山県西江村もその例外ではない。同地は観光化が進み、苗

¹ 中国では行政単位は国、省、市、区、鎮（郷）、村（行政村）、村（自然村、寨、自然寨）のように分けている。

² 刺繍は苗語でアーフォ（IPA表記:a:fau）という。

³ 苗語ではガンリュウホオビェ（IPA表記:gan liəu həu bi'æ）という

族刺繍は芸術品として扱われ観光商品となっている。機械で作られた刺繍、手工で作られた刺繍、外部から西江に取り入れられた刺繍が混在し、若い世代の刺繍継承者が少ないという現状がある。このような状況において、これまでは如何にして現地の刺繍を保護し伝承していくかが一般的に議論されてきたが[劉 2007、王・翟・梁 2013]、本論はこういった立場からは一定の距離を保ち、現地社会において観察可能な刺繍の継承と伝承の現状、西江の刺繍技法、刺繍紋様、特徴とその社会背景を記録し、苗族社会と刺繍作品の双方向的な変化を民族誌的に記述する。

本論では刺繍製作の主役である苗族の女性の語りをもとに、苗族女性の婚姻における刺繍の位置づけ及び役割、苗族女性の財としての刺繍の価値、さらに刺繍をしない苗族男性の観点から刺繍に対する考え方、西江村苗族刺繍の技法、紋様、色の記録などの面を考察する。その一方で、1950年代から現在までの変化の著しかった時代における苗族社会を動態的な視点から議論する。刺繍糸の物質性から技法・紋様・色彩の特徴を検討し、伝承、ジェンダー、婚姻、交換などという点を、刺繍というモノの観点から展開し、これまでの研究を補完する。

西江苗族社会の人々の視点から見れば刺繍を手工製作するには多大な時間が必要であることは言うまでもないことである。本論では製作時間を物理的なモノとして示せることが刺繍に特異な物質性であるという観点から、刺繍がアクターとして苗族社会においていかに機能しているのかについて検討する。そしてフィールドワークに基づいた現地の人々の視点から、刺繍の果たしている社会的機能及び象徴、交換、財といった刺繍の位置づけを考察し、社会によって築かれる刺繍、および刺繍により築かれる社会関係を明らかにする。

2. 調査地の概要

2.1 中国貴州省黔东南州苗族侗族自治州と苗族

中国は56の民族を擁する多民族国家であり、最も人口の多い漢族と55の少数民族からなっている。貴州省（略称：黔）は中国の西南部に位置し、省都は貴陽市である。東は湖南省、南は広西チワン族自治区、西は雲南省、北は四川省と重慶市と接する（図1）。

省域は起伏に富んだ雲貴高原（標高1,000m）であり、雲南省から湖南省へ向かって低くなっていく。北側にある烏江は重慶の涪陵で長江に注ぎ、南側は紅水河（珠江上流）の上流域となり、貴陽、安順などのある省中央部は、2つの河川の分水嶺になっている。貴州省全体は亜熱帯高原であるため、特に夏は涼しく、過ごしやすい。



図1 中国地図（筆者作成）

苗族は中国の5大少数民族⁴の1つであり、9,426,007⁵の人口を擁し、政府の統計に基づけば貴州にはその半数近い4,299,954⁶人が居住している。貴州省黔東南地域ではとりわけ多くの苗族が居住しているため、苗族の「奥地」とも称されてきた。同地域に居住している苗族の人口は中国全土の苗族人口の6分の1⁷を占めており、また多くの研究において、黔東南地域の苗族は「黒苗」支系に属していると指摘されていた[鈴木・金丸 1985:23-25]。20世紀初頭、鳥居龍蔵は、貴州省の苗族を「紅苗」、「白苗」、「黒苗」、「花苗」などの82の支系に分類したが[鳥居 1976:25]、1951年、「これら

⁴ 2010年の人口第六次全国人口普查のデータによれば、中国5大少数民族は壮族（人口16,926,381）、回族（人口10,586,087）、満族（人口10,387,958）、ウイグル族（人口10,069,346）、苗族（人口9,426,007）である。

⁵ 「第三部分 2010年第六次全国人口普查主要数値公報 2010年第六次全国人口普查主要数値公報(第1号)」、『第六次全国人口普查主要数値』、2010年、中国統計出版社、pp. 41-45

⁶ 「付録 付録1 貴州省2010年第六次全国人口普查主要数値公報」、『貴州省人口普查資料』、2010年、中国統計出版社、p. 2039、pp. 2041-2043

⁷ 苗族人口：『中国2010年人口普查資料』(中国統計出版社2010年)により、全国の苗族人口数は9,426,007人である。『貴州省2010年人口普查資料』(中国統計出版社、2010年)により、黔東南地域の苗族人口数は1,447,257人である。

の表記は明確に侮辱的性質を持つ少数民族の名称である」として国務院（当時は「政務院」）により使用禁止令が出された⁸。しかし中華人民共和国成立後、出版された地方誌や論文などにおいて、苗族は依然としていくつかの「支系」に分類されている。たとえば、苗族出身の研究者である伍新福は衣装の色により白苗支系、花苗支系、青苗支系、黒苗支系、紅苗支系などの支系に分けている[伍 1990:87]。民族学研究者の楊廷碩はまた、苗族の分布により東部支系、南部支系、西部支系、北部支系、中部支系に分けている[楊 1998:72-74]。これらの研究史および衣装の色による分類から、本稿で対象とする雷山県西江村の苗族は黒苗支系に属するものとする。

苗族の歴史に関しては、「苗族は戦争のため、移動を余儀なくされた民族」であるという語りになされ、そのために苗族は中国の南方に広く分布していると一般に解釈されている。戦争や自然災害で西へ移動した苗族の一部は雷公山に定住した。苗族は稲作文化を有しているが、稲作を続けるため、高い山、深い森林を水田に開墾し、棚田を作ったとされる。黔東南地区に居住している苗族は国内の苗族の1/4を占めているという。

苗族は独自の言語を使用し、それらは大きく湘西、黔東、川黔滇の3つの方言区に分けられている[呉・呉 2007(五):234]。また苗族は文字を持たない民族であるため、苗族の刺繍は時として自民族の歴史を記録する「文字」の役割を持っていると説明される。

2.2 雷山県

貴州省黔東南苗族侗族自治州は雲貴高原の周辺地域にあり、南は広西チワン族自治区柳州地区と接し、西には黔南布衣族苗族自治州があり、北は遵義地区、銅仁地区と接している(図2)。黔東南州は凱里市及び麻江、雷山、丹寨、黄平、施秉、鎮遠、三穗、玊、天柱、錦屏、黎平、從江、榕江、台江、劍河など15の県と凱里経済開発区、116の郷と90の鎮からなっている(図3)。雷山県は凱里市まで42キロ、西江鎮は雷山県の東北部に位置している。

2015年12月24日、全長21.9キロの凱雷高速⁹が開通した。凱雷高速は貴州の最も短い高速道路で、西江の観光を発展させるために作られたものである。凱雷高速は短いですが、西江千戸苗寨¹⁰を代表とする苗族村の観光に関しては効果的な影響をもたらしている。沿線には4つの観光地と13の苗寨¹¹があり、凱里市内と西江千戸苗寨を繋い

⁸ 1951年5月15日、国務院（当時は「政務院」という）が『政務院関于处理带有魏岐視或侮辱少数民族性質的称谓、地名、碑碣、匾聯的指示』を公布した。

⁹ 凱里市と雷山県を繋ぐ高速道路である。

¹⁰ 中国で一番大きい苗族の村落であり、村の住民の戸数は千戸以上あるため「西江千戸苗寨」と呼ばれる。

¹¹ 苗族の人が居住する村落を「苗寨」と呼ばれる。

でいる。



図2 貴州省地図（筆者作成）

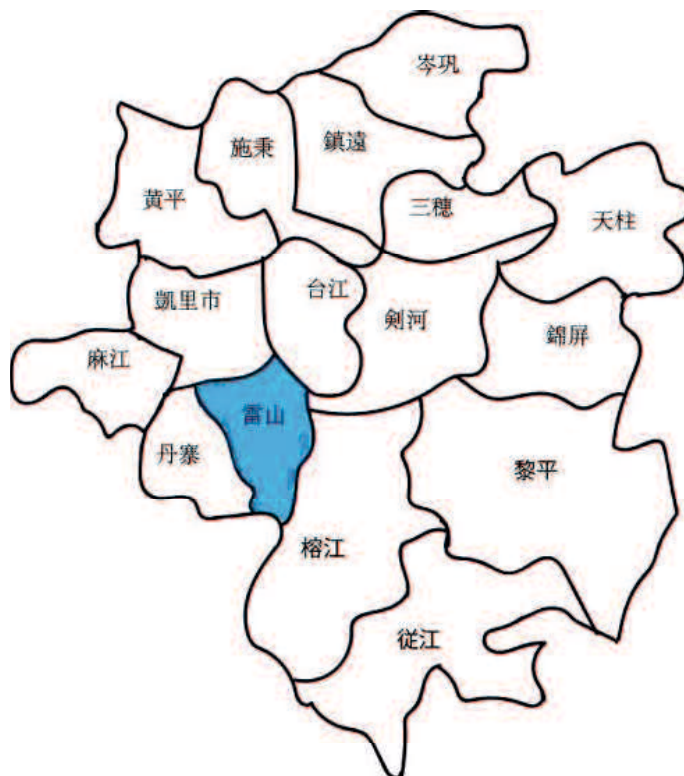


図3 黔东南苗族侗族自治州地図（筆者作成）

黔東南州の面積は 30,337.1 平方メートルであり、黔桂鉄道、湘黔鉄道、国道 320 と国道 321 が県内を通っている。人口 446.91 万人で、苗族、侗族、漢族、布衣族、水族、瑶族、壮族、土家族など 33 の少数民族が住んでいる。少数民族の人口は全州人口の 82%で、そのうち苗族は 42%を占めている。黔東南州は山が続き、境内は雷公山をはじめとする 27 箇所の植物保護区と自然保護区がある。また、清水江、舞陽河と都柳江の 3 つの川がある。雷山県の気候的特徴については、雷山県全域の年平均気温が 15.4℃で、四季の気温変化が顕著であり、年間平均降水量は 1,286.7mm である[易・顧・熊 2014:8653]。西江鎮は温暖湿潤気候であり、年平均気温が 14~19℃であり、豊富な自然資源、鉱産資源、生物資源を有している。

2.3 西江鎮の苗族

西江鎮の千戸苗寨は中国で一番大きい苗寨であり、白水河の両側にある。西江鎮は 1992 年に形成され、24 の行政村（注 1 参照）、58 の自然寨、222 の村民組合と 1 の居民委員会¹²からなっている。全鎮は 5,759 戸、人口 24,147 人、そのうち苗族の人口は 21,585 人、総人口の 90%近くを占めている。

西江の苗族の先祖が「Dlib（日本語発音：ジー、IPA 表記:dʒi:）」氏族に属している。西江のあたりは田圃（苗語の「jangl（日本語発音：ジャン、IPA 表記:dʒaŋ）」は田圃という意味）が多いため、まわりの苗族に「Dlib jangl」と呼ばれるようになったという。清の時代、1738 年の「改土帰流¹³」により、「Dlib jangl」が統一され、音訳で「Dlib jangl」を漢語で「鷄講（日本語発音：ジージャン、IPA 表記:dʒi: dʒaŋ）」と呼ばれるようになった。西江鎮の北には台江県、西北は凱里市、東北は国家級自然保護区雷公山が位置する。

本論の調査地である雷山県は貴州省の東南部に位置し、西江鎮西江千戸苗寨（西江村）は雷山県の東北部に位置する¹⁴。2017 年の西江村の人口規模は 1,432 戸、5,515 人である¹⁵。当地は農業が主産業で、米、野菜などを作っていたが、近年は観光地として有名になり、観光産業に従事する者も少なくない。

西江は苗族の伝統的な文化が残されてきたところであるとされている。苗族の伝統的な飲食、服飾、建築、宗教儀礼、信仰、工芸などは西江ではよく守られてきたと語られる。蘆笙、銀飾、吊脚楼、刺繡、酒や酸湯などから、西江住民の日常生活をうか

¹² 中華人民共和国において都市地域社会に設置された住民組織である。日本の町内会にあたり、住民の相互扶助組織として「大衆の自治組織」と性格づけられる一方、行政系統の末端に位置付けられており、政府の保護を受けながら行政の補助機能を担っている。

¹³ 元代から清朝初期にかけての王朝中央政府による地方の原住民に対する間接統治システムであった「土司制度」をしだいに廃止し、王朝中央政府直轄の州県制に転換させ、科挙に合格して選抜された「流官」を派遣し直接支配するという、明代以降の一連の制度転換をいう。

¹⁴ 『貴州省地図』、2006 年、中国地図出版社、p. 45

¹⁵ <https://baike.baidu.com/item/%E8%A5%BF%E6%B1%9F%E9%95%87/7922847?fr=aladdin> 参照、2018 年 1 月 2 日取得

がうことができる。西江千戸苗寨は「中国苗族第一寨」と呼ばれ、観光資源が豊富であり、自然景観と人文景観¹⁶が両方みられるところである。貴州の苗族出身の研究者である呉育標・馮国榮は「西江は千年以上の歴史をもち、千棟以上の吊脚楼があり、中国さらに世界において最も大きな苗族集落である。また、西江では世界中の苗族の歴史、社会、経済、文化が見られる」[呉・馮 2014:1]と指摘する。

2.4 西江鎮の自然環境

雷公山は苗嶺山脈の主峰であり、東経 108° 5' ~108° 24'、北緯 26° 15' ~26° 32' に位置し、貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県、台江県、劍河県、榕江県の4つの県にまたがっている。苗嶺山脈は十数の1,800メートル級の峰からなっている。山脈は西北が高く、東南が低く、東北から西南に向けて「S」字の形で伸びている。雷公山国家森林公园は雷山県の白岩村、響水岩、雷公山頂、高岩村、水溪村、蓮花などを含み、海拔1,000~3,000メートル、面積4,354.73ヘクタールであり、森林の覆蓋率は83%占めている[呉・馮 2014:23-43]。

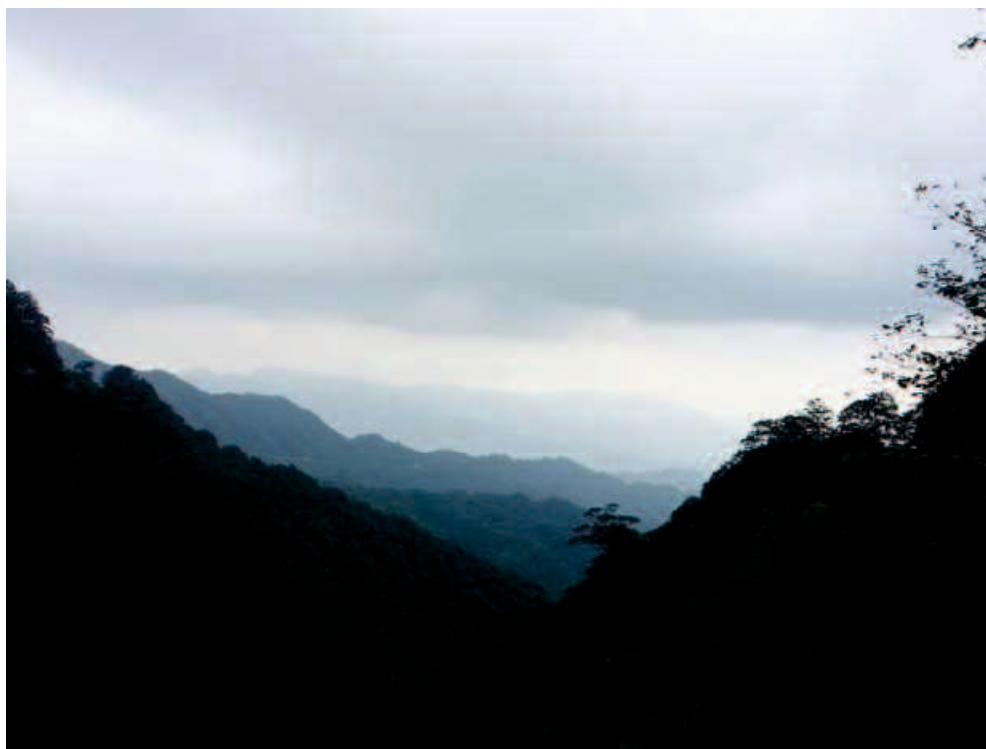


写真1 雷公山（筆者撮影）

2.5 西江苗族の歴史

苗族社会は無文字社会であり、口頭伝承によって祖先の歴史を保持してきた。本論

¹⁶ 文化景観とも言う。人間と自然の創造力により構築し、地域特有の文化を反映する景観である。その例として、建築、服飾などが挙げられる。

で調査地となる西江の苗族も同様である。西江では何世代にもわたって伝わってきた伝説があり、それらの伝説を紐解くことにより、西江苗族の「歴史」の一端を把握することが出来る。

その伝説によれば、西江の住民は上古時期の「三苗国¹⁷」の末裔であり、始祖は蚩尤であったとされる。「蚩尤には3人の息子がおり、西江の苗族は蚩尤の3番目の息子の子孫である。蚩尤の三男の子孫である『哈飛』は劉邦と仲がよく一緒に戦った。劉邦がその後哈飛を裏切ったので、敵になった。結局哈飛は劉邦に負け、息子の虎飛も劉邦に敵わなかった。最後に、虎飛は4人の息子引虎飛、莫虎飛、彫虎飛、和虎飛と相談し、和虎飛は残って虎飛と一緒に戦い、引虎飛、莫虎飛、彫虎飛は西へ移動することにした。引虎飛、莫虎飛、彫虎飛の3人はその後、西江で定住することになった」[張 1997:6-7]。この内、莫虎飛は雷公坪に移住し、「苗家皇城」を建立した。それだけでなく、西江の侯昌徳（生年不詳、男性、西江出身）は「父子連名」¹⁸に従い、蚩尤から清代の雍正年間の1738年に行われた「改土帰流」にて戸籍を作るまで、引虎飛の子孫の苗族の名を覚えていたという。これによれば、それは始祖の蚩尤から280世代続いていたとされる[張 1997:17-18]。

2016年2月のフィールド調査の際における、李 YW（1939年生、男性、羊排村）の話によると、「父輩（父の世代）から聞いた話だが、私たちの祖先は蚩尤であり、昔戦争のため、蚩尤の子孫である引虎飛と莫虎飛が苗族の人を連れて西江まで逃げてきた。逃げるときは長い旅で苦労した。引虎飛と莫虎飛は芦笙を作り、銅鼓を作り、女性たちは踊りをして過ごしていた。そのため、今の苗族は芦笙、踊りが好きだ」と語る。現在でも西江の人々は自分の祖先は蚩尤の子孫の引虎飛と莫虎飛であると認識している。また観光開発もあり、政府は西江で蚩尤と引虎飛、莫虎飛の石碑を作り、苗族の歴史を文字として刻んでもいる。

¹⁷ 唐堯は天下を虞舜に譲ったが、三苗の首領はそれを非難した。帝である堯は三苗の首領を殺したため、一族は反逆し、船で南海に漂流して三苗の国を作った。

¹⁸ 本論 pp.95-96 の父子連名の事例を参照。



写真2 引虎飛と莫虎飛（筆者撮影、2016年2月）

写真2の上部に刻まれている苗族の歴史（()内は筆者補充）

「荆楚蛮夷¹⁹」春秋戦国時代、荆楚は「五覇」「七雄」の1つである楚国の主たる民衆となった。その後、秦は巴を奪い、蜀を併呑し、楚を滅ぼした。川湘鄂の苗族は戦争から逃げるため山奥に逃げ続けた。西漢初期に、川黔湘鄂あたりの山奥に苗族の先民は広がった。彼らの中の大部分は澧水（湖南省北部を流れる川で洞庭湖にそそぐ）、沅江（貴州省・湖南省を流れる川）を渡り、武陵地帯の「五溪」地区に入った。当時は「五溪蛮」と呼ばれていた。秦漢から唐の末期に至って、封建王朝は相次いで「五溪蛮」にある苗族のところに進兵したので、「五溪蛮」の苗族は逃げるためまた「五溪」の奥へ遷移した。遷移は2つの路線に分かれた。1つは舞陽江西を沿い、思州（現在の岑巩県）に至った。もう1つは沅溪（現在の清水江）に沿って西へ向かい、黔東南の一部である雷公山のあたりに着いた。南下し広西北部に至った一部の苗族は都柳江に沿って北上し、一部は榕江、従江、丹寨に定居し、一部は雷公山のあたりに定住した。

¹⁹ 商の時代（紀元前1600年～紀元前1406年）から、中原（洛陽から開封までを中心とした黄河中下流域）の人は漢江地区（長江、漢水の合流域、湖北省の西部に位置する）の南方地域と南方部族を「荆楚」と呼ぶ。中国の古代は華夏族以外の民族を南蛮、北狄、西戎、東夷と呼び、「蛮夷戎狄」を「蛮夷」「四夷」ともいう。

2.6 西江鎮の観光発展

筆者が現地調査を始めた 2015 年の時点で、西江はすでに観光開発が進み、観光業が盛んであった。観光化の影響によって調査地には大きな変容が起きた。それらの主だった経緯は、筆者の現地での聞き取り調査及び文献調査をもとに整理した表 1 の通りである。

表 1 西江の観光発展

番号	時間	内容
1	1982 年	西江は貴州省人民政府により「貴州省東線民族風情旅行景 点」と指定された。その前から観光に来る人はいたが、交 通が不便なため、観光の規模がは限られていた。その状態 は 20 年近く続いていた。
2	1992 年	西江千戸苗寨は貴州省政府により省レベル文物保護単位 と認定された。
3	2003 年	「苗年文化週」が西江で行われ、メディアにより報道され たことにより、西江苗寨の観光開発が伸展した。
4	2004 年	貴州省初期村鎮の保護と建設の重点村とされた。
5	2005 年 11 月	「苗年文化週 ²⁰ 」の間に、「中国民族博物館西江千戸苗寨 館」が成立した。
6	2007 年 9 月 24 日	貴州省第十屆人民代表大会常務委員会第二十九次会議が 行われ、『貴州省風景名勝区条例』を定め、12 月 1 日から 施行された。貴州省全省の観光地の開発は『貴州省風景名 勝区条例』に従い推進している。
7	2008 年 9 月 26 日	「第三屆貴州旅行産業發展大会」が雷山県西江千戸苗寨で 行われた。この会議により、黔东南州政府が 2.7 億元（日 本円で約 41 億円）を投入し、「看西江知天下苗寨（日本 語訳：西江を見れば天下の苗族の村を知る）」というテー マをめぐり、西江の観光開発を推進している。
8	2015 年	貴州省の省都である貴陽市から凱里までの高鉄（日本の新 幹線）が正式に運営し始まった。
9	2017 年	西江の観光をさらに發展させるために、凱里市から雷山県 までの「凱雷高速」が完成した。交通の改善により、西江 へ行く観光客が増えている。

²⁰ 西江苗族の正月は毎年 11 月中旬であり、初年、大年、晩年がある。その中で、最も賑やかなのは大年と晩年である。2019 年西江の正月は初年は 9 月 27、大年は 10 月 21 日、晩年は 11 月 14 日である。特に大年から晩年の期間は苗族文化を表すイベントがたくさんあり、「苗年文化週」と呼ばれる。

3. 先行研究の概観

本論では中国西南部にある苗族社会の手工芸である刺繍に焦点を絞り、刺繍をモノとする視点から、そのモノと人間の相互関係を考察する。すなわち、刺繍から物質文化研究の可能性を探究することを目指す。そのため、以下ではまず文化人類学における物質文化研究の動向を概観する。

3.1 文化人類学における物質研究の現状

19世紀には博物館の誕生という時代背景の下、西欧圏以外の社会への関心が高まり、人類学初期の研究者たちが進化論と物質研究を結びつけるような傾向が強かった。人類学の草創期には物質文化研究は関心を集めた領域の1つであり、その時の物質文化研究は主にモノを創造した人間の主体性を強調したものであった。そして20世紀の初めごろまで物資研究が一時期大きな学術潮流となった[床呂・河合 2011: 6-7]。

1900年代初頭に、イギリスの人類学者マリノフスキーによる機能主義(functionalism)やラドクリフ＝ブラウンによる構造機能主義(structural-functionalism)が登場し、人類学が少しずつ独自の学問分野として確立されるようになった。そして、構造主義の祖であるフランスの人類学者レヴィ＝ストロースが社会組織や親族組織に対して新たな研究枠組みを提示すると、文化人類学は哲学や現代思想に対しても大きな影響力を与えるようになった[Lévi-Strauss 1949]。ただ、マリノフスキーらの影響で、20世紀前半における人類学は機能主義や構造機能主義を中心とする抽象的なシステムへの関心が主流であり、この頃に具体的にモノを研究する物質文化研究は生業、親族、儀礼などと比べ、ドイツ語圏を除き、それほど活潑であったとはいえない状況にあった。

このような窮境を打開したのは1980年代以降のアパデュライ[Appadurai 1986]やダニエル・ミラー[Miller ed. 1986]らの研究であった。アパデュライとミラーによって、それまでのモノを創造した文化社会、従来の人間中心主義的な物質文化研究のという限界を超え、社会における人とモノの関係を重視し、物質文化研究に新たな研究視座が提供された。

フランスの人類学者のブルーノ・ラトゥールや英国の社会人類学者のアルフレッド・ジェルも似たような指摘をしている。ラトゥールは「主体—客体」(「社会—自然」)という近代的二分法から脱却し、「人間—非人間」によるアクター・ネットワーク理論(Actor-network-theory, ANT)を提出した[Latour 2005]。またジェルは美術の分野から出発し、人類学は社会科学であり、芸術人類学は単純に異文化の美意識を研究するのではなく、芸術品の生産、流通などの社会脈絡に焦点を当てることを強調している。ジェルは「芸術人類学理論は『排他的』な芸術対象のカテゴリや分類をその

主要な理論用語とすることはできない。その理由を言えば、私が主張してきたように、この理論の全体的な傾向として、人間と物との社会的関係の存在によって『人』と『対象』が融合し、人間は物をとおして存在する領域を探求するからである（筆者訳）」²¹[Ge11 1992:12]と指摘し、社会における人間とモノの相互作用によって作り上げられた社会関係を重要視している。芸術だけでなく、ティム・インゴルドは「つくることは作者と素材のあいだの相互作用であり、芸術と建築同様、人類学と考古学の分野でもこのことはあてはまる」[インゴルド 2017:5]と述べている。

このように、従来の物質文化研究と区別するため、人間と非人間の主体と客体の交替を重要視する物質研究は近年「モノ」研究と呼ばれている。1990年代以降、物質文化研究は復活し、たとえば、日本では文化人類学会では『民族学研究』²²において「物質文化研究の新たな可能性を求めて」という特集を組み、吉田憲司[1998:518-536]や橋本裕之[1998:537-562]の論文が収録されている。近年日本でモノ研究の可能性を探り続けてきた代表として床呂郁哉・河合香吏[床呂・河合 2011、2019]が挙げられる。

このような流れと並走する形で、1980年代以降の物質文化研究はモノから人、さらに社会の相互作用という視座に立ち、手工芸に関する研究が蓄積されるようになった。たとえば、田口理恵はインドネシア・スンバ島の布というモノを取り上げ、布の生産活動を軸に、生産工程、慣習的な作用、販売、流通などの面から考察し、モノから社会に力点を置き、モノがつくる人間関係に注目した[田口 2002]。似たような研究として金谷美和のものがある。彼女はインド西部グジャラート州の絞り染め技法によって生産されている女性の被り布を研究対象として、被り布というモノがいかに関係社会の社会関係を構築するかに焦点を当てた[金谷 2007]。日本社会を対象としたものとして、黒田末寿は日本の鍛冶屋の調査において、道具や製作材料と人間の相互作用に注目している[黒田 2019]。また青木啓将は日本刀を研究対象に、その生産、流通、鑑賞などを検討し、「それぞれに異なる履歴を持つ人びとと刀、多様かつ、ある一定の共通性が見出される相互交渉のあり方」[青木 2019:4]を描きだしている。

このような研究の潮流において、ジェル、インゴルド、田口、金谷などの研究は本論に示唆的な視座を提供してくれる。以上の先行研究でも示されてきたように、変動しつつある社会状況の中で苗族が手工芸品である刺繍というモノを介して、いかにローカルな社会の関係を構築・再構築しているか（構築・再構築されるか）を明らかにすることが本論の目的である。

²¹ 原文：The anthropological theory of art can not afford to have as its primary theoretical term a category or taxon of objects which are ‘exclusively’ art objects because the whole tendency of this theory, as I have been suggesting, is to explore a domain in which ‘objects’ merge with ‘people’ by virtue of the existence of social relations between persons and things, and persons and persons via things.

²² 日本文化人類学会の機関誌、『文化人類学』の継承前誌である。

3.2 苗族刺繍に関する先行研究の概観

苗族刺繍に関する研究の現状を見る前にまず世界の刺繍に関する研究を概観しておきたい。これまで刺繍に関しては多くの研究が蓄積されてきた[Sakiestewa 1989、Paine 1989、Blanchard 2002:661-679、Paine 2006、Weir 2007、Fursova 2008:0-106、Torimaru 2008、Mondal 2009、Buruma 2009:74-89、Parker 2010、Tyagi 2012:185-202、Rusli 2016、Silberstein 2016、Nofierni 2017:1-8]。

これらの中には刺繍は女性文化であると言う研究も少なくない[Wilkinson-Weber 1999、Segalo 2018]。シェイラ・ペインは刺繍に関心を示し、大英博物館のファブリック・コレクションのシリーズとして、インドとパキスタンの刺繍[Paine 1989]、アフガニスタンの刺繍[Paine 2006]に関する写真集を出版した。その中で、数多くの写真をとおして刺繍の紋様や素材、技術を紹介し、刺繍が表している使用者の身分、階級、さらに宗教的な意味について説明的な文章をつけている。ポロック・マコーレーはスペインの伝統的な刺繍に着目し、刺繍製作者の生活や生産環境を記録すると同時に、刺繍の紋様や技術に関心を示し、刺繍は芸術、歴史、記憶を表すものだけではないとし、刺繍製作者と製作者同士、コミュニティなどの関係について検討した[MacAulay 2000]。

苗族の刺繍に関する研究は、中国と日本が圧倒的に多く、欧米圏における苗族刺繍に関する研究は決して多いとはいえない。筆者が調べた文献に限っていえば、苗族の刺繍に関する英文資料は中日研究者によるものが多い[Torimaru 2008、Zhang 2014]。欧米圏において苗族刺繍に関する研究があることはあるが、それが大きな影響力を持っているとは言えない状況である。それに対して、日本では鳥居龍蔵をはじめ、この100年の間に日本の研究者が行った苗族に関する調査は、かなり早い段階から存在し、研究蓄積も多い。そのため、本論では中国と日本の文献や論文を中心とする（もちろん刺繍全般をめぐる議論はその限りでない）。

中国においては、1980年代以降に研究者たちが苗族の刺繍に注目し始めた。1980年代から1990年代に発表された論文は少なく、刺繍を芸術品として扱い、刺繍の紋様、造型及びその意味合いについて検討したものがほとんどである[岐 1983:52-53、馬 1992:53-58、范・楊 1993:35-37、楊 1994:54-58、蒙 1995:36-41、張 1995:141-144、薛 1996:58-67、韓 1997:12]。さらに2000年代以降の研究者たちにとって、刺繍は依然として芸術品として魅力が強調され、象徴論的な研究が現在になっても苗族刺繍研究の中心であり続けている[楊 2002:26-29、楊 2003:2-3、丁・龍 2003:25-28、龍 2003:47、田 2003:72-73、黄 2007、陳・龍 2007:112-113、陳 2009:27-29、孟 2009:19-22、楊 2010:282-283、龍 2011:79-81、魏

2014:116-118、白 2014:31-32、陳 2015:58-62、何・金 2015:92-95、馬・王 2016:117-120、劉 2016:70-72、錢 2019:95-96]。本研究では刺繍を芸術品ではなく、モノであるという立場をとり、象徴論的な議論から距離を置き、モノとしての刺繍を理解しようとし、さらに刺繍がアクターとして苗族社会においていかに人間社会を構築・再構築しているのかという問題を探究することを試みる。

中日において、苗族の刺繍に関しては、刺繍は女性の文化であることが定説であり[張 1997、張暁・張寒梅・潘璐璐 2017、李 2011(2):45-48、聶 2014(2):88-100、楊・張 2017:41-49]、刺繍で装飾した衣装と結びつけて研究するものもあれば、刺繍そのものに注目しているものもある。1980年代以降、刺繍に関する研究が盛んになり、その中で多くの研究者は刺繍の紋様と技法に関心を寄せてきた。それらは刺繍紋様の意味、技法の紹介、紋様の分類、紋様と技法、色彩などに関するものが多い[美術資料組 1978:1-50、汪 1983:1-36、岐 1983:78、李・張・周 1996:204-246、楊 1997:116-217、何 2004:200-214、張 2004:175-183、吳 2006:122、楊 2010:282-283、黄 2011:43-49、周 2011:113-129、鈴木 2012:463、鳥丸 2017、范・楊・藍 2018]。刺繍の伝承に関しては母娘の関係を重視する成果も多くだされた[吳 2006:118-124、龍 2008:101-104、劉 2008:325-328、黄 2011(48):43-49、佐藤 2014:305-327]。とはいえ、これまでの苗族社会の刺繍に関する研究において、男性は全く言及されていないわけではない。たとえば、曹端波・傅慧平・馬静[曹・傅・馬 2013:122]、吳育標・馮国榮[吳・馮 2014]、鈴木正崇・金丸良子[鈴木・金丸 1985:131-132]の研究は刺繍が苗族の男性と女性の恋愛と婚姻において重要な役割を果たしていると指摘した。

近年の動向として、苗族社会の観光化が進む中で、女性が刺繍をとおして、家に経済的な貢献を果たすことができるようになり、家庭内での地位が向上し、かつてより家庭内における決定権を持つようになってきているという、葉蔭茵[葉 2017(133):86-92]、廖婧琳[廖 2018(1):41-48]、齊玉莹[齊 2018(1):25-28]などによる研究がある。

また張建春[2005:72-74]、王孔敬[2008:38-41]、王振豪[2013:217-227]などは、観光化が進む中で、刺繍が苗族を代表するような特色として表象され、文化的価値が高まることで経済的価値も上昇していることを指摘している。苗族刺繍が重要な「文化商品」として市場に進出し、他民族からの注目を集め、商品としてよく売れるようになり、研究者たちは刺繍の交換に注目し始めている。しかし、彼らの関心はほとんどは対外的な交換であり、対内的交換に多少は触れてはいるが、それらは恋愛、婚姻あるいは祭りなどにおける男性と女性との間の、あるいは2つの婚姻集団の間の刺繍の交換といった限定的な議論に留まっている[袁 2011:46-50、袁 2012、羅・馬

2012:97-105、席克定 2013:87-95]。

以上は中日における苗族刺繍に関する研究の現状であり、刺繍を女性文化とし、刺繍そのものに関する研究、刺繍を作る人に関する研究、刺繍が所属する社会を研究するという文脈で研究が蓄積されてきた。しかし、これらの研究は刺繍を芸術品として、あるいは苗族文化を象徴する媒介として見られており、あくまでも人間社会側、つまり人間中心主義的な視座から刺繍を見てきたといえる。社会的・経済的な面で急激に変動している苗族社会において、刺繍というモノを中心に考察する視点は看過されてきた。そのため、本論では刺繍の主体性という観点から議論を進め、刺繍という「モノ」から社会を見るという視点から、刺繍により構築・再構築される人間の関係に注目する。

3.3 本論の課題と研究意義

本論は苗族の手工芸である刺繍をモノとして見る立場をとる。刺繍というモノを媒介として、人間と人間、人間とモノの相互作用により構築・再構築される社会関係を考察するものである。特にこの中では、人間がモノをとおして蓄積した社会関係を明らかにすることを試みる。それはまたモノが人間をとおして蓄積した関係性を明らかにすることでもある。また、国家、個別社会などの社会的・経済的な変容が激しい社会状況の中で、新しく形成され小規模社会、刺繍技法・作品の継承や生成を改めて理解することを目指す。

これまでの先行研究においては、苗族の刺繍と作り手である女性を外部の視点（いわゆるエティックな視座）から切り取ることが多かった。たとえば日本の研究者である鳥丸貞恵と鳥丸知子は苗族の民族衣装に注目し、20年近く苗族の村々を周り、数多くの刺繍や衣装の写真を撮影し『ミャオ族²³の民族衣装 刺繍と装飾技法』を出版し、簡潔に刺繍の製作過程を記録している。しかし彼女らが時間をかけて収集した苗族の刺繍の記録は一貫して刺繍研究者としての立場から作られたものであり、現地の人々が刺繍のどこに注目しているかなどは記されていない。

筆者は現地調査をとおして、刺繍の図案や技法を記録することはもちろん、刺繍について現地の人々がどのように語るかということも調査の対象としている。つまり現地の女性からの視点（いわゆるエミックな視座）を外部からの視点と同様に重視する。たとえば刺繍が目にある時、彼女らが最初に見るのは刺繍の芸術的美しさなどではなく、刺繍糸の精緻さや刺繍技法及び刺繍にかかる時間の方である。その刺繍にかかった時間をもとに刺繍の「経済的」「文化的」価値を導きだしていると言ってもよい。本研究では刺繍製作にかかる時間に着目し、外部・内部双方の視点を織り交ぜる

²³ ミャオ族：中国では苗族と呼んでいるが、日本の学者は苗族をミャオ族と表記することもある。

ことにより、彼女らにとっての刺繍の意義を理解したい。

本論はモノ論から中国貴州省黔東南雷山県西江村の苗族刺繍を考察する。そのため、まず刺繍糸の視点から苗族刺繍の色彩特徴を明らかにすることにより、刺繍糸・刺繍・人間の関係を検討する。苗族の刺繍技法の伝承の研究において、同時代における女性（とりわけ婚姻後の夫方地域の女性たち）からの伝承が重要であり、今まで研究者たちが重視してきた母娘伝承を同時代伝承の一部であるという視座を提供する。また、ジェンダーの視点から、苗族社会における女性中心的な刺繍研究から距離を置き、中日研究者があまり触れてこなかった男性の視点を取り入れ、苗族の婚姻関係と刺繍の関係を再考し、これまでの研究に対して補完的な議論を提供する。本論では時間軸を設定し、1950年代以降（聞き取り調査できる範囲）の社会背景を整理する。時代背景の変遷により、刺繍そのもの、及び刺繍に関わる人間・社会の変容を見ていく。本論が目指すのは、先行研究において多く散見される苗族社会に対する政策提言ではなく、苗族社会を事例として刺繍文化及び社会組織に関する研究を行い、それを学術成果として公開することで、急激な開発政策下にある手工芸文化の変容過程を描き出すことにある。

本論は刺繍を糸・紋様・技法・色彩など細かい観点から分析しはじめ、手工製・機械製の比較の中で製作の時間に注目し、さらに、現地の人々の視点を重視し、刺繍の作り手である女性だけでなく、親族、近隣、観光客、男性、研究者などの多様なアクターとの関係から刺繍の価値及び位置づけを究明するものである。

以上の検討をとおして、刺繍の物質性に焦点をあて、これまで不鮮明であった苗族の刺繍における技法、紋様、素材、伝承、社会関係、社会背景、親族、ジェンダー、社会変容などの問題を、さまざまなデータをもとに明らかにし、刺繍により構築・再構築される苗族社会、そして苗族社会の変容における刺繍の現れ方をとおしてモノと人とで作り上げられる社会関係資本と刺繍技法・刺繍作品を明らかにする。

4. フィールド調査の概要

本論では1950年代以降の苗族社会に焦点を当てることの妥当性は次の2点である。まず1950年代は中華人民共和国が成立した直後になり、社会的・経済的に急激な変動が見られる。このような変動は苗族社会にも大きな影響を与えた。次に本論で用いる主要な研究方法はフィールドワークであり、現地の人の語りを重視する。その語りを聞ける世代を遡れば、1950年代前後が限界であるためである。

筆者が初めて貴州省西江千戸苗寨を訪れたのは大学時代の2010年であり、西江苗族文化の調査という目的で5日間ほど滞在した。調査といっても、何を調査して、何を研究するというのではなく、「観光気分」で5日間を過ごした。筆者は漢族出身の

ため、少数民族の物事に関心を持っていた。最も印象に残っているのは広場に観光客向けの民族衣装試着の店が林立し、10 円で 10 分間衣装を借り写真を撮ることのできたことである。その衣装があまりにも美しく、迷わずお金を払い、赤色の衣装を選んで着て写真を撮った。後になってから分かったことであるが、当時着用した衣装は機械製品であり、西江現地の衣装ではなかった。その後 5 年が経ち、修士課程に入り、研究テーマを絞る際に、指導教官と相談し、苗族の刺繍を研究課題とすることを決めた。

筆者は修士過程から現在までは西江苗族の刺繍を中心に研究をしてきた。2015 年から 2019 年の 5 年の間、夏季休暇と冬期休暇を利用して 9 回西江へ赴き、フィールドワークを行った。合計 115 日間ほど現地で滞在し、ある程度の参与観察も行うことができた。日本で調査データを整理し、論文を作成する上で補足が必要になった時は、Wechat²⁴を利用した。筆者が漢族であるため、調査では基本的に漢語を利用したが、苗語の学習も行い、必要に応じて苗語を用いた。漢語の分からない調査対象に対しては、適宜、現地の人に通訳してもらうことによって調査を遂行した。苗語の意味²⁵について分からない場合、その都度現地の協力者に確認している。筆者が調査により確認できた（調査地の）苗語は付録 1 にまとめた。また表 2 には調査期間の概略を示した。

表 2 調査の概略

	調査地	調査期間
1	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2010 年 10 月 1 日～10 月 6 日
2	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2015 年 2 月 22 日～2 月 25 日
3	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2015 年 10 月 18～10 月 20
4	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2016 年 2 月 25 日～3 月 6 日
5	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2016 年 7 月 15 日～7 月 28 日 2016 年 8 月 24 日～9 月 18 日
6	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2016 年 11 月 17 日～11 月 20 日
7	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2017 年 8 月 25 日～9 月 1 日 2017 年 9 月 9 日～9 月 17 日
8	貴州省黔东南雷山県州西江鎮	2018 年 2 月 20 日～2 月 28 日 2018 年 3 月 10 日～3 月 22 日
9	貴州省黔东南台江県施洞鎮、雷山県西江鎮	2018 年 10 月 27 日～10 月 31 日
10	貴州省黔东南雷山県西江鎮	2019 年 2 月 25 日～3 月 6 日

²⁴ 中国大手 IT 企業テンセントが作った無料インスタントメッセージングアプリである。

²⁵ 論文を書く途中で苗語に関する情報が必要である場合、インターネット通話で補足調査をしている。

現地調査では苗族出身の女性、男性、観光客、(漢族の) 商人などを中心に聞き取り調査を行った。本研究で事例として出したインフォーマントを表3に整理した。インフォーマントの氏名の表記については、漢語の姓の漢字と名の大文字のアルファベットの頭文字(たとえば李 YW) で表記する。同姓で名の表記がダブった場合、数字で示す(たとえば宋 YH1、宋 YH2)。姓しか知らないインフォーマントは漢語の姓の漢字と小文字のアルファベット(たとえば李 a) として表記する。姓名の知らないインフォーマントは大文字のアルファベット(たとえば A) で表記する。

表3 インフォーマントリスト(筆者作成)

番号	氏名	生年月日	性別	民族	出身地	婚姻状況
男性						
1	李 YW	1939 年	男性	苗族	羊排村	既婚、嫁：宋 H (東引村)
2	李 XP	1964 年	男性	苗族	羊排村	既婚、嫁：呉 L (雷山県)
3	宋 YH2	1966 年	男性	苗族	東引村	既婚、嫁：李 YF
4	李 JP1	1967 年	男性	苗族	羊排村	既婚、嫁：董 DH (東引村)
5	李 JP2	1969 年	男性	苗族	羊排村	既婚、嫁：胡 a (三穗)
6	李 KP	1987 年	男性	苗族	羊排村	未婚
7	A	20 代	男性	漢族	貴陽市烏当区	既婚、嫁：李 h
8	皮 ZJ	20 代	男性	苗族	三顆樹	既婚、嫁：張 Q
9	邵 a	30 代	男性	苗族	施洞鎮	既婚、嫁：不詳
10	宋 a	40 代	男性	苗族	南貴村	未婚
11	張 a	40 代	男性	苗族	凱里市	不詳
12	李 XH	40 代	男性	苗族	羊排村	既婚、嫁：李 WF
13	李 J	40 代	男性	苗族	東引村	既婚、嫁：毛 JH
14	李 f	40 代	男性	苗族	東引村	既婚、嫁：C (凱里)
15	穆 XH	40 代	男性	苗族	控拝村	既婚、嫁：竇 a (開覚村)
16	石 YG	60 代	男性	苗族	施洞鎮	既婚、嫁：不詳
17	姚 BM	生年不詳	男性	苗族	天柱県	既婚、嫁：李 YM (羊排村)
18	姚 CY	生年不詳	男性	苗族	天柱県	既婚、嫁：不詳
女性						
19	李 YM	1930 年代	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先：天柱県
20	楊 ZY	1931 年	女性	苗族	開覚村	既婚、嫁ぎ先：羊排村
21	楊 CM	1935 年	女性	苗族	不詳	既婚、嫁ぎ先：南貴村
22	宋 GX	1939 年	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先：平寨村
23	楊 a	1940 年代	女性	苗族	西江	既婚、李 YW の元妻、嫁ぎ先：羊排村
24	李 F	1941 年	女性	苗族	不詳	既婚、嫁ぎ先：東引村
25	汪 a	1949 年	女性	苗族	開覚村	既婚、嫁ぎ先：羊排村

26	宋 H	1963 年	女性	苗族	東引村	既婚、嫁ぎ先:羊排村
27	李 YF	1968 年	女性	苗族	不詳	既婚、嫁ぎ先:東引村
28	楊 CL	1968 年	女性	苗族	榕江県	既婚、嫁ぎ先:榕江県
29	李 LP	1970 年	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:凱里市
30	李 b	1970 年	女性	苗族	不詳	既婚、嫁ぎ先:羊排村
31	李 a	1970 年	女性	苗族	平寨村	既婚、嫁ぎ先:東引村
32	宋 LQ	1971 年	女性	苗族	東引村	既婚、嫁ぎ先:也薈
33	李 WF	1972 年	女性	苗族	開覚村	既婚、嫁ぎ先:羊排村
34	宋 LM	1973 年	女性	苗族	東引村	既婚、嫁ぎ先:羊排村
35	李 QP	1973 年	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:江蘇省
36	毛 JH	1974 年	女性	苗族	南貴村	既婚、嫁ぎ先:東引村
37	張 Q	1994 年	女性	苗族	郎徳上寨	既婚、嫁ぎ先:三顆樹
38	楊 FF	1994 年	女性	苗族	郎徳上寨	既婚、嫁ぎ先:雷山県
39	李 i	1999 年生	女性	苗族	羊排村	未婚
40	宋 YX	2006 年	女性	苗族	東引村	未婚
41	宋 LL	2007 年	女性	苗族	東引村	未婚
42	李 g	20 代	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:東引村
43	李 h	20 代	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:貴陽市
44	候 Z	20 代	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:凱里市
45	邵 CH	30 代	女性	苗族	施洞鎮	不詳
46	石 JH	30 代	女性	苗族	施洞鎮	既婚、嫁ぎ先:不詳
47	金 Q	30 代	女性	苗族	雷山県	未婚
48	李 d	40 代	女性	苗族	雷山県	既婚、嫁ぎ先:不詳
49	李 e	40 代	女性	苗族	羊排村	既婚、嫁ぎ先:不詳
50	李 j	40 代	女性	苗族	不詳	既婚、嫁ぎ先:羊排村
51	蔣 YX	40 代	女性	苗族	施秉県	既婚、嫁ぎ先:施秉県
52	龍 XC	50 代	女性	漢族	湖南省	既婚、嫁ぎ先:湖南省
53	李 c	50 代	女性	苗族	西江鎮	既婚、嫁ぎ先:不詳
54	候 a	50 代	女性	苗族	東引村	既婚、嫁ぎ先:羊排村
55	潘 GZ	50 代	女性	苗族	施洞鎮	既婚、嫁ぎ先:施洞鎮
56	李 WH	50 代	女性	苗族	開覚村	既婚、嫁ぎ先:開覚村
57	呉 XL	50 代	女性	苗族	雷山県	既婚、嫁ぎ先:雷山県
58	B	50 代	女性	漢族	貴陽市	既婚、嫁ぎ先:貴陽市
59	宋 YH1	60 代	女性	苗族	東引村	既婚、嫁ぎ先:烏堯村

調査へ向かう前は、前もって資料などを調べ、目的を持って調査地へ向かうことにしている。しかし、実際の調査過程では、信頼性の高いデータを得るため、筆者は一々質問することを意図的に避けた。調査では現地の人々の日常生活を観察するだけでなく、苗族女性の刺繍製作過程を参与観察した。刺繍に関して深く理解するため、筆者自身も刺繍の製作体験をした。現地の人と一緒に行動する中で調査対象が積極的に話

してくれたことが本論の主たるデータとなっている。

5. 問題提起

本論は序章と終章を除いて、5章から構成されている。第1章「糸からの苗族刺繍研究」、第2章「苗族刺繍の母系伝承について（技法を中心に）」、第3章「苗族の刺繍に関するジェンダー観」、第4章「苗族女性の婚姻における衣装の再考」、第5章「苗族社会の財である刺繍と衣装の交換」である。

それぞれの章で解明しようとする問題については以下のようになっている。

第1章 糸からの苗族刺繍研究

苗族刺繍の刺繍糸に注目し、糸の色彩と素材の特質を検討した上で、刺繍糸、刺繍、刺繍製作者との関連性を考察する。すなわち、刺繍糸をとおして苗族の刺繍の特徴を再考し、技法や紋様を中心とした刺繍の見方から距離を置き、これまであまり注目されてこなかった素材である糸を中心とする新たな視点から刺繍を研究することを試みる。

第2章 苗族刺繍の母系伝承について（技法を中心に）

本章は実証的な調査データから「母娘伝承」の実体を明らかにし、「母娘関係」の重要性を認めつつも、母系に偏重し過ぎてきた先行研究を批判的に検討することを試みる。そして刺繍伝承、とりわけ刺繍技法の伝承において、母、夫方の親族、姉妹、女性の友人、同じ地域の女性など、「同時代の女性による伝承」という視座をとりいれ刺繍技法の伝承について再考する。

第3章 苗族の刺繍に関するジェンダー観

本章では、刺繍研究において男性と刺繍という研究の空白を埋めることを目的とする。加えて、市場経済化し、生業が変化し、人の移動が活発になった現代的な状況の中で、ジェンダー的な視座からみた刺繍の位置づけを考察する。

第4章 苗族女性の婚姻における衣装の再考

本章では苗族衣装を紹介し、衣装の製作者、着用場などについて概観した上で、結婚式における衣装の展示に着目し、民族衣装が苗族の女性にとってどのような存在であるのかについて検討する。また、坐家の実態を把握し、坐家をしなくなった原因、さらに再興できなかった原因について考察する。衣装の位置づけを結婚式で衣装を展示する場から再考することを試みる。

第5章 苗族社会の財である刺繍と衣装の交換

本章では苗族社会における対内的交換の対象、交換できる刺繍の範囲について検討する。具体的には苗族女性に対内的交換において交換する相手との関係に基づいて、

いかなる交換をしているのかについて明らかにする。これらの交換の過程において、苗族の女性は何をその価値(あるいは意義)の拠り所としているのかについて検討する。そして大きな変化の途上であり、現代化しつつある苗族社会における刺繍の価値を動態的に考察し、外部・内部双方の視点を織り交ぜることにより、苗族の女性たちにとっての刺繍の意義を再考する。

以上の5章で刺繍というモノに注目し、モノを介して展開される人間の多様な相互交渉、相互作用を追い求め、苗族の刺繍をめぐる、社会変容の中における文化資本・社会関係資本を示すモノとしての刺繍のあり方を探究する。すなわち、刺繍の特徴、伝承、ジェンダー、婚姻、交換などの視点から苗族の刺繍を検討し、変動する社会の中で刺繍・人間・社会がどのように結ばれているのか、あるいは解れているのかを、人とモノを対称的なものとしてとらえ明らかにする。

第1章 糸からの苗族刺繍研究

1.1 はじめに

中国で5番目に人口の多い少数民族である苗族は独自の言語を使用し、それらは大きく湘西、黔東、川黔滇の3つの方言区に分けられている。また苗族は文字を持たない民族であるため、苗族の刺繍は時として自民族の歴史を記録する「文字」として説明される。たとえば呉正光[1993]、周夢[2011]などは苗族の刺繍を「身につけている史書」と称している。

中国では1980年代から1990年代の後半にかけて、苗族刺繍²⁶に関する研究は主に刺繍の紋様の類型化と意味合いの探索、刺繍技法の紹介、刺繍の芸術的意義などに関するものがほとんどであった。しかし1990年代半ば以降、苗族村落の若者の多くが都市部へと出稼ぎに行き、刺繍を学ぶ者が激減したため、研究者たちは苗族の刺繍の伝承と保護に関心を持つようになった。さらに2000年代に入り、雷山県の西江と郎徳上寨²⁷、台江県²⁸の施洞²⁹などの観光開発にともない、苗族刺繍が文化資源として商品化されるようになった。それに伴い研究者たちは刺繍の社会的、文化的機能の探求をすると同時に、刺繍の経済的価値にも関心を持つようになる。しかし、これまでの研究では苗族の刺繍の紋様、技法、色彩のみが重視され、素材である布に関しては若干の報告があるものの、刺繍の製作において最も重要な要素である糸に注目した研究は管見の限り皆無とあってよい状況である。

文化人類学の分野において、布の研究や布の加工技術である刺繍などに関しては、糸が重要な要素であることは多くの研究者によって指摘されてきた。たとえばジェン・シュナイダー[1987]は、インドネシア社会やアメリカ社会において布は縦糸と緯糸の交錯により作り上げられ、その布の美しさは縦糸と緯糸の交錯、織機の後の装飾、繊維の性質と色などによって影響されると論じている。ティム・インゴルド[2014]は、刺繍を布に浮かぶラインであるという角度から整理し分析している。実際、筆者が行った中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県の西江鎮での調査においても、刺繍は糸により大きな影響を受けていることが明らかになった。苗族の女性が刺繍を見る際は、刺繍技法と紋様ももちろん確認するが、とりわけ刺繍の糸に注目をしている。糸がきちんと揃っていることで刺繍製作者の技術水準が分かるため、糸の存在は刺繍の良し悪しを判断する最も重要な基準となっている。

²⁶ 刺繍：苗語ではアーフォウ（IPA表記：a:fəu）という。

²⁷ 地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県の西北部に位置する苗族村落である。

²⁸ 地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州の15の県の1つである。清水江流域に位置し、苗族が多く居住している。

²⁹ 地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州台江県に位置する苗族村落である。

近年、技術の発達により機械で刺繍を製作できるようになった。刺繍に対して特に関心を寄せていなければ、手工製作の刺繍も機械製作の刺繍も同じように映るかもしれないが、刺繍に詳しい者、刺繍に造詣が深い者はそれらを明確に区別することができる。少なくとも苗族社会においては、機械製作の刺繍と手工製作の刺繍は文化的、社会的、経済的な価値が異なる。現地の女性は一目で機械製作と手工製作の刺繍の違いを、糸を通して見分けることができるのである。また興味深いことに紋様に対する色の変化（色使いの非対称的や不規則的な部分）は、紋様を施す女性自身の意思というよりも、刺繍を行う女性が使用する糸の残量によって決まることが多い。この点からも刺繍において糸が果たす役割を無視することができないことが指摘でき、本論ではこの点についてもモノとしての糸と刺繍製作者という観点から議論を深めていく。

本章は中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県の西江鎮を調査地とし、刺繍をする苗族女性に聞き取り調査し、現地の博物館、刺繍品販売店などで集めた刺繍及び刺繍糸に焦点を当てる。これまで研究者たちが行ってきた研究、すなわち刺繍の紋様、刺繍の技法で苗族の刺繍文化を解読することはもちろん重要であるが、刺繍糸を無視して刺繍製作を議論することはできない。そのため、ここでは苗族刺繍の刺繍糸に注目し、糸の色彩と素材の特質を検討した上で、刺繍糸、刺繍、刺繍製作者との関連性を考察する。すなわち、刺繍糸を通して苗族の刺繍の特徴を再考し、技法や紋様を中心とした刺繍の見方から距離を置き、これまであまり注目されてこなかった素材である糸を中心とする新たな視点から刺繍を研究すみることを試みるものである。

1.2 苗族社会における刺繍と糸をめぐる研究の現状

本章は中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県西江鎮の苗族の刺繍、とりわけ刺繍製作において重要な役割を果たす糸に注目して議論を行うものである。

文化人類学において、布と糸に関する研究は多く、刺繍は布を加工する技術と位置づけられている。ジェン・シュナイダーは世界各地の布に関する研究を取り上げ、その中でも織物生産者が緯糸織りと経糸代替の可能性を探求することに歴史的に挑戦したならば、審美的競争もまた経糸と緯糸の格子状幾何学からデザインモチーフおよびパターンを解放するように促した³⁰と指摘し[Schneider 1987:424]、事例として中国の刺繍を挙げた。また人間社会がつくり出す「ライン」に注目した人類学者であるティム・インゴルドは刺繍に関して、「編むものはラインを束ねて表面をつくり出す。元の糸はその表面上で今や軌跡、すなわち糸の絡み合いが生み出す規則的なパターンとなる。刺繍するものは、反対にパターンブックのページのような表面上の軌跡

³⁰ 原文:If cloth producers were historically challenged to explore the potentialities of weft-faced weaving and of the warp-faced alternative, aesthetic competition also induced them to liberate design motifs and patterns from the grid-like geometry of warp and weft.

から出発し、針を用いる仕事を通じて軌跡を糸に変換する。さらに、その変換作業において彼女は布地の表面を消そうとする。というのは、刺繍された布を見る時、私たちはそこにあらわれるラインが軌跡ではなく糸となり、あたかも布自体が透明になったかのように眺めるからである」と述べ、手工芸製作における糸の果たす役割を述べている[インゴルド 2014:91]。すなわち、これまで多くの研究成果が示してきたように、それぞれの社会における「衣」に関する研究において、糸は重要な研究対象であったし、今なおそうであり続けている。

本章で対象とする苗族の刺繍もまた糸で布を織り、その布に糸を縫い付けるので、刺繍全体は糸からなっている。私たちが刺繍を見る時、一般的に布地を見るのではなく、刺繍した紋様を見るが、その紋様もまた1本1本の糸から構成されている。繰り返しになるが、刺繍においては糸が重要な役割を果たしているのである。糸がなければ刺繍そのものが存在しないと言っても過言ではないだろう。

議論の対象を苗族社会に移そう。中日において、苗族の刺繍に関しては、刺繍で装飾した衣装と結びつけて研究するものもあれば、刺繍そのものに注目しているものもある。1980年代以降、刺繍に関する研究が盛んになり、その中で多くの研究者は刺繍の紋様と技法に関心を寄せてきた。それらは刺繍紋様の意味、技法の紹介、紋様の分類、紋様と技法の価値などに関するものが多い。

たとえば、1970年代から90年代までは、『苗族、侗族服飾資料』において貴州省黔东南地域の苗族の頭飾りと服飾がスケッチされている[美術資料組 1978:1-50]。図は白黒であり、1970年代の黔东南苗族服飾の形態を図で表現している。美術史家汪禄は貴州省黔东南地域の苗族服飾につけられた刺繍の紋様及び色を図にしている[汪 1983:1-36]。苗族研究者岐従文は歴史の視点から苗族服飾の「文字史書」である刺繍の紋様の源流及び変化とその原因について考察した。幾何紋様と魚紋様を取り上げて刺繍紋様の芸術的構成を紹介し、その芸術的な価値が現代社会の芸術に影響を与えていることを示した[岐 1983:78]。苗族出身で、「苗学³¹」という学問を創設した李廷貴・張山・周光大は苗族服飾を分類し、衣装につけている刺繍を湘西方言、黔東方言、川黔滇方言の3つの地域に分け、各地域で使用する刺繍技法と紋様の特徴について簡単に紹介した[李・張・周 1996:204-246]。苗族の服飾の研究という分野で多くの研究成果をあげた民族学研究者の楊昌国は苗族の服飾を研究対象とし、苗族の刺繍の紋様に深い関心を示し、紋様で表した祖先崇拜や神話、歴史などについて詳細に述べている。さらに、紋様の中で代表的な蝴蝶³²紋様、龍³³紋様、魚³⁴紋様、幾何紋様などを

³¹ 「苗学は苗族を研究する総合的な学科であり、苗族というエスニックグループ及び苗族地域の経済、社会発展などを研究対象とする学問である(筆者訳)」[納日・張 2017:1]。

³² 蝴蝶は苗語ではゲバシヨ(IPA表記:g ε̃˧˧˦ bɬiɔ̃˧)という。

³³ 龍は苗語ではウン(IPA表記:v_ən)という。

取り上げ、その意味合いを検討している[楊 1997:116-217]。

2000年代に入っても刺繍に関する研究は依然として紋様や技法に関心が向けられてきた。何晏文は苗族刺繍の紋様、技法を通して刺繍製作者の技量が見られると述べている[何 2004:200-214]。苗族研究家の呉平[呉 2006:122]、黄玉冰[黄 2011:43-49]は黔东南苗族の刺繍技法及び各技法の特徴について紹介している。民族学者である周夢は黔东南苗族侗族女性の服飾の刺繍工芸について、①刺繍紋様、②刺繍技法、③刺繍紋様の3つに分けてそれぞれの特色を分析した。刺繍の紋様についてはトーテム紋様[蝴蝶、魚、花³⁵、牛³⁶、鳥³⁷、龍など]、人物紋様と植物紋様、幾何紋様、あるシーンあるいは伝説を表現する紋様の4種類に分けた。加えて刺繍技法に関して平繡³⁸、破線繡³⁹、打籽繡⁴⁰、鎖繡⁴¹など10種類を紹介している[周 2011:113-129]。周夢は同書で苗族の民族衣装の美しさは色彩を通して表現されている[周 2011:188]と指摘したが、それは衣装全体の色彩特徴であり、刺繍糸に注目しているのではない。

日本の文化人類学者である鈴木正崇は「黔东南のミャオ族、自称ムーの衣装は華美で多様性に富み、紋様も蝶・魚・虫・花・蛇・ムカデ・太陽・水・植物など具体的なものが多く、渦巻紋や雷紋などの幾何学紋様も描かれている」[鈴木 2012:463]と述べている。また苗族の刺繍と衣装の研究家の在野学者鳥丸知子は大量の写真や図を用いて、苗族の刺繍技法と刺繍の製作過程を詳しく記録している[鳥丸 2017]。鳥丸は刺繍技法を紹介する中で、糸に関しては、糸紡ぎやどのように糸と針を操作して理想の形を作るかということは記述しているが、糸そのものに対する関心はさして高くない。

次に刺繍の色彩に関する研究について概観しておきたい。苗族研究に大きな影響を与えた日本の民族学者鳥居龍蔵は1902年頃に苗族について調査した。その頃の刺繍に関しては「衣服ノ原料、蠟纈及ビ刺繍」で語っており、刺繍に関する論述は、「刺繍ハイツレノ苗族ニモ盛ンニ行ハレドモ、就中花苗コレガ冠タリ（紋様ノ章ヲ参照セラレタシ）[鳥居 1976:152]と一言しか触れていない。しかし、「苗族ノ紋様」の部分では詳しく論じている。鳥居は刺繍の紋様を紹介し、その中で刺繍糸の質や色彩については、「コレ実物ハ絹ノ極メテ美麗ナルモノニシテ、アタカモ「蜀江ノ錦」カトモ疑ハル。糸質ハ絹ニシテ真紅、黒、青ノ三種ヨリナリ、其ノ三色モナホ濃淡数種ヲ混ジ、何人モ織物ノ感ヲ生ズ。今コレニ就キテ説明センニ、3ハ如何ト云フニ、コハ赤

³⁴ 魚は苗ではニイエ（IPA表記:njie）という。

³⁵ 花は苗語ではバン（IPA表記:b,an）という。

³⁶ 牛は苗語ではルウアン（IPA表記:lua,n）という。

³⁷ 鳥は苗語ではナアオ（IPA表記:na'.ao）という。

³⁸ 平繡は苗語ではオガン（IPA表記:ɔ'gan）という。

³⁹ 破線繡は苗語ではパンフォレイ（IPA表記:pʰan fo lei）という。

⁴⁰ 打籽繡は苗語ではチュウダドオ（IPA表記:tʃiu'da'do）いう。

⁴¹ 鎖繡は苗語ではディエンジュイ（IPA表記:d iɛn dʒ_iɔ yi）という。

色及び青色ノ糸ヲ以テシ、井筒形、花形ノ如キハ赤糸ニテ繡ヒ、其ノ他ハ悉ク青糸ヲ以テセリ。コノ紋様モ亦連続ニシテ、間ニ填充ヲ置キ連続セリ。コノ紋様ハ色ノ関係、紋様ノ配置ノ状態ニヨリ一様ナラズ」と述べている[鳥居 1976:154]。

民族学研究者の黄玉冰は西江苗族の刺繡技法の製作過程を紹介し、特定の技法にはよく使われている色があると指摘し、伝統的な刺繡にはオレンジ、浅い赤、赤紫、緑、青、浅い青などの色が多く使われると資料を基に示した[黄 2011:43-49]。黄菁は苗族衣装の色彩から、各種類の色が占めている割合を分析することで苗族衣装の色彩の特徴を考察している。張泰明は紋様、技法、色彩の3つの方面から貴州省黔东南の刺繡の特徴を明らかにし、その中で刺繡糸の色彩は地布の色彩の影響を受けていると指摘している[張 2004:175-183]。つまり地布の色により糸の色を決めるのである。楊再偉は刺繡紋様の色彩の特徴に注目し、苗族色彩は地域性があり、異なる地域の刺繡の色彩には違いがあることを示した[楊 2010:282-283]。

このように、鳥居龍蔵が刺繡の紋様と糸の色の関係を、楊再偉や黄玉冰などが技法と色との関連について言及しているが、これまでの研究はその細部である糸と糸の色彩の特徴に注目するものは少なく、糸を基準とした刺繡及び刺繡製作者の技量を評価するという現地社会の視点からの研究はほとんどないといつてよい。

本章は、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山县西江を調査地とし、これまでのように紋様や技法だけで刺繡を見るのではなく、苗族刺繡の素材である糸に着目するものである。苗族女性が施す刺繡の良し悪しと刺繡製作者の技量評価には刺繡糸の精緻さが最も重要な基準である。本章では西江で集めた刺繡のデータを基に、技術発展の中で現れた機械製作と手工製作の刺繡を、刺繡糸を通して識別することが可能であることを明らかにし、刺繡糸の視点から刺繡の文化的・芸術的・経済的な価値を再考する。すなわち、本章は刺繡をその細部である糸から分析し、糸・刺繡・刺繡製作者の間の関係について考察するものである。

1.3 刺繡糸と刺繡

1.3.1 西江の刺繡技法と製作過程

苗族の刺繡は様々な技法で構成されているが、それらの技法は平繡、数紗繡⁴²、皺繡⁴³、辮繡⁴⁴、破線繡、打籽繡、堆繡⁴⁵、馬尾繡⁴⁶、絞繡⁴⁷、貼花繡⁴⁸など20余種類があ

⁴² 数紗繡は苗語ではケガーシャン (IPA表記:k e g_a fa ŋ) という。

⁴³ 皺繡は苗語ではケオバン (IPA表記:k^h eo baŋ) という。

⁴⁴ 辮繡は苗語ではドヒ (IPA表記:d^h o hi) という。

⁴⁵ 堆繡は苗語ではガリャ (IPA表記:g_a lia) という。

⁴⁶ 馬尾繡は苗語ではガデンマイ (IPA表記:g_a d en ma i) という。

⁴⁷ 絞繡は苗語ではシュハオウジュ (IPA表記:θ yu hau d_ɕ iu) という。

⁴⁸ 貼花繡は苗語ではドオドオ (IPA表記:d õ d o) という。


る[呉 2006:122]。筆者が現地調査ではよく見られる刺繍技法とその製作の過程を整理し、表 1-1 西江の刺繍技法と製作過程にまとめた。

表 1-1 西江の刺繍技法と製作過程（筆者作成）

番号	刺繍技法	製作過程	写真
1	平繡	<p>まずは堅いかくに布を縫い付け、布地を作る。そして紋様の描いた紙（型紙）を布地に縫い付ける。糸の方向を調整しながら、型紙を包むように、布地の正面から反面へと針を通して糸を回す。</p> <p>平繡は苗族刺繍の入門技法であり、表面が滑らかである。</p>	 <p>筆者撮影（2019年2月）</p>
2	割線繡	<p>本来細い糸を分割し、より細い糸にする。割線繡の方法は平繡と同じだが、糸は平繡の糸より細い。主に2つの方法がある。1つは図案の両側の輪郭に沿い、針を左側から出し、右側に入れる。もう1つは、針を右側から出し、右側に入れる、そして左側に行き左側に入れるを繰り返す。</p> <p>割線繡の特徴は糸の分布は比較的均等であり、糸も滑らかである。</p>	 <p>筆者撮影（2016年9月）</p>

3	皺繡	<p>同色あるいは2色の糸8本～12本を平たく凹凸のないようにし、また筒状に編む。編んだ帯を曲げて布に敷く。敷き方は立敷き、平敷き、斜敷きの3種類がある。立敷きは浮き彫りのような感じを持つため、苗族の刺繡の大面積の装飾に使われる。平敷き、斜敷き輪郭に使われる。</p> <p>立敷きと平敷きの高さが異なるため、刺繡全体がリズム感を持っている。</p>	 <p>筆者撮影（2016年9月）</p>
4	馬尾繡	<p>馬尾繡の工芸には独自の制作技法がある。第1のステップは、馬の尾の毛を3～4本選んで芯にし、それに白い糸をしっかりと巻き付け、低音弦のような刺繡糸にする。第2のステップは、白い芯の刺繡糸を伝統的な刺繡用または切り絵模様のある枠に刺繡する。第3のステップは、色のついた糸7本で編んだ平たい糸を模様のある枠の中心部に刺繡する。第4のステップは、平刺繡、乱針、跳針などの一般的な技法で残りの部分を補充として刺繡する。</p>	 <p>筆者撮影（2016年9月）</p>

5	辮繡	<p>辮繡は若干本の糸を3つ編みにする。それを平たい状態で布に広げる。そして同じ色の糸で3つ編みを布に固定するように縫い付ける。</p>	 <p>筆者撮影 (2015年10月)</p>
6	鎖繡	<p>鎖繡は、フランス刺繡のチェーンステッチと同じである。鎖繡には双針繡と単針繡がある。鎖繡は、現在のチェーンステッチと同様で、表に出た針目と同じところ、または近接した部分に針を刺し入れ、糸が輪を作ったところから針を出して、糸を縫いとめるのを繰り返しながら進む。出来上がった糸の形が、鎖のように見えることから、こう呼ばれる。鎖繡は相良刺繡の粒の大小や、鎖繡の糸の太さや運針の方向を場所に応じて変えるなどによって、立体感が表現される。</p>	 <p>筆者撮影 (2016年2月)</p>
7	数紗繡	<p>数紗繡は中国の伝統的刺繡法である。挑花繡とも呼ばれる。数紗繡は割と簡単で、基本的な刺繡の方法は、布地の適当な位置を選んで中から針を出して、縦横交差して「X」形を作る。これを繰り返すと、図案が生き生きと布に浮かぶ。西江の数紗繡はよく黒い糸、あるいは深い色の糸を使う。</p>	 <p>筆者撮影 (2016年9月)</p>

8	貼花繡	<p>貼繡とも呼ばれる。よく花紋様や変形した植物紋様に使われる。刺繡技法は図案を書いている固い紙板を切り、色の付いた布に貼り付ける。図案の縁に沿って、布の縁と紙の縁の間を2、3mm空けて、ハサミで布を切る。立体感を出すため、布と紙板の間に少し綿花を入れる。そして、紙板の縁を縫い付けると、服などの装飾したいところにコンニャクで作った4糊で貼り付ける。最後に、紋様の線を金色などの太く平たい線で縫う。</p>	 <p>筆者撮影（2016年9月）</p>
---	-----	---	---

1.3.2 苗族女性の刺繡道具箱




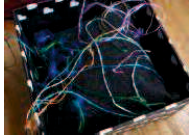





苗族の刺繡と糸の議論をする前に、まずその前提として彼女たちがどのような道具を用いて刺繡をしているかを概観しておく。刺繡をする苗族の女性は皆自分の道具箱（写真 1-1）を持っている。道具箱の中には糸、針、鋏、紙、指貫（漢語では「抵指」という。材質は金属製と布の2種類）、ペン、糸の光沢度を整える蠟と固体糊、眼鏡などが入っている。



写真 1-1 刺繡道具箱（筆者撮影 2018）

苗族の女性が刺繡道具箱に収めているものの用途と写真を、表 1-2 の苗族女性の刺繡道具箱に示した。

表 1-2 苗族女性の刺繍道具（筆者作成）

番号	名称	用途	写真（筆者撮影）
1	糸	刺繍の紋様を描いた硬い紙を布に固定し、紋様を布に縫う際に使う。	
2	雑誌	数多くの糸をもつれないように保存するために雑誌や本を用いる。ページの間に糸を挟んでおくために使用する。また製作途中や完成した刺繍が汚れたり、傷ついたり、皺になつたりしないように、雑誌の中に挟んでおく。	
3	固体糊、 蠟	糸の繊維を整えるために使う。刺繍をする前に糸を糊に1回通すことで、刺繍の光沢感が増す。	
4	指貫	材質は金属製と布の2種類がある。固く厚い布に針を通す時、針の頭を押すが、指を傷めないように指貫を用いる。	
5	針箱	針をなくさないように入れておくもの。また、針箱を使わず、針を刺繍や糸の束に指す場合がある。	
6	鋏	糸、紙、布を切る時に使う。	
7	針	糸を布に縫いつけ、縫ったところの糸をきれいに整える時に使う。また布を固定する時にも使う。	
8	布	地布、紐を作る時に使う。	
9	眼鏡	刺繍する女性、特に年配の女性はほとんど目が悪いため、眼鏡を使う。老眼鏡である。	
10	紙、ペン	紙は白地の紙、硬い紙の2種類ある。白い紙は紋様を描く時に使い、硬い紙は地布を作る時に使う。	

刺繍道具箱の中の用途から、苗族女性の生活の知恵が垣間見える。たとえば、表 1-1 の 2 番目の雑誌は、本来読み物であるが、苗族女性は刺繍糸と繡片⁴⁹を皺なくもつれなく収納するための道具として使っている。3 番の固体糊は粘着剤であるが、苗族女性にとっては糸の光沢感を増やすものである。4 番の指貫は、硬い紙を貼った地布に針を指す時、指を保護するための道具である。7 番の針は刺繍製作にも使うが、細長い布を縫う時に一方の端を固定する道具として使われる。

さらに、道具の活用として、苗族女性は刺繍をする際、全身を刺繍製作のために「最適化」している。写真 1-2-1 のように長細い布を縫う時に、一方をズボンの膝の上あたりに針で固定する。こうすることで、布のたるみやよじれを防ぐことができ、縫いやすくなるのである。また写真 1-2-2 は刺繍の糸や布を整える際、針を落とさないように自分の髪のかい束（お団子）に差しているところである。

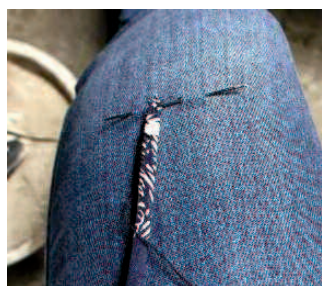


写真 1-2-1

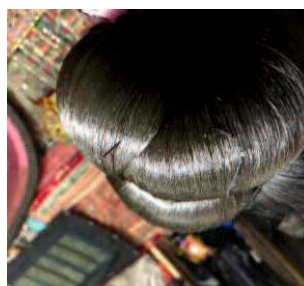


写真 1-2-2

写真 1-2 体の利用（筆者撮影）

以上で述べたように、苗族女性の刺繍道具箱には刺繍をするために必要な道具が揃っており、彼女らは刺繍する際にこれらの道具や身体を巧みに利用し、製作を行っている。逆に言えば刺繍製作は苗族女性の生活の知恵が多分に含意されているため、刺繍の道具箱をみれば、苗族女性の生活知が窺えるともいえる。

1.3.3 刺繍糸と刺繍技法

苗族刺繍の技法からは、刺繍糸の特徴（皺繡、辮繡、破線繡、打籽繡、馬尾繡、盤金繡など）、針の使い方（直針繡、鎖辺繡など）、刺繍の製作過程（絞繡、貼花繡、堆繡など）、刺繍素材の特性（数紗繡、双面繡など）などが大まかに特定される。つまり刺繍技法によって使う刺繍針や刺繍糸もそれぞれ異なってくるのである。本章は主に「糸」を対象とするため、ここでは刺繍針ではなく、刺繍糸と刺繍技法の関係について整理しておく。表 1-3 で示すものは刺繍技法に対応する刺繍糸の特徴である。

⁴⁹ 刺繍する女性は 1 枚 1 枚の刺繍を漢語で「繡片」という。

表 1-3 刺繍技法と刺繍糸（筆者作成）

番号	刺繍技法	技法の写真（筆者撮影）	刺繍糸の特徴	糸の写真
1	平繡 鎖繡 打籽繡 数紗繡 挑花繡	 (鎖繡: 双針繡)	市販の糸で、色の種類が多く、柔らかい触感、光沢がある。	 (筆者撮影)
2	破線繡		1本の糸を8つに分けて刺繍をする。破線繡に使われる刺繍糸は普通の刺繍糸よりも細く、より光沢のあるものが使われる。	 (筆者作成)
3	辮繡		6本から15本の刺繍糸を編み、それを紋様に沿って縫い付ける。編んだ刺繍糸の形は平、玉、波の3種類がある。	 (筆者撮影)
4	馬尾繡		馬尾繡の糸は3~4本の馬の尻尾の毛を芯にし、そこに手で白い糸をきつく巻きつける ⁵⁰ 。	 (筆者作成)
5	盤金繡 (捆金繡 ⁵¹ とも呼ばれる)		盤金繡の糸の材質は紙で、金色と銀色がある。紙のため針の穴を通せない。普通の刺繍糸で縫い	

⁵⁰ http://japanese.china.org.cn/culture/2015-07/21/content_36110764.htm, 2019年4月1日閲覧

⁵¹ 捆金繡は苗語ではコンジン（IPA表記：k^hoŋ dʒin）という。

			付ける。貼花繡の縁部分に縫いつけることが多い。	(筆者撮影)
--	--	--	-------------------------	--------

表 1-3 から、刺繡技法によって使用する刺繡糸の種類、使われ方が異なることが分かる。逆に、刺繡糸の特徴から刺繡技法が特定できるともいえる。すなわち糸の特徴からすべての刺繡技法を識別することはできないが、一部の刺繡技法は糸から判断することができる。また異なる刺繡技法を使用して作り上げた刺繡糸の特徴が違う。たとえば、数紗繡という刺繡技法で作った刺繡糸の形は X 字型 (写真 1-3) であり、鎖繡の刺繡糸の形は隣り合う輪が重なり合っているのが特徴である (写真 1-4)。



写真 1-3 数紗繡 (筆者撮影)



写真 1-4 鎖繡 (筆者撮影)

筆者が刺繡の研究を始めた当初、筆者自身は刺繡の技法を識別することはできなかった。同じ刺繡技法であるのに、見る度に苗族の人に確認しなければその技法を識別することができなかった。そして、このような確認の繰り返しの中、刺繡技法の識別ができるようになった。つまり刺繡技法を特定するためには、刺繡紋様のみを見るのではなく、刺繡糸の特徴や作り上げた刺繡糸の形を見て判断する必要があるのである。

1.3.4 糸で刺繡を評価する苗族女性

1.3.4.1 刺繡した糸を揃える

写真 1-5 は筆者が刺繡製作体験として、写真 1-6 の宋 H の刺繡作品と同じ紋様 (花)、同じ技法 (平繡) で作成したものである。2 枚の刺繡を比較してみれば、宋 H の作った刺繡 (写真 1-7) の方が筆者のよりはるかに美しいのは一目瞭然であろう。宋 H は筆者の作った刺繡を見て、「下手だ。糸が乱れている。葉のところは緑色の方がいい。水色だと違和感がある」と言った。平繡は最も簡単な刺繡技法といっても、実際やってみると初心者には簡単とはいえない。筆者は刺繡 (写真 1-5) を作る際、1 本 1 本の糸を平行に調整しながら、きちんと縫い付けることを心掛けたが、決して思い通りには行かず彼女たちから厳しい評価をもらうこととなった。刺繡 (平繡) は針を刺す

時、1部分1部分のバランスを意識しないといけない。糸をきちんと揃えないと美しい作品には仕上がらないのである。宋Hは「どの技法を使っても、糸が緩んだり、下の紙が見えたりすると、その刺繍はあまりよくない。これはゆっくり刺繍しないと(技術を修得)できない」と指摘した。宋Hらが刺繍をみる際は、刺繍技法はもちろんのこと、刺繍の糸、色にも注意を払っている。まず糸がきちんとそろえられていることは刺繍作品において最も重要な判断基準であり、また製作をする上で時間を要する作業の1つである。



写真 1-5 筆者の花紋様の刺繍 (筆者撮影)



写真 1-6 宋Hの花紋様の刺繍 (筆者撮影)

良い刺繍を作るには、「糸をきちんと揃えること、針で地布を通す時紋様を描いた紙が見えなくなる程密に刺すこと、糸を締めることというのがポイントである」と宋Hは語る。筆者は写真 1-5 の花を刺繍する際に、そのポイントを意識しながら刺繍したのだが、決してうまくはできなかった。その理由として、以下の5つことが挙げられる。①苗族の刺繍は硬い型紙に布を縫い付けて地布となり、その地布の上に紋様を刺繍していき、地布と紋様の紙が硬いため、針を通すのに強い力が必要であること。②しかし、力加減をコントロールできないと紙が破れ、細かい紙くずが糸と糸の間に出てくること。③力をいれてやっとな地布に針を通すと、糸の方向が乱れてしまい、紋

様全体のバランスが崩れること。④特に長い糸を地布に通す際に、糸がもつれたり切れたりすること。⑤さらに、糸を締める時に力を入れすぎると糸が切れること。そのため、写真 1-5 のような「失敗作」となってしまった。このような筆者の体験を通して、「刺繍糸がきちんと揃っているかどうかで刺繍する人の技量が分かる」ということが理解される。

1.3.4.2 刺繍糸の色の選択

苗族の人々が刺繍作品を見る際、彼らが最も注意を払うのが糸の制御である。写真 1-7 は 2018 年 3 月の現地調査の時、刺繍品販売店を経営している宋 H (1963 年生、女性、東引⁵²)⁵³ が作った衣装の袖口部分の繡片である。紋様は 2 羽の鳥、花、水草、川で、刺繍技法は平繡である。鳥は色の多い方が雄 (左) で、少ない方が雌 (右) である。宋 H は刺繍を 15 歳からやり始め、調査当時までの刺繍歴は 40 年である。宋 H の話によれば、写真 1-5 の繡片を作るには 1 ヶ月以上かかった。ここでいう 1 ヶ月とは毎日刺繍するというのではなく、店の仕事や家事の合間にしてかかった時間である。



写真 1-7 宋 H の刺繍作品 (筆者撮影 2018.3)

2018 年の現地調査の時、筆者は宋 H が刺繍したのとほぼ同じ紋様の花、川、水草を同じ刺繍技法で刺繍してみた。しかし筆者は意図的に刺繍をする際、刺繍糸の色を宋 H と異なる色にした。川を紫色、花の葉⁵⁴を薄い青にした。するとそれを見た宋 H と毛 JH (1974 年生、女性、南貴⁵⁵) は、2 人ともその色の組み合わせはおかしいという評価を筆者に下した。宋 H は「川は青の方がいい、紫はあまり使わない。葉は緑だろう」と語った。すなわち、彼女らは刺繍のどの紋様にはどの色を使うか、どの色を使わないか、ということを漠然と共有していることが窺える。彼女らは周辺環境に存在する実際の色を参照し、それをベースにして刺繍の色彩を組み合わせるということ

⁵² 東引は西江鎮に所属する村である。

⁵³ 宋 H (1963 年、女性、東引)：被調査者 (生年月日、性別、出身地)

⁵⁴ 葉は苗語では ga nao という。

⁵⁵ 南貴は西江鎮に所属する村である。

行っている。

1.3.4.3 刺繍糸の締め加減

2018年9月、アメリカに居住する中国系の女性胡 YR（20代）は雷山県西江阿幼民族博物館で始めて刺繍体験をした。胡 YR はアメリカで手工芸関係の仕事をしており、苗族の刺繍に深い関心を持っていた。彼女は苗族村落にて打籽繡と鎖繡という2種類の技法を学んだ。写真 1-8 は胡 YR が1日かかって作ったものである。彼女は「難しい、糸が自分の思ったとおりの形にならない」と話す。彼女に刺繍を教えた李 WF（1972年生、女性、開覚）と李 WH（50代、女性、開覚）は「刺繍を製作する時、糸の締め加減がとても重要である。しっかり糸を地布にくっ付けなければ、できた紋様の輪郭が太かったり細かったりしてしまい、それはきれいではない」と語った。胡 YR の作った刺繍を見れば、打籽繡（出来上がった紋様は1つ1つの丸の形である）の部分の丸の大きさが不統一であり、鎖繡の部分の糸は緩んでいるところがあるのがわかる。李 WF は胡 YR の刺繍作品を見て、「はじめて刺繍する人にとっては難しいが、これはあまりきれいではない」と言い、糸が緩くなっているところを見て、「これだと糸が切れやすい。たくさん練習すれば、上手になれる」と評価した。

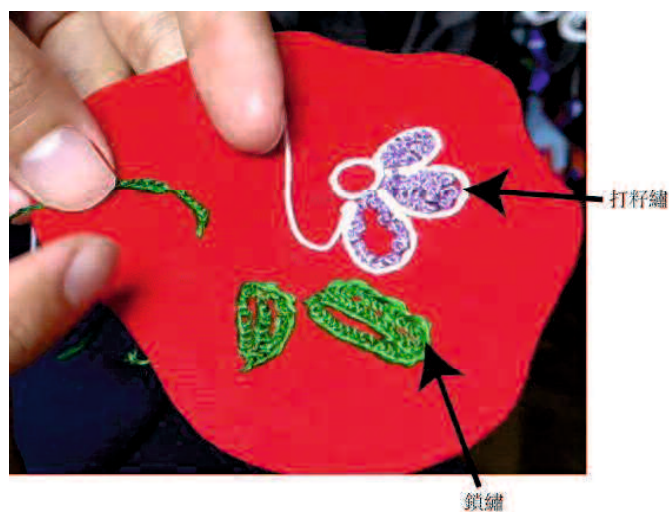


写真 1-8 初心者胡 YR の刺繍（筆者撮影）



写真 1-9 糸が緩んでいる刺繍（筆者撮影）

2018年9月、宋Hは家にある刺繍を整理していた。筆者はその折に、刺繍の保存と糸の関係に関して宋Hに尋ねのだが、彼女はウーベイ⁵⁶を折り畳みながら、刺繍の保存について「刺繍のある衣装を折り畳む時、もし糸がしっかりと地布に密着していなければ、紋様の形が崩れてしまい皺が出る。糸も切れやすい」と語った。写真1-9は古屋人家刺繍工芸展銷⁵⁷に所蔵されているウーベイの袖部分の刺繍である。この鳥紋様の刺繍は平刺繍であり、糸が緩んでいる。これに対し宋Hは「あまりよくない刺繍である」と評価した。すなわち、糸をしっかり締めることが紋様的美観に影響し、さらに刺繍の寿命にも影響するというわけである。

1.3.5 刺繍糸の色で年代を推測する

筆者は苗族の晴れ着であるウーベイの写真を整理している時に、ウーベイの作られた年代について確認するため、2018年11月末にWechat⁵⁸のビデオ通話で宋Hに聞き取り調査を行った。ウーベイの写真を見せ、ウーベイの作られた地域、年代について質問した。ビデオ通話では写真の質が落ちるため、宋Hには刺繍技法は確認できないが、ウーベイの刺繍の紋様と色は分かるということであった。筆者が6着のウーベイを見せると、宋Hはすぐにそれは60年ぐらい前のもの、それは40年ぐらい前のものだと言った。また宋Hは刺繍品販売店を経営し、店に並んでいる全ての刺繍の年代を把握しているとは言えない。しかし、現地調査において、筆者が宋Hの店にある刺繍の年代について質問した時、宋Hは分かる範囲ですぐ答えた。宋Hが作った刺繍、宋Hの母や姉妹が作った刺繍の年代が分かるのは当然のことであるが、彼女が刺繍品販売店を経営するために買い集めた刺繍について、どうして分かるのかと尋ねる

⁵⁶ ウーベイ（IPA表記：wu:bei）は苗語の発音であり、西江苗族の晴れ着である。

⁵⁷ 宋Hが経営している刺繍品販売店である。

⁵⁸ 中国大手IT企業テンセント（中国語：騰訊）が作った無料インスタントメッセージングアプリである。

と、宋 H は「色をみれば分かる」と答えた。

また 2019 の 2 月の現地調査で、刺繍を買い集めて販売している潘 GZ (50 代、女性、施洞鎮) と李 WF に阿幼民族博物館⁵⁹に所蔵されている民族衣装の年代、刺繍技法、紋様、色、作られた地域などについて聞き取り調査を行った。2 人とも刺繍技術をもち、刺繍を見て、その衣装の年代を推測することができた。李 WF は「年代が分かるのは、刺繍を買い集める時に私は販売者にその刺繍に関する情報を聞くからだ。また、刺繍されてから長い年月が経つと、刺繍糸の色が褪せる。そして 40 年前の刺繍の色は今と違う。あの頃 (40 年前) はみんな青色が好きで、龍でも、蝴蝶でも、青色にすることが多かった」と語った。すなわち、40 年前には青色が流行色であったと考えられ、李 WF が年代を推測する時、刺繍糸の色が 1 つの重要な要素となっているのである。

以上から、刺繍の製作において糸が重要な素材であり、刺繍糸の特質と刺繍技法の選択とはある程度の関連性があることが明らかになった。また、苗族女性が刺繍を製作する時、糸を整えることや糸の締め加減などに工夫し、完成した刺繍の美しさを糸を通して評価し、糸の色を通して刺繍の年代推測をしていることが調査事例から確認できた。

1.4 糸から苗族刺繍を紐解く

冒頭でも触れたように、これまで苗族の刺繍に関する研究は決して少ないとはいえないが、それらの多くは刺繍の紋様と技法という視点から考察したものがほとんどであった。もちろん刺繍作品・刺繍製作を見る際、紋様と技法は重要であるが、刺繍製作に不可欠な素材である刺繍糸の研究はこれまであまりにも等閑視され続けてきた。刺繍糸を無視して刺繍の価値を理解することはできない。本節では刺繍糸を通して、刺繍評価の基準、機械製作と手工製作の判別について検討する。

1.4.1 刺繍の価値基準の 1 つ——刺繍糸

前述したように、刺繍糸をきちんと揃えること、しっかりと地布に縫い付けることは刺繍の美観と耐久性に影響し、刺繍の良さを決める重要な要素である。しかし、それは簡単に獲得できる技能ではない。刺繍製作者は紋様のついた地布を用意し、刺繍技法を決めても、すぐ刺繍し始めるのではなく、まずは紋様全体の色の構成を考える。全体の構成を意識し、刺繍糸の方向 (横、縦、斜め) を調整しながら刺繍を行っている。

筆者は苗族女性が刺繍を製作する過程を観察し、熟練した苗族女性が刺繍をする時

⁵⁹ 阿幼民族博物館内は西江の住民である李 WF が 2017 年に開業した博物館である。苗族の刺繍、蠟染、銀飾り、生活道具などを展示し、販売する。また刺繍、蠟染の体験もできる。

は単に糸を地布に縫い付けるだけではなく、2、3回針を通す度に糸をきれいに揃えている（糸の方向が乱れていない、糸が緩めていない）ことを確認した。もし糸が揃っていない場合、針で調整してから次に進める。この細かな作業の繰り返しは膨大な時間がかかり、非常に手間のかかる作業であるため、根気がなければできないことである。ジーナ・コリガンは「未来の夫たちは、ミャオ族の未婚女性たちを、糸紡ぎ、機織り、刺繍の腕前から見定めるといわれている。手の込んだ衣装を美しく上手に作り上げることは根気強さと勤勉さの証なのだ」[コリガン 2003:11]と述べているが、ジーナ・コリガンがいう女性の腕前、根気強さや勤勉さは、技法や紋様の美しさというよりも、糸がきれいに揃っているという点に顕著に現れるといえる。

1.4.2 機械製作と手工製作

1990年代に入り、若者の出稼ぎで刺繍技能を継承する人が激減し、加えて技術の発達により刺繍を機械で製作することが可能となった。現在、西江では観光化が進み、民族商品を販売する刺繍品販売店が十数軒にのぼるようになった。いずれの販売店にも手工製作と機械製作の刺繍がある。手工製作の刺繍は機械製作の刺繍よりもはるかに高い価格で販売されている。

筆者が苗族服飾刺繍博物館、西江阿幼蠟染紡績刺繍博物館、古屋人家刺繍工藝展銷、金花綉坊などの刺繍品販売店で観察した限りにおいて、機械製作の刺繍と手工製作の刺繍を見分けることができる観光客は決して多くはなかった。雲南省文山⁶⁰に居住している苗族の民族衣装を研究している文化人類学者である宮脇千絵も「裏をみると糸の始末から機械製だと判別できるのだが、表から見る限り、手縫いの刺繍と見紛う出来栄である」と述べている[宮脇 2017:199]。しかし、筆者の調査においては、現地の苗族の女性は刺繍の表からでも機械製か手縫いかを容易に判断することができた。

筆者は刺繍の研究を始めた頃、機械製作と手工製作の刺繍の違いが分からなかった。しかし、刺繍ができる苗族女性は一目で機械製作の刺繍は分かると言う。彼女らは、「糸を見れば分かる。機械製作の刺繍は結び目を作ることができないので、刺繍の表の紋様から次の紋様に移った時の糸がそのまま残っている」と言う。

苗族服飾刺繍博物館の経営者である邵CH（30代、女性、施洞鎮出身）は「機械製作の工場では、1枚の刺繍ができあがったら、糸を切り、裏で糸の始末をする人を雇っている」と言った。すなわち、機械製作は効率性は高いが、機械は（少なくとも現時点においては）人間のように必要ところで糸を切ったり、裏で糸をぬけないように止めたりすることができない。機械は糸を切ることはせずに、刺繍全体において同

⁶⁰ 雲南省は中国西南にある省であり、文山市は雲南省の東南部に位置する。

色の部分を一気に完成させる。そのため、刺繍の表にはある同色の部分から別の同色の部分に移った時の流れが糸の連なりとしてそのまま残ってしまう（写真 1-10 の矢印で示した所）。手工製作の刺繍は、1つの部分が終わると、そこで糸を切って布の裏で糸の始末をする（写真 1-11）。そのため、表の紋様には必要のない刺繍糸は現れてこないののである。

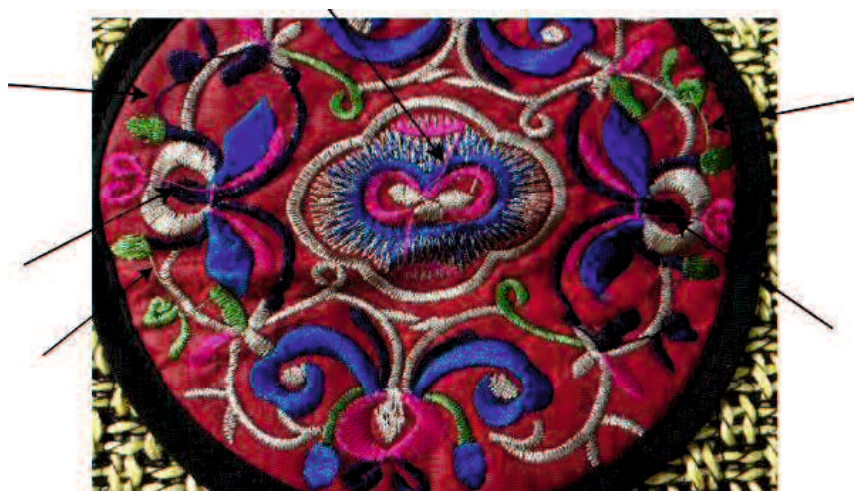


写真 1-10 機械製作の刺繍（筆者撮影）



写真 1-11 手工製作の刺繍（筆者撮影）

また、手工製作の場合は刺繍糸がきれいに揃えば揃うほど刺繍は良いとされる。しかし、人間は機械のように精密な作業ができないのも確かである。そのため、手工製作の刺繍は、きれいに揃っているものもあれば、揃っていないものもある。それに対して、機械製作の刺繍の糸はすべて均一に揃っている。これも手工製作と機械製作の刺繍の相違点の1つである。

別の例を挙げよう。写真 1-12 のように機械製作の刺繍糸の色は完全な対称を示し

ている。それに対して、手工製作の刺繍は紋様と技法は対称となっているが、刺繍糸の色は完全に対称であるとは限らない。写真 1-13 は手工製作による 1 着のウーベいの左右の腕部分の刺繍であるが、写真で番号 1 のところは濃い緑色で、番号 2 のところは濃い青色で刺繍が施されており、紋様と技法は同じであるものの、糸の色が少し異なっている。その理由を苗族の女性に尋ねると実に興味深い 2 つの回答が返ってくる。またそれは刺繍製作過程の観察、そして筆者自身の刺繍製作の体験において確認されたことである。1 つは製作途中で同じ色の刺繍糸がなくなったので、別の色の糸を使用したというもの。もう 1 つは 1 つの紋様を刺繍し終わった際、針にまだ糸が残っているため、そのまま同じ糸を別の紋様に使ったというものである。刺繍作業中に糸を切ると、糸の始末をしなければならず、また新しい糸を針に通さなければならない。この糸を扱うときの煩瑣性が、糸を使い切るまで使い、紋様や対称性に完全に依拠することなく刺繍を行うという行為につながっているのである。



写真 1-12 機械製作の龍紋様のウーベいの肩と両袖（筆者撮影）



写真 1-13 手工製作の龍紋様（筆者撮影）

以上は機械製作と手工製作の刺繍の違いを刺繍糸の観点から整理したものである。機械で刺繍を製作するのは効率がよく、紋様や技法の再現度も高いが、筆者の調査に

基づけば、彼女らが（少なくとも現時点においては）機械製作より手工製作の刺繍の方により高い価値があると考えていることは明らかである。たとえば、宋 H、李 WF、李 a（1970 年生、女性、平寨）、汪 a（1949 年生、女性、開覚）などの女性は数年かかって子供のために手工製作による刺繍の衣装を作っている。

さらに苗族女性は刺繍をする時に、広場や家の玄関に集まり、一緒に刺繍をすることが少なくない。この作業の中で互いに刺繍の技法を伝授・習得したり、色や紋様について意見を交換したり、互いの時間を共有することで、同時代における刺繍の伝承が見られる[楊 2018:35-38]。このような刺繍技術の相互学習や、刺繍するために集まった女性たちの時間の共有は機械製作の刺繍では起こりえないことである。

西江の観光化が進む中、刺繍の販売が盛んになり、その中でも手工製作の刺繍は機械製作の刺繍より遥かに経済的な価値があるものとなった。西江の刺繍品販売店で販売されている手工製刺繍の価格は、一般的に機械製刺繍の価格の数倍になる。手工製のウーベイの上衣 1 枚は 2 万元前後（日本円で 32 万円前後）であるのに対して、機械製は 3 千元前後（日本円で 5 万円前後）である。このような経済的な価値の差は刺繍製作の技法や紋様だけでなく、刺繍糸の取り扱い方からも生じている。それは刺繍糸をきちんと整え、しっかり締めるには多大な時間や労力がかかるためである。このように機械製作の刺繍は手工製作の刺繍と、外見上同じように見えてもその内実は、文化的、社会的、経済的など多くの面で全く異なったものであることが理解できる。それが顕著に現れるのは、両者の糸の取り扱い方の相違であり、糸の視点から手工製作と機械製作の違いを明確に識別することができるのである。

1.5 糸・刺繍・刺繍製作者

1.5.1 糸の残量により変わる刺繍の色彩構成

4.2 で機械製作と手工製作の違いとして、機械製作の刺繍は完全に対称であるが、手工製作の刺繍は完全な対称となっていないことを指摘した。本節ではこの点に関して、刺繍糸と刺繍製作者の間のインタラクティブな関係性（刺繍製作者と刺繍糸はどちらもその対象を動かすという意味で「主体」になり得るという視点。すなわち、刺繍製作者が主体であれば、刺繍糸が客体であり、刺繍糸が主体であれば、刺繍製作者が客体となる）の検討を通して刺繍糸と刺繍と刺繍製作者の関係を明らかにし、さらに議論を精緻化することを試みる。

文化人類学者である床呂郁哉と河合香吏が、『ものの人類学』において『もの』とひとの間に起こる相互作用の実態を長期にわたって子細に追うことによってあきらかになったことは、従属的で従順な客体であったはずの『もの』たちが、客体であることを『やめる』という実態が少なからずある、という現実であった」と述べている

ように[床呂・河合 2011:3]、糸もまたモノから考察する要素が多分に含まれている。すなわち、これまで提示してきた事例が示唆するように、人間とモノとの間で必ずしも人間が常にモノを操る立場に立っているとは限らず、モノが主体となり人間を動かすこともあるのである。このようにモノが主体となることは刺繍の製作過程にも見られる。

工芸美術の専門家である陳婷は苗族の刺繍について「対称性を求め、上下左右から見て、紋様、色彩などに完全な対称性が見られる」と指摘している[陳 2011:153]。これは機械製作の刺繍であれば可能であるが、手工製作の場合、より微細な視点から見れば刺繍糸の色は完全に対称となっているとは言い難い。写真 1-14 のザクロ⁶¹紋様の葉の部分を見れば、左側の葉（○で示した所）の糸は2種類の色があるのに対して右側の葉は1種類しかないので分かる。このように手工製作の刺繍では左右の色が全体的には同じであるが（つまり同系統の色を使っているが）、ほんの一部だけ異なる色の糸を使っていることがよくある。写真 1-15 は手工製作の鎖繡の刺繍であり、2つのザクロの紋様がある。この刺繍の糸の色は葉、ザクロの実、茎などに対しそれぞれ1種類の糸を使っている。写真 1-15 に楕円で囲んだ左側の方の葉は緑色であるが、上の部分には少しだけ隣接する実の部分の紫色の糸を使っている。これは「製作者が意識的にしたのだろうか」という見解に対し、現地の刺繍する女性は「そうではない。それは緑色の糸がなくなったのかもしれない」と答えた。つまり糸がなくなっても、すぐには買いに行かず、手元にある糸を使って刺繍し続けるため、このような色の越境、非対称性が現れるのである。このように糸の残量次第で当初予定していた色の構成が変わることは多分に起こりうるのである。

また刺繍糸の長さの残量による影響があることを別の状況においても起こりうることを示しておこう。筆者が刺繍の製作過程を観察している時、刺繍をする女性は1本の糸をできるだけ使い切るようにするという興味深い現象に気づいた。刺繍糸は決まった長さがあり、長すぎると刺繍する時糸がもつれるし、糸を短くすると、何度も針に糸を通さなければならず、裏で糸を止める作業も増えてしまう。そのため、ある部分の紋様の刺繍が完成しても、まだ針に糸が残っていれば、その糸を隣の紋様にそのまま使用することは決して珍しいことではないのである。

4.1 で述べたように、苗族女性が紋様と技法を決めても、すぐに刺繍を始めるわけではなく、紋様全体の色の構成を考えてから刺繍を開始する。すなわち、どの部分にどの色の糸を使うかは刺繍をし始める前に予め決めておくのである。それにも関わらず、針に通した糸の残量により、製作者は初めの予定を変えることがある。写真 1-14 と写真 1-15 の丸で示しているところは、本来同色であるはずの（つまり同色を予定

⁶¹ ザクロは苗語ではザイシリユ（IPA表記：z,ai f i' lia）という。

していた) ところが一部だけ異なっている。これは機械製作の刺繍には決して見られない色彩構成であり、手工製作の刺繍が機械製作の刺繍と決定的に異なるところである。



写真 1-14 手工製作の刺繍 (筆者撮影)



写真 1-15 手工製作のザクロ紋様 (筆者撮影)

このように、手工製作の刺繍の特徴として糸の色彩が一部対称でないところが挙げることができる。それは、使いたい色の糸が手元になかった時、あるいは針に糸が残っている場合に生じる。すなわち、人間は糸を操って刺繍をするが、逆に糸も人間の意識や行動を左右し、刺繍紋様の色彩構成に影響を与えているという状況が垣間見られる。刺繍製作者と刺繍糸の間には人とモノの相互作用があり、両者は相互に影響し合うなかで、刺繍の色と紋様を定めているのである。

1.5.2 市販の糸で決まる刺繍の色彩構成

2016年の現地調査において、筆者は広場で刺繍をしている女性たちが作っている魚紋様（まだウーベイにつけていない衣装の腕の一部分）が、同系色を用いたグラデーションになっていることに気づいた。この色の使い方は2000年代以前の刺繍には見られなかったものである。このような色の変化は、糸の種類の変化によって生じているものである。

このような色彩表現の変化は時代背景と無縁ではない。楊ZY（1941年生、女性、開覚）は「私が刺繍を学んだ時、糸も自分で作っていた」と語る。すなわち1950年代には苗族の女性は自分で刺繍糸を作っていた。当時は染料が限られていたので色の種類が限られていた。1960年代から1980年代にかけて、西江一帯は飢饉、人民公社、文化大革命を経験してきた。言うまでもなくこれらの時代には、糸の選択肢、種類は非常に少なかった。だが1980年代以降になると定期市で刺繍糸を買えるようになった。しかし宋Hや李WFによれば色の種類はそれほど多くなかったという。2000年以降、特に観光化が進み、交通が便利になり、外部との接触が多くなると刺繍糸の色の種類は一気に増えた⁶²。このような刺繍糸の色の種類の変化に応じて、苗族の刺繍も色彩表現において顕著な変化が見えるようになった。

筆者が現地において糸の販売店を調査したところ、販売店に並んでいる糸の色のグラデーションと刺繍の色のグラデーションとは驚くほど一致していた。写真1-16は定期市の糸販売店で売られている刺繍糸なのだが、糸はグラデーションになるように並べられている。続く写真1-17は2016年に西江の広場で撮影した鎖繡の魚紋様である。この刺繍の色は、刺繍糸の販売店と同じ構成でピンクのグラデーションで作られている。

⁶² 筆者はインターネットで刺繍糸の種類について調べてみた。中国「知乎」というサイトで調べたところ、刺繍糸は454種類の色があった。<https://zhuanlan.zhihu.com/p/35191759> 参照。2019年7月29日閲覧。実際2000年以降の西江の刺繍に使われている糸の種類は1980年代以前の刺繍より多い。すなわち、糸の色の種類が多くなり、刺繍製作者の選択肢が増えたことに従い、刺繍の色彩構成も変わったといえる。



写真 1-16 定期市で販売する刺繍糸（筆者撮影）



写真 1-17 魚紋様の刺繍（筆者撮影）

このような刺繍紋様におけるグラデーションは、2016年に広場で刺繍していた複数の苗族女性の刺繍、宋Hの2018年の刺繍、苗族女性李a（1970年生、女性、平寨）が2019年に製作した娘の結婚衣装につける繡片などにも見られる。すなわちここでも糸が可能にする刺繍表現が確認される。つまり刺繍製作者の意図によって刺繍の色彩は決まるが、刺繍のグラデーションを可能にすること、刺繍のグラデーションの構成においては、市場で販売されている糸の存在と糸の配置が刺繍の色彩構成において大きな影響力を持っていると考えられるのである。このことから5.1で述べたように、刺繍糸と刺繍製作者の相互作用が確認されるのである。

1.6 まとめ

文化人類学という分野の中で、刺繍は布の研究や布の加工技術に関しても多く報告されるが、やはりまず糸から議論が始まることが多い。しかし、中日における苗族の

刺繍研究においては、刺繍の技法、紋様、色彩については確かに多くの蓄積があるものの、糸そのものに関する議論は等閑視され続けてきた。もちろんこれまでの研究を通して、苗族の衣装と刺繍の技法、紋様、色彩の特徴についてはある程度全体像を掴むことができる。しかし、これまでの苗族の刺繍に関する研究は、細部である刺繍糸に注目し、糸・刺繍・刺繍製作者の関係に焦点をあてた研究は存在しなかった。しかし存在しないからといって、重要でないとは言い切れない。刺繍を見る際に紋様と技法はもちろん重要であるが、刺繍に不可欠な素材である刺繍糸を見逃しては刺繍そのものの価値を理解することは不完全である。

本章では、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県西江鎮の苗族刺繍を、刺繍の素材である糸に焦点をあてて検討してきた。西江で刺繍をする苗族女性は誰でも刺繍に必要なものが揃った刺繍道具箱を持っている。本章ではまず彼女らが刺繍する際に、固体糊を糸の光沢感を増す道具とし、針と体を利用して布を固定するなど、道具の特性を最大限に利用し、刺繍を行っていることを示した。また刺繍箱の中には必ず糸があり、糸の特徴と刺繍技法の選択は密に関連しており、各種の刺繍技法で作る際、糸の形が異なるため、刺繍糸の特徴や作り上げた刺繍糸の形を見て刺繍技法を識別することができることを明らかにした。

糸に関しては、苗族女性は刺繍の良し悪しや刺繍製作者の技量を評価する際、紋様や技法よりも最初から糸の整序を見ることが多いことを指摘した。その理由として、刺繍糸の色の選択や、糸が揃っていること、糸の締め加減が、刺繍の美観や耐久性に影響を与えるということが挙げられる。すなわち、刺繍糸がきれいに揃っていなければ、どんなに難しい刺繍技法を使っても刺繍は美しく見えないし、糸と布の密着性が高ければ高いほど刺繍は長持ちする。そのため彼女らは、刺繍製作の過程において、常に糸をきちんと揃えること、針で地布を通す時、紋様を描いた紙が見えないほど糸で密に刺すこと、糸を締めることなどを意識しながら刺繍をしていくのである。筆者自身の体験や刺繍の初心者と熟練者の刺繍製作過程の観察を通して、良い刺繍を作るには刺繍技法の習得よりも、刺繍糸の制御の方が遥かに難しく、習得するにはかなり長い時間と労力を要するということが明らかとなった。刺繍技法は教えてもらえば、知識としては「習得」可能だが、刺繍が上手になるには刺繍糸をきれいに揃え、地布にしっかりと縫い付けるということが重要となってくる。これは短時間で習得することは難しく、繰り返し時間をかけることではじめて習得可能な技能であるということも明らかとなった。

1990年代に入り、若者の出稼ぎで刺繍を継承する者が激減し、加えて技術の発展で刺繍を機械で製作することが可能となった。機械製作の刺繍は手工製作の刺繍とは文化的、社会的、経済的などの多くの面で異なっている。本章では、刺繍糸を通して機

機械製作と手工製作の刺繍の違いを識別するには、糸の切り目と結び目、刺繍糸の揃っている程度、刺繍糸の色彩構成の特徴を見れば分かることを示した。その中で特に注目に値するのが、機械製作の刺繍には見られないが、手工製作の刺繍には見られる特徴である。それは対称的に見える紋様の中に一部だけ非対称な所があり、一部だけ刺繍全体の色使いのルールを異にする部分があるという点である。このような特徴こそ、刺繍の製作過程における生き生きとした人間と糸の相互作用の中で派生するものであり、機械製作の刺繍では作りえない手工製作の刺繍の魅力的なところであると筆者は考える。

このような手工製作の刺繍の特徴は、刺繍製作者が刺繍の製作過程において、刺繍糸の手持ちの残量、また針に通している状態の糸の残りの長さによって影響され、刺繍し始める前に予め考えていた刺繍の色の構成や全体像は、これらにより多分に影響され変更される。また、2000年代以降の刺繍からグラデーションという色彩表現が多く見られるようになるのは、市場で販売される糸（種類と配置）により大きな影響を受けている可能性を指摘した。すなわち、人間が糸を操り刺繍を作るが、逆に糸も人間の意識や行動に影響を与え、刺繍紋様の色彩構成を変更させるという状況を明らかにした。刺繍製作は、刺繍糸と刺繍製作者の間の共同作業であり（たとえば糸の状況により紋様の色が変わり、市販の糸の種類と展示方法が刺繍の色彩構成に影響を与える）、いずれもが主体となり客体となり得る相互作用の中で作品が作られることを示した。

本章では、刺繍製作に不可欠な素材である刺繍糸に注目し、糸・刺繍・刺繍製作者の関係について整理し、これまで技法と紋様だけを中心としてきた苗族刺繍の研究を、糸という視点から新たに問い直したものである。これまでの苗族刺繍研究においては刺繍糸の主体性から刺繍をみるという視座はほとんど空白と言って良いところがあるが本章のオリジナリティなところである。

第2章 苗族刺繍の母系伝承について（技法を中心に）

2.1 はじめに

苗族は文字を持たないため、自民族の歴史を服装の刺繍を通して伝えてきたとされている[蒙 1995:40]。苗族にとって刺繍とは重要な民族文化の象徴であり、民族アイデンティティにとっても重要な要素となっている。民族衣装についている刺繍は外部の者にとっては苗族という民族を識別するための印である一方、苗族自身にとっても各地域の苗族グループを区別する基準の1つとなっている。

貴州苗族の刺繍を研究する際、黔东南雷山县地域は苗族の刺繍に関する研究蓄積が豊富な黒苗支系の代表的な地域である。本章は、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山县西江鎮西江千戸苗寨の刺繍を研究対象とし、フィールド調査に基づいて刺繍技法の伝承方法を再考する。以下、2.2の節で調査地を概観した後、母娘の刺繍技法の伝承において特に重要な期間とされる「坐家」について説明する。続く2.3節では、これまで先行研究において定式化されてきた、母から娘へ刺繍技法が伝承される、いわゆる母娘伝承の研究事例を提示し、2.4の節で実地調査に基づいて刺繍技法の伝承を確認する。そして2.5節で先行研究において定式化されてきた母娘伝承を検証する。

本章が特に力点を置くのは、母以外の同時代の女性による伝承の重要性、とりわけ様々な刺繍技法の伝承方法を再確認することであり、母娘伝承は同時代の女性による伝承方式の一部分に過ぎないということを指摘することである。つまり、本章の目的は従来の母娘伝承を主体とした苗族刺繍技法の継承方法を改めて、「同時代の女性」という観点から問い直すことである。

2.2 調査地の概要

2.2.1 坐家について

苗族女性は結婚に前後して母親から娘へ刺繍技法が教えられる特別な期間がある。苗族の女性は結婚式を挙げた後、実家に居住し、結婚後の家族の衣裳の準備する期間を設ける。この期間は「坐家」と呼ばれる。坐家は、鈴木正崇・金丸良子よれば「結婚後も花嫁が引き続き実家に住み、これを『坐家』(通い婚) niangb zaid nai」と称する。この後しばらくは吃新節⁶³、苗年⁶⁴という祭りの時だけ、夫の家に滞在するという生活を続ける。(中略) 結婚後1~2年の間は、夫と妻は分かれて住む。(中略) こ

⁶³ 苗語で「ナオモガリ (IPA表記: nau:mɔŋ a:lɪ)」といい、苗族の人が豊作を祝うための祭りである。毎年6月中上旬に行われる。

⁶⁴ 苗族の正月であり、毎年旧暦の10月の中旬頃に行う。具体的な時間は鼓蔵頭によって決められる。苗年の時に、蘆笙舞、闘牛などをする。

の間は、もし普段の時に、花嫁が夫の家に来て、男性は出かけてしまって、『回避』Vak mais をする。普通は妻が身籠ってから、夫が妻を呼びよせるのであり、それまでは同居に備えて衣服をつくったりなど準備する期間である。漢語で『不落夫家』で、日本でいう妻訪いに当たる形式だが、労働力の問題が大きく絡んでいる⁶⁵[鈴木・金丸 1985:86]。

これまでの研究では坐家は刺繍技術の習得期間とされ、また婚姻の猶予期間であるとされてきた。しかし西江では1960年代頃には坐家をする女性は既に少なくなっていたという。すなわち今日までの半世紀近くにわたって、刺繍技法の伝承は、単純に「坐家を通して行われる」とは言えない状況にあった。これは以下に述べる政治経済的な状況と無関係ではない。

2.2.2 西江苗族刺繍伝承に関する時代背景（1960年代から2019年まで）

基本的に「坐家」の期間に苗族女性は刺繍技法を習得したが、20世紀後半以降、中国は政治的に不安定な時期に在り、彼女らのライフスタイルも大きな変化を余儀なくされた。そのため伝承のあり方も政治状況と無関係ではない。そのため伝承の現状を考える上でも、半世紀前から現在における彼女らを取りまく環境も概観しておきたい。

筆者は2016年の2月、7月、9月の3回、合わせて40日間、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州西江鎮でフィールド調査を行った。被調査者の中の、李YW（1939年生、男性）と宋H（1963年生、女性）の夫婦のライフヒストリーをベースとして1960年代から2016年の調査当時の時代背景にまとめ、西江の刺繍伝承に関する基本的な時代背景としておきたい。

李YW（1939年生、男性、羊排村）のライフヒストリーをもとに、筆者は李YWの生活状況を5つの時期に分けた。

- ①1939年～1958年：家の状況は貧しかったが、学校に行き、国からの補助金があり、食べることにそれ程心配はしていなかった。
- ②1958年～1978年：飢饉や人民公社制度のため、西江の人々は貧しい生活をおくり、「腹一杯」食べられない時期であった。いくら労働しても、労働成果を国家に捧げなければならないため、生活は良くならなかったという。李YWの話によれば、李YWの姉である李YM（生年不詳）も労働に参加し、刺繍する時間を持つことは難しかった。
- ③1978年～1984年：改革開放が始まり、貧しかったが労働により生活改善がみられるようになった。70～80年代、1人っ子政策や学校教育のため、子供が減少し、刺繍を習得する者、刺繍を習得する機会も減少した。

⁶⁵ 鈴木正崇・金丸良子、『西南中国の少数民族』、古今書院、1985年、pp. 86～87

④1984年～2008年：中国沿海の都市の経済発展が著しく、西江の若者の出稼ぎ者が激増していた。市場経済化のなかで刺繍という手工芸を通して生計を維持することが難しく、必然的に若者は出稼ぎせざるをえない状況に置かれたため、若い世代の刺繍継承者が減少した。

⑤2008年～現在：西江鎮が観光地になり、出稼ぎに出る若者は減少した。現地の人の生活も豊かになりつつある。刺繍作品の経済的価値を見出し、刺繍品販売店を出している人もいるが、現地の人にはホテルやレストランの仕事をしたほうが手早く現金収入を得られるため、刺繍をする人は多いとは言えない。

もちろん李 YW の 1 人だけのライフヒストリーをもって西江鎮の住民の代表とすることはできないが、李 YW が生まれてから 1958 年に学業を終える期間を除いて、西江の 1960 年代から現在までの大まかな生活状況を窺い知ることができる。20 世紀後半以降は、刺繍についてはいわゆる「伝統的」な母娘の間で技法を伝承するというような単純な語りでは説明できない状況が彼らをとりまいていた。

1960～1980 年代は、飢饉、文化大革命という時代背景の中で西江の住民は生活に窮した時代が続いたため、刺繍という工芸品を作る時間的、経済的余裕のない状況であった。改革開放後、生活にゆとりが生じ、刺繍をする余裕は生まれたものの、経済的な豊かさをもとめて出稼ぎに行く者が増えたり、学校教育のため子どもが親から離れたたり、現地の観光開発の影響で生業に変化があったりしたため、母から娘へという刺繍の伝承は次第に行えなくなってきた。しかし現在、観光化や経済発展に伴い、新たに刺繍教室という伝承方式が現れている。

以上が調査地の刺繍伝承をとりまく概略と現状である。

2.3 苗族の刺繍伝承に関する研究の現状

現在、苗族刺繍に関する研究の蓄積は少なくなく、主に中国の研究者によるものが多い。それらは苗族刺繍の商品化、伝承と保護、芸術性、図案、歴史、技法、民俗などの分野に分けることができる。本章はとりわけ苗族の刺繍の伝承（刺繍技法・刺繍紋様・紋様の意味など）に着目し、以下のように研究史を整理したうえで、問題点を指摘することにしたい。

苗族の刺繍研究において数多くの論考を発表してきた龍葉先は、苗族の刺繍の伝承には「母娘相伝」（「輪型模式」）と「仲間相伝」（「全通模式」）という 2 つのパターンがあることを指摘している[龍 2008:101-104]。輪型模式は「母娘相伝」であり、家庭内で母（上位）の世代から娘（下位）の世代に伝わり、娘が母になるとまた次の世代に伝えることを意味する。

「全通模式」は「仲間相伝」であり、地区内の同世代の女性が互いの交流の中で刺

繡を学習することである。すなわち、龍葉先は刺繡の伝承を母娘という「縦」方向の伝承と同世代の仲間の「横」方向の伝承とに分けている。龍によれば苗族刺繡は「輪型」→「全通」→「輪型」という流れで伝わるという。また龍は「苗族少女の〈自然〉から〈社会〉への転換というのは、母から娘へ伝承されるのが最も主要な方法であり、その転換は主に家庭内と地域社会内で実現する。娘は母から刺繡を学ぶだけでなく、兄の嫁や年齢の近い女性の仲間からも学んでいる。この娘たちは刺繡をしながらお喋り続け、刺繡の経験を共有することで、気持ちをより合わせ、一緒に新しい紋様を作り出したりもする。その娘が母になった時、自分の技術を自分の娘に教える。このようなことが繰り返される（筆者訳）」[龍 2008:102]という。

龍の「母娘相伝」は母娘という上位世代から下位世代へという縦軸を作り、「仲間相伝」は同世代の横軸を作っているとの指摘は、苗族刺繡の伝承に関する研究の中で極めて重要である。しかし、龍は母系以外の血縁関係などのない上位世代と下位世代との伝承を見落としている。龍が「母から娘へと伝承するのは一番主要な方式である」と言っていることから、母系以外の伝承にも注意を向けつつも、やはり龍の議論は「母娘伝承」に偏重していると言わざるを得ない。また龍の苗族刺繡の「輪型」（母娘）→「全通」（同世代友人）→「輪型」（母娘）という順で刺繡を伝承しているという指摘それ自体について、筆者は強く否定するつもりはないが、刺繡技法の伝承という視点からみれば、そのフローは伝承を固定化してしまっているともいえ、刺繡技法のダイナミズムを描き切れていないと考える。

次に刺繡を母娘の情動的つながりから研究した佐藤若菜[佐藤 2014:305-327]について触れたい。佐藤は苗族の刺繡伝承というよりも民族衣装それ自体に注目しているが、彼女の提示している「民族衣装」は刺繡と深く関わっている。佐藤は中国西南部（貴州省・雲南省・湖南省）に暮らす苗族を事例に、現地の社会経済史を背景とした衣装の価値の変遷、製作と所有の変化、および女性のライフコースの変容の中で、刺繡文化を捉えなおす試みを通じ、苗族における衣装を介した母娘の「共感的」関係が生起する過程を示した。1980年頃まで、苗族の女性のライフコースには、坐家と呼ばれる婚礼から婚家に移住するまでの猶予期間があった。しかし1990年頃から坐家はなくなり、新婦は婚礼の数日後に夫と暮らしはじめ、早々と子をもうけるようになった。これに伴い、衣装製作においても変化が起きていると佐藤は指摘する。

1980年代以前には製作技術の伝習など、母娘間の特有の関係が衣装を介して築かれていたという。しかし、1990年以降、衣装を略奪したり、製作した上で保管したり、預けたりする行為が、衣装のやりとりだけにとどまらない多様な意味を持つようになった。1990年代以降、衣装の価値が上昇し、嫁不足や坐家期間の短縮にみられる婚姻形態の変化、そして衣装が母の手で娘のために作られるようになった事によって、衣

装をめぐる母娘の「共感的」関係が生起するようになったという。佐藤の論文には民族衣装の製作における「母娘関係」が強く主張されている。確かに衣装の製作には「母娘関係」が重要であるが、技法の伝承という視点から人間関係を考えるのであれば、やはり同時代の女性の存在を見落としてはならない。また佐藤は苗族の女性が結婚後に「坐家」という生家に住み続ける期間を利用し、母から刺繍を習得することを指摘し、加えて刺繍が施された衣装が母系的に管理されることに注目している。確かに衣装の管理は母系的であるが、そこに施された刺繍の技法が、必ずしも母系あるいは母娘間でのみ継承されてきたものとは限らない。

以上、代表的な研究者として龍と佐藤を挙げたが、先行研究、とりわけ中国国内の苗族刺繍の伝承に関する他の先行研究を挙げれば枚挙に暇がない。たとえば黄玉氷[黄 2011(48):43-49]、呉平[呉 2006:118-124]、劉孝蓉[劉 2008(26):325-328]などの研究を挙げることが出来るが、それらは苗族刺繍の伝承について「母から娘へ」という「母娘伝承」が行われているという表現にとどまっており、それが実際に、どのように母から娘へと伝承されているかという点に関して十分に示していない。

以上を踏まえ、本章は実証的な調査データから「母娘伝承」の実体を明らかにし、「母娘関係」の重要性を認めつつも、母系に偏重し過ぎてきた先行研究を批判的に検討することを試みる。そして刺繍伝承、とりわけ刺繍技法の伝承において、母、夫方の親族、姉妹、女性の友人、同じ地域の女性など、「同時代の女性による伝承」という視座が重要であることを指摘する。筆者はこれらのアクターをいずれも「同時代の女性」の中の1人と考え、「母娘伝承」を「同時代の女性による伝承」の一部に再配置する。

2.4 西江の苗族刺繍の伝承

2.4.1 刺繍の種類

苗族の刺繍は苗族衣装の装飾の主要な手段である。それは苗族の女性文化の代表的なものでもあり、様々な図案、刺繍スタイルを生み出してきた。苗繡⁶⁶の刺し方は緻密であり、デザインの題材も豊富で、主に鳥、魚、銅鼓、蝶、龍などがあり、苗族の「歴史」を表す紋様も多く存在する。

苗繡の技法は数多くあり、苗族の刺繍を調査対象とする呉平によれば「苗繡の中には平繡、板絲繡、数紗繡、納錦繡、皺繡、瓣繡、破線繡、錫繡、打籽繡、堆繡、馬尾繡、絞繡、盤線繡、織繡、挽繡、貼花繡、挑花、双面繡、直針繡、鎖辺繡、盤金繡など20種類以上ある」[呉 2006:122]。

筆者は2015年10月、2016年2月、同年9月の西江での実地調査で、12人の女性

⁶⁶ 苗繡：苗族の刺繍の略称である。

に聞き取り調査を行った。本章の事例にて詳しく習得技法を聞き取れた女性は5人であり、習得している刺繍技法の詳細は表 2-1 に示した通りである。

表 2-1 西江の刺繍と女性の習得技法（筆者作成）

	氏名（生年、出身地）	習得した刺繍技法
1	楊 ZY（1931 年生、開覚 ⁶⁷ 村）	平繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、皺繡、辮繡、馬尾繡、数紗繡、膨花繡、剖線繡
2	李 WF（1972 年生、開覚村）	平繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、皺繡、包繡、貼花繡、辮繡、馬尾繡、数紗繡、噴花繡、剖線繡
3	宋 H（1963 年生、東引村）	平繡、馬尾繡、皺繡、鎖繡（双針繡）、数紗繡、辮繡、剖線繡
4	毛 JH（1974 年生、南貴村）	平繡、皺繡、辮繡、馬尾繡、鎖繡（双針繡）、剖線繡
5	張 Q（1994 年生、郎徳上寨）	平繡

表 2-1 から、西江でよくみられる刺繍技法は平繡、剖線繡、皺繡、辮繡、馬尾繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、数紗繡、噴花繡、貼花繡であることが分かる。現地の人の話に共通しているのは、平繡が一番簡単な刺繍技法であり、ほぼ全員平繡から学び始めるという。平繡は刺繍の入門技法であり、刺繍の基本であると考えてよいであろう。2016 年 2 月、現地調査で聞き取りをした宋 H は「刺繍を学び始めた時、母から一番最初に教えてもらったのは平繡だった。ほとんどみんな平繡から学び始める」と筆者に語った。筆者と張 Q（1994 年生、郎徳上寨出身）が刺繍を学ぼうとしたとき、宋 H が最初に教えてくれたのも平繡であった。

2.4.2 刺繍紋様の伝承

西江苗族の刺繍は主に女性の盛装の襟、背中、肩、エプロン、スカート、靴などに付けられる。また子どもの帽子、背負い、布団にもよく付けられる。

刺繍の紋様は苗族の女性が刺繍を習得する過程において伝わる。たとえば宋 H は紋様の伝承について次のように語る。「母が刺繍したものを参考にしたり、自分の好きな花を刺繍にしたりすることが多い。胡蝶ママ⁶⁸が子供を守ってくれるということは昔のお年寄りから聞いた」。宋 H の語りからも、刺繍をする女性が前世代から伝わっ

⁶⁷ 開覚村：西江鎮の属する行政村の 1 つである。

⁶⁸ 苗族は蝶を漢語で「胡蝶ママ」と呼んでいる。胡蝶ママは苗族の始祖と考えられ、苗族の人が蝶を自民族の「守護神」と考えている。蝴蝶ママは苗語ではゲバシヨマ（IPA表記：g ε̃˧ bɑ̃ ʃhiɔ̃˧ ma）という。蝴蝶は「ゲバシヨ」といい、ママ（母親）は「マ」という。

てきた刺繍作品を模倣することにより、紋様とそこに込められた意味を継承している様子が窺える。



写真 2-1 宋 H の家にある刺繍作品（筆者撮影）

写真 2-1 は宋 H の刺繍品販売店の刺繍作品である。抽象的でわかりにくい紋様であるため、筆者が彼女に紋様について聞くと、「多分鳥だろう。花もあるが。私にもわからない」と話した。紋様は実在する刺繍作品があれば次の世代に伝承することができるが、現在では紋様の意味は必ずしも「正確」に下位世代へと伝わっているわけではないようである。

2.4.3 刺繍技法の伝承

本章では刺繍の伝承を紋様と技法に分け、技法伝承に重点をおいている。以下では、技法の伝承方法を、母娘伝承、同時代伝承、刺繍教室伝承に整理し議論を進めていく。

2.4.3.1 母娘伝承の事例

苗族の刺繍は一般に、代々母親から娘へと伝承されてきている。先述したようにかつて苗族の女性は結婚すると坐家という期間を経た後、夫の家で居住した。坐家の期間中に、結婚後に自分が身に着ける衣類や子供のおぶい紐、靴などを製作する。筆者が現地調査をした 12 人の女性の内、坐家をした者は 2 名しかいなかった。以下にその坐家をした楊 ZY（1931 年、女性、開覚村）と李 F（1941 年生、女性、出身地不詳）と坐家をしなかった宋 H の刺繍の伝承の事例を記す。

坐家をした楊 ZY（1931 年生、開覚村）は、12 歳の時に母を亡くした（図 2-1）。そのため、母に刺繍を習ったのは極めて短い期間であり、完全に刺繍技法を習得することはできなかった。その後、母の妹であるオバから刺繍技法を習った。「母とオバは

刺繍を祖母から学んだと聞いたことがあるが、具体的に何歳から学び始めたのか、また刺繍の習得過程については知らない」と楊ZYは語った。楊ZYには弟が1人いたが、刺繍の習得は彼女1人がした。坐家の期間に、13着の服を作り夫の家へ持って行った。結婚後、娘4人と息子1人を授かり、4人の娘に刺繍を教えた。現在は4番目の娘の李WFと一緒に生活している。2016年の調査当時は85歳の高齢であったが、健康であるため、娘が経営している「雷山県西江阿幼苗族刺繍紡」で刺繍や服縫製などの仕事をしていた。

楊ZYの事例から、「母親に刺繍を学んだ」「母の死後、母方のオバから刺繍を学んだ」という2つのことが分かる。つまり楊ZYは刺繍を母系親族から習得した。

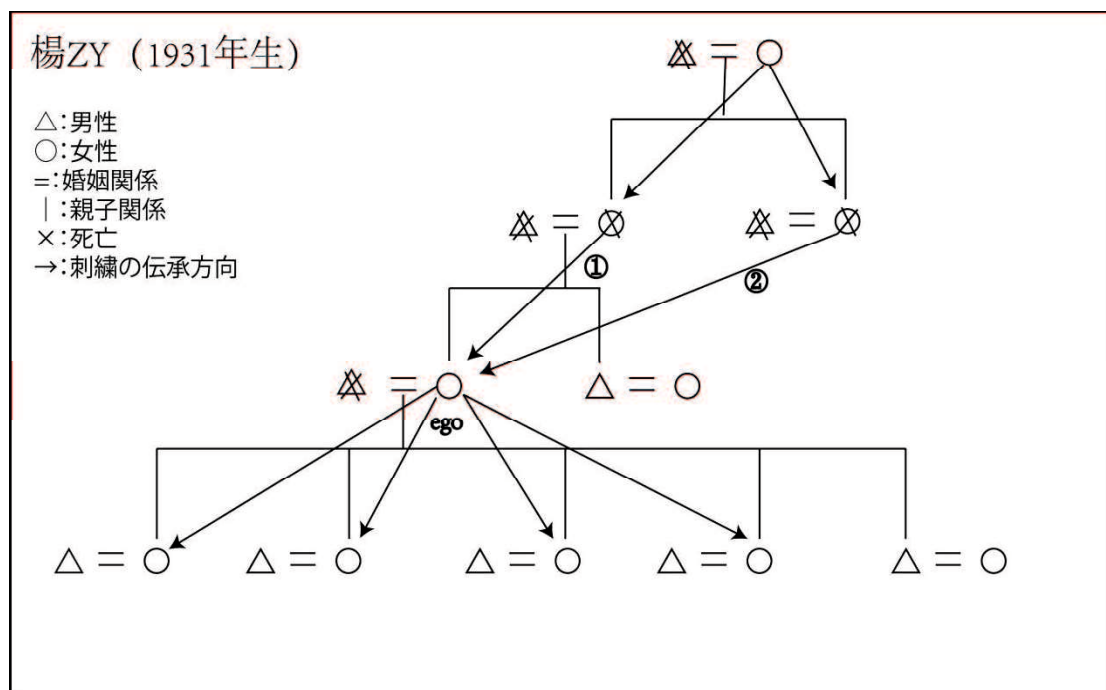


図 2-1 楊ZY (1931年生) 親族関係図 (筆者作成)

次に同じく坐家をした李F (1941年生) の事例である (図 2-2)。李Fは結婚して現在東引村に住んでいる。李Fは母から刺繍の技術を教えられたと語り、糸紡ぎ、布織りもできる。結婚に際して、2年間ほど坐家をしたという。結婚する前から母に刺繍を教えてもらったが、坐家の期間に刺繍の技術が向上したという。李F自身もまた2人の娘に刺繍の技法を教えた。長女の宋LQ (1971年生) は也薺⁶⁹に嫁ぎ、現在は民宿を経営している。彼女は現在あまり刺繍をしていないようである。次女の宋LM (1973年生) は西江鎮羊排村也東寨⁷⁰に嫁ぎ、現在レストランを経営しているため、刺繍す

⁶⁹ 也薺：地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州丹寨県に属する。

⁷⁰ 寨：周囲を木の柵や塀で囲っている村。規模の小さい城。

る時間は少ないという。李 F は現在次男の宋 YH2 (1966 年生) の嫁である李 YF (1968 年生) が経営している「李 YF 刺繍工紡」で刺繍関係の仕事を手伝っている。

李 F の世代は、刺繍を学ぶとき、糸紡、布織も学んでいたが、娘の世代になると、布や糸が買えるようになり、次第に布と糸は自分で作らないようになった。李 F は現在たまに布を織るが、普段はほとんど布と糸は買っている。李 F は嫁の経営している刺繍工紡で主に子供の靴に簡単な刺繍をしている。嫁に積極的に教えているわけではないが、一緒に刺繍をする時に、紋様、技法、配色などについて話し合う。その話し合いと刺繍をすることで、互いに刺繍を学んでいる。

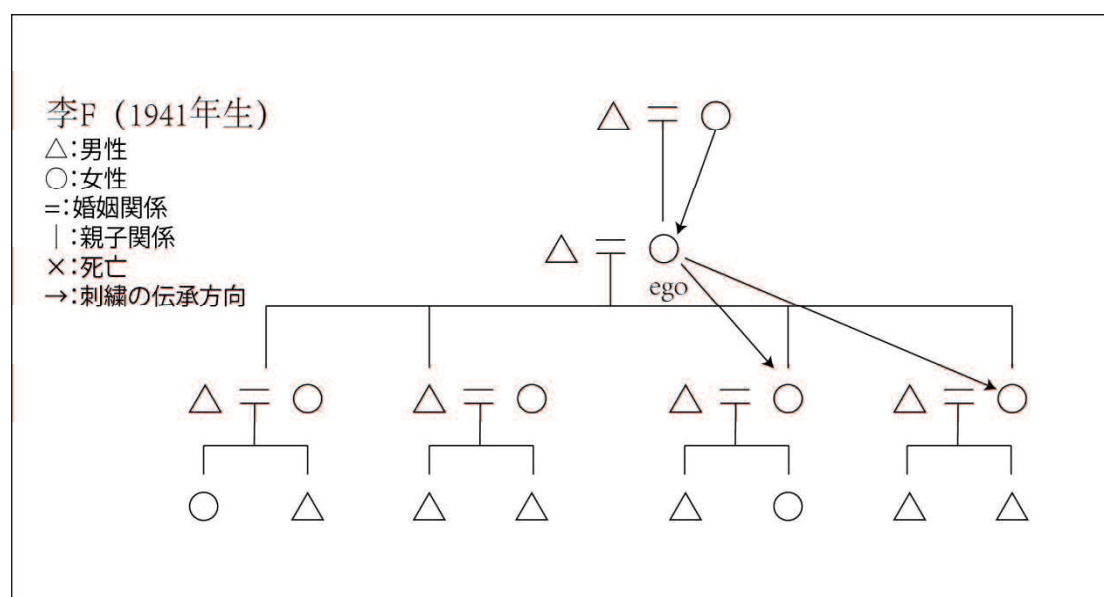


図 2-2 李 F (1941 年生) 親族関係図 (筆者作成)

3 人目は坐家をしなかった宋 H (1963 年生) の事例である (図 2-3)。彼女は小学校を卒業した後、15 歳の頃に、母から刺繍を学び始めた。しかし糸紡ぎと布織りはできないという。結婚した後の 1980 年代、5 年近く刺繍で生計を立てていたが離婚した。1990 年に、宋 H は李 YW (1939 年生) と結婚した (2 人とも子連れ再婚)。夫の李 YW は既に子どもが 5 人 (男 3 人、女 2 人) おり、宋 H も男の子を 1 人を連れてきたため、合わせて 6 人の子供がいる。結婚後、李 YW の娘は 2 人とも刺繍に全く興味を示さなかったため、刺繍は教えなかったという。現在、長女の李 LP (1970 年生) は結婚し、凱里市⁷¹に住んでいる。長女の娘も刺繍に興味がなく、学校の勉強もあることから、刺繍を教えなかったと語る。次女の李 QP (1973 年生) は結婚し、江蘇省に住んでいる。次女の娘とは離れて暮らしているため、刺繍を教えようがないと宋 H は話す。

⁷¹ 凱里市：地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州に属する。

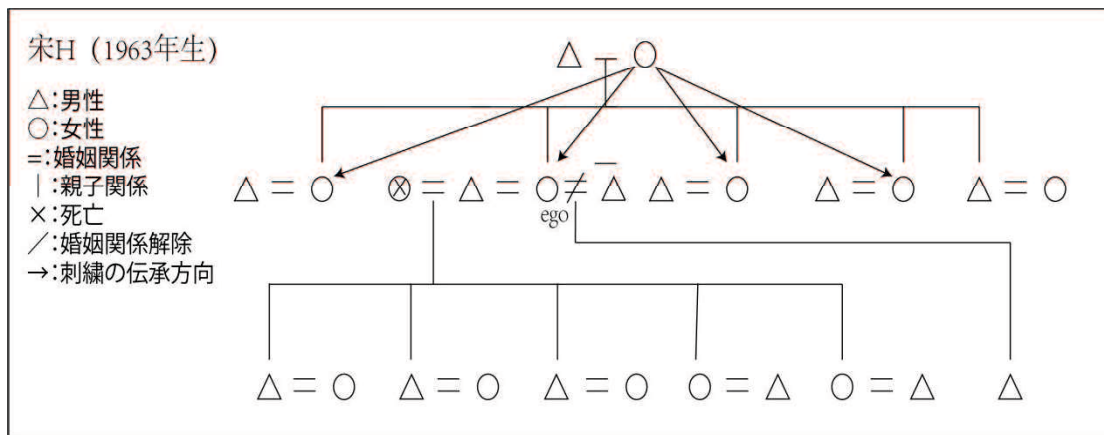


図 2-3 宋 H (1963 年生) 親族関係図 (筆者作成)

この 3 人を含め、筆者が聞き取り調査した 12 人の女性の内、楊 ZY (1931 年生)、楊 CM (1935 年生)、宋 GX (1939 年生)、李 F (1941 年生)、宋 H (1963 年生)、楊 CL (1968 年生)、李 YF (1968 年生)、李 b (1970 年生)、李 WF (1972 年生)、毛 JH (1974 年生)、楊 FF (1994 年生、調査当時未婚) の 11 人は母から刺繍を習っていた。しかし、残りの 1 人である張 Q (1994 年生) は母から習っていない (後述するが、彼女は同時代の女性から刺繍を習った)。また毛 JH は娘がいないので、次の世代に刺繍を教えていない。李 WF や宋 H のように娘が刺繍に興味を示さず、息子には刺繍を教えない。ここまでは、龍や佐藤の指摘の通り「母娘伝承」が存在することは明確である。

2.4.3.2 同時代の女性による伝承の事例

次に母娘伝承とは異なった形態で刺繍の技術を習得する事例をみていくことにする。フィールド調査において、現地の女性に「刺繍は誰に教えてもらいましたか」という質問をすると、間違いなくほぼ全員が「母に教えてもらった」と答える。そのため語りのレベルにおいて刺繍が「母娘伝承」されているということは異論を挟む余地はない。しかし実際にすべての刺繍技法が母から娘へと伝承されているかという点、必ずしもそうとは言い切れない (また後述する張 Q のように初めから母親以外から習うこともある)。以下の事例より、刺繍、とりわけ刺繍技法が同時代の女性によって伝承されることを示す。

刺繍技法の習得は主に母から、又は同時代の女性から習得する。李 WF (1972 年生) の母は楊 ZY (1931 年生) であるが、表 2-1 で示したように、李 WF ができる刺繍技法は母より多く、貼花繡は母から習得したのではなく、一緒に刺繍する女性から学んだという (表 2-1 を参照)。「母に刺繍を学んだが、全部母から学んだわけではない。時々友達と一緒に刺繍するので、友達に刺繍技法を学んだものもある」と李 WF は語る。

また宋 H (1963 年生) も刺繍技法を母に教えてもらったというが、弟が結婚して遼寧省⁷²に移住することになり、母も弟のところへ移住したので、母娘間で伝承ができる状況ではなくなった。2016 年の 4 月に雷山県政府により「刺繍試合」⁷³が開催された時、宋 H は刺繍試合に参加する作品に双針繡を使った。双針繡の技法は母からではなく、一緒に刺繍試合に参加する人に教えてもらったという。

一方、宋 H の店でアルバイトしていた張 Q (1994 年生) は母から刺繍を学んでおらず、宋 H から平繡を学んだ。張 Q の事例から、刺繍の継承は特に母からでなくても、同時代の刺繍のできる女性から習得することが可能であることが分かる。すなわち刺繍伝承は母系にのみ伝わる秘伝でもなければ、母系以外へ伝承することが禁止されているわけでもない。佐藤が指摘したように、衣装に関しては母娘間の関係性が強調されるが、そこに施された刺繍の技術、技法の交流に関しては非常にオープンであるといえる。

李 YF のように、姑 (夫方親族) である李 F と同居しているため、一緒に刺繍する時に、刺繍の技法や紋様について話し合うことにより、無意識に刺繍技法の相互学習が行われているケースもある。



写真 2-2 一緒に刺繍する女性たち (筆者撮影 2016 年 2 月)

⁷² 遼寧省：地名。中国の東北に位置する。

⁷³ 刺繍試合：「雷山県民族手工産業発展办公室文件『雷手工办通 (2015) 1 号』によると、銀細工と刺繍の伝統手工芸を発展させるため、雷山県政府により手工芸類に属する銀細工と刺繍の試合が組織された。刺繍試合で優勝した人に「十佳繡娘」という名誉と賞金を与えられる。



写真 2-3 一緒に刺繍する女性たち（筆者撮影 2016 年 2 月）

西江で調査をしているとよく目にするのが、2～3 人あるいは 4～5 人の女性が家の玄関の前で話をしながら、刺繍をしている光景である。写真 2-2、2-3 のように、10 数人の女性が広場に集まり、話しをしながら刺繍をしていることもある。

ここまで述べてきたことを簡単にまとめよう。李 WF と宋 H の事例から、西江の刺繍技法は必ずしも母親だけから習得しているわけではないことが明らかとなった。苗族社会は夫方居住であるため、結婚後実母がいつもそばにいるわけではない。このような状況において、1 人の女性は周囲にいる同時代の女性からさまざまな刺繍技法を学ぶ。つまり同時代（すなわち同じ生活圏）を生きる母以外の女性は、これまでの議論に則れば「母娘伝承」の補完的な役割を担っているのである。あるいは技法という側面に焦点をあてれば、母娘の関係は逆転する可能性を有する。刺繍の習得は短期間でできるわけではなく、長期間を要する。苗族の刺繍技法の伝承を、より俯瞰的に見ると「母娘伝承」はあくまで女性を刺繍の世界に導く「入口」に過ぎず、刺繍の基礎的技法を育くむ場として捉える必要があるだろう。より多くの刺繍技法を習得することにおいて、「同時代の女性による伝承」が果たしている役割は大きい。このことは先行研究ではほとんど報告されてこなかった事象ではあるが、これを無視することはできないと筆者は考える。

これまで論じてきたように、西江社会では、「母から娘へ」という刺繍の伝承方式のほかに、母系親族、夫方の女性親族、姉妹、女性の友人、同じ地域の女性など、同時代の女性による伝承の存在が明らかとなった。フィールド調査で聞き取りをした女性の事例を分析しまとめると、西江苗族の刺繍伝承の「同時代性」は以下のような特徴がある。

①母娘伝承は主に娘が 12～13 歳の頃から学びはじめ、娘が結婚後「坐家」を通し

て集中的に学ぶ（あるいは学ばれていた）。結婚後は夫家居住となり、実母から刺繍を学ぶということはまれである。西江現地では60代以上の女性が結婚後「坐家」のときに集中的に刺繍を学んでいたが、現在「坐家」をしている人はいない。即ち刺繍の習得期間は、1960年代以前は主に10代で結婚してからの「坐家」の期間、1960年代以降は10代から結婚するまでの期間であった。一方で刺繍が同時代の女性によって伝承されるという視点から見ると、刺繍の伝承時期は随意であり、結婚の前でも、結婚後でも、特に時期は決まっていない。

②同時代伝承の場所は随意である。「母娘伝承」の場合、女性は実家で母に刺繍を教えてもらっていた。「同時代の女性」による伝承は、決まった場所がない。自家、友人の家、広場など、女性が集まる場所が伝承の場となる。

③同時代の女性に学ぶのは、母から教えてもらっていない刺繍技法である。母は娘に刺繍に関する基本的な技法を教える。娘は刺繍の技術を向上させるために、母、近隣の女性、友人など同時代の女性から「空いた時間」に「適当な場所」で、一緒に刺繍することをとおして時間と空間を共有し、刺繍技法を相互学習するのである。

まとめよう。母娘間の共感や教育に刺繍を位置づけるのであれば、母娘あるいは母系というものは非常に重要な意義をもつ。しかし技法を主人公にして刺繍伝承をとらえれば、技法は母系、母娘関係なく、縦横無尽に女性から女性へと世代や地域や系譜を無視して移動を繰り返しているのである。

2.4.3.3 刺繍教室による伝承の事例

西江は現在、観光化の進展にともない、現地の住民の生活に大きな変化をもたらされている。その中で刺繍は、観光商品として見出され、西江博物館には苗族の民族衣装が展示されている。苗族刺繍は苗族の伝統文化の代表的なものとして観光客に宣伝され、刺繍工芸は観光客の目を引くものとなっている。また近年、観光客向けの刺繍製品の販売店ができ、刺繍工紡などが開かれるようになってきており、その中で刺繍の伝承に新しい伝承方式が現れはじめている。刺繍を通して経済的な利益を求め、苗族の刺繍を広げたいという考えもあり、現地の住民は刺繍の売店、刺繍工紡、博物館などを積極的に作っている。たとえば羊排村の李 WF（1972年生）により、刺繍は「刺繍教室で教わる」という事象が出現した。

2017年初頭、李 WF が経営する「西江阿幼蠟染紡績刺繍博物館」が開館した。この博物館では西江刺繍、蠟染、紡績などの作品が展示され、紡績機、蠟染の道具なども集められている。そして、館内には刺繍、蠟染、紡績などの製作過程を実際に体験できる「体験館」を設けている。同施設は観光客向けの刺繍教室のみならず現地の子ど

も向け施設でもあり、「できるだけ、多くの人に私たち西江の刺繍を知ってほしい」と李 WF は語る。しかし、筆者が調査した 2017 年 9 月の時点では、李 WF の博物館に集まるのは観光客が中心で、現地の人々の姿は見られなかった。また、蠟染と刺繍の体験館では、蠟染体験のほうが刺繍より人気があった。このような状況では、刺繍教室を介して現地の人へ「伝承」という機能は空振りに終わってしまいかねない。しかし、刺繍を教える常設の場が現地社会にあるという事実は重要であり、その存在自体が西江の子供たちや女性たちに少なからず影響を与えている。

2.4.4 刺繍伝承が置かれている現状

現在、苗族の伝統衣装は、どうしても華美な刺繍にだけに目がいきがちだが、かつては刺繍が施された衣装の製作は、糸紡ぎ、布織とセットであった。西江羊排寨の楊 ZY (1935 年生) は自分で布と糸を作っていたし、東引村の李 F (1941 年生) は今でも布と糸を自分で作っている。南貴村の宋 GX (1939 年生) は現在でこそ年を取ったため刺繍はできないが、「昔、自分が刺繍に使う糸と布 (衣装製作用、刺繍用) は自分で手作りしていた。忙しい時は売店で買った」と語る。かつては布を作るために、綿花を栽培したようであるが、現在では綿花を栽培している人はほとんどいない。

宋 H (1963 年生) から聞き取りした刺繍の製作過程をまとめると、1 つの刺繍製品を仕上げるには、①刺繍図を描く、②布の縫い付け、③刺繍図の縫い付け、④刺繍法を決める、⑤色合わせ、⑥刺繍の 6 つの作業があるという。実際、宋 H の前の世代はその 6 つの部分に加えて、刺繍に使う布と糸を女性自身の手によって作りだしていたのである。

現在 50 代の宋 H の世代になると、ほとんど自分で布と糸を作らなくなり、代わりに、専門店で買ってくるようになったという。その布と糸を作る技術は 1950 年代までは、基本的に伝承されてきたが、その世代から次の世代への刺繍の伝承は簡略化された。この背景として、1960 年代～1980 年代の飢饉⁷⁴、文化大革命があり、李 YW は「飢饉の時、お腹を満たすだけで精一杯だったので、女性たちは刺繍するどころではなかった」と語る。政治情勢と安価な工業製品の出現によって、布と糸の技術は伝承されなくなったといえる。

また宋 H の次の世代 (おおよそ 1980 年～現在) になると、刺繍サンプル⁷⁵の出現により、刺繍の製作過程はさらに簡略化された。ただ糸を布に縫い付ける作業だけになった。表 2-2 は、李 F (1941 年生)、宋 H (1963 年生)、張 Q (1994 年生) の 3 人が刺繍の製作過程でできることを示したものである。本来存在した刺繍の製作過程から現

⁷⁴ 飢饉：1958～1961 年、全国範囲で大きな飢饉があった。

⁷⁵ 刺繍サンプル：デザイン済みの刺繍、糸を縫い付ける作業だけを残している。

在の刺繍製作まで、省略された部分を表 2-2 に示した。○は刺繍の製作過程で行っていた（行う技術をもっていた）ことを表し、×は製作過程で行わない（行う技術をもっていない）ことを表している。

表 2-2 刺繍の製作過程の簡略化（筆者作成）（2016 年時点）

刺繍過程/世代	李 F（1941 年生）	宋 H（1963 年生）	張 Q（1994 年生）
①糸紡ぎ	○	×	×
②布織り	○	×	×
③絵図	○	○	×
④布の縫い付け	○	○	×
⑤模様の縫い付け	○	○	×
⑥刺繍法選択	○	○	×
⑦色合わせ	○	○	○
⑧刺繍	○	○	○

表 2-2 から、刺繍の製作が世代を追うごとに簡略化されていることは明らかである。さらに 2016 年現在の西江では、刺繍サンプルが販売されており、刺繍製作の過程は、これ以上ない領域にまで簡略化されている。李 F（1941 年生）の世代にとって刺繍とは、表 2-2 の①糸紡ぎから⑧刺繍までをセットで習得することであり、糸紡ぎと布織を含めて伝承されていた。宋 H（1963 年生）の世代では、既製の布、糸が簡単に入手できるようになったため、③絵図から⑧刺繍までを 1 セットとして習得した。さらに張 Q（1994 年生）の世代になると、刺繍の習得は単に刺繍技法という部分だけを習得すればよいことになった。

筆者がフィールド調査を行った 2016 年の時点での西江苗族の刺繍の伝承状況をまとめると以下のような状況にあった。

①60 代以上の女性は前の世代から糸紡ぎ、布織、刺繍技法、紋様などの技術を継承しているが、現在既に高齢のため刺繍生産の担い手ではなくなっている。

②40 代・50 代の女性は、刺繍技法を習得しているが、生活を豊かにするため、食堂やホテル業などに専念し、刺繍製作にあてる時間が非常に少なくなっている。

③20 代・30 代の若者は、ライフスタイルや価値観が変化したことから刺繍を継承する意欲が低下している。

以上より、西江の刺繍は伝承を担う者、継承が可能な者が極端に少なくなっているという状況にある。西江苗族の女性は刺繍の方法を母から学び、同時代の女性との交流により刺繍技法を向上させ、また次の世代の女性に伝承してきた。すなわち、母か

ら刺繍を習得している場合には女性が刺繍の継承者であり、母として刺繍を娘に教える場合には女性が伝承者である。継承者と伝承者という2つの役割は、2016年現在60代以上の女性において併存しているが、次の世代になるとただの継承者になり、次世代へ刺繍技法を伝承するという伝承者の役割は消えつつある。さらに若い世代、とりわけ20代の女性は継承意欲が高くなく、西江の女性の刺繍の継承者としての役割は消滅する可能性が高い。では、このような状況のなかで、刺繍および刺繍技法がどのように伝承・継承されているかを次節で示す。

2.5 母娘伝承を再考する

2.5.1 母娘伝承と同時代伝承

中国の国内でも国外でも苗族の刺繍の伝承について、女性を刺繍の伝承者、そして継承者という観点から、「母から娘へ」という「母娘伝承」に偏重した研究が少なかつた。たとえば先述した龍葉先は「苗族の刺繍工芸の伝承は『伝承者』と『継承者』の相互作用の過程である」[龍 2005:25]と指摘している。また佐藤若菜も衣装をとおして作られる「母」と「娘」の「母娘関係」を強調している[佐藤 2014:305]。苗族の刺繍工芸に関する説明は、1人の女性が刺繍を伝承、継承するという2つの役割を果たしていることが周知の事実として語られてきた。だが、本章ではこれまでみてきたように、刺繍技法という観点からみれば、その伝承と継承は母娘あるいは母系だけでは説明できないということは明白である。ここではさらにその点を細かくみていきたい。

以下では、楊ZY(1931年生)と娘の李WF(1972年生)の事例と、宋H(1963年生)の事例を通して、彼女らの人生を娘→結婚→母という3つの段階に分けて、各段階において彼女らが果たしている役割と刺繍の伝承および継承の様子を提示する。

まず楊ZY(1931年生)と娘の李WF(1972年生)の事例である。李WFは結婚するまでの間に、母の楊ZYから刺繍を学んだが、さらに刺繍に興味を持ったため、自分で刺繍(包繍)しているものをほどいて習得したり、友人と一緒に刺繍する時に知らない刺繍技法(貼花繍)を教えてもらったりしていた。また、李WFは3人の姉からも教えてもらうことがあったという。李WFは結婚後もずっと刺繍を続け、母親となり息子1人と娘1人を持った。娘が刺繍に興味を示さなかったため、娘には教えていないという。李WFは娘に刺繍を教えてはいないが、「西江阿幼蠟染紡績刺繍博物館」、「雷山県西江阿幼苗族刺繍紡」、「也東刺繍作紡」を経営するなかで、現地の子どもたちや、観光客に刺繍を教えている。楊ZYと李WFの刺繍の伝承、継承の様子は図2-4の通りである。

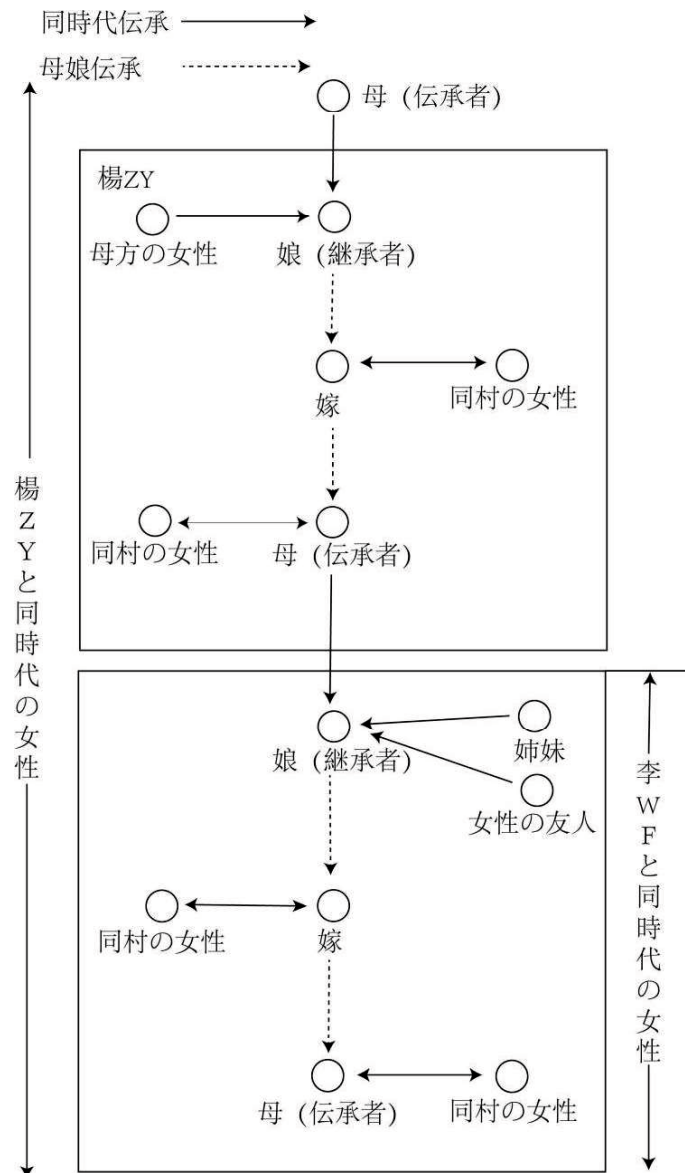


図 2-4 楊 ZY の同時代伝承図 (筆者作成)

次に東引出身で羊排寨へ嫁いだ宋 H (1963 年) の事例をみてみよう。宋 H は彼女の姉妹と年齢差はあったが、姉妹 4 人で母から一緒に刺繍を習ったという。母の代わりに姉から習ったこともあった。宋 H は 2016 年の刺繍大会の試合に参加するため、双針繡を友達から教えてもらったりもしており、自分の知らない技法を現在でも学び続けている。調査当時 (2016 年 2 月)、宋 H は自分が経営している食堂「古屋人家」でアルバイトしている張 Q (1994 年生、女性、郎徳上寨⁷⁶出身) に平繡を教えていた。

既に述べたように、平繡は刺繍の入門、基本技法である。筆者が調査した西江の女性は皆、母から一番最初に習ったのは平繡だと語る。換言すれば、平繡の伝承方式が

⁷⁶ 郎徳上寨：中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県郎徳鎮に位置する苗族の村。

基本的に「母娘伝承」の代名詞であると考えられる。しかし宋 H と張 Q の 2 人は血縁関係でもなく、親戚関係でもない。それにも関わらず、張 Q は本来母から学ぶはずの入門技法でさえ宋 H から習っていた。張 Q が宋 H から平繡を習ったということは出身地以外の地域の女性でも、一緒に生活する時間と空間、張暁の言葉を借りれば「小群体」があれば、刺繡の伝習が可能であるということである。

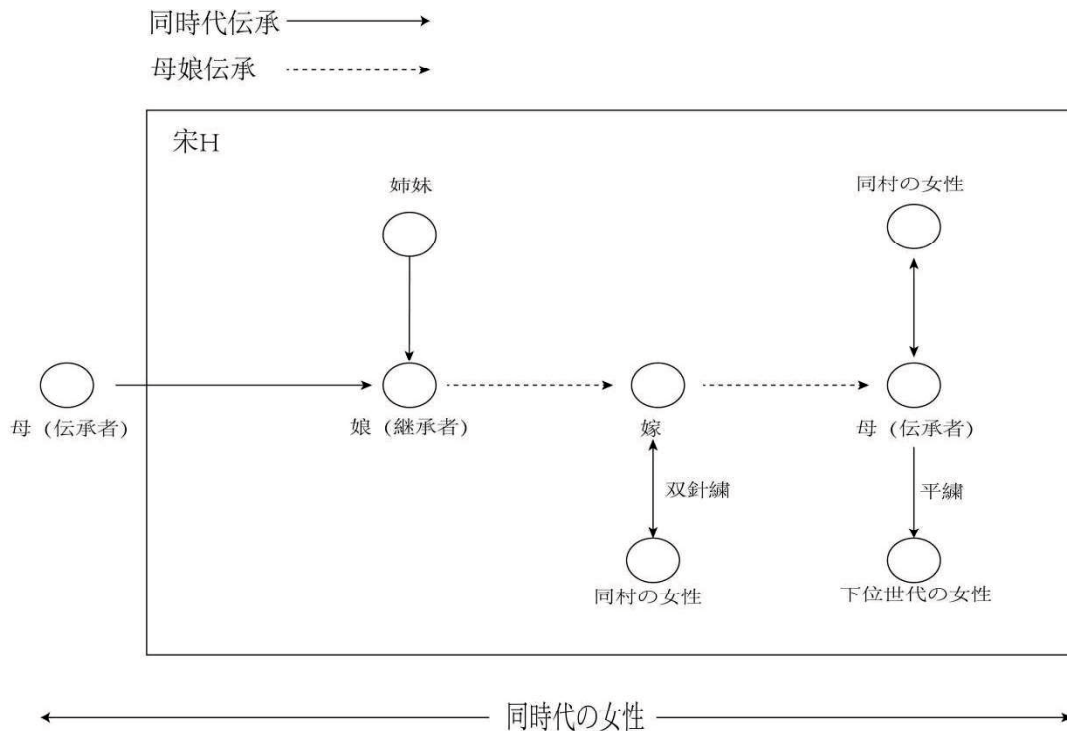


図 2-5 宋 H の同時代伝承図（筆者作成）

楊 ZY と宋 H の事例から、刺繡は母から習得するというのが苗族の基本的な伝承形態であることが示されたが、同時に母のほかに、同じ母系に属する親族、姉妹、女性の友人、同じ地域に居住する女性などからも相互的に学習することが明示された。たとえば東引寨の李 F（1941 年生）と李 YF（1968 年生）は姑と嫁の関係にあたる。しかし 2 人は現在同居しているため、互いに刺繡を教え合うことがある。実母から基本的な刺繡の入門技法を習い、刺繡への道へ導かれた後で、母親以外の女性から教わることも少なくない。

繰り返しになるが、これまでの先行研究では母娘伝承に注目するあまり、母娘間の坐家を通しての伝承ばかりが注目されてきた。苗族女性における刺繡伝承はむしろ、1 人の女性のライフステージが変化するに及んで、その女性が刺繡伝承および刺繡継承において果たしている役割が変わるのである。年を重ねるにつれて、結婚、夫方居住などの生活環境の変化もあり、母から離れ、母に刺繡を学ぶ機会、時間が減少する

のに対して、同じ地域に住む同時代の女性と一緒に刺繍する機会と時間が増える。むしろ技法の習得に関しては、夫方へ居住してからの方がより充実したものとなる可能性が高いのである。

図 2-4 と図 2-5 において、具体的に誰からどの刺繍技法を習得したかという細かな部分、また父方からの刺繍習得があるかということに関しては、十分なデータのサンプル数がある訳ではなく、またデータの確度が高いとはいいがたい。だが苗族の女性は結婚後夫方居住となり、刺繍技法の伝承、継承に制約がないことから、母娘は父方の親族の女性から刺繍を習う可能性が大いにあると言える。宋 H と李 WF が刺繍技法の中の一番簡単な平繡を母から習ったことは確実であり、龍と佐藤が指摘する「母娘伝承」は確かであろう。しかし、宋 H と張 Q の事例からも窺えるように、技法という観点を越えて、刺繍そのものを伝承するという場面において（母親ではなく）同時代の女性がその役を担う場合がある。

1 人の苗族女性の人生を 3 つの段階に分けると、図 2-4 の楊 ZY と李 WF の事例、図 2-5 の宋 H の事例などから、刺繍の伝承において母が活躍するのは娘の人生の 3 つの内、娘が結婚する前の段階であることが窺える。1 人の女性の人生を 1 つの時代であると考えれば、この女性が生まれてから死ぬまでの間、刺繍習得には母から、姉妹から、女性の友人や近隣からなど多かれ少なかれ影響をうけている。刺繍の習得そのものは長期にわたり、少しずつ積み重ねていく長い過程である。特に様々な刺繍技法に目を向ければ母を介さない伝承、継承の方が多いかもしれない。ここで筆者が主張したいことは、母から教えられるのはあくまでもその長い過程の一部分にすぎないということである。「母娘伝承」というのは西江苗族の刺繍伝承の主たるラインであるが、刺繍技法という観点から母親の役割を俯瞰すれば、母もその同時代の女性の中の 1 人に過ぎないということである。

刺繍を刺繍技法という観点から改めて捉えなおせば、母から刺繍を教えるのは、娘を刺繍の世界に導くいわば入門の段階であり、またそれはかつては糸紡、布織とセットであった。また刺繍技法の伝承は、母としては娘に刺繍を習得させ、恥ずかしくないうようにという、苗族女性としてのたしなみを身につけさせ、将来良い嫁になれるような情動的な目的が多分に含意されている。これに対して、同時代の女性による伝承は、一緒に刺繍する空間と時間を共有するという、より伝承と継承に特化した状況に置かれており、母娘伝承のような「娘が良い女性になって欲しい」という情動的な目的を達成するためということではなく、純粋に刺繍技法を「共有」する意義を含んでいる。改めて言うまでもないが、刺繍技法の伝承・継承はその媒介として必ずしも母親を必要とはしていないのである。

2.5.2 刺繍をする女性の「小群体」

苗族社会において、刺繍は女性の仕事であり、男性が刺繍することはほとんどない。1人の女性は刺繍の伝承と継承という2つの役割を担っている。西江出身の文化人類学者である張暁は、西江で集いながら刺繍をしたり、手仕事をしながら話をする女性のグループを「小群体⁷⁷（中国語 xiaogunti）」と呼んだ[張 1997:105]。張暁によれば、西江の刺繍をする女性の「小群体」は「集まり」であり、その「場」を利用し、家族では話しにくいことなどを同じ立場である女性の友人に話したり、刺繍の交流をしたりすることを通して、家事や農作業を繰り返す日常生活を豊かにするものであるという。その「場」を西江の女性は「娯楽の場」ととらえているが、筆者はこれこそが西江の女性の日常と刺繍技法との関係が顕著に現れている場面であると見ている。女性が刺繍を通して、一緒に女性たちの「共同の時間」と「共同の空間」を作っているためである。この場、この空間にて同時代女性による刺繍技法の伝承が行われているのである。

宋H（1963年生）は「暇なときに、仲のよい友達を誘い、一緒に刺繍をする。どの刺繍法にするのか、糸はどの色にするのか、友達に意見を聞くことができるし、みんなで話をしながら刺繍をした方が楽しい。時には、友達ができる刺繍技法で、私が出来ないものを教えてもらったりもする。忙しい時はみな各自、家で刺繍をする」と語る。宋Hの話によれば、刺繍は女性が集まるに値する十分な「理由」となる。刺繍により作られた共同の時間、空間があるからこそ、西江の女性の「小群体」は形成されるのである。このように「小群体」は形成され、さらに刺繍の技術、デザインなどの交流が行われることによって、刺繍の技術・技巧に磨きがかかり、そこが刺繍の伝承・継承の「場」となる。すなわち、技法の伝承・継承の多くは、決して家庭内というドメスティックな領域に留められているのではなく、「小群体」のような時間的・空間的にオープンな状況においてなされているのである。言い換えれば、特別な技法を家庭内という領域に留めてしまえば、継承者不在ということでそれが廃れてしまうこともあるだろう。技法はあくまで「小群体」というオープンな場によって、伝承・継承されているのである。

以上のことから、苗族の女性は刺繍技法の伝承・継承において、必ずしも母から娘へという伝承方式のみを取るだけでなく、同時代に生活している女性との間で相互的に刺繍技法を学ぶことがよくあることがうかがえる。つまり同時代の女性による技法の伝承・継承というのは刺繍技法の継承という意味において、もっとも重要な場のひとつとなっているのである。張は苗族の手仕事の場を「小群体」と呼んだが、まさに刺繍技法、とりわけ高度な刺繍技法に関しては、「小群体」が重要な場となってい

⁷⁷ 寄り合いグループという意味である。本論ではこの寄り合いグループを「小群体」と表記する。

るのである。

2.6 まとめ

本章では先行研究およびフィールド調査を通して、西江苗族刺繍の種類を概略し、「伝承」のあり方を、①刺繍紋様を伝承すること、②刺繍の技法を伝承することに分けて考察した。とりわけ②刺繍の技法を伝承することに焦点をあてて議論を展開してきたが、刺繍技法に関しては、親族関係、婚姻状況をとおして確かに「母娘伝承」はみられるが、より複雑な技法は「同時代の女性による伝承」に負う部分が多いことが明らかとなった。

本章のデータは2016年の2月、7月、9月の3回、40日間にわたって刺繍に関するフィールド調査を行ったものに基づく。本章で示したように、フィールド調査のデータをもとに西江の女性に聞き取りを行い、3人の親族関係図の分析を通して、西江の刺繍技法の「母娘伝承」の実体を明らかにした。また、刺繍技法の伝承・継承において「母娘伝承」のほかに「同時代の女性による伝承」の重要性を指摘した。特にこれは刺繍の技術・技法という点において特に重要である。聞き取り調査で得られたデータは20世紀後半以降のものであり、苗族の「悠久の歴史」という観点からみれば、坐家が廃れていったこの時代は、政治経済的に特異な状況に置かれていたと言えるかもしれない。しかし、坐家が主流であった時代においても、技法の伝承・継承という視点からみれば、本章で議論した観点は有用であったということが出来よう。なぜなら、刺繍技法の伝承・継承が「小群体」においてなされるとすれば、たとえ坐家が残っていたとしても、(嫁ぎ先の集落にて行われるという意味で)意義ある議論であるためである。

西江苗族の刺繍はこれまで「母娘伝承」と「同時代の女性による伝承」という2つの伝承方式により受け継がれてきたが、観光化が進むなかで、刺繍工紡、刺繍博物館などが現れ、刺繍の伝承において「刺繍教室」という新たな伝承方式も現れている。刺繍教室による伝承は近年出現したばかりなので、ここで多く論じることは避けたいが、今後男性の継承者、苗族以外の女性の継承者の可能性も排除できない。ただ、ひとつ言えるのは苗族社会の刺繍を取り巻く状況は常に変化し続けているということである。

本章でも再三述べたように、筆者は苗族の刺繍伝承における「母娘伝承」を否定するつもりはまったくない。むしろ本章では複数の事例を通して「母娘伝承」を積極的に認めている。だが、これまでの先行研究ではそれが強く主張されるがために、「小群体」で行われるような同時代女性における伝承・継承の様子が見落とされてきた。刺繍技法の伝承・継承という意味において同時代女性の存在は、母親と同等あるいは

それ以上に重要である。というのも刺繍技法の習得という面において、母娘が共有する時間は限られているためであり、婚出後における同時代女性がグループになり、「小群体」として刺繍活動をしている中でなされる交流の方が技法の習得という意味ではより重要であるからである。

本章で提示したデータは地理的、時代的な条件もある程度限られた範囲での議論となってしまったが、これまでの研究で見落とされてきたこの点が指摘できたとすれば、本章の目的は達成されたと考える。

第3章 苗族の刺繍に関するジェンダー観

3.1 はじめに

本章はジェンダーという観点から、刺繍する女性はもちろん、刺繍をしない男性が刺繍とどのような関係を持っているかを明らかにする。西江苗族出身の人類学研究者である張暁は2017年に『貴州苗族代表性服飾』を出版したが、同書における聞き取り調査の対象は全員女性であり、日本の研究者である佐藤若菜や宮脇千絵も苗族の衣装に関する研究においては女性を中心としている。確かに苗族女性は刺繍製作の主役であることは疑いの余地がない。しかし、筆者は2018年に「銀匠⁷⁸村」と呼ばれる控拝村⁷⁹で行った調査において、銀匠である穆XH(40代、控拝出身、男性)から「銀飾りの紋様は刺繍の紋様を参照したことがある」という語りを得ている。

苗族の刺繍の製作、使用の主役は女性である。これまでの研究においても、刺繍に関して女性をかなり重要な位置に付け、男性と刺繍が無関係のように見える。しかし、1990年代の出稼ぎブームや、道路の建設、観光化などにより、若い年齢層の労働力が村を出て、農業用の畑や水田がなくなり、苗族の村の生業形態が変わり、生活様式にも変化が見られた。このような時代背景において、刺繍における主役は女性であることに変わりはないが、潜在化していた男性と刺繍との関係は顕在化するようになり、無視することができなくなった。刺繍が民族商品として開発され、観光化という背景もあって刺繍が商品として販売され、その販売には男性が参与している事例もある。男性も苗族社会の一員であり、刺繍を製作する女性と場を共有している限りにおいて、決して刺繍製作と無関係であるとは言えない。

本章では、刺繍研究において男性と刺繍という研究の空白を埋めることを目的とする。加えて、市場経済化し、生業が変化し、人の移動が活発になった現代的な状況の中で、男性と刺繍との関わりという視座に立ちながら、ジェンダー的な視座からみた刺繍の位置づけを考察する。

3.2 ジェンダー論からみた刺繍に関する研究の現状

手工業とりわけ女性とテクスタイルの研究で有名な文化人類学者ジェーン・シュナイダーとアネット・B・ワイナーとは布に関して、「布と社会関係」、「文化的意味」、「スタイルの創造」などの分野でなされている研究を総括的に紹介し、その中で「いろいろな社会関係を1つにまとめる象徴的な力が布にある。(中略)……人類は織ら

⁷⁸ 銀匠：銀飾りを作る職人。

⁷⁹ 地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県西江鎮の東北部に位置する。

れたマットのようなものだ」[ワイナー・シュナイダー 1995:61]と指摘している。ジェーン・シュナイダーは東南アジアの研究者はジェンダーの視角から女性が布の製造を、男性が金属の剣を作り出すのと補充し合っていると考え、北アメリカの母息子との関係を事例として、「男性」は経糸で、出産のアナロジーで最初に設定され、「女性」は緯糸で、それらをインターレースし、成熟を示唆した[Schneider 1987:409-448]。言い換えれば、人間社会は布と同じように経糸と横糸から構成され、その経糸は男性で、横糸は女性である。すなわち、1つの社会を理解するには布が非常に重要な位置を占めているというのである。ジェーン・シュナイダーとアネット・B・ワイナーの布についての研究では、いずれもジェンダーの視点を重視している。

バリ島を中心とするインドネシアの農村社会の社会変化と女性労働を研究する中谷文美によれば、「インドネシアをはじめとする東南アジアの多くの社会では、布づくりが象徴的なレベルでも実際の生産の場面でも、女性と深く結び付けられてきた。バリでも、布の生産と消費をめぐる変化がさまざまにみられるなかで、『機織り＝女の仕事』という文化的通念は今のところ根本的な揺るぎを見せていない。若い世代を中心に織布業に従事する男性の数も増えているが、彼らのかかわる領域はまだ限られており、生産や流通の主力をになうのは依然として女性たちである」[中谷2003:113-149]と述べている。すなわち1つの社会において、布を織るのは女性であり、布と女性との関係性を通してその社会の一部を理解することができるが、それでは不完全である。中谷は布の研究には主役である女性を研究するはもちろんであるが、女性と関係のある男性も取り入れるべきであるという。

1960年代以前、中国貴州省黔东南州雷山県西江鎮では苗族女性は刺繍を習得する際、糸紡ぎ、布織り、刺繍の3つの作業をセットで習得した。刺繍を作る前に、まず糸と布を作る。苗族の女性は布に刺繍を施し、その布の価値をさらに向上させた。苗族社会において刺繍を施した布は帽子、衣装、ビツ⁸⁰、冠婚葬祭など多くの生活の場面に使われ、インドネシアのバリ島における布と同じような意義を有しているといえる。すなわち、刺繍をとおして苗族の社会を理解する点からみれば、バリ島の布織りと同じである。つまり中谷がバリ島の布研究において男性の視点を取り入れたように、苗族社会における刺繍の研究においてもジェンダーの視点から議論を加えることは重要であろう。

まずジェンダー論の観点から苗族の刺繍に関して行われたこれまでの研究動向について日本の研究者と中国の研究者に分けて検討したい。日本では苗族の刺繍や民族衣装について、多くの研究成果をあげてきたのは佐藤若菜、在野の研究者である鳥丸貞恵と鳥丸知子などの女性研究者である。たとえば、婚姻関係と刺繍の関係に関して、

⁸⁰ ビツ (IPA表記: bhi) は苗語の発音である。子供のおぶい紐という意味である。

佐藤若菜は刺繍の製作者である女性との結びつきを強調し、刺繍ができるか否かは（かつては）女性の婚姻と関連付けられていたとする[佐藤 2014:305-327]。鳥丸貞恵は苗族の村を訪ね、20年以上苗族の衣装、蠟染、刺繍についての記録をしてきた[鳥丸 2017]。鳥丸は苗族の刺繍技法、衣装の形などを詳しく記録しているが、その記録の中に、男性の姿はほとんど見られない。佐藤、鳥丸のいずれも刺繍、衣装を製作した女性に注目しており、男性と刺繍や民族衣装との関係については、あまり関心を示していない。

次に、中国における苗族の刺繍に関しての研究を見てみたい。たとえば、服装の歴史や民族服飾文化とデザインを研究してきた周夢は3回にわたり、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州のいくつかの県に行き、服飾についてのフィールド調査を行った。彼女は苗族侗族女性の服装に注目し、服装の構成、装飾、刺繍、布染め、文化、タブーおよび伝承の状況などについてまとめた[周 2011]。西江出身の張暁は1990年代に『西江苗族婦女口述史研究』を著し、苗族研究で女性を主役とする研究分野を開発した[張 1997]。また、張暁・張寒梅などは2017年に『貴州苗族代表性服飾』を著した[張暁・張寒梅・潘璐璐 2017]。この本の前半は苗族の服飾を東部、中部、西部の3つの方言区に分けて、各地区の代表的な服飾を紹介している。張暁は口述を重視し、本の後半には16人の女性からの聞き取りの内容を採録し、彼女らと刺繍との出会い、刺繍製作の現状について紹介されている。このように周夢も張暁も服飾と刺繍の研究において、精緻なデータをを集めてはいるものの、それは主役である女性の視点から採録されたものとなっている。同じような視点を持つ研究者は他にもいる。たとえば、李迎喜[李 2011(2):45-48]、聶羽彤[聶 2014(2):88-100]、楊菲・張寒梅[楊・張 2017:41-49]などである。これらの研究者もまた女性の視点から刺繍を考察する傾向があり、刺繍製作における男性の位置づけを重視しているとはいえない。

近年の動向として、葉蔭茵[葉 2017(133):86-92]、廖婧琳[廖 2018(1):41-48]、齊玉瑩[齊 2018(1):25-28]などによる苗族社会の観光化が進む中で、女性が刺繍を通して、家に経済的な貢献をすることができ、家庭内での地位が向上し、かつてより家庭内における決定権を持つようになってきているという研究がある。刺繍や刺繍のついた民族衣装では女性は製作の主役であり、また使用者であるため、刺繍の生産と消費において重要な位置を占めているのは確かである。しかしこのような研究者らは1つ重要な問題を見落している。それは家庭内に、女性と男性が各自で分担する作業があり、女性の家庭内での地位が変化するとともに、男性もその変化の影響を受けているということである。そのため男性の変化についても女性と同様に検討する必要があるといえよう。

これまでの苗族社会の刺繍に関する研究において、男性は全く言及されていないわ

けではない。たとえば、曹端波・傅慧平・馬静[曹・傅・馬 2013:122]、呉育標・馮国栄[呉・馮 2014]、鈴木正崇・金丸良子[鈴木・金丸 1985:131-132]の研究は刺繍が苗族の男性と女性の恋愛と婚姻において重要な役割を果たしていることを示している。しかし、男性と女性とは夫婦という関係しかないというわけではなく、女性をとりまく男性との社会関係は兄弟、父娘、母息子、近親者など幾重にも及ぶ。この点から考えれば、現在までの男性と刺繍についての研究は、恋愛や婚姻に関わるものばかりであり、決して十分とは言えない。

以上が日本と中国における刺繍に関する研究の現状である。確かに苗族女性が刺繍製作の主役であることに疑いの余地はない。しかし筆者の調査によれば男性が刺繍と無関係であるとは言い切れない。その理由は、刺繍の製作過程において男性が刺繍の紋様を描く事例があり、女性の刺繍時間を確保するという形で、男性が刺繍と関わっているからである。そこで、ジェンダーの視点から、刺繍製作に参加する女性だけではなく、製作に直接参加していない男性も研究の対象とするべきではないかと考えている。

3.3 男性と刺繍との関係

前節で述べたように、刺繍の研究領域においては刺繍をしない苗族男性がほとんど視野に入っていない。しかし、それは決して男性が刺繍と関係がないということではない。本節では男性と刺繍の関係という観点から、刺繍しない男性はどのような形で、刺繍のどの部分に参加しているのかについて、①刺繍の製作過程での参与と②刺繍が完成した後の販売への参与の2つの部分に分けて論じていきたい。

3.3.1 刺繍製作における男性

3.3.1.1 刺繍の製作過程に参加

西江苗族の刺繍技法には平繡、辮繡、鄒繡、纏繡、鎖繡（単針繡、双針繡）、数紗繡、挑花繡、馬尾繡など十数種類あり、その中で平繡は入門技法、基本技法である[楊2017]。筆者は2016年2月、西江在住の宋H（1963年、女性、羊排村）から平繡の技法を習った。各種類の刺繍技法で使用する道具は同じである。刺繍するには、布、紙（普通の紙、硬い紙）、針、糸、ハサミ、鉛筆、指貫（針を硬い地布を通す時に使う）などの道具を揃える。平繡の場合、以下の流れに従い刺繍を施していく。

- ①刺繍紋様を紙に描く。刺繍を始める前に、まず植物や動物の紋様を普通の紙に描く。絵が上手な人は自分で紋様を書く。絵が上手でない場合、薄い透明の紙ですでに刺繍してあるものを複写する。描いた紋様をハサミで切り取り、型紙を作る(写真3-1)。



写真 3-1 紋様の型紙（筆者撮影）

②刺繍しやすくするために、地布を作る（写真 3-2）。堅めの紙を用意し、紋様を書いた紙の大きさに合わせ、堅めの紙を切る。次に、刺繍をする布の縁を堅めの紙の縁より 1cm ほど余裕をもって切る。次に布と堅めの紙を重ね、はみ出た布を紙の裏面に折り返し、堅めの紙を挟むようにして、紙に縫い付ける。この時布がしわにならないように、縁を押さえながら縫う。



写真 3-2 紋様の型紙と地布（②）（筆者撮影）

③刺繍紋様の型紙を縫い付ける（写真 3-3）。切り取った紋様を布の上に置いて、左手の人差し指で布の裏面、親指が表に出るように布を挟む。紋様を固定するように親指で紋様を押さえながら縫い付ける。紋様を部分部分に分け、描いた鉛筆の線に沿

い、紋様の縁から糸の間を 1-2mmほど空けるように縫う。

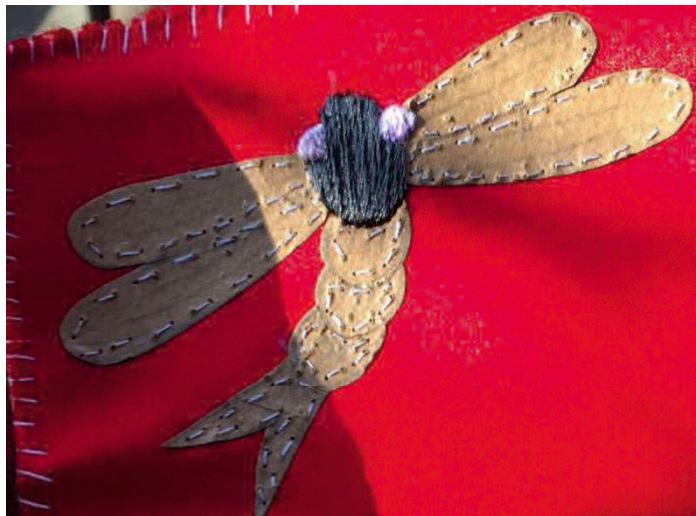


写真 3-3 刺繍紋様の型紙の縫い付け（筆者撮影）

④同じ紋様でも、刺繍技法と色合わせによって、出来上がった刺繍は異なる。1つの刺繍には幾つもの刺繍技法を使用することがある。

⑤色合わせ。自分が好きな色の糸を選び、色合わせを想像して刺繍を始める。

⑥刺繍。平繡の場合、常に左右対称を意識しながら刺繍する。その際、部分部分に分け、左右対称にするため各部分の中心から刺繍し始める（写真 3-4）。



写真 3-4 平繡の蜻蛉紋様（筆者撮影）

以上は平織の製作過程である。刺繍技法によって地布製作などの準備や製作方法が異なるが、「紋様を書く」、「色合わせ」などの部分は同じである。

3.3.1.2 刺繍製作過程に参加している男性

2016年2月と7月～9月の西江での調査では、紋様を描くのも糸の色合わせも省略され、定期市で直接刺繍のサンプルが販売されていた。具体的にいつ頃から販売されるようになったのか、数人の女性に聞いたが、はっきりとした答えは出なかった。2016年9月7日、西江では定期市があった。定期市では、女性向けの日常着と刺繍関係の物が多く販売されている。その中に、刺繍のサンプルが販売されていた。2018年9月に雷山県の定期市に行った時も、刺繍関係の販売店があり、刺繍サンプル(写真3-5)も多く見られた。

写真3-6は2016年9月に撮影したもので、男性の宋a(40代、男性、南貴村)が刺繍の紋様を描いた紙を販売しているところである。宋aは身体的な原因で会話ができないため、聞き取り調査はできなかったが、絵が上手で現地では有名人である。現地の人の話によると、宋aは西江鎮南貴村⁸¹の住民であり、現在廃品回収と刺繍紋様の販売で生計を立てているようである。現地の刺繍する女性は宋aから刺繍紋様を買い、紋様を布に縫い付け、糸の色合わせを考えて刺繍作業を始める。筆者は2018年9月に再度調査に行ったが、宋aはまだその商売をしていた。



写真3-5 刺繍サンプル (筆者撮影 2018.9)

⁸¹ 地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県西江鎮に属する。



写真 3-6 刺繍紋様の紙を販売する宋 a (筆者撮影 2016.9)

宋 a の事例では、彼は刺繍はできないが、刺繍の紋様を描くことができる。聞き取り調査ができなかったため、宋 a が女性の刺繍製作に参加しようとする意欲があるかどうかは分からないが、彼は女性の刺繍製作過程の 1 つである紋様を描くという部分に参加していることは確かである。宋 a の事例は特別かもしれないが、女性が男性である宋 a の書いた紋様を抵抗なく受け入れていることから、男性が女性の刺繍製作へ参与することが可能であることが分かる。

3.3.1.3 刺繍時間を確保する男性

筆者は 2015 年から 2018 年 11 月までの間、合計 9 回西江でフィールド調査を行った。宋 H は刺繍品販売店と食堂の両方を経営しており、筆者の調査中、彼女は何回も「食堂経営を止め、刺繍に専念したい」と言っていた。しかし、食堂はすぐ収入が得られるため、観光客が食事に来ると断れない。また、筆者が宋 H の生活を観察した結果からすると、彼女の 1 日の大部分の時間は家事、農作業、売店経営、食堂経営、娯楽などに使われていることが分かった。彼女は毎日刺繍できるとは限らず、刺繍ができる時間も決まっていない。すなわち、いつ刺繍するか、1 日どのぐらい刺繍するか、いつまでに 1 つの刺繍を完成させるかはランダムである。筆者が観察した日の中で、宋 H が刺繍できた時間は最長が 3 時間半であり、普通は 1 時間から 2 時間である。このように刺繍する時間が少ない状況において、夫である李 YW はどのような役割をはたしているのだろうか。

筆者はこれまでの調査で観察した李 YW (1939 年生、男性、羊排村) と宋 H (1963 年生、女性、東引村) 夫婦の日常生活を整理してみた。調査は主に大学の夏と冬の長期休暇を利用して行うため、1 年を通して生活を見ることはできないが、李 YW 夫婦の

生活の一端を窺うことはできる。李 YW と宋 H 夫婦は各自の分担がはっきりしている。李 YW は畑仕事を中心に、宋 H は家事と畑仕事、刺繍品販売店と食堂の経営などが中心である。女性の方が男性より仕事が多いというのは 1 つの特徴である。たとえば、2018 年 3 月 17 日に、李 YW が村の祭祀に参加し、田圃の仕事、野菜収穫などを行っている間に、宋 H は家で刺繍をしていた。翌日の 18 日に、宋 H は病気で入院した友人の見舞いで雷山県へ行き、家を空けた時、李 YW が刺繍品販売店の店番をした。

2018 年 9 月の調査では、李 YW は雨の日を除いてほぼ毎日畑、田圃に行っている。その理由について、李 YW は「私は妻の刺繍について何もわからない。お客さんが来ても、役に立たない。畑仕事は疲れるが、私が畑に行き、妻が家に残ったほうがいい」と語った。すなわち、李 YW は自分が畑仕事をすることで、宋 H が家に残って家事などをすれば、刺繍をする時間が作れると考えている。

また毛 JH (1974 年生、女性、南貴村出身) の事例を見ると、彼女は南貴村の出身で、東引村⁸²へ嫁いで来た。夫の李 J (40 代) は西江千戸苗寨の北門入口の門衛を務め、家のことは全部毛 JH に任せている。さらに、2018 年に東引村に新しい家建てるとも、毛 JH のほうが多くの仕事を分担した。毛 JH は普段農作業や家事で忙しいが、観光シーズンになると宋 H の食堂でアルバイトもする。仕事ぶりが真面目であるため、信頼されている。彼女は刺繍もできるが、筆者は毛 JH が刺繍しているところを一度もみたことがない。彼女は「忙しいから、刺繍する時間がない」と語った。

この 2 人の事例から、宋 H は夫の李 YW が農作業とある程度の家事を分担することで、刺繍する時間ができている。これに対して、毛 JH の場合、夫の李 J は家事と農作業をあまりしないため、彼女は農事と家事で忙しくて刺繍できないことを指摘できる。

3.3.2 製作完成した刺繍と男性

女性が刺繍を作って、それを子供の帽子、ビツ、エプロン、ウーゲン⁸³ (日常着)、ウーベイ (晴れ着)、靴などにつける。それらは子供用のものを除き、衣装とエプロンはすべて女性用のものであり、男性の衣装には刺繍を付けない (写真 3-7)。すなわち、そのウーゲン、ウーベイ、エプロンは女性が使用するもので、製作者本人あるいは家族の女性が使用するのである。また、刺繍の付いた衣装 (ウーベイ) は次の世代に相続される。さらに、観光化の中で、刺繍の付いたものは販売されている。すなわち、女性が完成させた刺繍は自分で使用する、次世代へ相続する、販売するという 3 つの扱い方をされている。

⁸² 地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県西江鎮に属する。

⁸³ IPA u: ɣən



写真 3-7 刺繍がない男性の服（筆者撮影）

本節では、女性が完成させた刺繍の扱い方によって、刺繍と男性との繋がりを見ることを目的とする。

3.3.2.1 女性が自分で使用する刺繍

苗族の衣装に付けられている刺繍には歴史記録、装飾、民族集団識別などの機能があるが、ここでは刺繍の装飾機能に注目する。女性が化粧するのも、綺麗な服を着るのも美に対する憧れである。すなわち、刺繍は衣装を装飾し、さらに衣装を着る主体である女性を装飾する。この時、見てくれる人がいなければ、装飾の意味がないといえよう。

2016年11月の苗族の正月である苗年の時、苗族の女性はウーベイを着て広場で蘆笙舞を踊っていた。踊っている女性は若い女性と子供だけであり、年配の女性はいなかった（写真3-8）。これについて既婚の宋Hが「結婚したら苗年の時蘆笙舞⁸⁴を踊らなくなる。若い女（未婚）の子が踊る」と語った。この場で、もちろん綺麗な衣装を着ている女性を見ているのは現地の苗族の女性、男性、観光客である。しかし、この時の若い女性は綺麗な姿をして人前に立ち、恋愛対象を探すことを目的の1つとして

⁸⁴ 男子が蘆笙（楽器）を吹きながら脚を柔軟に動かして踊る伝統的民間舞踊の1つ。苗族の青年男女が愛を語る場にもなる。

いる。所謂「女為悦己者容⁸⁵」であり、すなわち、「女は自分を愛してくれる人のために、容貌をととのえ飾る」のである[諸橋 1993:525]。苗族の女性が時間と労力を傾けて作り上げた刺繍で装飾した衣装（ウーベイ、ウーゲン）には彼女らの思いが詰まっている。苗族の女性が刺繍のついているウーベイを着る理由の1つは、自分を悦んでくれる男性のためであると言ってよいであろう。



写真 3-8 苗年の時広場で踊る女性（筆者撮影 2016.9）

3.3.2.2 次世代へ相続される刺繍

苗族の刺繍のついたウーベイは女性の服であり、男性の服には刺繍が一切ついていない。その衣装の相続について、宮脇千絵も佐藤若菜も、母娘を通して相続されてきたと指摘している[宮脇 2010、佐藤 2014]。苗族の刺繍と衣装の相続において、男性が衣装を受け継ぐという研究は今日までない。しかし、筆者は調査の中で、息子のためにウーベイを作ったことがあるという人に出会った。それは宋H、李WF、李c（50代、女性）の3人である。

事例1

宋Hは子連れで再婚した。現在の夫との間には血縁関係のある子供はいないが、連れ子である息子の李KP（1987年生、男性）とは血縁関係があり、その息子の婚姻のためいろいろと準備している。たとえば、自分でお金を稼いで息子の結婚後の家を建てようとしている。また、宋Hは今までにあわせて4着のウーベイを作った。

⁸⁵ 「女為悦己者容」の出典は「戦国策・趙策」である。女は己れを悦ぶものの為に容づくることを意味する。

その中の2着は李YWの長男と次男の娘のためである。3着目は息子のため、最後の1着は自分のものである。宋Hは「この衣装(3着目)は息子のために作った。息子が結婚する時、嫁にこの服(4着目)を着て欲しい」と語った。しかし、孫の世代になると、宋Hは孫娘のためにウーベイを作ったが、男の孫には作っていない。これについて彼女は「孫には作らない。それに、今は作る時間がない」と語った。

事例2

博物館経営をしている李WFは子供が2人いる。男の子1人、女の子1人である。李WFは「私は今博物館のことでなかなか刺繍できないが、とくに子供の結婚用の服を作った。2着で、1着ずつである」と語った。彼女は2人の子供の結婚用のウーベイを作った。2着とも女性のウーベイであり、1着は娘のため、もう1着は息子の嫁用に用意している。その盛装は博物館に展示しておらず、家で保管している。それは売るものではないからと李WFは語った。

事例3

2017年9月17日、李cはウーベイの腕部分の繡片を作っていた。彼女は「息子の嫁のために作っている。息子が結婚する時に、嫁に着てもらいたい」と語った。

宋Hと李WFの2人の事例で、女性用のウーベイを息子のために作ったということがわかった。その衣装は女性が着るもので、実際は嫁にあげるものではないかというような錯覚をおこすかもしれない。しかし、宋Hと李WFは2人とも「嫁のために」ではなく、「息子のために」という表現をしている。一方、李cは「嫁のために作っている」と表現している。李cの言った「嫁」は「息子の嫁」を指すことは誰でも分かるが、ここで嫁のために作った衣装の譲渡には息子が介在していることを見逃してはならない。さらに、結婚する時、あるいは祭りの時にこのウーベイを着るのは嫁であることは確かであるが、それはあくまでも嫁がその衣装の使用者であるとしか言えない。嫁がその衣装を所有するわけではないのである。さらに、嫁のために作った衣装は誰が所有するのか、誰が保管するのかについては、現段階の調査ではまだ明らかになっていないが、これは今後の課題である。

これまでの研究では、苗族の衣装の相続について母娘の間に行われていると指摘されてきた。筆者はこれを真っ向から否定するわけではない。上に記した3人は40代・50代の女性であり、1960年代から現在に至るまで文化大革命、改革開放、出稼ぎブーム、観光化といった目まぐるしい時代を経験している。1990年代の出稼ぎや2000年以降の観光化などの影響で、西江は外部との接触が増え、現地の人々の生活や考え

方も少しずつ変わってきている。この変化の中で、男性が刺繍との関わりが多くなっており、これからまた変化が続くが、刺繍のついた衣装において男性も伝承することになる可能性はあると筆者は考えている。調査不足の部分もある⁸⁶が、息子のために衣装を作ったのであれば、衣装は息子の所有物となり、衣装の使用権を嫁に与えるだけなのではないだろうか。まだ仮説であるが、これを今後の課題として引き続き調査をしていきたい。

3.3.2.3 販売用の刺繍

西江は2007年に旅行開発大会が開かれて以降、現地の観光化は驚くほど進んでいる。このような背景において、刺繍という民族の特徴をもつものが観光商品として販売されている。筆者は2018年9月の現地調査で、西江村内にある刺繍品販売店（13軒）を調査した。表3-1は調査した刺繍品販売店と経営者を示したものであり、備考にはその店における男性のかかわり方について簡単に記した。

表 3-1 西江の刺繍品販売店（筆者作成）

NO.	刺繍品販売店名	経 営 者	男性の仕事
1	苗疆錦綉民芸園	張 a (40 代、男性)	張 a は刺繍できる李 d (40 代、女性) を雇い、刺繍品販売店の経営を任せる。
2	木春綉坊	30 代女性	
3	苗綉生活館	20 代の女性	
4	紅祥民族刺綉	邵 a (30 代、男性、施洞鎮出身)	邵 a は春花刺綉博物館経営者である邵 CH (30 代、女性、施洞鎮出身) の弟で、邵 CH が忙しい時に手伝いに行く。
5	苗族服飾刺繡博物館 —春花刺繡博物館	邵 CH (30 代、女性、施洞鎮出身)	
6	蝴蝶媽媽綉坊	30 代の女性	
7	天下品綉	30 代の男性	
8	阿麗沙苗綉包	20 代の女性	

⁸⁶ たとえば、もし息子と嫁が離婚するような場合、衣装の所有は製作者本人か、息子か、嫁かということについては、これまでの調査で聞き取りができなかった。

9	金花綉坊	石 YG (60 代、男性、施洞鎮出身)	実際の経営者は石 YG の娘の石 JH(30 代、女性、施洞鎮出身) であるが、彼女は貴陽の青岩古鎮でも刺繡品販売店を 3 軒も出しているため、この店は父 (石 YG) に任せている。
10	西江阿幼蠟染紡績刺繡博物館	李 WF (1972 年生、女性)	夫の李 XH (40 代、男性、西江出身) は博物館の建設にあまり経済的な応援はしていないが、800m ² の家屋を李 WF の博物館に改造した。
11	西江阿幼苗族刺繡紡	李 WF (1972 年生、女性)	
12	李 YF 刺繡工紡 (婦女手工試点企業)	李 YF (1968 年生、女性)	夫は出稼ぎで広東省にいる。李 YF は夫の家の一部を刺繡工房として利用し、姑と一緒に経営している。
13	古屋人家刺繡工芸展销	宋 H (1963 年生、女性)	夫は宋 H の刺繡品販売店の経営にあまり口を出さないが、販売店の拡大には反対した。宋 H が忙しい時に、店番をすることもあるが、刺繡に対して詳しくないため、客が来ると、宋 H に電話する。

以上の 13 軒の刺繡品販売店のうち、4 軒が男性によって経営されている。男性経営者の方が女性より少ないが、男性が刺繡の販売に参加していることは確実である。その中の部 a (30 代、男性、施洞鎮出身)、石 YG (60 代、男性、施洞鎮出身) の 2 人に聞き取り調査ができた。2 人とも刺繡していないが、1 枚 1 枚の刺繡を見るとその刺繡製品がどこで作られたかすぐ分かり、刺繡製品の技法についても詳しい。石 YG から「私も少し刺繡できるけど、あまり上手ではない。勉強すればできる」という語りも得た。彼が刺繡しているところを実際に見ていないが、この語りから男性が刺繡してはいけないという文化的規範がないことが分かった。

宋 H の刺繡品販売店の経営を夫の李 YW は支持しているが、規模を拡大することに対して反対した。李 YW は宋 H が刺繡できること、刺繡上手であることをたいしたことではないと考えている。宋 H は李 YW の同意を得られないため、刺繡売店の規模を拡大することを諦めた。

李 WF が刺繡博物館を経営することに李 XH (夫) は一時期反対していた。李 WF の博物館を作る決心が固く、夫に「お金は自分で何とかするから、家だけを使わせて」と

頼んだ。夫は「李 WF にこんな難しいことができるかと心配している」と語った。そのような心配を持ちながら、李 XH は最後に自分の受け継いだ家を李 WF の博物館に改築した。夫は博物館の木製の家具や展示台などを作り、内部と外部の工事をし、内装も外装もした。博物館内部の防犯カメラも買って設置した。

刺繍品販売店の経営に関して調査した限り、店の経営は女性が中心となっている。しかし、だからといって、女性のみで力が店が営まれているのではなく、父、夫、弟などからある程度の協力を得ていた（表 3-1 からわかる）。たとえば、石 JH は父からの支援を得て数軒の販売店を開いている。邵 CH は弟に店を手伝ってもらっている。李 WF は夫の家屋を博物館に改築し、ある程度の協力を得て大規模な刺繍品販売店を開くができた。逆に宋 H は刺繍品販売店の規模を拡大することを夫に反対されたため、小規模販売店のままである。女性が刺繍販売で家に経済的な貢献をすることができ、ある程度家のことに対して決定権を持つようになってはいるが、まだ男性が女性より上位であることに変わりはないようである。本来男女ともに負担していた農作業が現在ほとんど男性が負担することになり、家庭内における男女の仕事分業が変化が見られる。とくに刺繍品販売店に関することが基本的に女性の決定を優先的に考え、男性は女性の指示通りに活動する。このような一方的に女性が決定権を持つことが観光化される前の苗族社会においてはほとんど考えられないことであった。

3.4 考察

3.4.1 男性の刺繍製作への参与

刺繍製作は女性の仕事であると語り続けられてきた。そのため、刺繍の製作過程において女性しかいない、あるいは男性が刺繍製作に参加してはいけないというような錯覚を与えている。しかし、本章で取り上げた宋 a（40 代、男性、南貴村）と李 YW（1939 年、男性）の事例からみれば、必ずしも男性が刺繍製作過程に関係していないわけではない。

宋 a は刺繍の製作過程において、紋様のデザインに参加している。李 YW は農作業を多く負担することで、宋 H の刺繍時間を確保している。筆者は苗族女性が時間を持つことは刺繍製作の前提であると考えている。苗族の家庭において、女性と男性は各自分担があり、各自自分の仕事を遂行してから、余暇時間を持つことになる。逆に考えれば、男性と女性が自分の仕事をしなければ、余暇時間を持つことはできない。李 YW はきちんと畑仕事をする、さらに宋 H の分の畑仕事を分担することで、宋 H の余暇時間を作っている。

以上の筆者が集めた事例をとおして、刺繍の商品化や観光業が発展している中で、刺繍製作過程において、男性は刺繍製作の紋様デザインに参加し、女性の刺繍製作の

時間を確保するという役割を果たしていることが明らかになった。

3.4.2 刺繍の所有と経営

西江の現地の人たちは1980年代、90年代は刺繍の経済的価値をそれほど重視していなかった。というのも、80年代90年代には古い刺繍を薪がわりに使っていた事例が少なくなかったし、古い刺繍を捨てるケースもあった。だが時代が変わり、2000年に入ると西江一帯は観光開発され、刺繍は民族工芸品として外部に広く知られるようになった。外部の人たちは手工芸品の刺繍を求めて同地を訪れるが、これは苗族女性に刺繍で生活改善する機会を提供している。李WF、宋H、李YFなどの苗族女性は刺繍品販売店を出し、女性だけが所有する刺繍を販売して貨幣と交換をすることになった。刺繍品販売店の経営には、男性も参与するようになっている。邵a（30代、男性）や石YG（60代、男性）は刺繍品販売店を経営しているうちに、実際に刺繍はしていないが、刺繍技法や紋様などについてある程度の知識を持つようになった。たとえば、石YGは刺繍はしないが、平繡、打籽繡などの刺繍技法の製作過程を言葉で説明することができる。一方で、李YWは妻の宋Hの忙しい時に刺繍品販売店の店番をするが、刺繍に関することは知らない。刺繍品販売店を経営している男性の中で、邵a（30代、男性）は邵CHの弟であり、石YGは金花綉坊の実際の経営者である石JHの父であり、李YWは宋Hの夫である。女性につながる男性は父、夫、弟のだけでも刺繍品販売店の経営に参与することができる。

また、刺繍のついた民族衣装のウーベイ・コーティエ（晴れ着）の相続において、今まで母娘の間でしか行われなかった刺繍の相続に変化が起きている。それは息子も相続者の範囲に入るということである。宋H、李WF、李cの事例では、母親が息子あるいは息子を介して嫁のために刺繍のついたウーベイを作る。この3人の息子はまだ結婚していないが、その衣装をいかなる形で受け継ぐか、受け継いだ後の衣装の所有権などはこれからの筆者の課題となるが、男性が受け継ぐ可能性があるといえよう。男性が刺繍のついた衣装を相続できるというのはこれまでにないことであり、刺繍といえば女性というような時代ではなくなっている。

3.4.3 男性の消極的な支持

西江が観光開発される前は自給自足の農耕社会であった。各家は自留地⁸⁷を持ち、家族は男女を問わず、農作業の労働力であった。女性は家事と農作業を終えから刺繍した。しかし、現在の西江の生活様式は一変し、道路や観光開発のため農民の自留地が減少し、農作業もするが、観光業が中心となっている。このような背景の中で、農

⁸⁷ 自留地：農民が所有する土地。

作業にしても観光業にしても、男性と女性は各自分担する仕事ははっきりしている。各自は自分の仕事を完遂するからこそ、女性は刺繍する余暇時間を持つことが可能になる。逆に言えば、もし男性が仕事をしなければ、その分女性が家を維持するために多くの仕事を負担することとなる。男性は積極的に仕事をして、女性に刺繍させるというわけではないが、自分の仕事をきちんとすることで女性が刺繍することに対して一種の支援をしていることになる。ところで、筆者は現地調査で、女性が刺繍することに反対する男性には1人も会ったことがない。すなわち、男性が自分の分担する仕事をきちんとこなすことや、女性が刺繍することに反対しないことは、男性が女性の刺繍することに積極的ではなく、消極的な支持をしていると言えるだろう。

3.4.4 男性のシャドーワーク

「シャドーワーク」とは、イリイチが1984年にはじめて提出した概念であり、「買入れた商品に、それに適するようになるか価値を付加するために支出されねばならぬ時間、煩勞、努力」[イリイチ 1984: 94]のことをいう。シャドーワークを理解しやすくするため、イリイチは卵を料理することを事例として取り上げている。女性が卵料理をするため、マーケットに出かけて卵を手に入れ、車で家に持ち帰って、コンロに点火し、バターを鍋にいれて、卵を焼く。彼女は問題の商品に各段階で価値を付加している。食材を買うことから卵を焼くまでの一連の作業が卵料理を作るための「シャドーワーク」である。I・イリイチはまた「財またはサービスをその生産者と消費者とのあいだで市場を介して交換することを基礎とする経済は、統計的に公表される部門と公表されない部門にまず区分される」[イリイチ 1984: 43]とし、女性が公表されない経済の中で差別されていると指摘した。たとえば、夫（男性）は家庭外で働き、賃金が支払われているのに対して、妻（女性）は家庭内で家事、料理、育児などの仕事をするが賃金が支払われない。この場合女性が賃労働をする男性のために、家事や育児などシャドーワークをし、男性と同じように労働をしているが、女性の労働は賃労働と認められていない。本章で取り扱う西江苗族社会の刺繍製作、刺繍販売は女性が中心というように公表され、男性が刺繍に付加価値をつけるためにシャドーワークをしていることが無視されている。

西江の住民は1980年代までは自給自足の農耕生活を送り、外部との接触が少なかった。現地の60代以上の人の話によれば、彼らの世代では道路がないため、周辺の苗族村落や雷山県や凱里市などに行くには歩くしかなかったという。1980年代以降、道路ができ、西江現地の生活には多大な影響を受けた。特に1990年代以降出稼ぎブームがあり、若者の多くは貴陽市や広州などの沿海都市へ出稼ぎに行ったため、労働力の減少により自給自足の農耕生活は崩壊し始めた。しかし、この自給自足の生活様

式が完全に崩壊したのは2000年以降の観光化による影響が大きかった。観光化が進む中、商品経済が盛んになり、刺繍も民族商品として販売されるようになった⁸⁸。刺繍製品の販売は1980年代頃には既に行われていたが、消費者は現地の刺繍ができない女性に限られており、小範囲の販売であった。それが2000年代前後になると、刺繍を買うのは外国人や研究者が中心となった。その後観光開発が進み、刺繍の商品化が進み、刺繍製品販売の専門店が数多くできてきた。

刺繍が商品化され、市場で交換されるようになるという背景の中、男性が刺繍に関わり始め、特に販売に大きな役割を果たすようになった。現地調査で見聞した事例からいえば、宋Hの刺繍品販売店の看板や展示台はすべて夫の李YWが作った。李WFの博物館の電気工事、木材の加工、展示台、家の改装は大工である夫の李XHがした。邵CHの博物館の電気工事は弟がし、ガラス製の展示台や木製の展示台の運搬作業も弟がした。

しかし、このようなことは外部の人からは見えないので、刺繍の販売は女性が担うものという認識が強い。たとえば、刺繍品販売店の客の多くは、この刺繍は素晴らしい、苗族の女性の刺繍技術が素晴らしい」という評価をよくするが、「この展示台が素晴らしい、電気が素晴らしい」とは誰も言わない。観光客が刺繍品販売店に入ると、販売店の内装や展示台を見るのではなく、刺繍を見るが、販売店の経営者からすると、内装、展示台、ライトなどがあることで、刺繍が綺麗に見えるし、刺繍に高い値段をつける「自信」を持たせてくれるのである。

事例から言えば、商店街通りにある刺繍品販売店の内装が綺麗（刺繍を並び展示する棚があり、照明がいい）な所は、販売している刺繍の値段が全体的に内装の良くない（刺繍展示する場所がなく、綺麗に並べない、照明がよくない）刺繍品販売店より高い。2018年3月の調査で、金花繡坊の一枚の帽子は3,900元（約70,000円）であったのに対し、古屋人家刺繍工芸展銷という販売店では刺繍技法と紋様がほとんど同じ帽子は1,200元（約20,000円）であった。これほど大きな値段の差がある理由について宋Hは「刺繍は私のと変わらないが、販売店が人通りの多い所にあり、内装は私の店より綺麗だから」と語った。

2018年の夏に、宋Hの夫李YWは部屋の1つを改築し展示壁と展示台を作り、息子の李KPが照明を購入して付けた。このことが宋Hに自信を持たせ、2018年の9月の調査の時宋Hは自分の店にある刺繍を全部出して、値段を上げていた。すなわち、男性たちが刺繍品販売店の内装に時間、煩勞、努力を投入し、シャドーワークをしたことが、刺繍の販売価格に入っていると言える。

⁸⁸ これに対して、観光化される以前の刺繍について、西江で刺繍品販売店を経営する数人の女性から、「1980—90年代に刺繍を薪替わりとしていた」という話を聞いた。

その上、女性たちのほとんどが刺繍の販売で得た収入は自分の収入であると考え、刺繍展示台を作ってくれた男性あるいは店番をしてくれた男性に給料を払っていない。この視点からいえば、男性が刺繍の商品経済においてシャドーワークをしていることになるが、それは公表されておらず、給料ももらえず、ある意味では「不可視」化されているのではないかと筆者は考えている。

3.5 まとめ

これまで苗族の刺繍についての多くの研究によって、刺繍は女性によって育まれてきた文化であることは定説とされてきた。苗族の刺繍の製作と使用において中心的役割を果たすのは女性である。現地調査の際、家の玄関や広場で刺繍をしていたのは女性のみである。刺繍のついた衣装、ビツ、靴なども女性が使う。技術の伝承や刺繍の付いたモノの相続に関しても、苗族の人々は「母から娘へと受け継がれる」と語り続けてきた。このように視覚的に見える刺繍の製作と使用の中心が女性であり、さらに現地の人の語りの影響もあり、男性と刺繍の関係は目につきにくく見逃されてきた。そのため、研究者たちも女性に目を向けるものが多い。

しかし、現在は、これまでと少し様子が異なっている。1990年代の出稼ぎブームや、道路の建設、観光化などにより、若い年齢層が村を出て、農業用の畑や水田がなくなり、苗族の村の生業形態が変わり、生活様式にも変化が見られた。すなわち、農耕を中心とした自給自足的な生活から観光業を中心とする半農半商のよう生活へと変化しつつあるのである。このような時代背景の中、刺繍における主役は女性であることに変わりはないが、潜在化していた男性と刺繍との関係は顕在化するようになり、無視することができなくなってきた。刺繍が商品化したことにより、その販売や提供されるサービスに付加価値をつけるため、男性が時間、煩勞、努力をいとわず、シャドーワークをしている。しかし、これは公表されず、男性も収入を得ていない。この点から考えれば、男性が刺繍の経済において、ある程度「不可視」化されているといえよう。

本章は中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県西江鎮を調査地として、これまで女性の視点に偏重してきた苗族の刺繍研究を、男性の視点を取り入れて検討してきた。ここでは男性と刺繍との関係を、刺繍の完成前（製作過程）と完成後（販売、使用）に分けて整理した。刺繍の完成までに、すなわち刺繍の製作過程において男性は刺繍の紋様を描き、女性の刺繍時間を確保するという形で積極的あるいは消極的に参与している。消極的参与とは男性が家事や農作業をして女性の刺繍時間を確保し、女性が刺繍することに男性が反対しないといった消極的な支持を意味する。これまでこのような支持が無視されており、不重要であると考えてしまうかもしれないが、これま

で男性のこのような消極的な支持があるからこそ、女性が刺繍することができるといえよう。そうでなければ、本論の事例に出した毛 JH のように刺繍技術が持っていても刺繍できない状況に陥るのである。さらに、2000 年代以降観光化の中で、刺繍が商品化され、刺繍をする女性たちは刺繍をとおして生活改善を求めようになった。女性が刺繍をとおして家に経済的な貢献ができるようになり、刺繍の付加価値をつけるように家の内装などのシャドゥーワークをし、女性の分の農作業を負担したり、刺繍販売店の手伝いをしたりすることで、女性の刺繍品販売を支持を支持している。男性が家庭内における地位は女性より上位にあることは変わりはないが、女性は家への経済的貢献により、本来男女ともに負担していた農作業が現在ほとんど男性が負担することになり、家庭内における仕事分業が変化し、女性の地位が向上している。とくに刺繍品販売店に関することが基本的に女性の決定を優先的に考える。男性は女性の指示通りに活動する。このような一方的に女性が決定権を持つことが観光化される前の苗族社会においてはほとんど考えられないことであった。

また完成後の刺繍と男性の関係については、刺繍をどのように使用するのかという面から、すなわち、製作者本人（女性）の使用、次世代への相続用、販売用という 3 つの面から論じた。特にこれまでの研究で示した母娘の間でしか行われてこなかった「晴れ着」であるウーベイの譲渡において、直接息子へ譲渡するのではないが、息子の「未来の嫁」への譲渡が可能であることが確認された。これはこれまで報告されてこなかったことである。調査において、ウーベイを製作する母から「息子のために作った」という語りを得たため、今回は事例として取り上げたにすぎず、このような姑から嫁への衣装の譲渡は従来からあったものなのか、実際に息子が結婚した時、ウーベイの扱い方、所有権、さらに息子と嫁の考え方についてまだ課題が残っており、引き続き研究する必要があると考えている。

第4章 苗族女性の婚姻における衣装の再考

4.1 はじめに

貴州省の黔东南州雷山県西江鎮の西江千戸苗寨は最大の苗族村落として有名であり、観光化は著しく発展している。西江苗族は特有の民族衣装を持ち、西江式の苗族服飾は巴拉河⁸⁹流域の長裙苗⁹⁰の服飾の代表であると位置づけられている[張曉・張寒梅・潘璐璐 2017:25]。

西江苗族の民族衣装といえば女性の衣装を指す。女性の衣装は日常着と晴れ着に分けられている。20世紀の初頭、男性の衣装は漢民族の影響を受け、ほぼ漢民族と同じになり、祭りなどハレの日には黒く染めた丈の長い一重の服を着る。

筆者の調査事例からいえば、1950年代頃、西江苗族の女性は12歳頃から衣装製作と刺繍製作の技術を習得し始め、自分の衣装をほとんど自分で手作りしていた。糸を紡ぎ、布を織り、仕上げた服に刺繍もしていた。1960年代、70年代の貧しい時代には、手工製作する余裕はなかったが、技術の習得はしていた。1980年代になると糸や布の既製品が販売されるようになり、衣装を手工製作するということは刺繍のみを手工製作するということになった。さらに1990年代以降は機械製の既製服が現れ、刺繍した衣装を購入することができるようになった。このような変遷を経て、現在は刺繍や衣装を製作する人が減少している。一方で、多大な時間と労力を使っても、手工製作をする女性は少なくはない。彼女たちにとってなぜ既製服は劣るのか、なぜ手工製が重要なのであろうか。

筆者が現地調査で集めた事例から、衣装を手工製作する苗族女性の多くは、その衣装を結婚式のために準備することが明らかとなった。本章では1950年代から現在までの衣装と婚姻の関係を動的に検討する。特に結婚式と坐家⁹¹（訪問婚）に注目し、衣装の製作、着用、展示、贈与などについて検討した上で、苗族女性の婚姻における衣装の位置づけを再考することを目的とする。

4.2 苗族の婚姻と衣装に関する先行研究

文化人類学において婚姻は1つの大きな研究テーマであり、人類学に大きな影響を与えた社会人類学者のレヴィ=ストロースは結婚を集団間の交換であると考へ、結婚という交換を通して当該社会の連帯関係を構築するとした[レヴィ=ストロース

⁸⁹ 巴拉河は中国の長江の支流で、長江上流の清水江に注ぎ、沅江水系に属している。

⁹⁰ 苗族は女性の着用するスカートの長さにより長裙苗、中裙苗、短裙苗に分類されている。西江苗族の女性は長いスカートを着用している。

⁹¹ 結婚式の後、女性がすぐ夫の家へ移住するのではなく、実家に戻り、定期間実家で過ごす。その間に衣装を作る。

1977]。レヴィ=ストロースは婚姻交換において物的な財と社会的な財が交換されると考えている。

インド・チベット・日本の社会組織を研究する社会人類学者の中根千枝は「実際、村民にとっては、同じ村落単位というよりは、それぞれの家を中心とした隣人たちとのまとまりの方がはるかに重要な社会的な意味を持っている。1つの村落内部がいくつかの近隣集团的なものに分かれるばかりでなく、その周縁にあっては村落の境をクロスして近隣集団（血縁・婚姻のつながりも勿論入ってくるが）が形成されているために、当然、村落としてのまとまりは弱くならざるをえないということになる」[中根 2002:342]と指摘した。すなわち、婚姻関係を結ぶことによって、新郎新婦が所属する家が繋がるだけでなく、両方の持つ社会関係の連合によって広いネットワークを構築することが望まれる。

文化人類学においては衣装も1つの大きな研究テーマである。アネット・B・ワイナーとジェーン・シュナイダー[ワイナー・シュナイダー 1995]は布に着目し、布と関わる社会、市場、儀礼など多くの視点から議論した。そして衣装に関して、「他人の衣装に対する反応と自らの服装での試みは示しているのは、衣服の意味——地位、集团的アイデンティティ、社会階層性、そして政治信念の表示としての衣服の重要性——に関する意識がますます大きくなっていったということである」[ワイナー・シュナイダー 1995:522]と指摘している。しかし、この中では衣装の所有者、製作者、贈与者などの関係には触れておらず、また衣装を通じた人間の社会関係については言及していない。

衣装と婚姻は深い関係がある。衣装は人の一生に関わるものであり、婚姻という重要な儀礼において衣装は装飾物であり、儀礼服であり、持参財でもある。これまでの衣装に関する研究において、婚姻における衣装というテーマが重要視されてきた。たとえばアジア社会の伝統染織を研究している文化人類学者である中谷文美[中谷 2003]、中国雲南省文山の苗族の民族衣装を研究している文化人類学者の宮脇千絵[宮脇 2017]などは布や衣装に関する民族誌を出版し、その中でもやはり婚姻との関連を重視している。

本章の研究対象である苗族は特有の婚姻習俗と民族衣装を持っている。現在までに苗族の婚姻と衣装に関して多くの研究成果が蓄積されている。まず婚姻に関する研究を概観する。

現在苗族の婚姻は一夫一妻制[李廷貴・張山・周光大 1996:380]であり、基本的に夫方居住[『苗族簡史』編集組 1985:320-325]である。苗族の男女が婚姻関係を結ぶには厳しい婚姻規制を守らなければならない。それらは、同姓不婚⁹²[『苗族簡史』編

⁹² 男女の苗語の姓が同じであれば、婚姻関係を結ぶことは許されない。

集組 1985:19、田園 2012:6-12]、同服飾不婚⁹³[費孝通等 2009:135、席克定 2009:393、楊毅 2014:54]、同宗不婚⁹⁴[吳澤霖 1958:257、吳建偉 1990(03):75、吳榮臻・吳曙光 2007:618、周相卿・劉嘉宝 2014:77]、外族不婚⁹⁵[伍新福 1995(02):49-54]、苗漢不婚⁹⁶[吳榮臻・吳曙光 2007:620]、血縁婚姻禁止⁹⁷[李国章 2006:116]などである。しかし、筆者の調査地である西江ではこれらの婚姻規制が緩められている傾向が見られる。

このような背景において、いかに婚姻と衣装の関係を理解するかは1つの研究課題である。筆者の現地調査では、西江苗族は1950年代頃までは婚姻関係を結ぶにあたって、上にあげた婚姻規制を厳しく守ってきたという語りを得た。しかし、1980年代以降の学校教育の普及、1990年代以降の出稼ぎブーム、2000年代以降の観光化などの影響で、婚姻規制に対する現地の人々の考えには変化が見られるようになった。恋愛関係さらに婚姻関係の確認の方式が変わり（広場でユーフェ「苗語発音、IPA表記j_u:f_ε」⁹⁸する姿が見えなくなり、仕事場や学校などで知り合うことが多い）、他民族の人と結婚することも多々見られる。このような中、衣装の婚姻における位置づけも変化し、再考する必要があると筆者は考えている。

ところで、婚姻規制の中で1つ注意すべきところがある。それは多くの研究では「同宗不婚」という概念を使用している。しかし、苗族に関しては宗族という概念を取り入れることは妥当性に欠ける。宗族というのは同じ父系出自の家族に所属する男性と女性のことであり、全員同姓であり、同じ祖先を持っている。これまでの研究で「同宗」と表現する場合は実際には氏族（クラン⁹⁹）を指している。苗族出身の歴史学研究者である伍新福は「同宗」という言い方を避け、「同族不婚」[伍新福 1995(02):50]と表現している。ここでいう「同族」の「族」は氏族を指すのである。1724年の改土帰流¹⁰⁰で戸籍に登録するために、苗族の姓の発音と近い漢民族の姓を使用するようになったからである。現在、身元証明証にもその姓名を使用している。そのため、同じ姓であっても、異なる祖先を持つ場合があり、逆に、姓は異なっても同じ祖先を持つ場合がある。したがって、「同宗」という言い方は、苗族にはふさわしくない。

苗族の人は行政的、対外的には漢族の姓名を使用しているが、苗族内部では互いに

⁹³ 男女が同じ服飾圏に所属していれば、婚姻関係を結ぶことは許されない。

⁹⁴ 男女が同じ宗族（同じ父系集団）に所属すれば、婚姻関係を結ぶことは許されない。

⁹⁵ 苗族の男女が苗族以外の民族の人と婚姻関係を結ぶことは許されない。

⁹⁶ 苗族の人と漢族の人は婚姻関係を結ぶことは許されない。

⁹⁷ 血縁関係を持つ人同士は婚姻関係を結ぶことは許されない。

⁹⁸ 若い苗族の男女が広場に集まり、歌ったり踊ったりすることで恋愛相手を探す方法である。

⁹⁹ 共通の祖先を持つ血縁集団、または共通の祖先を持つという意識信仰による連帯感の下で結束した血縁集団である。

¹⁰⁰ 元代から清朝初期にかけての王朝中央政府による地方の原住民に対する間接統治システムであった「土司制度」をしだいに廃止し、王朝中央政府直轄の州県制に転換し、科挙に合格して選抜された「流官」を派遣し直接支配するという、明代以降の一連の制度転換をいう。

苗語の名前だけで称する。苗族の苗語の名前は父子連名制である。父子連名というのは子供の名前に父、祖父の名前を入れるという名づけ方である。例をあげて説明しよう。

楊占這噶（生年不詳、女性、東引村¹⁰¹）と楊闊富噶（生年不詳、女性、東引村）の名では「楊」は2人の姓であり、「占」と「闊」は名である。「這」は「占」の父であり、「富」は「闊」の父である。さらに「噶」は「這」と「富」の父である。すなわち「這」と「富」はキョウダイであり、「占」と「闊」は父方の従姉妹である。苗語の姓名だけであれば「宗族」という概念を使用してもよい。しかし、苗族では漢語の姓と苗語の姓の両方を使用している。「同宗」というのは漢族研究者の視点にすぎない。そのため、苗族に対しては「同宗」という表現より伍新福の使用した「同族」の方が妥当であると筆者は考える。

また、苗族は自民族に特有の民族衣装を持っている。その上に苗族の中には数多くの支系があり、それぞれの支系の民族衣装がある。中国の少数民族文化を研究する楊毅は、苗族の民族衣装が他者に自分の所属する支系と婚姻状況（既婚か否か）を示す社会的な機能を持っている[楊毅 2014:55]と指摘した。楊毅の他に、民族の服飾文化を研究する人類学者の周夢[周夢 2017:103-105]、芸術研究者の華思寧[華思寧 2016:102]なども衣装が民族識別と年齢や婚姻状況を示す機能を持っていると指摘した。生態人類学者の任宜海は、黔东南苗族の結婚式における換装¹⁰²に着目し、衣装が民族アイデンティティを表し、自分と他者との関係性を構築するとした[任宜海 2018:198-201]。歴史学者の張勝蘭[張勝蘭 2014:25-33]、文化人類学者の楊菲[楊菲 2016(2):36-38]も、衣装が民族アイデンティティを表すことを指摘した。

このように、苗族の民族衣装は民族アイデンティティを表し、民族識別や女性の婚姻状況を表している。すなわち、衣装と婚姻の関係について、男性は結婚する前の恋愛段階で衣装を通して女性の民族を識別し、婚姻状況を知り、結婚式では新婦が衣装を通して民族アイデンティティを表していることが明らかにされた。しかし、衣装を製作する技術を持っている苗族女性には、結婚式での衣装からは単に衣装の属する支系、衣装製作の技術、紋様だけではなく、衣装を通して新婦の社会関係までもみることができるのである。本章では、西江が観光化する中、機械製作の衣装が現れたり、婚姻規制が緩んだりしている中で、手工製作の衣装が婚姻における位置づけについて検討する。

苗族の婚姻は恋愛・ユーフエ、婚姻関係の確認、結婚式、坐家という一連の行為を終え、夫の家で居住し始めた時から婚姻生活を始める[鈴木正崇・金丸良子

¹⁰¹ 地名、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県の西江鎮に所属する村である。

¹⁰² 換装：苗族のメーバーが誕生、結婚、死亡などの通過儀礼において、自民族の衣装を着用すること。衣装の色、紋様、装飾物には自民族のこだわりがある。

1985:83-87、席克定 2009:394-397、曹端波・傅慧平・馬静 2013:34-35]。その中の坐家に関して、①坐家は苗族の母系社会から父系社会に転換したことを反映する証である[吳澤霖 1991:335-351]、②坐家は苗族刺繍を習得し、結婚後に女性と家族の着る服、靴などを作る期間である[潘定智 1984:120、張暎 2000(04):41-47、席克定 2003:94]、③坐家は女性の苗族婚姻制度の抵抗行為である[席克定 2009:396-397]、④坐家は子供を出産する能力を確認する期間である[吳澤霖 1991:340、陶興安 2008:31]、⑤坐家は婚姻の猶予期間である[席克定 2003:94]など5つの説がある。

これまでの研究のほとんどが坐家を婚姻の一部として位置づけ、婚姻に多大な比重をおいており、坐家に関してはさほどの関心を示してはいない。西江では1970年代頃から坐家をしなくなり、その後も復活することなく、2000年代以降は若者たちが知らないことが筆者の調査により明らかになった。筆者は坐家を女性の衣装製作の期間であると考えている。本章では坐家と刺繍製作・衣装製作との関連から、坐家の期間は西江苗族の女性にとってどのような存在であるのか、坐家をしなくなった原因、さらに復活していない原因について検討する。

以下では苗族衣装を紹介し、坐家で衣装の製作、衣装の製作者、着用の場などについて概観した上で、結婚式における衣装の展示に着目し、民族衣装が苗族の女性にとってどのような存在であるのかについて検討する。また、坐家の実態を把握し、坐家をしなくなった原因、さらに再興していない原因について考察する。すなわち、本章では苗族の女性の衣装と婚姻とはいつ、どの場面で、どのように関わっているのかについて検討し、衣装の婚姻における位置づけを再考することを目的とする。

4.3 西江苗族の衣装

4.3.1 日常着—ウーゲン

4.3.1.1 ウーゲン

調査地である西江では女性たちが日常的に着る上衣を苗語でウーゲンといい、柔らかい黒色の布をベースにしている。1着のウーゲンは基本的に上衣と上半身のエプロン(苗語発音はチュウエヤオ、IPA表記は tʃʰiu wei' jiao) からなっている(写真4-1)。上衣の襟(図4-1の①)、袖口(図4-1の②③)、エプロンの胸の部分(図4-1の④)に刺繍が付けられている。紋様は花、蛙、鳥、兔、蝴蝶などがよく見られる。ウーゲン製作によく使われる刺繍技法は簡単な平繡と貼花繡が多い。

このウーゲンからある程度苗族の女性の年齢を推測することができる。60代以上の女性の日常着は刺繍のない素朴な青色であり、30代以上の女性は黒色の布地に刺繍を付けている。30代以下の女性は黒色の布地に刺繍を付けているものもあれば、布地がピンクなどの色もある。下半身は年齢に関係なく黒いズボンをはく。現地の女性の語

りによれば、「黒いズボンの方があまり汚れないし、痩せて見える。そして服の色と組み合わせると綺麗に見える」からである。



写真 4-1 ウーゲン (宋 H 撮影)

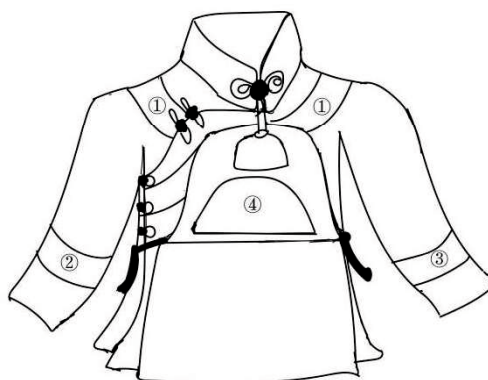


図 4-1 ウーゲン (筆者作成)

4.3.1.2 市販のウーゲン

西江ではウーゲンを販売する売店があり、そこでは上衣も黒いズボンも販売している。西江の女性たちは販売店や定期市、凱里市や雷山県の定期市などでウーゲンとズボンを購入している。西江では6日おきに定期市があり、食材、衣類、女性の髪飾り、農作業の道具、農作物の種などを販売する小商人が多く集まる。その中で一番目立つのは苗族女性の刺繍関係のもの（糸、刺繍紋様）、ウーゲンの既製品とウーゲンに付ける刺繍の半既製品¹⁰³（写真 4-2、写真 4-3）である。この半既製品とはウーゲンに付ける刺繍の部分（1 図の①②③④）に刺繍を施す作業だけが残っている紋様の描かれているサンプルである。

ウーゲンの既製品は機械製であり、定期市で240元前後（日本円で約4,000円）で販売される。現在西江の女性は家事、農作業、商売（観光化の中、宿や食堂の経営、民族特色商品の販売など）で刺繍をする時間があまりないため、定期市で買う人が多い。手工製作の衣装にこだわりのある女性は半既製品の刺繍サンプルを購入し、時間がある時に刺繍する。

¹⁰³ 苗族の刺繍は元々糸紡ぎ、布織り、描画（紋様）、布地（硬い紙に布を縫い付ける）、紋様固定（紋様を書いた紙を布地に縫い付ける）、色彩構成設計、刺繍という流れであった。現在この過程が簡略化され、紋様固定済みの布地（刺繍サンプル）が販売され、刺繍だけをするようになっている。



写真 4-2

写真 4-2 ウーゲンの襟と袖口の刺繍サンプル（筆者撮影）



写真 4-3

写真 4-3 ウーゲンのエプロンの刺繍サンプル（筆者撮影）

4.3.1.3 ウーゲンの製作

西江では日常的に着るウーゲンは市販の機械製の既製服が多いが、自分で手工製作する女性もいる。1950年代以前は、李Fのように糸紡ぎ・布織り・刺繍のすべてを自分でしていたが、現在の女性は半既製品を購入し、刺繍だけをするようになっている。そのため、現在衣装を手工製作するといえば、実際は衣装につけている刺繍だけを手工製作するということである。

西江が観光開発される前は、現地の住民は農業を中心とした生活を送っていた。1990年代に研究者や外国人観光客が西江に入りだし、さらに2000年代以降（特に2008年の旅行発展大会¹⁰⁴以降）西江の観光業が急速に発展し、西江は観光業が中心となった。西江の女性は家事、農作業をすると同時に、売店や食堂の仕事などもするようになった。そのため、女性が1日に刺繍できる時間は限られる。

西江で刺繍を手工製作する女性は主に①紋様、布地なども自分で用意して刺繍する、②市販の半既製の刺繍サンプルを購入して、刺繍だけを施すという2つのタイプがある。この内、時間を節約するために半既製品の刺繍サンプルに刺繍だけをする女性の方が比較相対的に多い。2018年2月の現地調査で、宋H（1963年生、女性、東引村）が半既製の刺繍サンプルのウーゲンの袖口部分の刺繍1枚を仕上げるのに1ヶ月以上かかった。ウーゲンの4箇所を刺繍を製作するには、膨大な時間がかかることがわかる。

また、苗族の女性は12歳～15歳の頃から刺繍を学び始めるが、結婚するまではウーゲンではなく、ウーベイ¹⁰⁵製作が中心である。1950年代頃の女性は結婚式を終えて実家に戻り、坐家を始める。この坐家の期間に結婚後に着るウーゲンを製作した。し

¹⁰⁴ 2008年9月26日、第3回貴州省旅遊産業発展大会が西江で開かれた。

¹⁰⁵ 晴れ着の上衣を苗語でウーベイ（IPA表記：wu:bei）という。

かし、限られた期間に、一生分のウーゲンを製作することはできない。そのため、ウーゲンの製作は坐家の期間だけではなく、結婚後にも時間がある時に製作し続ける。

4.3.1.4 ウーゲンの着用

刺繍を手工製作するには多くの時間がかかるのに対して、市販の既製服はそれほど価格が高くないし、時間も労力も全く不要である。このような理由から、苗族の女性の手工製と機械製の既製服に対する扱いは異なる。

今日の西江の中心産業は観光業となったが、家事、育児、農作業は依然として、女性の仕事である。苗族の女性は仕事をする時はウーゲンを着るが、それは古いものや市販品である。また観光業が発達している西江では外部の人に西江の民族衣装を展示しており、そのためにも苗族の女性はモデルとしてウーゲンを着ている。刺繍製作の経験を持つ苗族女性は手工製と機械製を見分けることができるが、刺繍に関して全く知らない観光客は区別できない。そのため、西江の女性は日常生活においては市販のウーゲンを着用している。

一方親戚の家を訪ねるような時は、必ず衣装を着替える。この場合手工製作の衣装を着ることが多い。2019年3月1日に、西江東引村の女性が凱里市の盤古鎮¹⁰⁶で食事会をした。この食事会に参加したのは東引村で生まれた女性、127人であった。当日、出発する前に宋Hは自分で手工製作した新しいウーゲンを着た。宋Hは東引村の女性たちに筆者が同行することを認めてもらった。手工製作のウーゲンを筆者にも着せてくれようとしたが、家にある手工製のウーゲンは古いので、宋Hはわざわざ李WF(1972年生、女性、開覚村¹⁰⁷)の手工製のウーゲンを借りて筆者に着せてくれた。

ウーゲンはもともと日常着であるが、結婚式で盛装の替わりとして着用することがあることが調査を通して明らかになった。たとえば、宋YH1(60代、女性、東引村)は娘の結婚式の時、花嫁はウーゲンでもよいと考えている。こう考えるのは彼女だけではなく、毛JH(1974年、女性、南貴村¹⁰⁸)もウーゲンで結婚式をあげた。毛JHは「私が結婚した時、家が貧しかったから、日常着で結婚した」と語った。彼女の語りによれば、結婚式の時、日常着を着るのは彼女だけではない。また平寨村出身の李a(1970年生、女性)も、家が貧しかったから、結婚式ではウーベイを着ることができず、ウーゲンを着た。毛JHや李aのように、家が貧しいため結婚式で盛装(ウーベイとコーテェイ)をすることができなかった女性は少なくはない。結婚式でウーゲンを着るかウーベイを着るかは家の経済的条件と関係があると考えられる。

前述したように、西江の女性が日常生活で着用するウーゲンには市販の既製服と刺

¹⁰⁶ 苗族風の食堂である。

¹⁰⁷ 地名、西江鎮に所属する村である。

¹⁰⁸ 地名、西江鎮に所属する村である。

繡のみを手工製作した服の2種類がある。手工製作の衣装は膨大な時間がかかるので、市販のウーゲンより大切に扱われ、家事や農作業では着用せず、外出や親戚の訪問・食事会などの時だけ着用する。このように、手工製のウーゲンは市販の機械製に比べ特別扱いされている。

4.3.2 晴れ着—ウーベイ・コーテェイ

西江の苗族女性の晴れ着は漢語で盛装と呼ばれ、これは上衣のウーベイ（苗語 wu: bei）と下衣のコーテェイ（苗語 kau tei'）からなっている。この晴れ着は祭りや結婚式などのハレの日のみに着用する。ここではウーベイとコーテェイについて述べる。

4.3.2.1 ウーベイ

晴れ着の上衣部分は苗語で「ウーベイ（wu:bei）」といい、「烏（wu:）」は服、「貝（bei）」は雌性という意味である。1960年代以前の西江でウーベイに使われた布地は黒く染めた麻の布であり、苗族女性が自分で製作した。1着のウーベイには細長い繡片8枚と幅の広い繡片2枚がある。細長い繡片はウーベイの襟（2枚）、肩（左1枚・右1枚）、腕（左2枚・右2枚）で、幅の広いのは袖口部分（左1枚・右1枚、大きい）である（写真4-4、図4-2）。つけられている刺繡の紋様と技法は基本的に左右対称（図4-2で示したように、番号が同じである部分の紋様と技法が対称的である、以下同様）であるが、色は手工製作の刺繡には製作過程での製作者と刺繡糸の相互作用により一部不完全な対称が見られる（これについては別章で述べる）。また、刺繡の紋様は、襟、肩、腕部分は蝴蝶、ザクロ、花などが多く、袖口部分の大きい繡片は龍、鳥、ザクロ、蝴蝶、魚などが多い。ウーベイ製作によく使われる刺繡技法は平繡、貼花繡、鄒繡、辮繡、鎖繡、捆金などである。

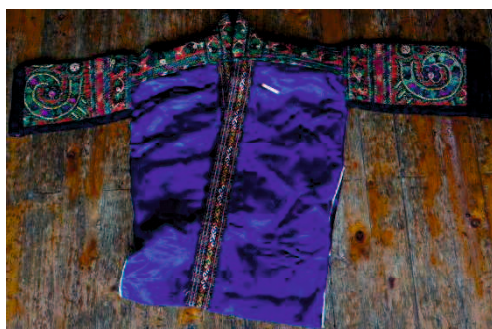


写真 4-4 ウーベイ（筆者撮影）

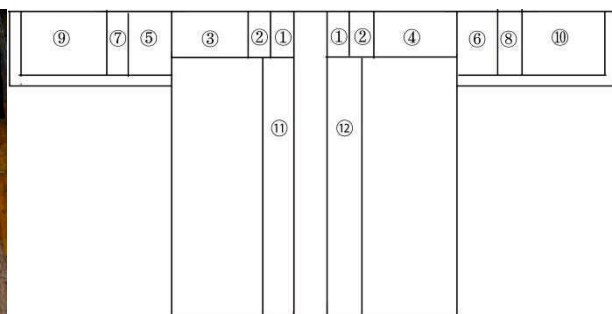


図 4-2 ウーベイ（筆者作成）

4.3.2.2 コーテェイ

コーテェイは23本から27本の刺繍からなるスカートである。1本の刺繍には3枚あるいは5枚の繡片があるため、3段式、5段式と呼ばれている。3段式のコーテェイ（図4-3）には69枚～81枚の刺繍、5段式のコーテェイには100枚以上の刺繍が必要である。コーテェイには花、鳥、魚、ザクロ、蛙、兎のような紋様が施され、平繡、破線繡、貼花繡などが多く使われる。



写真 4-5 3段式のコーテェイ（筆者撮影）

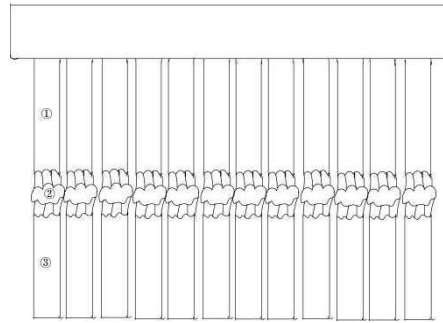


図 4-3 3段式のコーテェイ
（筆者作成）

宋 H（1963年、女性、東引村）は23本の刺繍からなっている3段式のコーテェイ（69枚繡片）、25本の刺繍からなっている5段式のコーテェイ（125枚繡片）の2着を持っている。花、鳥、蝴蝶などの紋様が多く、刺繍技法は平繡と破線繡である。

李 WF（1972年生、女性、開覚村）の家にあるコーテェイは3段式で27本の刺繍（81枚繡片）がある（写真4-5）。このコーテェイの刺繍は李 WF が3人の姉と一緒に完成させたものであり、現在は李 WF が経営している博物館の壁に展示されている。李 WF の語りによれば、苗族は奇数が好きである。そのため、漢民族が結婚の時に偶数を好むのと異なり、一般的に苗族は結婚の時も奇数の方がいいという。その理由について、李 WF は「母から奇数のほうがいいと教えられた。具体的な理由はわからない」と言った。

2019年の調査の時、李 a（1970年生、女性、平寨村¹⁰⁹）は娘の結婚衣装を作っている所で、コーテェイの刺繍をしていた。李 a がコーテェイに付けていた刺繍の紋様は魚、花が中心であり、平繡という一番簡単な刺繍技法であった。彼女は1枚の刺繍を作るには1週間くらいかかり、コーテェイの刺繍をすべて仕上げるには1年～2年が必要であると言った。

4.3.2.3 晴れ着の製作

1950年代以前は、苗族女性は12歳～15歳頃から刺繍を学び始め、結婚するまで刺

¹⁰⁹ 地名、西江鎮に所属する村である。

繡を練習しながら、晴れ着につける刺繡を製作した。たとえば、楊ZY（1941年生、女性、開覚村）は自分の衣装を製作した。また、宋Hの家にある魚紋様のウーベイ（写真4-6）について「ここの刺繡は私の姉がした。この部分（腕の刺繡と刺繡の間の部分）は母がした。私はこれができない」と語った。李WFが博物館に飾っている3段式のコーテェイ（写真4-7）には23本の刺繡（69枚の刺繡）があり、その中には李WFと3人の姉が製作した刺繡がある。このように、1着の晴れ着を製作する時、着用者本人と着用者の姉妹や母も衣装の製作に参加している。



写真 4-6 宋Hの手工製作したウーベイ（筆者撮影）



写真 4-7 李WFの博物館に展示するコーテェイ（筆者撮影）

1960年代、70年代は困難な時代であったため、衣装製作をする余裕はなかった。1980年代以降は生活が改善したが、晴れ着を製作する者は減少した。前述したように、時間がなくなったのである。それに加えて若い女性に限れば、学業を優先しなければならないことや良い仕事を求めて都市に行くようになり、刺繡を習得する者が減少す

るようになった。そのため、若い世代の女性は自分で衣装を製作する人が多くはなかった。しかし、彼女らの母親は手工製作にこだわり、娘のために衣装を製作した。事例をみよう。

汪 a (70 代、女性、羊排村¹¹⁰) には娘 4 人がいる。4 人の娘は全員結婚した。汪 a は「私は娘の結婚衣装を全部用意した。1 人 1 着だ」と語った。

李 WF は子供が 2 人いる。息子が 1 人、娘が 1 人で、かれらの将来の結婚用の晴れ着を 2 着作った。1 着は娘のもので、もう 1 着は息子の嫁用である。その晴れ着は博物館に展示してはならず、家に保存している。それは売るものではないからだと言った。

李 a (1970 年生、女性、平寨村) には子供が 2 人いる。息子 1 人と娘 1 人である。李 a は娘のために結婚衣装を作っているところである。2019 年 2 月の調査当時、上衣のウーベイは既に完成し、下衣のコーテュイは製作途中であった。彼女は「嫁がうちに来たら作ってあげてもいいが、結婚衣装は嫁の実家が用意するから、私は作らなくてもよい」と語った。

李 e (40 代、女性、羊排村) は現在羊排村で自家製の酒を販売する酒屋を経営しており、客がない時にウーベイに付ける刺繍を製作している。2018 年 9 月、李 e は娘 (2001 年生) の結婚衣装を作っていた。李 e は「娘は刺繍ができないから、私が作ってやる。昔私は自分で結婚衣装を作った」と語った。

ところで、刺繍技術を持っていても衣装製作をしない人もいる。たとえば、宋 YH1 は刺繍できるが、娘の花嫁衣装を「私は作らない。娘が大人になったし、私も作る時間がない」と言った。彼女の話によれば、現在の女性は結婚の時は普段着を着る人がいる。晴れ着は結婚式の日の 1 日しか着ないので、もし着なければなんとかしてやれる。宋 YH1 本人も晴れ着を持っていない。結婚の時母が作ってくれたが、今それは妹の宋 H のところにある。妹は自分でも 1 着作ったので、娘が結婚する時は妹 (宋 H) に借りることにしている。普通この衣装は自分の家族 (特に血縁関係を持つ家族) 以外の人には貸したりはせず、みんな大事にしているのである。

さらに、現在では、刺繍技術を持つ女性は 40 代以上である。20 代、30 代の女性は勉強や出来稼ぎで、刺繍を学ばなかった人が多い。また 1990 年代以降は晴れ着を機械で製作することが可能になった。そのため、機械製の晴れ着を購入する人もいるが、現地の女性は機械製のものより手工製作した方を高く評価している。

4.3.2.4 晴れ着の保存と着用

西江の女性は手工製作の晴れ着をととても大切に扱い、保存している。西江の晴れ着

¹¹⁰ 地名、西江鎮に所属する村である。

には背中、袖口に銀飾りをたくさんつける。そのため晴れ着を着るには、毎回銀飾りを縫い付けなければならない。この作業は2日ほどかかる。また、銀は空気と接すると変色するので、その色が衣装に移らないように、晴れ着を着ない時は、衣装につけた銀飾りを衣装から外す作業を行う。そして刺繍の形を崩さないように折りたたみ、大事に保存する。

晴れ着は未婚女性が祭りやユーフェの時、また結婚式の時に着用する。既婚女性が晴れ着を着用することはほとんどない。実際2016年11月の苗年¹¹¹の時、宋Hが息子の恋人の金Q（30代、女性、雷山県）と未婚の筆者に晴れ着を着せてくれた。筆者は広場に行った。広場には晴れ着を着た女性が集まり、蘆笙¹¹²を吹いている男性の後ろに並び、蘆笙舞を踊った。筆者の観察では当日晴れ着を着て広場で踊ったのは20代前後の女性と女の子であり、年配の女性はほとんどいなかった。これについて、宋Hは「結婚したら、もう（晴れ着を着て）踊らない」と言った。すなわち、晴れ着は苗族の女性が結婚前と結婚式の時に着る衣装であり、結婚後に着ることはほとんどない¹¹³。

しかし、観光化の中で、観光客に西江苗族の民族衣装を見せるために、年配者も晴れ着を着用して、西江の正門や広場などで踊ったり歌ったりしている。これは観光化の産物であると筆者は考える。

以上、西江苗族の女性の衣装に着目し、日常着であるウーゲンと晴れ着であるウーベイとコーテェイについて現地調査で集めた事例を紹介しながら、衣装の製作者、市販の衣装、着用する場、製作の時間などを述べた。

西江のウーゲン、ウーベイ・コーテェイはどれも刺繍で装飾してある。衣装を製作するには多くの時間を要する。実際の製作過程で最も時間がかかるのは刺繍を製作することである。1950年代までは糸と布も手作りしていたが、1980年代以降衣装製作に必要な糸や布は市場で購入することができるようになった。そのため、現在は手工製作で衣装を作るというのは衣装を装飾する刺繍を手工製作することである。

ところが、1990年代以降、西江では刺繍も機械製作の衣装が現れた。筆者の現地調査によれば、機械製の既製の価格は手工製の衣装よりはるかに安い。既製の方が製作する手間と時間がかからないため、衣装製作や刺繍制作する技術を持たない女性、また製作する時間のない女性は市販の既製服を買うようになった。確かに既製の方が自分で衣装を手工製作するより便利であるが、時間と手間をかけても衣装を手工製

¹¹¹ 苗族の正月である。毎年稲の収穫が終わった後に、祭りの主催者が苗年の日時を決める。苗年では餅を食べ、広場で蘆笙舞を踊る。

¹¹² 楽器。蘆(あし)の茎を管として用いた笙である。苗族は祭りなどのハレの日に男性が蘆笙を吹き、女性が踊る。

¹¹³ 2016年10月と2019年3月の現地調査の時、葬式で40代前後の女性十数人が晴れ着を着て、死者を囲んで蘆笙舞を踊っているところを見たことがある。

作する女性はいる。その理由は結婚式と関係があると筆者は考える。

4.4 西江苗族の婚姻

4.4.1 結婚式

4.4.1.1 結婚式の流れ

西江苗族の結婚式は新婦側と新郎側の両方で行われる。式の流れとしては、まず新婦側の親戚が新婦の家を集まり、宴会する。そして新郎が新婦の家まで迎えに行き、新郎の家に連れて行く。一方、新郎側の親戚も新郎の家を集まり、宴会をする。

筆者が現地調査において、2016年9月（新郎側）と2019年2月（新婦側）の2回、西江苗族の結婚式に参加することができた。本節ではその2回の結婚式の状況、結婚式の流れに沿って新婦側の式と新郎側の式を記述することで、西江苗族の結婚식을再現する。

まず、結婚式当日、新婦側（2019年2月27日）の家で行われたことを、次の表4-1で示す。

表 4-1 新婦側の結婚式の流れ（筆者作成）

順番	時間	結婚式の流れ
2019年2月27日		
1	8時頃	新婦の家の親戚が集まり、男性がかまどを作る。女性は野菜を洗い、食器を並べ、朝食の準備を始める。
2	8時45分頃	湯を沸かし、豚屠殺の準備をする。
3	9時頃	豚（招待客用）屠殺。
4	9時半頃	朝食の準備。「攔門酒 ¹¹⁴ 」（3箇所）の準備。
5	10時頃	新郎の親戚が豚、飲み物、酒、米、卵などを持って新婦の家へ来る。新郎側の親戚は新婦の家にとどり着くまでに3箇所の「攔門酒」を飲まなければならない。
6	10時半頃	朝食が始まる。酒を飲むため、12時ぐらいまで続く。
7	11時半頃	昼食を用意する。
8	12時15分頃	昼食の用意ができ、全員新婦の家集まる。新郎側の親戚と新婦側の親戚が食卓の両側に座り、新郎側の代表者（新郎の兄）が結納のお金を確認する。そして新郎から新婦の祖母、両親などにお金を渡し、2杯の酒を捧げる。次に新婦側が結納金を確

¹¹⁴ 攔門酒とは尊敬する客に対して自家製の酒を用意し、客が来る道に置き、客はその前を通るときには必ず飲む。

		認する。新郎の兄と新婦の父が3杯の酒を飲み、2本の鶏のものを食べると、結納の確認が終わる。
9	13時頃	昼食が始まる。これは夕方の17時ぐらいまで続く。女性たちは歌ったり踊ったり、酔うまで酒を飲み続け、普段タバコを吸わない女性も宴会ではみんなタバコを吸う。
10	18時頃	夕食が始まる。料理は新しく作るのではなく、昼食で余ったものを温めたものである。夕食は夜の21時頃まで続く。
11	22時半頃	新婦はこの日は動きやすいように、 <u>1日中ウーゲンを着ている。</u> 夜に新婦が実家を出る前に、 <u>晴れ着（ウーベイ・コーテェイ）、銀飾り¹¹⁵（ウーニ）に着替えて、新郎と一緒に新郎の家へ行く。</u>

次に、結婚式の日、新郎側（2016年9月14日と9月15日）の家で行われたことを、次の表4-2で示す。

表4-2 新郎側の結婚式の流れ（筆者作成）

順番	時間	結婚式の流れ
1	9月15日の前の週	氏族の中の年配者が集まり、結納金、新婦を迎える時間などの、結婚式の具体的な事や担当者を決める。
2016年9月14日		
2	朝	朝から新郎側の親戚の女性が集まり、食事の用意をし、親戚を招待する。
3	午前中	新郎李f（40歳）は午前中男性の友人と村の親戚を連れ、新婦Cの家に行く。結納金、米、卵などを持っていく。
4	昼頃	新婦の家族と結納を確認し、結納金を新婦の家族に渡す。
2016年9月15日		
5	朝 1時頃	新婦の家族と挨拶し、新婦を連れて新郎の家へ向かう。
6	朝 2時頃	新婦が西江の北門に着いたと連絡があると、家で待っていた新郎側の親戚の女性が新婦の服、銀飾り、靴などを持ち、羊排村也東寨の正門へ向かい、そこで新婦を待つ。新婦が寨の正門に着くと、 <u>正門で晴れ着に着替えさせる。</u> 着せ終わると、爆竹を鳴らし、新郎の家に歩いていく。新婦側が用意したもち米、豚

¹¹⁵ 苗語ではウーニ（IPA表記：wu:ni'）という。

		足、豚の頭、魚、布団、枕、衣装（ウーベイ・ウーゲン・コーテェイ）、靴、銀飾りなどを新郎の家へ持参する。
7	朝 8 時頃	新婦が又晴れ着（ウーベイ・コーテェイ・銀飾り）を着たまま新郎の村の井戸へ行き、天秤で水を運んで新郎の家のキッチンにある桶に入れる。これは、今後勤勉な嫁になるという意味である。水を入れ終わってから、新婦はウーゲンに着替える。新郎の村の人が新婦の家から持って来たもち米と魚を食べる。食べ終わってから、新郎側の男性が豚を殺す。その肉は夜の披露宴に使う。結婚式当日のごちそうは、客を招待する新郎のオバたちが朝から自分の家で調理して持っていく。
8	朝 9 時以降	新婦が家から持参してきたウーベイ・ウーゲン・コーテェイを結婚後に居住する寝室のベッドや壁に並べて展示する。新婦は食事の時以外、寝室にいる。新郎側の親戚の女性が新婦のいる寝室へ行き、展示された新婦の持参物を見る。
9	午後 16 時半頃	長卓宴 ¹¹⁶ が始まる。酒を飲む人は気が済むまで飲む。長卓宴の席は男性と女性が分けられている。

以上は男性側と女性側の双方の結婚式当日に行われたことをまとめ、結婚式の流れを再現したものである。結婚式で新婦の衣装が現れる場面は以下ようになる。

- ①新婦が実家を出る前まではウーゲンを着ている。
- ②新婦が実家から新郎の家へ行く前に晴れ着（ウーベイ・コーテェイ）に着替える。
- ③新婦が新郎の家に到着した翌日の朝、晴れ着を着て井戸から水を新郎の家の厨房まで運ぶ。それが終わると、ウーゲンに着替える。その後は1日中ウーゲンのままである。
- ④新婦がウーゲンに着替えた後、実家から持参したウーゲン、ウーベイ、コーテェイを寝室に展示する。
新郎側の女性の親戚と新婦は衣装をめぐって会話する。

4.4.1.2 結婚式で衣装の展示

前節では西江の結婚式の流れを整理した。西江苗族の結婚式において特徴的なことは新婦が新郎の家に着いた翌日の朝から晩まで新婦は自分たちの寝室にいて、実家から持参した衣装や靴などをベッドの上や壁に並べて飾ることである（写真 4-8 と写真

¹¹⁶ 苗族は長いテーブルを囲んで食事をする。

4-9)。あたかも博物館で展覧会をしているような雰囲気である。

この間、新郎側の女性の親戚がこの部屋に入り、新婦が展示した衣装を見る。男性はこの部屋に入ることはできない。この時は新郎側の女性の親戚は新婦と初対面の人が多いため、展示された衣装を褒めたり、衣装をめぐって会話がはずむ。新婦に対して、また新婦が展示した衣装に対して、新郎側の女性の親戚が「Hau Jya Ou (苗語)」（綺麗）、「Hau Exi Ou (苗語)」（綺麗）と褒める。会話は新婦に対して、衣装は自分で作ったのか、そうでなかったら、誰が作ったのか、又もらった場合は誰からもらったかなど、展示しているモノについてである。そのため新郎側の女性親戚が長くとどまることはないが、新婦は一日中来た人たちの相手をしなければならない。



写真 4-8 寝室で衣装の展示 (西江女性撮影)

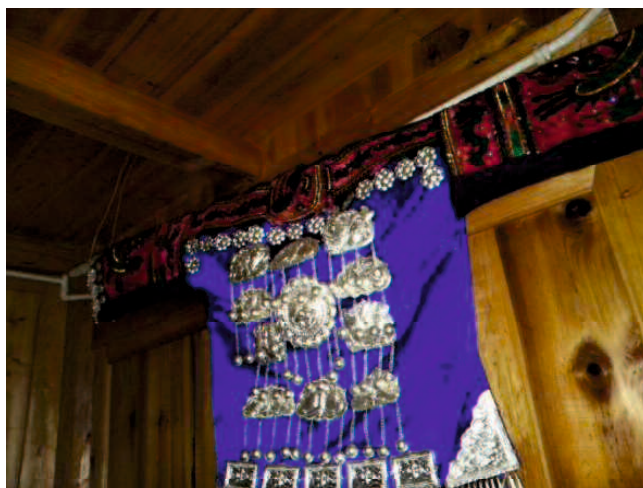


写真 4-9 楊 FF の寝室の壁にかけられたウーベイ (張 Q 撮影)

写真 4-9 の楊 FF (1994 年生、女性、郎徳上寨¹¹⁷) の結婚式で着用したウーベイと 5 段式のコーテェイの刺繍は楊 FF 自身が手工製作したものである。楊 FF は平繡という刺繍技法を使用し、アルバイトをしながらその合間に刺繍した。楊 FF の結婚式に参加した張 Q (1994 年、女性、郎徳上寨) は「自分で衣装を製作したのは偉い。私は刺繍できないので、母が作ってくれた」と語った。

筆者は李 WF と宋 YH1 に対して結婚式で展示されているウーゲンについて聞き取り調査を行った。李 WF は「あれ (あの衣装) は新婦のオバが贈ってくれたものだ。手工製作のもあれば、市場で購入した機械製の既製服もある」と語った。宋 YH1 は「ウーゲンは新婦の母方のオバと父方のオバがプレゼントするものよ。展示するために借りることもある」と語った。すなわち、新婦が新郎側の家で展示するウーゲンは新婦のオバ (父方・母方) が用意するものである。

2019 年 2 月、李 g (20 代、女性、羊排村) は東引村の男性と結婚した。李 g の母の候 a (50 代、女性、東引村) は病気で失明し、衣装を製作することができない。李 g 自身も刺繍はできない。そのため李 g が結婚式で着たウーベイとコーテェイは母に買ってもらったものである。この事情は分かるが、潘 GZ (50 代、女性、施洞鎮¹¹⁸) と李 WF (1972 年、女性、羊排村) は小声で「あの衣装は機械製のものだ。あまりよくない」という厳しい評価をした。

以上の事例をまとめると以下のようになる。

苗族女性は結婚式で実家から持参したウーゲン、ウーベイ、コーテェイなどを展示する。新婦が結婚式で着用する晴れ着はもともとは結婚するまでの間に自分で製作していた。しかし、刺繍の技術を習得する人が減少し、刺繍できない女性が増えた。そのため、結婚式で着用する晴れ着は母親が手工製作する場合もあれば、既製品を購入する場合もある。一方、展示するウーゲンは新婦のオバが用意し、手工製と購入した機械製の 2 種類がある。新郎側の女性親戚は新婦の展示した衣装を技術や紋様などを見るだけではなく、手工製か機械製か、誰が作ったかという視角からも見ている。

この衣装を展示する場は新婦と新郎側の女性親戚が知り合う場でもあり、普通知らない人同士が話題を作ることは難しい。しかし、結婚式では衣装という媒介物があるからこそ、会話が起りやすくなる。すなわち、衣装というものを通して人間同士の関係が繋がっていく。

¹¹⁷ 地名、中華人民共和国貴州省黔东南苗族侗族自治州の雷山県の北部に位置する。

¹¹⁸ 地名、中華人民共和国貴州省黔东南苗族侗族自治州の西北部に位置する台江県に所属する。

4.4.2 坐家

西江苗族の女性は結婚後には基本的に夫方に居住する。しかし、彼女らは結婚式が終わり、夫の家に移住するまでの間、実家に居住する。これを坐家という。西江の苗語では「ジャムズニャオ ウエイ ビポォニャオ¹¹⁹ (日本語発音)」といい、本論文では坐家と表記する。この期間は1年から5年ぐらいで、女性が夫の家で暮らし始めると、坐家が終わる。

なぜ苗族の女性は坐家をするのかについては婚姻の猶予、衣装製作の期間、親が決めた婚姻への抵抗、母系社会から父系社会への転換などという説があるが、筆者は坐家は衣装製作の期間であると考え。その理由として、婚姻猶予や親の決めた婚姻への抵抗というのは、坐家をする原因ではなく、むしろ逆に親が子供の婚姻を決めることや母方交叉イトコ婚¹²⁰というのを背景に、坐家の存在が個人の婚姻に自由を持たない女性にとって、一時期自分で決められない婚姻から逃げられるという理由を提供し、婚姻猶予の期間になるからである。母系社会から父系社会への転換という説については実証的に検討することができないため、今後の課題である。そのため、筆者が現地調査で集めた事例から、現時点では坐家は衣装の製作期間だと考えるのが妥当であると考え。女性がこの衣装製作の期間において刺繍技術を学び精進させるのである。

以下では事例を通して、1950年代以降西江の坐家変容と現状について検討する。調査は2015年～2019年の夏と冬に行った。事例の年齢は調査時点のものである。

4.4.2.1 坐家をした世代

筆者の現地調査から、現在坐家をする人はいないが、1950年代頃には坐家をした人が確かにいたことが、以下の事例により明らかである。

事例1 楊ZY (1931年生、女性、開覚村)

楊ZYは結婚式が終わって2年半ぐらい坐家をした。彼女は「坐家の期間に13着のウーゲンを作り、夫の家へ持参した。あの時(坐家)衣装は全部自分で作った」と語った。ちなみに楊ZYは結婚するまでに結婚式で着用した晴れ着(ウーベイ・コーテェイ)を彼女自身で手工製作した。結婚式が終わり、楊ZYは坐家の期間にウーゲンを13着作った。

事例2 李F (1941年生、女性、羊排村)

李Fは結婚して現在東引村に住んでいる。筆者が2015年10月に西江に調査に行っ

¹¹⁹ 坐家は苗語でジャムズニャオ ウエイ ビポォニャオ (IPA表記:dʒɿ bu dʒi nia⁹ wei⁹ bi⁹ 'k ph⁵ niau) という。

¹²⁰ エゴの母方のオジの息子がエゴを嫁にする優先権利を持つこと。

た時、李 F は嫁の李 YF と一緒に住んでいた。李 F の世代は、刺繍を学ぶ時、糸紡ぎ、布織りも学んでいたが、娘の世代になると、布や糸が買えるようになり、段々布と糸を自分で作らないようになった。李 F は現在たまに布を織るが、普段は布と糸を買っている。

李 F は母から糸紡ぎ、布織りと刺繍の技術を習った。結婚した時、2年間ほど坐家をした。その間に結婚後に着る衣装を数着製作し、刺繍の技術を上達したという。李 F は現在次男の宋 YH2（1966年、男性、東引村）の嫁である李 YF（1968年、女性）が経営している「李 YF 刺繍工紡」で刺繍関係の仕事を手伝っている。次男は出稼ぎで広州にいる。

楊 ZY と李 F の事例から、1950年代、1960年代には坐家という実家に居住する期間が存在していたことは明らかである。この期間に新婦は結婚後に着る日常着（ウーゲン）を製作した。また子供が生まれてから使うビツ、帽子も作るが、本章では女性の衣装だけに注目する。

4.4.2.2 坐家をしなくなった世代

上述のように1950年前後に坐家をした女性がいたということが明らかであった。しかし、1950年代の末ごろから1970年代にかけて、中国では飢饉¹²¹、人民公社設立¹²²、更に文化大革命¹²³などがあった。そのため、西江の人々の生活も困窮を極め、衣装を作る余裕などなかった。この時代の女性たちは結婚すると、すぐに夫方で住み労働しなければならず、坐家をしなくなった。また、1970年代の末頃から改革開放や分田到戸¹²⁴などで、生活の改善ができたが、坐家は復活しなかった。1980年代は教育復興、1990年代出稼ぎなどという時代背景において、坐家をする人はほぼいなかった。以下は坐家をしなくなった事例である。

事例3 宋 YH1（60代、女性、東引村）

宋 YH1 は1970年代に烏堯村¹²⁵の男性と結婚した。結婚の時着用した晴れ着は母（80代、女性、不明）と、妹の宋 H（1963年、女性、東引村）が協力して製作した。現在

¹²¹ 1958年ー1961年中国は自然災害などの原因で3年間食糧不足の状態が続いた。

¹²² かつて中国において農村に存在した組織である。一郷一社の規模を基本単位とし、末端行政機関であると同時に集団所有制の下に、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化さらには軍事の機能を営んだ。すなわち、従来の権力機構（郷人民政府と郷人民代表大会）と「合作社」を一体化した「政社合一」の組織であった。

¹²³ 中国で1966年から1976年まで続き、1977年に終結宣言がなされた、毛沢東主導による革命運動である。

¹²⁴ 土地を農民に分配する制度である。

¹²⁵ 地名、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県の東北部に位置する。

その衣装は妹の家に保存されている。宋 YH1 は結婚後にすぐ夫の家に居住し、坐家をしなかった。宋 YH1 は「あの時夫の家はとても貧しかった。家事や農作業などをしなければならず、食べるものもなかった。畑仕事が多かった。衣装製作するどころではなかった。その後（筆者補充：1990年代以降）たくさんの人が出稼ぎに行った。うちはお金がないから、夫と一緒に出稼ぎで広東へ行った」と語った。すなわち、宋 YH1 は結婚後すぐ夫の家の労働力として働き始め、坐家をしなかった。2019年の調査で宋 YH1 はまだ夫と広東省で働き、衣装製作や刺繍をしていない。

事例4 毛 JH（1974年、女性、南貴村）

毛 JH は兄（1人）と弟（1人）の3人キョウダイであり、母から刺繍を学んだ。毛 JH は1993年に李 J（40代、男性、東引村）と結婚した。結婚の時に家が貧しかったので、晴れ着をすることができず、ウーゲンを着用した。結婚式で着用したウーゲンは実家の母が製作した。結婚式が終わってからすぐ夫の家に居住することになったので、坐家をしなかった。現在西江の観光業が盛んになり、毛 JH は農繁期には農作業をするが、農閑期には西江の飲食店でアルバイト（月給約2,000元、日本円で約35,000円）をしている。

事例5 李 WF（1972年、女性、開覚村）

李 WF は楊 ZY の4番目の娘であり、姉（3人）と弟（1人）がおり、5人キョウダイである。1990年代の初め頃に貴陽市へ出稼ぎに行き、そこで夫の李 XH（40代、男性、羊排村）と知り合った。1996年に夫と西江に戻って結婚式を挙げて、すぐ又貴陽市へ戻り仕事をした。そのため李 WF は坐家をしなかった。李 WF の語りによれば、李 WF の姉たちは刺繍が上手だが、3人とも坐家をしなかった。李 WF の母である楊 ZY は坐家をしたが、李 WF と3人の姉は結婚式を行ってすぐに夫の家で生活し始め、坐家をしなかった。

以上の事例から、1960年代以降西江苗族の女性は坐家をしなくなった。筆者が2016年9月の現地調査において、苗族女性の宋 H（1963年、女性、東引村）から「40年前からみんな坐家をしなくなった」という語りを得た。すなわち、貧しい時代には、刺繍する余裕がなかったため、集中的に結婚後の衣装を製作することは難しかった。

4.4.2.3 坐家を知らない世代

1960年代以降、生活が安定しなかった時代の中で、西江苗族の女性は坐家をしなくなった。しかし、1980年代から生活に余裕が生まれたが、坐家は復興しなかった。さ

らに張Q（1994年、女性、郎徳上寨）や楊FF（1994年、女性、郎徳上寨）の世代になると、坐家ということさえ知らないという状況になっている。2019年、筆者は坐家について、刺繍が上手であり、自分で結婚衣装を製作した楊FFに聞き取り調査を行った際、楊FFは「これ（筆者補充：坐家）は本当によく知らない」と語った。

事例6 候Z（20代、女性、羊排村）

候Zは刺繍ができない。結婚式が終わってすぐ夫と一緒に生活した。現在子供は5歳で、夫の母に子供の面倒を見てもらい、候Zは重慶¹²⁶へ出稼ぎに行き、レストランで働いている。

事例7 張Q（1994年生、女性、郎徳上寨）

張Qは2016年9月に苗族の男性皮ZJ（20代、男性、三顆樹¹²⁷）と結婚し、翌年息子を生んだ。張Qは勉強で忙しかったため、母に刺繍を学ばなかった。結婚式が終わって、張Qは夫の家から実家へ戻り、2日間だけ実家に滞在した。その後皮ZJが仕事で貴陽市¹²⁸に行き、張Qは西江や凱里で不安定なアルバイトをし、2人共仕事先にアパートを借りている。息子は皮ZJの母に見てもらっている。皮ZJと張Qの2人は週末だけ三顆樹に帰り、子供に会いに行く。すなわち、張Qは坐家をしなかった。

事例8 李h（20代、女性、羊排村）

李hは刺繍ができない。貴陽で仕事をしていた時、漢族の夫のA（20代、男性、貴陽市烏当区¹²⁹）と知り合った。2015年にAと結婚し、翌年娘を生んだ。李hとAは仕事があり、結婚式が終わるとすぐ仕事に戻った。2人は貴陽で働いているので、烏当区に居住している。子供は李hの親に預けているため、李hとAは週末に西江の李hの実家で1泊してすぐ貴陽に戻る。李hは坐家することはなかった。李hが坐家をしなかった理由についてはまだ調査していないが、李hは刺繍ができないこと、仕事で坐家する時間がなかったことなどが考えられるだろう。

以上の事例から1990年以降に生まれた若い世代は刺繍できる者が少ない。そして、結婚式の後に坐家をする人はほとんどいないということが分かった。このような状況になった理由としては、学校教育や出稼ぎなどの影響が考えられる。これについては考察の部分で詳しく検討する。

¹²⁶ 地名、中国の西南部に位置する直轄市である。

¹²⁷ 地名、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州凱里市に位置する。

¹²⁸ 地名、中国貴州省の省都である。

¹²⁹ 地名、中国貴州省の省都である貴陽市に所属する。

まとめよう。1950年代前後は西江苗族の女性は結婚式の後実家に戻り、結婚後の日常着を製作した。坐家をしていたことを事例を通して確認することができた。しかし、1960年代、70年代の貧しい時代は、労働力が必要であり、衣装製作をするような余裕がなかったため、坐家をするにはほぼできない状況であった。1980年代以降は生活が改善したが、学校教育や出稼ぎなどで、刺繍をする人が激減し、坐家をする人はほとんどいなかった。さらに2000年代以降、20代30代の若い世代は坐家をしなないし、また坐家ということさえ知らない状況である。

4.5 考察

4.5.1 苗族の衣装

本章では西江苗族の衣装を日常着と晴れ着に分けて紹介した。1950年代までの女性の衣装は糸紡ぎ、布織り、刺繍など全部手工製作した。1980年代以降は布や糸を市場で購入することが可能になったことから、手工製作の衣装というのは実際は衣装を装飾する刺繍のみを手工製作することとなった。1990年代以降、機械製作の衣装や刺繍が現れ、それらを購入する女性がいる。しかし、筆者の調査から言えば、西江苗族の女性は機械製作より手工製作のほうを高く評価している。ウーゲンとウーベイ・コーテェイは女性の一生に関わるものである。本章では衣装の製作者と着用者について検討し、衣装から苗族女性の婚姻、社会関係などを見るのが可能であることを明らかにした。

4.5.2 西江の学校教育・刺繍・坐家

前章において、楊ZYや李Fの事例から1950年代頃、西江では確かに坐家が存在したことを示した。1960年代、70年代は貧しい時代であったため、苗族女性には刺繍や衣装製作する余裕がなく、坐家をしなかった。しかし、1980年代になると生活が改善し、余裕が生まれたが、坐家が復活することはなかった。その理由として出稼ぎ、学校教育が普及したことが考えられる。そこで本節では学校教育に注目し、坐家が復活しなかった原因を事例を通して検討する。

事例9 宋GX（1939年生まれ、女性、南貴村）

宋GXは13歳の頃から母に刺繍の技術を習い始めた。宋GXには息子が2人と、娘が1人いる。宋GXは西江では珍しく中学校まで行った女性である。そのため、政府機関で仕事をしていた。仕事があるため、刺繍する時間も限られていたが、娘に刺繍

を教えた。現在娘は結婚して凱里¹³⁰に住んでいる。次男は南貴村でレストランを営
し、家の経済状況は長男よりよいので、宋 GX は次男の家に住んでいる。現在宋 GX は
高齢のため、刺繍することができない。

事例 10 李 YM (1930 年代、女性、羊排村)

李 YM は小学校を卒業した。李 YM が実家にいる時、刺繍を学ばなかった。1950 年代
に姚 BM (生年不詳、男性、天柱県¹³¹) と結婚し、結婚式が終わるとすぐ夫の家へ行き、
坐家をしなかった。子供 4 人 (息子 1 人、娘 3 人) を生んだ。李 YM は小学校を卒業
しているが、1950 年代では高学歴であった。李 YM は教育を重視したため、子供 4 人
を全員学校に行かせた。現在息子の姚 CY (生年不詳、男性、天柱県) は黔東南州政府
の公務員、長女は刑務官、次女は幼稚園の教師、三女は病院の看護師として働いてい
る。李 YM の娘は 3 人とも学校教育を受けたので、仕事をしており、刺繍ができない。

事例 11 楊 a (1940 年代、女性、西江)

楊 a は李 YW の元妻であり、1990 年に亡くなった。李 YW の語りによれば、楊 a は西
江苗族の女性の中では珍しく中学校まで行ったため、高学歴で政府の婦女主任として
働き、「知識分子¹³²」である。楊 a は刺繍や衣装製作はできないが、知識もあり、家
事と仕事の両立ができていたため、能力のある人と夫に高く評価されていた。西江苗
族の女性は 12 歳から 15 歳頃から刺繍を学び始めるが、この間楊 a は中学校に行っ
たので、刺繍の習得をしなかった。

1977 年、文化大革命で中止となった大学入学試験が再開し、学校教育を重視し始め
た。1986 年、『中華人民共和国義務教育法』¹³³が制定され、多くの人に学校教育を受
けることができるようになった。このような背景の中で、1950 年代から西江小学校の
教師をし、1980 年代に西江小学校の校長先生となった李 YW によると、「1960 年代の
ように学校に 1 人の子供も来なかったという状況が一変し、1980 年代には学校に百人
以上も来て、さらに 2000 年になると (李 YW が定年退職する頃) 千人以上が来た」と
いう。

事例 12 李 i (1999 年生、女性、羊排村)

李 WF は娘の李 i (1999 年生、女性、羊排村) に刺繍を教えていない。李 WF は「娘
は今大学に行っている。娘は刺繍を学ぼうとしない。本人が刺繍を学びたければ教え

¹³⁰ 地名、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州の中心にある。

¹³¹ 中華人民共和国貴州省黔東南苗族侗族自治州の東北部に位置する県である。

¹³² 中国で知識を活かして働く人を知識分子という。たとえば、教師、作家、弁護士など。

¹³³ 適齢児童や生徒が義務教育を受ける権利を保障するために、義務教育の実施を保証し、全民族の素質
を高め、憲法と教育法に基づいて制定された法律である。

るが、刺繍に興味がないので、やりたいことをやってほしい」と語った。

事例 13 (1994 年生、女性、郎徳上寨)

張 Q (1994 年生、女性、郎徳上寨) は勉強で忙しいため、母に刺繍を学ばなかった。張 Q が「中学校のクラスメートはほとんど全員刺繍ができない。教えてもらう時間がない」と語った。

事例 14 宋 LL (2007 年生、女性、東引村) と宋 YX (2006 年生、女性、東引村)

2016 年の現地調査で、小学生の宋 LL (2007 年生、女性、東引村) と宋 YX (2006 年生、女性、東引村) に聞き取り調査を行った。宋 LL は 1 人っ子で、調査当時両親が家を留守にし、自家が経営する酒販売店で仕事をしていた。宋 LL は「毎日朝 6 時頃に起きなければならない。小学校 2 年生の時、先生が厳しいので、遅刻してはいけなかった」と語った。宋 LL と宋 YX の 2 人は 20 分ほど筆者と話をし、「もう家へ帰らないといけない。宿題をしなければならないから」と言った。

この 2 人の語りによれば、現在西江には幼稚園もあり、クラスメートは全員幼稚園に入ってから小学校に行くという。まだ小学校 2 年生と 3 年生の 2 人は朝 6 時頃起きて学校に行き、午後 5 時頃家に帰る。そして宿題もしなければならない。2000 年代以降の女の子は 1950 年代の女の子 (12 歳頃から刺繍を学び始める) と違い、学校教育を受けることを中心とした生活を送っている。

以上の事例を整理しよう。1950 年代の「掃盲運動¹³⁴」で西江では学校へ行く者が増えたが、男子の方が圧倒的に多く、女子は少なかった。この時期学校教育を受けた少数の女子が、家で刺繍を学ぶことがほとんどできなかった。そして、教育を受けた女性は卒業後公務員になることが多く、エリート的な存在であった。宋 GX のように刺繍を学んだが、卒業後仕事のために、刺繍する余裕がなかった。

筆者が集めた事例では、1950 年代に学校教育を受けた女性は刺繍ができない者が多く、坐家をしなかった。そして 1960 年代から 1970 年代は飢饉、人民公社、文化大革命などで、苗族の人は学校へ行けず、刺繍や衣装の製作などをする余裕がなかった。さらに 1980 年代以降は学校教育の普及により、刺繍をする者が激減した。また、この頃には既製の糸や布が購入ができるようになったため、刺繍だけを手工製作するようになった。そのため、刺繍ができなければ、衣装製作 (特に衣装につける刺繍を製作する) をすることはできない。

前述のように坐家は結婚後の衣装を製作する期間である。したがって刺繍ができな

¹³⁴ 掃盲運動は 1950 年代初頭新中国が成立した後、国民の識字率が低い状況を改善するために行われた識字運動である。1951 年速成識字法が全国範囲で普及した。

い人にとって、坐家の必要はなくなった。現在、若い世代は坐家さえ知らない。すなわち、学校教育の普及により、刺繍の習得と製作をする者が減少し、さらに坐家は消滅した。

4.5.3 文化資本としての刺繍の衰退

文化資本 (capital culturel) は社会学者であるピエール・ブルデューによって確立された概念である。文化資本とは、「広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育をとおして各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など (身体化された文化資本)、書物・絵画・道具・機械のように物質として所有可能な文化的財物 (客体された文化資本)、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など (制度化された文化資本)、以上の三種類に分けられる」[石井 1990:v]という。苗族の女性にとっては刺繍技術を持つというのは身体化された文化資本であり、刺繍技術を利用して作り出した刺繍はまさに所有可能な財であり、客体化された文化資本であるといえる。

前節の坐家についての検討において、1950年代以前、女性が坐家の期間に衣装を作り、技術の習得をしているという話があったが、1960年代、1970年代においては中国社会が動乱期にあり、経済的にも厳しい状況にあったため、苗族の女性は刺繍をする余裕はなかったが、刺繍技術だけは習得していた。その時代では学校教育を受けた女性が極僅かであり、学校教育を受けた女性の中には刺繍技術を習得できなかった人が多い。

すなわち、1980年代以前の西江苗族社会の女性においては、学校教育より、刺繍教育のほうが重視されており、ほとんどの女性には刺繍技術を有し、それが彼女らの文化資本であったと考えられる。ジーナ・コリガンは「未来の夫たちは、ミャオ族の未婚女性たちを、糸紡ぎ、機織り、刺繍の腕前から見定めるといわれている。手の込んだ衣装を美しく上手に作り上げることは根気強さと勤勉さの証なのだ」[コリガン 2003:11]と述べている。すなわち、その頃の女性は刺繍技術を持つのは基本的なことであり、現地社会では、いわゆる「良い嫁」になれるかどうかの評価基準であった。また女性たちは刺繍技術を利用して実物の客体化された文化資本を製作することができる。すなわち、1980年以前の女性たちは刺繍技術という身体化された文化資本と刺繍品という客体化された文化資本の両方を持っていた。

しかし1980年代以降、出稼ぎや学校教育の定着により、出稼ぎや学校に行く女性が増える一方、刺繍技術を習得する女性が減少した。1990年代以降は機械製作の刺繍が出現したことで、既製の刺繍品が販売されるようになり、刺繍技術の習得者がさらに減少した。このように、1980年代以前に幼少期を過ごした女性のほとんどが刺繍技

術という身体化された文化資本を持っているのに対して、1980年代以降にはこの身体化された文化資本を持つ女性は減少する。このような背景において、刺繍技術という文化資本を持っているかどうかで女性を評価することができなくなり、むしろ学校教育の方が重要視されるようになった。

だが2000年代以降の刺繍の商品化の中で、観光客、研究者、コレクターなど外部の人によって手工製作の刺繍が重要視されるようになった。刺繍技術を持つ女性は依然として多くはない状況において、刺繍技術を持つことが外部の人に高く評価され、刺繍技術を持つことが女性の身体化された文化資本であることが新たな価値を見出すようになった。すなわち「良い嫁」になるためではなく、刺繍品を製作できる能力、あるいは刺繍を伝承できる能力とされるようになったのである。もちろん、手工製作した刺繍製品を持つことが客体化された文化資本であることに変わりはない。

以上の述べたように1980年代以前苗族の女性にとっては刺繍技術の習得が教養であり、刺繍技術という身体化された文化資本と自分の手で製作した刺繍品という客体化された文化資本を持っていた。1980年代以降は、苗族の女性にとって刺繍技術の習得より、学校教育を受けるほうがより重要なこととなり、文化資本としての刺繍技術が衰退するようになり、苗族社会内部では女性を刺繍技術で評価することはできなくなった。そして、技術をもたない女性は母が作った刺繍品を受け継ぐことで、客体化された文化資本を所有するのみとなった。さらに2000年代以降の観光化や刺繍の商品化の時代において、手工製作の刺繍が重要視されることとなるが、その背景において、刺繍技術という身体化された文化資本が見直され、手工で刺繍製作できること、刺繍技法を次世代へ伝承できることが、再び別の評価軸から刺繍技術を持っている女性の身体化された文化資本となったのである。

4.5.4 社会関係資本を確認する場

社会関係資本 (capital social) は社会学者であるピエール・ブルデューによって確立された概念である。社会関係資本とは、「さまざまな集団に属することによって得られる人間関係の総体。家族、友人、上司、同僚、先輩、同窓生、仕事上の知人などいろいろあるが、そのつながりによって何らかの利益が得られる場合に用いられる概念」[石井 1990:vi]である。本節では社会関係資本の視点から、西江苗族が結婚式で衣装を展示する場について検討する。

4.4の節で苗族の結婚式の流れを示したように、新郎側の家で新婦が持参した衣装を展示し、新婦は1日中その部屋にいる。結婚式までに、新婦と新郎側の親戚とは接する機会が少ないので、衣装を展示する場は新婦と新郎側の女性親戚が初対面する場である。結婚式で初対面となる女性同士にとって、部屋に展示してある衣装が話題の

きっかけ、中心となる。この場では主に新郎側の女性親族が衣装をめぐって、褒めたり、衣装の製作者や贈与者について訊いたりする。そして、刺繍ができる女性は部屋で新婦と話をするだけではなく、展示された衣装につけられている刺繍の技法、紋様、手工製か機械製かなどを話題にし、鑑賞する。このように新婦との会話と衣装の鑑賞を通し、新郎側の女性親戚は新婦の衣装製作の能力、新婦の家族関係、新婦の性格などを「確認」する。

第2章で触れたように、西江苗族出身の文化人類学者である張暁は苗族の女性研究において、「婦女小群体」[張暁 2000(4) : 41-47]という概念を提示した。この小群体とは苗族女性が4、5人あるいは十数人でグループを作り、一緒に行動するということである（事例は本論 p. 59-61 参照）。筆者の現地調査においても、十数人の苗族女性が広場に集まり、一緒に刺繍をしている姿をよく見かけた。もし新婦が刺繍をできるのであれば、結婚して住み始めた地域の刺繍グループに参加しやすくなると考えて良いであろう。すなわち、新婦が持参したものを展示する場は新婦にとって、新郎側の女性に認めてもらう場であり、一緒に刺繍をする小群体の仲間に加わることができる最初のもっとも重要な機会なのである。このような小群体は集まって話をしながら一緒に刺繍をする。写真 4-10 は羊排村の女性が広場に集まって一緒に刺繍をしているところである。この場において、女性たちは糸の配色について相談したり、刺繍技法の交流（宋Hはこの場で鎖繡という技法を習得した）をしたりする。刺繍をしている女性が刺繍をしながら、隣に座る女性に自分の刺繍を見てもらったり、ほかの人の刺繍を見たりすることがよくある。第〇章で触れたように、この場に集まった女性たちは、共同の場所で一緒に刺繍をすることで共同の時間を過ごし、のんびりした場を共有し、刺繍技法や紋様、配色などの交流をとおして、刺繍の伝承・継承を行っている。



写真 4-10 西江の広場に集まった刺繍する女性の小群体（筆者撮影）

繰り返しになるが、西江では1950年代前はウーゲンとウーベイを自分で手工製作していた。1990年代以降、ウーゲンもウーベイも機械製の既製服が販売されるようになったが、まだ手工製作のものにこだわる女性がいる。刺繍技術を持っている世代の女性の多くは娘のためにウーゲンを手工製作する。晴れ着の部分で述べたように、1着の晴れ着（ウーベイ・コーテェイ）を製作するには2、3年もかかるのに、結婚後に晴れ着を着用する機会はほとんどない。それでも、既製服を買うのではなく、膨大な時間をかけてでも娘のために衣装（ウーベイ・コーテェイ）を手工製作する女性は少なくない。もし親族が自分のために晴れ着を作ってくれなかったとしても、借りるということが可能だ有る。宋 YH1 は自分では手工製作をする余裕はないが、娘が結婚する時に、自分の姉妹＝娘のオバ（母方）に手工製作した晴れ着を借りることができた。なぜそこまでしてまで手工芸に拘るかと言えば、それは結婚式で新婦が衣装を展示する場があるからである。この場は新婦にとって、製作に数年を要するウーベイ・コーテェイを製作する母親がいること、あるいは母親がいなかったとしても衣装を貸してくれる存在、たとえば（母方）オバがいること、を示す場なのである。つまり新婦に対して多くの労力を割いてくれる者の存在の有無が、刺繍が施された晴れ着を通して示されるわけであり、換言すれば新婦の社会関係資本を新郎側の親戚に披露する場なのである。

4.6 まとめ

本章では中国貴州省黔東南州雷山県西江鎮の西江千戸苗寨を調査地として、西江苗族の女性の衣装と婚姻について考察した。西江苗族の女性の衣装には日常着であるウーゲンと晴れ着であるウーベイとコーテェイがある。ここではウーゲンとウーベイ・コーテェイの製作者、製作方式、着用の場などを整理した。衣装の製作に関して社会の変化とともに、既製の糸と布または刺繍サンプルの出現により、手工製作の過程が簡略化されるようになった。さらに、機械製の既製服も販売されるようになった。農作業や家事もあり、特に西江の観光化が進む中、苗族の女性が衣装を手工製作する余裕がない状況において、既製服の出現は西江の女性にとっては欠かせない存在となった。しかし、既製品があるとはいえ、手工製作の衣装に執着する女性は少なくない。筆者が現地調査で集めた事例に限られるものの、現在西江の女性は日常的に着用するウーゲンは市販品が多く、外出や食事会などのオフィシャルな用事がある場合には手工製の衣装を好んで着用する。

1950年代から1990年代頃まで、苗族の女性は衣装製作や刺繍製作の技術を持っていたため、自分の衣装をほとんど自分で手工製作していた。そのため、1990年代以前

の西江苗族の女性にとって手工製作の衣装が普通であり、誰もが持っているので、古くなると捨てたり燃やしたりしていた。機械製の既製服が現れてから苗族女性が手工製作の衣装の価値を意識するようになった。そのため、西江の女性たちが機械製の衣装と手工製の衣装に対して異なる評価をし、異なる扱い方をしている。西江苗族の女性は機械製の衣装より手工製の衣装のほうが高い価値があると考えている。

西江苗族の女性は手工製作の衣装を高く評価している。衣装製作する技術を持っている女性は現在ではほとんど40代以上であり、多くは娘のために衣装を手工製作しようとする。1980年代生まれ、90年代生まれ以降の若い女性たちは学校教育の影響や出稼ぎで刺繍の技術を学ぶ機会が激減し、衣装製作をすることができなくなっている。すなわち、かつては衣装を着る者が自分で衣装を製作していたが、現在では母が娘のために衣装を製作するようになった。

筆者の調査によると、現在手工製作の衣装はほとんどが結婚式のためのものであることがわかった。結婚式の流れの中で特に刺繍が注目される場面は、衣装を展示する場であり、新郎側の女性が展示された衣装を鑑賞し、衣装の製作者や贈与者などをこの場で確認していることが事例を通して明らかになった。この場において、刺繍が施された衣装は初対面である新婦と新郎側の女性親族に話題を提供し、さらに新郎側の女性が衣装の製作方式、技術度、製作者、贈与者（借りる場合もある）などを確認する。この一連の確認によって新婦が持っている社会関係資本が「確認」される。すなわち、結婚式で新婦が衣装を持参し展示するということは単なる衣装の展示ではなく、社会関係資本の表示でもあるとも言え、新婦にとって新郎側の女性に認めてもらう重要な場である。西江苗族の女性は定期市に行くのも、刺繍するのも「小群体」を作り、一緒に行動することが多い。新婦が展示する衣装を自分で手工製作したかどうかを聞くことで、新婦が刺繍技術を持っているかどうかを確認している。そのため、新婦が結婚式の展示の場において刺繍技術という文化資本を持っていることで認められるかどうかは、新郎側の女性の「小群体」に入れるかどうか、どの「小群体」に入れるかに関連すると筆者は考える。そのためにも、新婦の母親は多大な時間と労力をかけてでも衣装を手工製作するといえる。

技術の発展により、衣装を製作することが簡略化されつつあり、衣装を手工製作するということは刺繍だけを手工製作するということになっている。1980年代以降、学校教育の影響により刺繍の技術を習得する者が激減した。また、1960年代、70年代の貧しい時代には、結婚式の後に、女性が一定期間実家に居住し衣装を製作する坐家ができなかった。さらに、刺繍習得者の減少によって、衣装を製作する技術を持つ者が激減し、坐家の期間に衣装を製作することができなかった。そのため、1980年代以降、刺繍製作は復興したが、坐家は復活しなかった。本章では坐家が衣装製作の期間

であり、政治的・経済的条件により坐家ができなくなり、さらに学校教育の影響により刺繍技術の習得者が少なくなったことが坐家が復活できない根本的な原因であることを指摘した。

以上のように、本章では苗族の女性の婚姻においてあまり注目されてこなかった結婚式における衣装を展示する場と結婚式の後の坐家の期間に焦点を当て、衣装との関わりを検討した。まず西江苗族女性の日常とハレの日に着用する衣装を紹介し、衣装の製作者、着用の場、製作方式などについて述べた。また、古くから結婚式の後に坐家という衣装製作の期間があったが、政治・経済的な状況により坐家をしなくなり、学校教育の影響で復活できなかったことを事例を通して明らかにした。1980年代以前、苗族女性は刺繍技術という身体化された文化資本と自分で製作した刺繍品という客体化された文化資本を持っていたが、1980年代以降は、苗族社会内部において上位世代の刺繍品を受け継ぐことで客体化された文化資本としての刺繍が維持され、刺繍技術の習得者の激減により刺繍技術という身体化された文化資本は衰退の一途をたどるようになった。だが一方で結婚式における衣装の果たす役割においては、刺繍が施された衣装は新婦にとって自身を装飾するだけでなく、刺繍が施された晴れ着（および衣装）は、新婦に対して、贈与であれ貸借であれ、製作に数年を要する刺繍衣装を提供する存在がいるという社会関係資本を展示し、嫁ぎ先の女性に認めてもらう重要な媒介物でもあることを示した。

これまで衣装は民族の識別や民族アイデンティティを表すと位置づけられてきたが、本章では衣装の位置づけを結婚式で衣装を展示する場から再考した。そして文化資本である刺繍の衣装が社会関係資本を表すものとして、新婦と嫁ぎ先の女性との関係構築（刺繍をする女性の小群体に加入できるかどうか）に大きな役割を果たしていることを示した。本章で苗族の女性の衣装と婚姻の関係の考察をとおして、これまで苗族の衣装と婚姻に関する研究の空白を埋めることができたと考える。

第5章 苗族社会の財である刺繍と衣装の交換

5.1 はじめに

1978年の改革開放以降、中国は少しずつ市場経済化が進んでいる。苗族社会も市場経済化の影響を受け、社会的・経済的環境は変化しつつある。このような状況に対して、中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県における苗族社会の女性たちの一部で、手作りの刺繍を買い集め、販売するなどの活動がみられようになった。特に2000年以降、西江の観光化が進む中、民族工芸品である刺繍の経済的な価値が高まり、刺繍の販売を通して経済的利益を求めようようになってきている。

筆者の調査では、刺繍の作り手である女性たちが、金銭的に余裕があれば、西江、烏堯¹³⁵、控拝¹³⁶などの近隣の苗族村落を回り、刺繍が施された衣装を収集するという状況が垣間見られた。たとえば、後述する宋H（1963年生、女性）の刺繍品販売店には、彼女が買い集めた数百枚の繡片がある。また彼女と同じように、後述する李WF（1972年生、女性）も10年以上の間、繡片を収集し続け、2017年に（中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県南貴村西江千戸苗寨の中に）苗族刺繍博物館を設立している。同地が観光化される中、刺繍の経済的価値は高騰している。経済的価格の高い刺繍を購入する人はそれほど多くないため、刺繍はすぐには金銭的価値には変換できない（経済的価格の高い刺繍を購入する人はそれほど多くないため）ものの、経済的価値が確立されたため、李WFらにとっては「財産」であるというのが適切であろう。

本章では文化人類学的なフィールドワークの手法を用いて得た事例に対し、2つのアプローチから検討を加えることで論を進めていく。1つ目は市場経済化が進む現代の苗族社会において、刺繍製品をめぐる取引交換と贈与交換（本章で扱う刺繍・衣装の贈与交換は贈るという行為だけではなく、広く無償の貸与が含まれている）という2つの交換形態が存在していることを明らかにする。これらの交換の過程において、苗族の女性は何をその価値（あるいは意義）の拠り所としているかということについて検討する。2つ目は大きな変化の途上であり、現代化しつつある苗族社会における刺繍の価値を動的に考察し、外部・内部双方の視点を織り交ぜることにより、彼女たちにとっての刺繍の意義を再考する。

本章の主たる目的は、先行研究においてはほとんど描かれてこなかった刺繍の作り手である女性の視点から刺繍の価値及び位置づけを再考することである。以下では先行研究における到達点を示したうえで、調査事例を踏まえ、現代苗族社会における刺

¹³⁵ 烏堯は地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県東北部に位置する。

¹³⁶ 控拝は地名。中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県東北部に位置する。

繡をめぐる2つの交換の在り方、そして現代の苗族社会における刺繡の新たな意義について明らかにする。

5.2 苗族女性の財（財産）である刺繡と衣装

5.2.1 苗族女性としての「財産」とは

苗族女性が所有する財は何であろうか。苗族全般に関する代表的な文献である『苗族通史（五）』の「卷三十三 家庭村落誌」では、苗族の家庭内の財産の分配について「父母の財産は主に男子が継承する。女性には結婚する時に、嫁入り道具を与えるだけである。富裕な家庭は娘に『私房田¹³⁷』を娘に与える（筆者訳）」[吳榮臻・吳曙光 2007:663]となっている。

苗族女性を中心とする研究者である袁潔によると、苗族の財産相続について、苗族女性は結婚に際し実家の財産を相続する権利を持たず、結婚後も夫方の財産を相続することができない[袁 2012]。結婚前も結婚後も苗族女性が相続できる財産は結婚の時、生家が用意した衣装と銀飾りだけである。このように、苗族女性は衣装と銀飾りの所有権のみを持ち、それが彼女らの「財産」となっている。

これまでの苗族研究者の多くは苗族の衣装を形状と装飾に分類し、主に形状によって苗族の衣装を分類してきた。たとえば西南の少数民族を人類学的、民俗学的に研究している研究者の楊正文は苗族の衣装を地域的な特徴から、湘西型、清水江型などに分けている[楊 1998]。また、民族研究を専門とする席克定は苗族の服飾は上衣部分、下衣部分（スカートなど）、衣装の付属部分（頭巾、靴）及び衣装の装飾部分（刺繡、蠟染など）からなっているとした[席 2005]。換言すれば、刺繡は衣装の一部であり、苗族女性自身も刺繡の所有権を持っているといえる。そのため衣装に付属している刺繡も苗族女性の財産であると言えるであろう。本章ではこのように婚姻に際して母娘間で相続される刺繡が施された衣服を「財産」とし、後述する世代間継承ではなく交換において価値が見出される衣装を「財」として論を展開する。

5.2.2 財としての苗族刺繡と財の交換に関する研究の現状

これまで苗族の言語、符号、古歌を研究してきた貴州民族大学の李一如によると苗族の服飾に関する研究は次のようである。李は現在までの苗族衣装に関する研究の領域について、「初期は苗族服飾の様式と種類に関する考察に重点を置いている。その後は研究を服飾の製作、服飾と歴史文化の関係に広め、解釈学理論と現象学、符号学などを利用した。そのため、研究範囲は更に広がり、服飾と文化学、歴史学、民俗学、芸術学、図像学、美学などと結合され、分野を跨る研究となっている（筆者訳）」と

¹³⁷ 娘が結婚する時、田圃を分け与える。この田圃を「私房田」と呼ぶ。

指摘している[李 2017:28-40]。しかし経済学的な視点、とりわけ経済人類学的な視点からは、苗族刺繍はほとんど議論されてこなかった。

そのためここでは教科書的な観点から議論を始めたい。経済人類学において財は、取引交換と贈与交換の2つの扱いがある。文化人類学者の中川敏は、初学者向けの教科書の中で交換を財をめぐるゲームとした上で、「取引ゲーム」と「贈与ゲーム」という2種類の「ゲーム」に分けた。①取引ゲームの目的は得をすることであるのに対して、②贈与ゲームの目的は人間関係を構築することであると説明している。そして中川は「贈りものが『内なる』秩序に、取り引きが『外なる』秩序——あるいは無秩序なのかもしれませんが——に関連させられている」と述べる[中川 1992:50]。つまり議論を先取りすると、苗族女性が市場経済化、観光化の中で刺繍を観光客に販売することで経済的利益を求めるのは、①の取引ゲームに当たり、次に刺繍のついた衣装を親戚や友人に無償で貸し、それに対して親戚や友人が金銭ではなく食事や互助をすることで返礼するという、緩い互酬性がみられ、両者の関係を維持することを目的とするのは、②の贈りものゲームであると考えられる。

経済人類学者である栗本慎一郎も1つの社会における市場は、内の市場と外の市場の結合であると指摘している[栗本 1995:85]。以上はあくまでも「教科書的な説明」であるため、この議論がそのまま苗族社会にあてはまるとは限らない。しかし、これまで経済人類学的な分析がなされてこなかった苗族女性の財をめぐる問題において、このような視点から考察を加えることは有益であろう。

確かに、苗族の民族観光開発に力を入れている張建春[2005:72-74]、王孔敬[2008:38-41]、王振豪[2013:217-227]などは、観光化が進む中で、刺繍が苗族を代表するような特色として表象され、文化的価値が高まることで経済的価値も上昇していることを指摘している。実際観光化の中で、苗族女性は刺繍の販売をとおして経済的利益を追求し、積極的に外部の人と取引交換をしている。すなわち、刺繍を対外的な領域において交換していることは確かである。しかし、対内的な交換を含んだ経済人類学的な研究は未だ十分に為されているとはいえない。

民族学的調査に関して言えば、1950年代に、費孝通[1951]、呉澤霖[1991]などが貴州の苗族村落の調査をはじめたことから、苗族に目を向ける研究者が増加した。刺繍に関して言えば、研究者たちは刺繍の交換にはあまり関心を示してこなかった。2000年以降、特に観光化が進む中で、刺繍の経済的価値が「発見」され、民族的特色のある商品として外部の者に販売されることが多くなった。たとえば、先に紹介した袁潔は、調査地である郎徳上寨では観光業の発展に伴って、苗族刺繍が重要な「文化商品」として市場に進出し、外部からの注目を集め、商品としてよく売れるようになったと指摘している[袁 2012:128]。

研究者たちは刺繍品の交換に注目し始めているが、彼らの関心はほとんどが対外的な交換である。たとえば袁潔[2011:46-50]、羅曉明・馬静[2012:97-105]、席克定[2013:87-95]は、対内的交換に触れてはいるが、それらは恋愛、婚姻あるいは祭りなどにおける男性と女性との間の、あるいは2つの婚姻集団の間の刺繍の交換といった限定的な議論に留まっている。具体的には、袁潔は「苗族女性は『姉妹飯¹³⁸』を男性に贈り、その中に松葉が入っている。後日男性は刺繍の針と糸を女性に返礼する」と言い、また「婚姻儀礼において、……女性は嫁入り道具である衣装を男性に渡し、男性は傘を女性に渡す（筆者訳）」と記述している[袁潔 2011:47]。すなわち、袁潔は苗族女性は嫁入り道具である刺繍のついた衣装を結婚式という特別な日に男性と交換し、これから夫婦関係を築くということのみに触れられてきたに過ぎない。

以上述べてきたように、西江の苗族社会における刺繍品の交換に関しては、対外的交換に注目が向けられ、対内的交換では2つの婚姻集団の間の交換のみに部分的に言及されるに留まっているのが研究の現状である。

本章では苗族社会における対内的交換の対象、交換できる刺繍の範囲について検討する。具体的には苗族女性に対内的交換において交換する相手との関係に基づいて、いかなる交換をしているのかについて明らかにする。以下では、中国貴州省黔东南州雷山県西江鎮羊排寨で刺繍品販売店を営んでいる苗族女性2人の聞き取り調査を中心に、西江苗族社会において刺繍品は取引交換と贈与交換の両方の対象物として存在していることを明示する。また現地の女性が刺繍品の贈与交換においていかなる社会関係、人間関係を作り上げているのかについても明らかにする。

5.3 西江の苗族社会における刺繍品の交換

先に述べたように、経済人類学では一般に物の交換には「取引交換」と「贈与交換」の2種類があるとされている。これらの交換はそれぞれ次のような目的、特徴を持っている。中川敏によれば[中川 1992:28]、取引交換は関係性を持たない人と交換することで利益を求めることで、贈与交換は関係性を持っている人と損得を問わず交換することで関係性を維持することを目的とする。

もちろん、以上はあくまで教科書的な説明であるため、両者を明確に境界化することはできないであろう。だが、本節では経済人類学が創り上げた2つの交換の特徴を手がかりとし、西江の苗族社会における刺繍品の取引交換と贈与交換の傾向を検討していく。細かな議論に入る前に、まず衣装と刺繍との関係を確認しておきたい。

¹³⁸ 姉妹飯は旧暦3月15日の姉妹節で、苗族女性がもち米でご飯を作り客をもてなす食べ物である。

5.3.1 民族衣装の着用

西江苗族の民族衣装の普段着は苗語で「ウーゲン」(写真 5-1、写真 5-2) と呼び、直訳すれば「繡花衣」という。西江の苗族女性は普段はこの服を着ている。家事や農作業をする時もこの服である。ウーゲンの特徴は襟、肩、首まわりに刺繍があり、袖口にも 5cm ぐらいの幅の刺繍がある。また胸の部分には大きな花の繡片が付けられている。ウーゲンは普段着であるが、毛 JH (1974 年生、女性、西江南貴村出身で、現在東引村に居住) の話によれば、彼女の家は富裕でなかったため、結婚式の時もウーゲンを着たという。



写真 5-1 ウーベイを着ている毛 JH (筆者撮影 2018 年 3 月)



写真 5-2 広場で刺繍している西江苗族の女性 (筆者撮影 2018 年 3 月)

現在西江苗族の女性は誰でもウーゲンを持っているが、それは自分で作ったものとは限らない。筆者が2017年に西江の定期市に行った時、ウーゲンの既製服を販売している店が2軒あった。1軒は店頭販売で、もう1軒は露天販売であった。上衣は150元（約2,500円）から300元（約5,000円）で販売していた。自分で刺繍をし、仕立てている女性もいるが、現在は時間がないため既製品を買っている女性も少なくない。たとえば2016年9月の現地調査では、李j（40代、女性）は貼花繡の技法を用いてウーゲンの刺繍を自分でしていたが、一方で張Q（1994年生、女性）は刺繍ができないため、販売店でそれを買っていた。また刺繍品販売店を営んでいる宋Hの三男の嫁（30代）は三顆樹¹³⁹の出身で、刺繍ができないため、日常着として機械製のウーゲンを買っている。

次は晴れ着であるウーベイについてである。西江の晴れ着は苗語で「ウーベイ」（写真5-3、写真5-4）と呼び、日本語に直訳すれば「雄衣」となり、語義をそのまま受け取れば男性の服である。これに関し、宋Hとその夫である李YW（1939年生、男性）は、「ウーベイは昔は男性の着る服であったが、今は女性の服になっている」と語る。この衣装は結婚式や葬式、盛大な祭り（苗年¹⁴⁰、鼓蔵節¹⁴¹など）の時だけ着用する。

2016年11月の西江の苗年の時、宋Hは2着のウーベイを出し、息子の婚約者と筆者に着せられた。11月19日の午後にはウーベイを着た苗族の女性が広場に集まり、蘆笙舞¹⁴²を踊った。その女性たちはほぼ全員が10代ー20代であった。宋Hによると、「祭りの時、既婚の女性はあまりウーベイを着ない」という。現在、機械で作られたウーベイが市場に出回っており、数千元（日本円では約数万円）という安価な値段で売られている。刺繍ができない人やウーベイを作る時間がない人が主に購入するという。しかし手工製作にこだわる人は値段が高くても（数万元、日本円では約数十万円）、手工製作のウーベイを買う傾向が強い。また時間をかけても、自分で作る人もいたり、ウーベイを必要な時だけ借りて着る人もいる。

¹³⁹ 三顆樹は地名。貴州省黔东南州に位置する。西江から25キロ。

¹⁴⁰ 苗年は苗族の正月。毎年秋の収穫が終わった11月中旬に行われる。日程は鼓蔵頭により決められる。

¹⁴¹ 鼓蔵節は苗族が13年に1度行う胡蝶ママ（注57参照）を祭る祭祀活動。

¹⁴² 蘆笙舞は男子が蘆笙（楽器）を吹きながら脚を柔軟に動かして踊る伝統的民間舞踊の1つ。苗族の青年男女が愛を語る場にもなる。



写真 5-3 結婚式でウーベイを着た花嫁（筆者撮影 2016年9月）



写真 5-4 西江阿幼博物館に展示してあるウーベイ（筆者撮影 2017年9月）

以上述べたように、西江苗族の女性は日常的に着る衣装（ウーゲン）と特別な日に着る衣装（ウーベイ）を持っている。ウーゲンにしても、ウーベイにしても、いずれも刺繍が施されている。刺繍は衣装を装飾し、衣装の一部となっており、衣装に付加価値を与えている。

5.3.2 刺繍品の取引交換（他人の刺繍品を収集し販売する2人の苗族女性）

本節では西江羊排寨で刺繍品販売店を営んでいる苗族女性である宋H(1963年生、女性)と李WF(1972年生、女性)の2人の事例を通して、刺繍品の取引交換について

て検討する。

この2人の女性が販売店に出している刺繍製品には次の4種類がある。それは、①機械製の刺繍品、②自分または母、姉妹などが作った古い刺繍品、③予約を受けてから作った刺繍品、④現地または周辺の苗族村落で買い集めた刺繍品である。②③④はいずれも手工製作品である。

李WFと宋Hを事例として取り上げたのは次の理由からである。まず、2人の年齢は40代と50代であり、2人とも苗族出身であり、刺繍製作の技能を有する。外部社会との接触に必要な漢語が話せる。一般的に苗族の60代、70代の女性は刺繍はできるが漢語を使用することができない。逆に20代、30代の女性は漢語はできるが、刺繍については詳しくない者が多い。そのため、漢語も刺繍もできる40代の李WFと50代の宋Hからは刺繍品をめぐる取引交換に関して多くの情報を得ることができるからである。2人が刺繍品販売店で販売している刺繍品の種類はほぼ同じであり、その中には他人から買い集めた刺繍製品が店の大部分を占めている。しかし2つの販売店は規模が異なり、それぞれの、経営方針も異なっている。これらの理由から、この2人の事例を検討することで、西江社会における苗族刺繍品の取引交換の一端を提示することができると思われる。

5.3.2.1 小規模経営店

宋H（1963年生、女性）は1980年代、農作業の余暇を利用して刺繍品を作り定期市で販売していた。その時は1枚の繡片を数十元（約1,000円）で販売していた。宋Hの夫李YWは小学校の教師であり、彼の話によれば、「80年代の自分の月給は数十元（約1,000円）しかなかった」という。宋Hによれば、「余裕があれば1週間ぐらいで1枚の繡片を仕上げ、布紐などと一緒に定期市で露店販売していた」という。「刺繍製作する時間がない時は、販売にいかなかった。数枚の繡片を作り上げたら、1ヶ月から2ヶ月に1回定期市に行った」。すなわち刺繍製作できる時間によって、作り上げられる刺繍品の数が限られているため、刺繍品の不定期販売をしていたという。その頃宋Hは刺繍品販売をしていた定期市に関しては、場所も時間も決めていなかったと話す。刺繍製作は細かい手作業で、描画から刺繍の完成までは時間がかかり、手工製作の刺繍品を量産することは難しい。宋Hの刺繍品は定期市で人気があったが、量産できないため、経済的な利益はそれほど多くなかったという。

1990年代に入り宋Hは再婚することとなった。夫方の家は田畑が多く、農作業が忙しくなったため、宋Hはあまり刺繍にあてる時間が作れなくなった。2000年以降は田圃と畑などを子供に分け、彼女はある程度重い労働から開放されたことでまた好きな刺繍ができる時間を持てるようになった。宋Hは自分で刺繍をすると同時に、西江村

や西江周辺の苗族村落から刺繍製品を一定の値段で買い集めるようになった。宋Hは「私のお金は全部この刺繍品につき込んでいる。刺繍が好きだから、お金があれば、すぐ綺麗な刺繍品を買う」と語る。彼女が刺繍を買い集め始めた最初の動機は刺繍に対する情熱であったという。

2000年以降西江の観光開発が始まり、外部社会との接触が増えた。宋Hは外部の人々が手工製作である苗族の刺繍に興味があることを知り、本格的に刺繍品の販売を始めようとした。しかし、1980年代に刺繍品販売していた彼女は、刺繍品は経済的利益に転換できるが、それほど量産できないことをよく知っていた。しかし、彼女が買い集めていた西江や周辺村落の苗族女性の手工製作の刺繍品は刺繍品販売店の経営を可能にし、2008年に宋Hは食堂経営と同時に刺繍品販売店を始めた。宋Hの刺繍品販売店には自分で製作したもの、母の製作したもの、買い集めた古いもの、少量ではあるが機械製作の刺繍品などが並んでいる。

2015年、筆者が現地調査で訪れた際、宋Hの刺繍品販売店は独立した店舗ではなく、自宅の左側の部屋に刺繍製品が重ねて置いてあった。展示する空間はほとんどなく、そこは観光客が通る道からは見えなかった。そのため、食事をするために店に入らなければ、刺繍品販売コーナーがあることは分からなかった。そこで、宋Hは2017年に観光客の通る道に面して約8㎡の店を建てた。しかし店は小さく、とてもではないが全ての刺繍品を展示することは難しい。そのため数百枚の繡片、衣装を小さな空間に置き、数枚の刺繍品と蠟染を壁に掛けて展示した。毎朝刺繍品を出して展示し、夜にまたそれらをたたんで店の奥に収める作業をしなければならないため、刺繍品販売店の開店の前と閉店後は、準備と片付けに30分位かかっていた。

宋Hは刺繍品販売店の経営には、自分なりの考えを持っており、「私は李WFのように広い店を持っていないが、私の店で売っている刺繍品はほとんど手工製作である。一针一针手で作ったものだから、高く売っている。分かってくれる人は、高くても買う」と語る。そのため、彼女が手工製作の刺繍品と機械製作の刺繍品につける価格には大きな差がある。機械製作の刺繍品で装飾された晴れ着の上衣は3千元(約5万円)であるのに対し、手工製作は1万元(約16万円)から2万元(約32万円)の値をつけている。すなわち、宋Hは刺繍品の手工製作に高い価値があると考えている。宋Hが手工製作の刺繍品に高い価値をつけている理由については後で詳しく述べるが、彼女の刺繍品販売店は小規模であり、観光客の数や、天候などいろいろなことに左右され、収入が安定していないことは確かである。宋Hは一時期、インターネットで刺繍品の販売をしようとしたが、漢語は話せるものの漢字を書くのが苦手であり、インターネットを活用することは難しかったので、店頭での直接販売に専念している。

5.3.2.2 刺繍品を買わない観光客との取引交換

刺繍品販売店に来る観光客には刺繍品の値段が高くて買えない者、購買力はあるが買う程まで刺繍品が欲しくない者、刺繍に興味があり購買力もあって買う者などの幾つのパターンがある。その中には刺繍のついた衣装を着て、写真を撮って記念にしたいという観光客も少なくない。宋Hはそのような観光客に向け、もう1つの商売（取引交換）をしている。それは、刺繍のついた民族衣装を30元（約500円）で観光客に貸すことである。観光客は衣装を着て、30分から1時間ぐらい楽しみ、その様子を写真に収める。

西江の博物館前には広場があり、そこでも民族衣装を観光客に貸している店が数軒ある。その値段は10元であるのに対し、宋Hの店の価格は広場の店の3倍と非常に高い。この理由について宋Hは「あの店の服は私のとは比べ物にならない。あれは機械で作った服で、しかも西江の民族衣装ではない」と言う。このように衣装のレンタルであっても、彼女は手工製品と機械製品を明確に区別しそれらを差異化している。

観光客は民族衣装であるウーゲンとウーベイを着る体験をし、苗族女性はお金をもらう。すなわち実物の刺繍品や民族衣装と貨幣というモノ消費ではなく、コト消費を通して取引交換を行っているといえる。

5.3.2.3 大規模経営店

次に大規模経営をしている李WFの事例を見てみよう。李WFは1990年代（当時20代）に出稼ぎで貴州省貴陽市¹⁴³に行き、そこで木工（彫刻）職人であった夫の李XH（当時20代、生年不詳）と出会った。李WFは刺繍が好きで、2人とも芸術的なものに興味があることが2人を結婚に導いたという。貴陽市には長く滞在せず、1990年代後半に夫と西江に戻ってきた。彼女の話によれば、西江の家屋は全て木造であるため、夫が木工として稼いだお金で生活することはできたが、結婚後は貧しい生活を送っていたという。

李WFが刺繍品を買い集め始めたのは1990年代後半の頃からであり、もちろん刺繍作品が好きだというのが刺繍品を収集する大きな理由であった。しかし、もう1つ理由があることが彼女の次の語りから窺える。「あの頃、私が人の家を訪ねた時、古い刺繍品を燃料として燃やしていた女性が何人もいた。それは私には衝撃的であった。燃やすなんてもったいないと思った。だから、私は安い値段でそれを買った」。

この話からすると、1990年代、すべての苗族女性が刺繍に価値を見出していたとは言えない。特に、刺繍品を燃料として燃やしていたということからすると、苗族女性が刺繍品を製作するのは販売を目的としていなかったことは明らかである。つまり

¹⁴³ 貴陽市は地名。貴州の省都。

1990年頃までは、刺繍には歴史的価値、社会的価値があるかどうかは別として、西江苗族の女性自身は、そこに経済的価値があるとは考えていなかったといえる。しかし現在李WFは「西江阿幼民族博物館」を経営している。そこに彼女が買い集めた刺繍品、母と姉妹と自分の手工製作の刺繍品、機械製作の刺繍品など千点以上を展示しており、また刺繍品販売店も経営している。

李WFの刺繍品販売店は宋Hの刺繍品販売店とは異なり、規模が大きく、雷山県政府から経済的な支援を得ている。彼女の店舗は刺繍品や蠟染、布などの製作道具を展示し、博物館の形を取っている。また、刺繍、蠟染の体験館も設けている。その博物館は800㎡以上の広さがあり、単なる刺繍品の販売店ではなく、博物館、体験館、販売店など総合的な施設となっている。そこには、刺繍製作をする者、蠟染をする者、販売をする者、布を縫う者、インターネット管理をする者、経営販売する者、デザイナーなどの職員がいる。まさに小さな企業と言ってよいであろう。それらの職員は現地の女性や隣村の女性、省外から来た若い女性（インターネット管理）、李WFの家族などである。

李WFは「私は手工芸が好きで、もっと多くの人に我々苗族の刺繍を知ってもらいたい。外部の人に刺繍や蠟染という手工芸の魅力を伝えたい。観光客は機械で作ったものより、手工のほうを求めている」と語る。李WFはウィーチャット¹⁴⁴、新浪微博¹⁴⁵などのネット広報を通し、博覧会への参加、テレビを通しての宣伝などを行っている。李WFはまた、旅行会社からも観光団体を紹介してもらっている。彼女の博物館に来る客の数は宋Hの売店よりはるかに多い。李WFは博物館を経営しているので、商売人的な雰囲気があるが、刺繍製品は宋Hと同じように手工製作に価値があることを強調し、重視している。

5.3.3 刺繍品の贈与交換

5.3.3.1 販売店に出さない刺繍品（秘蔵している刺繍品）

宋Hと李WFは刺繍品販売店を経営し、店頭あるいは博物館の中で数百数千枚の刺繍を管理している。しかし、2人とも表には出さず秘蔵している刺繍品があり、それを売ることは考えたこともないという。それは彼女たち自身（あるいは親世代）が子供のために作ったウーベイである。宋Hの息子の李KP（1987年生）はまだ結婚していないが、彼女は息子の将来の伴侶のために1着の晴れ着を作った。また宋Hは母が作ってくれた晴れ着を1着持っているが、それも息子の嫁に贈るつもりであるという。その2着の衣装は決して店頭に出すことはない。宋Hは自分の作った晴れ着と母から

¹⁴⁴ ウィーチャットは中国大手IT企業テンセント（中国名：騰訊）が作った無料インスタントメッセージングアプリである。

¹⁴⁵ 新浪微博は中国・新浪公司の運営するミニブログサイトである。

もらった晴れ着をととても大事に扱っている。たとえば折りたたむ時に刺繍の部分に傷や折れ目などをつけないように注意したり、ほかの服との摩擦によって刺繍が傷つくのを避けるため、晴れ着は中表にたたみ、刺繍のある面を内側にしている。また刺繍のある部分を繡片の形により整えている。晴れ着の刺繍のあるところは袖口、襟、肩などであるため、その部分はたたみじわができないように細心の注意を払ってたたむ。その2着の衣装は祭り、結婚、葬式などの重要な日にだけ出す。その理由について、晴れ着は普段鼠などの害を防ぐため、とても安全な場所に置いているので、すぐには取り出せないからであると語る。

李 WF も息子の将来の結婚相手と娘のために1着ずつ晴れ着（ウーベイ・コーテェイ）を作った。李 WF は1着の晴れ着を作るには1年以上かかったと言い、その衣装は絶対売らないと話す。博物館に展示している晴れ着は彼女が買い集めた手工製作のものであり、彼女自身が作ったものではない。

このように、宋 H も李 WF も自分で作ったあるいは作ってくれたものをととても大切にしているが、宋 H はそれとは別に大切にしている刺繍品があり、それは絶対に売らないという。それは宋 H が買い集めた刺繍品の中の特殊なものである。この衣装は見た目が新しく、刺繍の紋様が綺麗であるという。使われている刺繍技法は西江でよく見られる技法であるが、糸が整って綺麗に並んでおり、専門家である宋 H の目に大変美しくみえるため、手元に置いておきたいと語った。

5.3.3.2 刺繍品の対内的交換と対外的交換

5.3.3.2.1 現地の人に対するウーゲンとウーベイの貸借

中川敏は人が贈与をする理由について、「社会構造の語彙の最小ユニットである2者関係は、たいていの文化においてその関係に適当な行為パターンを規制して」おり、「ある関係に適当な行動パターンが存在する、と文化は主張する」（中川 1992:91）と述べている。中川は1つの社会における交換は、交換を行う両者の関係の生成、あるいは再確認をするものであると指摘する。筆者は「金銭を媒介にした衣装の貸与」という取引交換との対比において「無償・金銭を媒介としない衣装の貸与」を贈与交換に分類し、以下では刺繍で装飾した衣装の貸し借りの事例を通して、西江の苗族社会における刺繍品の贈与交換から、関係の生成および再確認ということに関して検討を加えていく。

西江苗族の女性はほぼ全員がウーゲンを所持している。当然宋 H も手工製作と機械製作のウーゲンの両方を持っている。日常的に家事や農作業などをする時は機械製作のウーゲンか古い手工製作のウーゲンを着ることが多いが、観光客や親戚の人が来る時や、外出、親戚の家を訪ねる時には新しい手工製作のウーゲンを着る。宋 H はウー

ゲンを人から借りることはないが、人に貸すことはある。この時、彼女と貸す対象との関係により、ウーゲンは異なる扱い方をされる。

西江の苗族女性の多くは自分のウーゲンを持っているため、互いにウーゲンを貸し借りすることは滅多にない。しかし観光化の中で、商売あるいは仕事で西江に来る外部の人や漢族の人に対してウーゲンを貸すことはよく見られる光景である。湖南省鳳凰から来た龍 XC (50 代、女性) の事例を見てみよう。龍 XC は宋 H の家の近くに露天の店を出している。龍 XC は糸で腕輪を編み、女性向けのネックレスやピアスなどの装飾小物を販売している。龍 XC は西江に既に 5 年近く居住しているため、周囲の人からは現地の住民と認められており、龍 XC 自身もある程度現地の社会活動に参加している。

たとえば、2018 年 3 月に龍 XC は羊排寨の李家の先祖の墓参りに参加した。しかし彼女は普段苗族の衣装を着ないので、ウーゲンを持っていない。そのため彼女は現地の人と一緒に行動を共にしたり、状況に応じて苗族の民族衣装を着る必要に迫られることがあるという。そのような時、宋 H は自分の好きなウーゲンとウーベイを出して龍 XC に選んでもらい、彼女に貸し出す。特にウーベイは 1 人で着ることができないため、宋 H が手伝わなければならない。龍 XC はその衣装を着て外出してもよいし、いつ返してもよい。宋 H は龍 XC に見返りを期待してはおらず、お金を払う必要もないという。だが龍 XC は宋 H が衣装を貸してくれたことに対して、少し時間を空けた後、食材を買いこんで宋 H の家で料理をし、一緒に食事をするなどの「返礼」を行っている。また宋 H が忙しい時には刺繍品販売店の留守番をしたり、食堂が混む時には、龍 XC が野菜を洗ったり皿洗いをするなどの手伝いを率先して行ったりする。すなわち、宋 H がウーゲンやウーベイを「無償」で貸してくれたことに対して、龍 XC は食べ物や労働を通して「返礼」をしているともいえるのである。このように、ここでは 2 者間の緩やかな「互酬性」が垣間みられる。

宋 H の姉である宋 YH1 は娘の花嫁衣装について、「私は作らない。娘が大人になったし、私も作る時間がない」と語る。宋 YH1 の話によれば、現在の女性は結婚式の時、普段着の人もいるためウーベイがなくても特に問題にはならず、ウーベイ自体も結婚式の日の 1 日しか着ないので、もし着たければどうにでも都合がつくという。宋 YH1 自身もウーベイを持っていない。かつて自身が結婚する時に母がウーベイを作ってくれたが、今それは妹の宋 b のところに保管されている。宋 YH1 の妹 (宋 H) が 1 着のウーベイを作ったので、宋 YH1 の娘が結婚する時に宋 H のウーベイを借りると語る。一般的にこのウーベイという衣装は、自分の家族以外の人には貸したりはせず、みな大事に保管している。宋 H と宋 YH1 姉妹の事例では、妹の宋 H の家にあるウーゲンとウーベイはすべて姉と姉の娘に貸し出されたという事実が存在する。つまり、宋 H と

宋 YH1 は親族という関係なので、大切なウーベイを貸すことが可能であり、あるいは借りることが可能であるということである。

5.3.3.2.2 外部の人に対するウーゲンとウーベイの交換

先に述べたように宋 H は他人である観光客に対して、お金をもらって苗族の衣装を貸している。客は 30 円で 30 分から 1 時間、刺繍のついた衣装を借りて着ることができ、衣装は店頭に出ているものに限られており、宋 H は自分が着るウーゲンは決して店頭に出すことはない。見知らぬ観光客に対して、その場で衣装の着用と貨幣の交換を直接的に行い、厳格に取引交換のルールを守っている。

2016 年の苗年の時、宋 H の嫁の友人である女性 B (50 代) が貴陽から西江に遊びに来たので、宋 H は B を自分の家に招待した。宋 H は息子の婚約者と筆者に着せるウーベイを 2 着用意した。B は翌日の蘆笙舞で、ウーベイを着て踊りたいと宋 H に言った。宋 H は直接その申し出を断ることはなかったが、B にウーベイを貸さなかった。B は普通の観光客であるが、宋 H の嫁を介して宋 H と知り合ったので、両者は一定の関係性を持っているといえる。しかし、宋 H は B からお金をもらうことはできないし、今後 2 人間の関係を継続する可能性も低いので、B に衣装を貸さなかった。その理由について、宋 H にとって B はあくまで「初対面の人」であることには変わりはなく、深い関係性を持っておらず、今後も親密に接触することはないからであろうと筆者は考えている。

5.4 苗族女性にとっての刺繍品の交換

5.4.1 刺繍品と貨幣の交換

本章の前半部は西江の苗族社会において、刺繍品の取引交換と贈与交換が行われていることについて検討した。刺繍品の取引交換とは刺繍品と貨幣の交換である。本章で事例として取り上げた宋 H と李 WF はお金があればできるだけ安い値段で刺繍品を買い集め、刺繍品販売店で高い値段で販売している様子を示した。たとえば、宋 H は数十元で買った刺繍品を数百円で販売し、数百元で買った刺繍品を数千元で販売している。その価格差が宋 H の収入となっている。図 5-1 にこの状況を示した。



図 5-1 苗族女性の刺繍品と貨幣の転換 (筆者作成)

これを一般的な経済人類学の図式に再配置してみよう。宋 H と李 WF は買い集めた数多くの刺繍品を貨幣と交換することで経済的利益を得ていることは明らかである。刺繍品はすぐにはお金にならないが、経済的価値を持ち、刺繍品と貨幣の交換が可能となっている。言い換えれば、宋 H や李 WF は貨幣で刺繍品を買い集めて貯蔵し、また買い集めた刺繍品を売ることによって貨幣を得るという行為によって利益を得ている。つまり彼女らは刺繍品の「貯金」「投資」を通して、貨幣を刺繍品と交換し、また刺繍品を貨幣と交換することで、利益を生み出す経済活動を行っているといえる。

5.4.2 親疎関係による交換

次に親疎関係に基づく贈与交換についても整理しておきたい。前章で述べたように宋 H と李 WF は刺繍品及びウーゲンやウーベイの貸し出しに関して、異なる対象に対して、異なる交換の様子を見せている。宋 H は嫁候補である金 Q (30 代、女性) に対してはウーベイを貸すだけでなく、金 Q が息子の李 KP (1987 年生) と結婚すれば、宋 H と宋 H の母が手作りしたウーベイも譲渡すると話す。宋 H は姉、姪、現地に住む女性に刺繍のついた衣装を貸すが、親族の姉と姪に貸し出す刺繍服の範囲は現地に長く居住している女性の龍 XC より広い。ここで、宋 H は姉、姪に対して直接的な返礼を求めておらず、また龍 XC に対しても取引交換を行うことを拒絶している。これはつまり取引交換を行わないことで良い近隣関係を築き、日常的に店を見てもらったりという関係性を求めていることを意味しているといえよう。

一方、宋 H の嫁の知り合いの B は嫁の紹介で知り合っているが、宋 H にとって B はあくまでもこれから接することのない観光客であり、衣装を貸すことを拒否した。筆者が確認することができた事例から、宋 H が様々な関係性により、刺繍品及びウーゲン、ウーベイの貸し出しを行っている範囲をまとめると、図 5-2 のようになる。

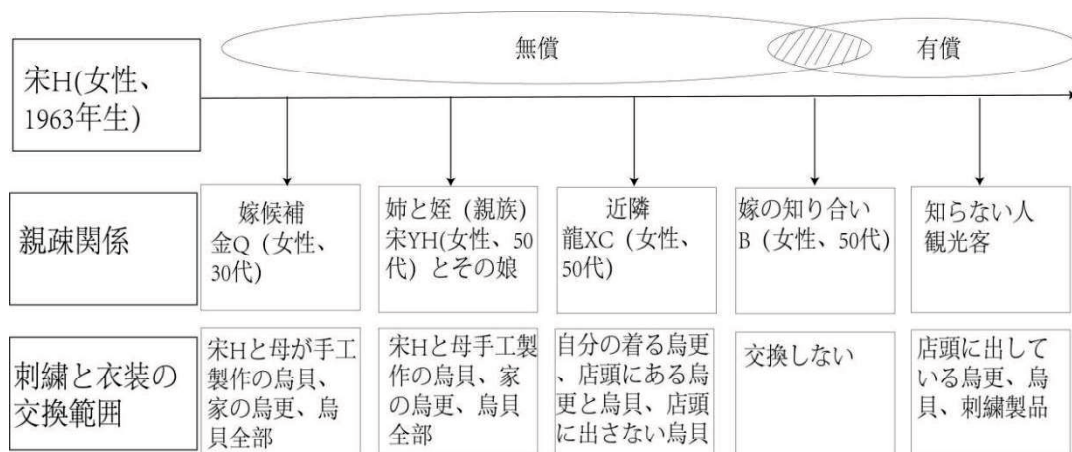


図 5-2 親疎関係による刺繍の衣装の貸借範囲 (筆者作成)

図 5-2 で示したように、宋 H は親疎関係により、異なる対象に対し、刺繍で装飾したそれぞれの衣装を交換している。また交換できる刺繍の衣装の範囲は親疎関係に基づいて異なっている。彼女に近い関係があればあるほど交換する衣装の範囲が広く、交換の等価性が低くなる。反対に彼女と遠い関係であればあるほど、刺繍の衣装の範囲は狭く、等価交換性は高くなることが窺える。

また、宋 H には娘はいないが、嫁候補の金 Q (30 代、女性) に対する衣装の交換 (貸与) について、宋 H は「この衣装は息子が結婚したら嫁にあげる」と語った。衣装の所有権は宋 H、宋 H の息子、金 Q の誰にあるのかは調査中であるため別稿で検討するが、この衣装は女性の衣装であるため、使用权は嫁にあるということになる。すなわち、金 Q は現在嫁候補であるため、宋 H は金 Q に対して衣装の貸与しかしていないが、将来金 Q が宋 H の嫁になれば、宋 H は衣装の所有権を金 Q に贈与することが想定される。しかし、この衣装の所有権の贈与は姉・姪、近隣などとの間では行わない。すなわち、関係性によって (嫁・娘など) 無償の貸与行為の果てに所有権の移動 (贈与) がある場合と、完全に貸与のみで終わる関係性 (姉・姪、近隣など) があると考えられる。

5.6 まとめ

本章では中国貴州省黔東南州雷山県西江鎮羊排寨を調査地とし、市場経済の影響を受けた西江苗族の刺繍品と衣装の交換について、現地で刺繍品を収集し、販売をしている苗族女性の宋 H と李 WF の事例について検討した。2 人が経営している刺繍品販売店の規模及び経営方式は異なっているが、販売している刺繍品の種類や刺繍の価値に対する認識は基本的に共通している。たとえば販売している刺繍品は手工製作と機械製作の製品があるが、手工製作の方により重点を置いている。宋 H も李 WF も刺繍製

作ができるが、1枚の繡片を完成するにはかなりの時間が必要であり、忙しい生活の中で大量の刺繍品を自分で作ることは困難である。そのため、2人は他の女性の作った刺繍品を買い集め、観光客相手に販売している。宋Hが刺繍品販売店を経営する中で、現地の人に向けては刺繍品の贈与交換をしているが、外部の人である観光客に向けては刺繍のついた衣装の取引交換をしているという明確な違いも明らかとなった。また李WFも紙幅の関係上論じることはできなかったが、同じような状況を確認することができた。すなわち、彼女らは刺繍品の交換において、対内（贈与・無償貸与）と対外（取引）によって異なる態度をとっているのである。

対内的交換および対外的交換は明確な境界があるわけではなく、いずれも状況依存的である。しかし両者は大きな2極であり、性格を異にしていることは確かである。たとえば対内的交換において、知っているがこれから関係を持とうとはしない人に対しては、取引交換も贈与交換もしない。一方外来の人であっても、現地で商売し居住している人に対しては刺繍のついた衣装の贈与交換をするが、刺繍の衣装の交換できる範囲は限られているといった実例をみることができた。すなわち、対内の交換においては、親疎関係により、刺繍のついている衣装を交換する範囲は状況に応じて異なった対応がなされているのである。

以上、本章では観光化により急激な社会変化に直面している苗族社会の刺繍品販売を事例に、刺繍品をめぐる2つの交換の在り方、そして先行研究では描かれてこなかった現代の苗族社会における刺繍のが市場経済の衝撃の中において果たしている役割について明らかにした。

終章

1. 各章の要約

苗族の刺繍は刺繍技術を有する苗族女性によって作られ、苗族女性の衣装を装飾するものである。本論では急激な社会的変化の中で、中国西南地域の貴州省黔东南雷山家の苗族の刺繍をめぐる、刺繍そのものの特徴、伝承、ジェンダー、刺繍が施されている民族衣装と婚姻、交換など多様な視点から検討することで、刺繍・人間・社会がどのように繋がっているのかについて明らかにした。以下に本論の各章の内容をまとめる。

序章では本論の研究目的、先行研究と問題の所在、調査地の概要、フィールド調査の概要、研究の意義などについて述べた。本論では中国貴州省黔东南苗族侗族自治州雷山県西江を調査地として、刺繍及び刺繍と関わる人を調査対象として、1950年代以降という変化に富んだ時代の中で、モノとしての刺繍が現地社会でどのような社会関係を構築・再構築して行くのかを究明することが目的であることを明記した。

第1章では、刺繍の素材である糸に注目し、機械製作の刺繍品と手工製作の刺繍品を比較する中で、糸の切り目と結び目、刺繍糸の揃っている程度、刺繍糸の色彩構成などが異なっていることを示した。そして、手工製作の刺繍品は対称的に見える紋様の中に一部だけ非対称な所があり、一部だけ刺繍品全体の色使いのルールを異にする部分があるというような特徴があることを明らかにした。このような特徴は刺繍製作過程における刺繍糸の手持ちの残量、また針に通している糸の残りの長さによって生じ、人間が糸を操り刺繍を作るが、逆に糸も人間の意識や行動に影響を与え、刺繍紋様の色彩構成を変更させるという状況を明らかにした。刺繍製作は、刺繍糸と刺繍製作者の間の共同作業であり（たとえば糸の状況により紋様の色が変わり、市販の糸の種類と展示方法が刺繍の色彩構成に影響を与える）、いずれもが主体となり客体となり得る相互作用の中で作品が作られることを示した。

第2章では、刺繍技法の伝承に着目し、現在苗族刺繍の技法は母娘伝承、同時代の女性による伝承、刺繍教室による伝承の3つの伝承方式があることを明らかにした。これまでの先行研究では母娘伝承が強く主張されたために、一緒に刺繍をする「小群体」で行われるような同時代女性による伝承・継承が見落とされてきた。女性のライフステージの変化に伴い、その女性が刺繍伝承および刺繍継承において果たしている役割が変わるため、刺繍技法の伝承・継承という意味において、母娘の共有する時間は限られているためであり、婚出後における同時代女性間でなされる交流の方が技法の習得という意味ではより重要であることを示した。従来重視されてきた母から娘へ

と伝承されることを肯定した上で、母娘伝承を同時代に生活している女性（母系に属する親族、姉妹、女性の友人、同じ地域に居住する女性など）による伝承の一部であることを再確認した。

第3章では、ジェンダーの観点から、刺繍をする苗族の女性はもちろんのこと、刺繍をしない男性が刺繍とどのような関係を持っているかを明らかにした。これまで苗族の刺繍についての多くの研究によって、刺繍が女性によって育まれてきた文化であることは定説であった。1990年代の出稼ぎブームや、道路の建設、観光化などにより、若い年齢層が村を出て、農業用の畑や水田が減少し、苗族の村の生業形態が変わり、生活様式も変化した。このような時代背景において、刺繍における主役は女性であることに変わりはないが、潜在化していた男性と刺繍との関係が顕在化ようになってきた。

男性と刺繍との関係について、刺繍の完成前（製作過程）と完成後（販売、使用）に分けて整理した。刺繍の完成までに、すなわち刺繍の製作過程において男性が刺繍の紋様を描き、男性が家事や農作業をして女性の刺繍時間を確保し、女性が刺繍をすることに男性が反対しないといった消極的な支持をしている。また完成後の刺繍と男性の関係については、刺繍をどのように使用するのかという面から、すなわち、製作者本人（女性）の使用、次世代への相続用、販売用という3つの面から論じた。次世代へ相続用の刺繍品に関する検討では調査データの不足は否めないが、宋Hや李WFなどの事例で本来母娘の間でしか行われてこなかった晴れ着であるウーベイ・コーテェイの譲渡において、息子を介しての「未来の嫁」への譲渡が可能であることが確認された。

特に刺繍品が商品化したことにより、販売や提供されるサービスに付加価値をつけるため、男性が時間、煩勞、努力を厭わず、シャドーワークをしている。しかし、これは公表されず、男性も収入を得ていない。この点から考えれば、男性が刺繍の経済において、ある程度「不可視」化されていることを示されたといえる。

第4章では、これまで衣装は民族識別や民族アイデンティティを表すと位置づけられてきたが、本章では刺繍をつけている民族衣装の位置づけを結婚式で衣装を展示する場から再考した。まずは、西江苗族女性の日常的着用するウーゲンと非日常的に着用するウーベイ・コーテェイを紹介し、衣装の製作者、着用の場、製作方式などについて述べた。次に、結婚式における衣装の果たす役割について、衣装が新婦にとって自身を装飾するだけでなく、新婦の社会関係資本を展示し、新婦が刺繍製作出来るか否かによって、嫁ぎ先の女性に認めてもらい、刺繍製作する「小群体」に入れるかどうかの重要な媒介物でもあることを示した。最後に、1950年代前の女性は結婚式の後に坐家という衣装製作の期間があったが、1960年代、1970年代の社会的動乱期と経済

的な環境により坐家をしなくなり、さらに1980年代以降は学校教育の影響で坐家が復活できなかったことを事例を通して明らかにした。

まとめて言えば、1980年代以前は刺繍をとおして苗族女性の文化資本と社会関係資本を確認していたが、1980年代以降、学校教育や出稼ぎの影響で刺繍技術の習得者が激減し、刺繍で文化資本を確認することができなくなる一方、技術所有者が技術の持たない娘のためにウーベイ・コーテエイとウーゲンを手工製作することになり、刺繍を通して苗族女性の社会関係資本を確認することが重要視されるようになった。

第5章では、観光化により急激な社会変化に直面している苗族社会の刺繍品販売を事例に、刺繍品をめぐる2つの交換の在り方、そして先行研究では触れられてこなかった現代の苗族社会における刺繍が市場経済の中において果たしている役割について明らかにした。刺繍品販売店を営んでいる苗族女性を事例に、現地の人に向けては刺繍品の贈与交換をしていることが、外部の人である観光客に向けては刺繍品の取引交換をしているという明確な違いが明らかとなった。すなわち、本章では苗族女性が刺繍品の交換において、対内（贈与・無償貸与）と対外（取引）によって異なる態度をとっており、さらに対内的な交換においては親疎関係によって交換する範囲が異なることを示した。

2. 時間を示すモノとしての刺繍

西江苗族社会において、刺繍技術の所有者にせよ、全く刺繍のできない人にせよ、衣装を製作するのに、特に衣装につける繡片を製作するには多大な労力と時間をかけなければならないことに反論する人はいない。いくら時代が変化しても、手工製作の刺繍には多大な時間がかかることに変わりはないのである。ウーゲン（日常着の上衣、苗語、IPA表記：wuː gən）は4枚の繡片、ウーベイ（晴れ着の上衣、苗語、IPA表記：wuː bei）には10枚ほどの繡片があり、コーテエイ（晴れ着の下衣、苗語、IPA表記：kəu teiˊ）には数十枚あるいは100枚以上の繡片が付けられる。李a（1970年生、女性、平寨村）の場合、店番をしながらコーテエイに付ける繡片1枚を製作するには1週間かかる。すなわち、コーテエイだけを製作するのに2年以上はかかることになる。西江現地の女性の語りに基づけば、1着のウーベイ・コーテエイを完成するには少なくとも2、3年以上の時間がかかるというのが一般的である。

刺繍をしている苗族の女性はよく「刺繍は1針1針縫い付けて行くので、ややこしいのよ。時間がかかる」と語る。西江が観光化される前には農業を中心としてきた。苗族の女性は家事を負担するだけでなく、男性と一緒に農作業も手伝う。女性たちは毎日家事や農作業をし終わってから、刺繍する時間を持った。そして、観光化が進み、交通改善などのため農耕用の土地が減少する一方、西江社会が農業中心の生活か

ら観光業を中心とするようになった。女性たちにとっては農作業の分量が減少しているが、その代わりに商売や食堂経営やアルバイトなどで、毎日刺繍できる時間もそれほど多くなったとはいえない（付録資料5を参照）。このような状況においても、苗族の女性は刺繍を手工製作する。

筆者の調査では、もちろん毛JHや宋YH1 などのような「時間かかるから」という理由で、刺繍技術を持っていても刺繍をしない女性は一定程度いることは示された。だが逆に、定期市で既製の繡片や刺繍品が販売されている状況においても、西江苗族社会では多大な時間と労力をかけてでもウーベイ・コーテェイとウーゲンを手工製作する女性が少なくはない。彼女らは、時間をかけても刺繍を手工製作で作る必要があり、時間をかけたからこそ刺繍というモノに価値があると考ええる。

筆者の調査から言えば、現地の刺繍技術を持つ女性から刺繍をみた場合、紋様と技法よりも、刺繍糸や刺繍製作にかかる時間の方を重視している。刺繍技術を持つ苗族女性は1枚の刺繍を手取る時、「これは1週間かかる」、「これは1ヶ月かかる」といったことがすぐに理解される。刺繍技術を持たない女性でも、普段周りに刺繍をする人を見慣れているため、どのくらい時間がかかるかを正確には判断できないが、「刺繍製作するに時間がかかる」ことは十分に理解している。また、筆者が刺繍製作を実際やっている時、刺繍技法を教えてくれた宋Hは「どんなに紋様が綺麗であっても、技法が複雑であっても、糸が綺麗に揃えなければ、美しくないよ。だから、ゆっくりやらないとよくできない。結構時間がかかるよ」と語った。すなわち、西江苗族の刺繍をする女性は刺繍の紋様と技法よりも、時間をかけて糸を綺麗に揃えていることこそが大切であると考えている。

西江苗族社会の女性は刺繍をみる時、紋様と技法ももちろん見るが、それより刺繍に宿っている時間の方をより重視している。2000年代以降刺繍が商品化する中で、機械製作の刺繍品と手工製作の刺繍品が販売され、手工製作の刺繍品の方が機械製作の刺繍品より価格的に数倍高い値がつくようになった。観光客が刺繍品販売店で手工製作の刺繍を安く売って欲しいと願い出るのに対して、苗族の女性は基本的にまけないようにしている。観光客に対する応対としては「時間がかかるから」と説明している。外部の人は現代社会の時給制のように、1時間働くことで給料を計算するように理解するかもしれないが、この刺繍製作にかかった時間は苗族社会の女性にとっては時給制月給制のような賃労働で図れる時間ではない。そこには同時代女性との関係、シャドーワークしている男性との関係、そしてもちろん母娘（母方オバ）との関係も含まれているためである。

これまでの研究では刺繍を芸術品として見る傾向が強かった。刺繍製作に時間がかかることに言及する研究者はいるが、刺繍がモノとして物理的に時間を示すものであ

るという特性があることに言及するものは少なく、どのような意味を持つのかについて深く考えてこなかった。苗族女性は刺繍をみれば、刺繍製作に時間がかかること、さらに刺繍製作にかかった大凡の時間が分かる。本研究ではモノとしての刺繍の物質性として時間を示せることに注目し、苗族の女性が刺繍を見る際に、技法と紋様より先に刺繍製作にかかる時間に注意すること、そしてその時間をとおして苗族女性の文化資本と社会関係資本を確認するということを示した。

3. 文化資本としての刺繍から社会関係資本としての刺繍へ

1960年代以前、苗族の女性は結婚する前に生家で刺繍の技術を習得した。刺繍技法は主に母から教えられ、家庭内で姉妹などと一緒に刺繍技法の習得と練習をした。そして、一緒に晴れ着につける繡片を作り、結婚前に苗族の女性は母や姉妹と共同作業をしながら、自分の着る晴れ着（ウーベイ・コーテェイ）を製作した。この時間と空間は家庭内の女性だけが所有し、男性（父・兄弟）は参加しなかった。この時代において、西江苗族社会において、学校教育を受けた知識人である極わずかな一部の女性を除き、ほとんどの女性が刺繍技術を習得した。また、1着の晴れ着を製作するには家族内部では母や姉妹の協力がなければ完成することが難しいことが筆者が調査した事例を通して明らかになった。すなわち、この時代において刺繍には女性の文化資本（刺繍技術・刺繍品）と社会関係資本（共同作業する人）がともに見られた。

1960年代から1980年代にかけて、文化大革命などの社会が動乱する中、経済的にも厳しい状況にありながら、苗族の女性は刺繍をする余裕がないが、極わずかの学校教育を受けた一部の女性を除いて、苗族の女性はほとんど刺繍技術を習得した。すなわち、その時代には学校教育より、刺繍の教育の方が重要であったためである。苗族社会内部において、学校教育より刺繍教育の方が重要視されていたのである。誰でも刺繍技術を持つが、刺繍をとおして女性を評価するというのは刺繍の良さによってであった。本論の第1章で示したように、刺繍がよいかどうかというのは糸の精緻さから見ており、綺麗で評価のよい刺繍を作るには時間がかかる。評価のよい刺繍を製作するにはより多くの時間がかかったことになる。家事や農作業をする中でも時間をかけて刺繍を手工製作すること、よりよい刺繍を作るためにより多くの時間をかけることで、1980年代以前苗族社会において刺繍製作した女性は評価された。

1980年代以降、母は娘に刺繍技術を教えるが、学校教育や出稼ぎなどで、刺繍技術の習得者が激減した。本来衣装を自分で製作していたが、若い世代が技術を持たないため、技術の持っている世代の女性は娘のために衣装を製作するようになった。娘は祭りなどのハレの日や結婚式でこの衣装を着用した。すなわち、この頃から、苗族女性が晴れ着を自分で製作するのではなく、刺繍技術という身体化された文化資本を持

つ女性が減少した。それと同時に、時間をかけて衣装を製作してくれる人がいる、あるいは貸してくれる人がいる（社会関係資本）ことが重要になってくる。

1990年代に入ると、機械製作の刺繍が出現し、刺繍が販売されるようになった。1990年代の後半までに、西江現地の女性が古くなった手工製作の刺繍を捨てたり薪替わりとしたりしていたが、その後研究者や外国人が刺繍への注目により、本来苗族社会内部の留まる刺繍が苗族社会の外部へ販売されるようになった。さらに、西江苗族社会が2000年代以降観光化が進む中、刺繍が民族文化を代表する商品として販売され、機械製作と手工製作の刺繍品が混在して市場に流通するようになった。その中で、機械製作の刺繍品により、手工製作のほうがより経済的価値が高く位置付けられた。

さらに、第4章において筆者が苗族女性の結婚式で衣装を展示する場に着目したように、新郎側の女性は、新婦が刺繍技術を持っているかどうか、展示されている衣装が手工製作かどうか、誰が作ってくれたのかなどを確認することで、新婦の文化資本と社会関係資本を確認することとなった。展示されている衣装が多いか少ないか、手工製作かどうかにより、西江苗族の女性は全く異なる態度をとる。具体的な事例を挙げれば、2019年2月羊排村で新婦の母が目が見えないため、結婚式で展示した衣装はほとんど市場で購入した機械製のものであり、それを知っている刺繍技術の所有者である李WFと潘GZは、新婦の「部屋」を見にも行かなかった。そして、筆者に「なにも見るものがない」と語った。それに対して、2019年11月29日李YWの甥の結婚式の時、新婦側から持参した衣装が全部手工製作のものであるため、李WFは見に行き、展示された衣装を録画して筆者に画像を送った（写真6-1）。動画の中で李WFと同じく新婦の衣装見に行った隣の女性との会話で何回も「これは全部手工製作のものだ。すごい」という言葉が出ており、「新婦の母、父方のオバ、母方のオバ、姉が作ってあげた」と李WFが話した。2回の結婚式で、衣装が手工製作かどうかによって、刺繍技術の所有者である李WFから全く異なる評価が下されている。筆者の調査不足の部分もあり、刺繍をしない人からはどう見ているかは引き続き確認する必要はあるものの、現在の調査データからいえるのは、新婦が持参した衣装が手工製作である場合、展示場に行く人が明らかに多く、総じて良い評価がもらえるということは確かである。



写真 6-1 2019年11月29日李YWの甥の結婚式で新婦側が展示した衣装（李WF撮影）

以上をまとめれば、1980年代以前の女性がほぼ全員が刺繍技術という身体化された文化資本と実物の刺繍品という客体化された文化資本を持っており、刺繍の衣装を製作するには母や姉妹の共同作業が必要であり、刺繍で社会関係資本を示すことができた。しかし1980年代以降、刺繍技術の習得者激減し、さらに1990年代以降、機械で刺繍を製作することが可能になったため、技術を持たない女性が客体化された文化資本（前の世代の刺繍品）を受け継ぐことで、刺繍の価値は示されるようになっていった。すなわち苗族現地社会において身体化された文化資本（刺繍技術）としての刺繍は衰退するようになったのである。そして、2000年代以降の観光化と刺繍の商品化の影響で、手工製作の刺繍が再び重要視されるようになり、刺繍技術者が少ない状況において、刺繍技術を持つ女性の能力が再評価され、文化資本としての意義が再確認された。このように文化資本としての刺繍は技術者の減少により、衰退が進む一方で、現地社会において時間をかけて刺繍の衣装を手工製作してくれる人、贈ってくれる人、貸してくれる人がいるということで、社会関係資本としての刺繍の意義がより顕著に現れるようになったことが本論の検討をとおして明らかになった。

4. 刺繍により構築・再構築される人間社会

刺繍はいわば手工芸品であり、モノである。手工芸品といえば、技術革新で出現した機械製のものと違い、本来の製作形態が重要視されている。本論の第1章の刺繍の製作過程の中に刺繍糸についての検討では、確かに手工で作り上げたものには機械製のものが代替できない魅力があることを明らかにした。論文の全体は刺繍が物質として果たしている役割に焦点を絞り、苗族という集団内部の社会関係は刺繍の製作によ

り形成されること、刺繍の構成は苗族という集団内部の社会関係によって形成されることを指摘した。親族内部の関係は固定的であるが、刺繍製作する女性が集まって形成したグループ（小群体）は固定的なものではなく、婚姻による移動などにより変化する。このようなグループは苗族社会の刺繍する女性にとっては、一緒に刺繍する時間と空間を共有する中で、各家での起きたことを話したりすることで村全体の情報を交換する場になる。さらに重要なのは、女性が集まって一緒に刺繍をすることで、生家で学びきれなかった刺繍技法を習得し、紋様や糸の配色について意見を交換するという同時代の女性の間で行われる刺繍の技法や紋様の伝承・継承に重要な役割を果たしていることである。グループは変化するが、グループを構成する単位は個人である。その個人を中心に、刺繍の製作や交換によりネットワークを構築している。

1950年代以降、急激な社会的変遷の中、苗族女性は刺繍の製作者であり、使用者であり、販売者となった。一方、2000年代以降、観光化が進み、刺繍が観光商品として販売され、刺繍をつけた民族衣装が苗族文化を代表するものとして有名になった。このような背景においても依然として刺繍に関することは全て苗族女性が主力である。しかし、女性文化だけで苗族の刺繍を理解するには不完全である。刺繍の製作者・使用者・販売者である苗族女性には父母、キョウダイ、親戚、近隣住民、友人などがいる。これらの人々、さらに知らない人々が刺繍とは多かれ少なかれ関わりを持っている。

本論では刺繍品の製作者・使用者・販売者の主体性を否定するのではない。むしろ、女性が刺繍文化を保護する主力であることを肯定的に見ている。本論の第2章から第5章までは刺繍をめぐる伝承、ジェンダー、婚姻、交換など多様な視点から検討することで、刺繍品の製作者・使用者・販売者が刺繍品を通して、家庭内、村落内、村落間、さらに村落外の人とどのような関係を構築・再構築しているのかを明らかにした。以下は刺繍により構築・再構築した社会関係である。

1) 家庭内

苗族の女性が結婚する前は生家で父母、キョウダイと一緒に生活し、結婚後には嫁ぎ先の義理の父母、夫、子供と一緒に生活する。女性のライフステージから、生家と婚家の親族の人とは様々な場面で刺繍と繋がっている。

第4章で示したように、苗族女性が結婚する時、母や姉妹から衣装を用意する。このような女性と母や姉妹との共同作業を通して作り上げた衣装、また結婚の時母と姉妹に用意してもらった衣装は母と娘の関係を表す確固たる証である。

そして、苗族の女性は結婚後には夫方居住により、夫や義父母などと同じ空間で生活するが、男性は刺繍しないため、この場合、姑と一緒に刺繍をする。第3章で男性

が刺繍の製作に直接参与はしないが、女性が刺繍製作することに反対しない、あるいは多くの農作業を分担することで、女性の刺繍する時間を確保することで消極的な支持をしていることを示した。さらに、子供が生まれたあと、苗族女性はまた娘に刺繍の技術教え、また娘のために衣装を作る。

母が娘のために衣装を作る事例が多いが、筆者の調査で「息子のために作っている」と語る女性もいた。息子のために作った衣装は女性の衣装である。すなわち、苗族女性は息子の未来の嫁のために時間をかけて衣装を製作する。また母が製作した衣装を娘に譲渡し、さらに次世代へ譲渡すること、借りることが可能であり、こうして刺繍のついた衣装は少なくとも3世代(あるいはそれ以上)の女性に使われることになる。すなわち、過去の人(母)、現在の人(本人)、さらに未来の人(娘・嫁)がそれぞれ刺繍のある衣装の製作、着用、所有、譲渡などによって繋がっている。

また観光化が進む中、刺繍が商品となり、経済的な価値が上昇し、刺繍品販売店を経営する人が多くなっている。その中で、刺繍技術者である女性が中心であることに変わりはないが、女性の父や弟などが刺繍品販売店の経営に参加することもある。そして刺繍の技術を持つ母や姉妹、姑などが販売用の刺繍品を製作したり、店番をしたりもする。女性の夫が販売店の場所を提供し、販売店の内装などの仕事を分担し、子供がパソコン関係の仕事をしてくれたりする。また、刺繍品の販売によって苗族女性が経済的に家へ貢献するようになり、家庭内における地位や分業などにも変化が見られる。このように苗族の女性が刺繍品販売店を経営する中で、父母、兄弟、姑、夫、子供などが多かれ少なかれ何らかの形で繋がっており、このような親族関係を活用して刺繍の製作や販売に対応していることが明らかになった。

2) 村落内

苗族の人は日常の食事の時でも、ハレの日(祭り、人生儀礼)などの宴会でも男女が分かれて座る。男性と女性は結婚後には家庭内では共同生活しているが、家庭外において、それぞれの「小群体」を持っている。苗族の女性は定期市に行くのも、食事会の時も、祭りに参加する時も、群れになって一緒に行動することが多いが、これは刺繍の製作にもよく見られる光景である。1人の女性は複数の「小群体」に入ることが可能であるが、本研究では一緒に刺繍をする「小群体」に着目する。現地調査でも家の玄関先や村の広場などで女性が2、3人から十数人が集まって話をしながら刺繍をする姿が多く見られた。このような小群体が集まって一緒に刺繍をする場合は、世間話や村のことについて交流することで情報交換の場であり、さらに第2章で示した刺繍技法の同時代伝承の場であり、技法・紋様・色彩などについて交流の場である。

本論の第4章で結婚式における刺繍のついた衣装を展示する場に関して、一緒に刺

繡をする小群体に入るにはある程度結婚式で展示されている刺繡の影響を受けることを示した。というのは、結婚式では新郎側の女性親族が新婦の展示した衣装や刺繡について新婦に質問したり、自分の目で鑑賞したりすることで、新婦が刺繡ができるかどうか（文化資本）、新婦のために衣装を製作する人がいるかどうか（社会関係資本）などを確認するためである。これは新婦が結婚後に夫方居住になった時、一緒に刺繡する「小群体」に入れるかどうかに関係している。

また、第5章で示したように、観光化の中、一部の苗族女性は刺繡の経済的価値を見出し、刺繡を通して生活改善を求め、刺繡品を販売するようになった。刺繡品販売店を経営する女性たちは村の人、店の近くで売店を経営する人などとは刺繡品の対外的な取引交換と対内的な贈与や無償借与により相互的に協力し合う関係を構築している。苗族女性は刺繡のついた衣装を対外的に販売しているが、対内的には親疎関係によって贈与・無償貸与できる刺繡の衣装の範囲は異なり、その中で手工製作の刺繡がやはり重要視されている。そして、このような交換では、無償ではあるが、食べ物や店番をするというような形で返礼をしている。この贈与・無償貸与をする相手に扱っている刺繡品を通してその親疎関係を確認することができる。

3) 村落間

苗族社会の村と村の間には婚姻によって結ばれ、結婚式において衣装を展示する場で、新郎側の女性親族は女性が持参した衣装及び衣装につけられた刺繡を通して新婦の社会関係資本を確認していることを第4章の婚姻の部分で示した。なぜこのような確認が重要であるかといえば、婚姻は単に結婚する2人を結ぶだけではなく、2人の所属する社会集団を結ぶことになる。つまり双方の親戚が姻戚になる。このような関係は特定の範囲の社会集団に限定することによって親類としての機能をより発揮することが可能となる。すなわち、新郎側の親戚から見れば新婦の持つ社会関係資本が自分の社会関係資本になる可能性がある。そのため、結婚式で新婦の持つ社会関係資本を確認する必要がある。

第5章の交換の部分では、2000年代以降刺繡の商品化という背景において、刺繡品を販売することで生計を維持し、生活改善を求める刺繡の技術所有者である苗族女性が増えつつあることが示された。このような苗族の女性が刺繡品販売店を経営する中で、商品である手工製作の刺繡品や衣装などを集めるために西江だけではなく、西江周辺の村落へ行って刺繡品を買い求めている。このような商品経済により構築された関係には3種類がある。1つ目は周辺の村落の知り合いの家へ訪れ、刺繡品を求める。2つ目は刺繡技術の持つ女性に製作してもらい、作り上げたものを買い求める。3つ目は村落の中に刺繡を集める人がいて、西江の女性がその人とは契約は結ばないが、

長期的にその人から買う。すなわち、2000年代以降、刺繍品販売に従事する苗族女性は他の村落との付き合いが婚姻を通してだけでなく、刺繍の商品化によるビジネスパートナーのような関係にもなっている。

4) 村落外

刺繍や衣装は苗族の手工芸であり、文化であり、アートであり、博物館の展示品であり、商品でもある。この刺繍の多重性、特に観光化により苗族の刺繍が有名になり、外部の人が手工製作の刺繍を求めている。西江の刺繍品販売店に来るようになった。刺繍を求めるのは観光客、研究者、芸術家、コレクター、商人などで、刺繍を購入する人もいれば、刺繍に興味を持って話を聞く人もいる。商品と貨幣の交換、刺繍に関する聞き取りなどは刺繍品販売店で行われる。しかし、これから刺繍品を購入したい人だけではなく、筆者のように調査のため長い付き合いを求める人もいる。現在はインターネットが普及しているため、Wechatで友達になり、刺繍品販売店という取引交換の場を離れても、スマホによる交流などはできる。

2019年2月に江蘇省で衣装販売店を経営している女性（30代）が観光で西江に来た。その女性は刺繍品と蠟染が気に入り、自分の店で売りたいと思い、数枚ずつ購入した。もしよく売れたら、引き続き西江から刺繍品と蠟染を購入しようと彼女は考えたわけである。そのため、西江の刺繍品販売店の経営者とWechatで友達になった。このように、刺繍品の商売により、西江苗族の女性が現地で刺繍品の販売をするだけでなく、江蘇省の女性のような「Wechat友達」とビジネスパートナーとなる可能性もある。

また西江苗族社会において、刺繍品の商売を通して生計を維持し、豊かになろうとする苗族の女性の中には、刺繍を西江だけでなく、貴州省の省内や貴州省外の都市（北京、江蘇など）に持っていき、販売や展覧会、展示即売会を行うなど中国各地で活躍している者もいる。近年中国は手工芸を重視し、貴州省政府や黔东南州の政府が手工芸保護に関する会議や交流会を多く開いている。刺繍技術者である苗族女性がこのような交流会に参加することで、政府関係者、同じく手工芸に関心のある人と出会う機会は増加する傾向にある。

たとえば2018年3月19日に西江鎮控排村では13年一度の沿仙丹節¹⁴⁶があり、刺繍、銀飾り、バスケットボールなどの試合が行われた。刺繍試合に参加したのは西江村、控排村、開覚村などの刺繍技術を持っている女性である。この場では女性は話を

¹⁴⁶ 控排村における13年一度の祭りであり、鼓蔵頭と村委員会によって祭りの行う時間と内容を決められる。控排銀匠第一村沿仙丹節組委員会によって祭りの各イベントを組織して実行する。旧暦の2019年2月1日～11日（西暦の2019年17日～27日）の10日間続いた。刺繍、銀飾り、バスケットボール、歌、芦笙などの試合、闘鳥、闘鶏などのイベントがある。

しながら、刺繍試合を進めていた（写真 6-2）。



写真 6-2 控拝村の刺繍試合に参加した女性（筆者撮影）

2019年11月26日には、雷山県婦女聯合会によって組織された「雷山県2019年婦女巧手脱貧刺繍技能暨創新產品大賽」（写真 6-3）が行われ、丹江鎮、西江鎮、永樂鎮、望豊郷、郎徳鎮、大塘鎮、方祥郷、達地郷、東城社区、西城社区などの婦女聯合会の協力を得て、各地域からの刺繍をする女性がこの試合に参加した。この場において、雷山県だけではなく、黔東南州に居住する各地域の苗族の刺繍技術者が集まり、刺繍の試合をするだけではなく、村以外の刺繍技術所有者と技法や紋様などの交流も行っていた。苗族女性がこのような活動に参加できるのは、刺繍技術（文化資本）を持っているためであり、刺繍を介してこれまでとは異なる関係性をもつようになったといえる。



写真 6-3 雷山县 2019 年妇女巧手脱贫刺绣技能暨创新产品大赛に参加する一部の女性（李WF提供）

2019 年 9 月 1 日～8 日に博物館や刺繍販売店を経営している苗族女性李WF、「榜香郁苗繡」という刺繍品販売会社蔣YX（40 代、女性、施秉県）、「贵州省黔苗繡芸工艺品株式会社」を経営している呉XL（50 代、女性、雷山県）などが日本の東京で苗族の刺繍と蠟染を持参し、第 88 回東京インターナショナルギフト・ショーに参加した。ギフト・ショーに参加したのは貴州省全域の少数民族の商品を販売する企業（31 社）であり、同ブースは貴州省商務庁によって組織された。ギフト・ショーに参加した 31 社の代表者を Wechat グループに入れ、そのイベントが終わってからもそのグループの中ではみんなそれぞれに活躍している。また彼女らはギフト・ショーで知り合った人と連絡先を交換していた。たとえば写真 6-4 は李WFがギフト・ショーで知り合った日本人の男性と東京に住んでいる中国人の女性呉a（50 代）と知り合い、日本人の男性と名刺交換し、呉aとは Wechat 友達になった際のものである。このように、苗族女性が刺繍を介して村から出、中国各地、さらに国際的に活躍するようになっている。



写真 6-4 李WFとギフト・ショーで知り合った人（筆者撮影）

苗族の女性は 2000 年代以前には村落の中で農作業と家事の生活を繰り返し、主に家族と村落内部の人とだけ関係を持っていた。しかし 2000 年代以降刺繍品の商売を通して生活改善を求める女性が増える中において、一部の女性が村から出て、刺繍に関するイベントなどに参加することで、手工芸者や研究者、他民族の刺繍技術者、政府の人など多くの人と接触し、自分のネットワークを拡大させる状況が起きている。

刺繍が商品化する前は、苗族女性のネットワークは親族関係や婚姻によって結んだ社会集団しかないような状況にあった。しかし、刺繍が商品化することにより、苗族の女性の持つ社会関係が多様になり、これまでの親族を中心としたネットワークに変化がみられるようになってきている。苗族女性は親族ネットワークを最大限に活用して事業を展開する一方、一部の苗族女性は刺繍品の販売や展示などの活動をするようになり、家から、村から、省から、さらに国からも出るようになってきている。苗族集団以外の人との接触が増えることで、親族以外の社会関係も構築するようになってきている。すなわち、刺繍の製作や販売により、苗族の女性が同じように（苗族以外の）刺繍の製作や販売をしている人、外部の消費者、政府関係者などとの社会関係を持つようになってきているのである。このような社会関係を構築・再構築するモノとして刺繍が媒介物として果たした役割を見逃してはならない。

本論文では以上のような刺繍の製作者・使用者・販売者である苗族女性を中心に、刺繍という媒介物をとおして構築・再構築される社会関係についても検討した。その

中で親族関係によるネットワークが刺繍の製作や販売などにおいて重要な役割を果たし、さらに婚姻により2つの苗族集団が結ばれ、密接な関係を維持していることを明らかにした。また、2000年代以降、苗族社会における市場経済の浸透により刺繍の商品化が進み、刺繍の製作者は使用者であると同時に、刺繍品を販売者ともなり、一部の苗族女性は村外、省外、国外とも関係を繋ぐことができるようになった。このように本論では物理的に時間の集約を示すことが可能なモノとしての刺繍製品が、多方面にわたり人間社会の関係性を構築・再構築していることが明らかになった。

5. 刺繍と市場経済

1980年代以前、苗族社会の刺繍は苗族の女性によって作られていた。刺繍は衣装を装飾するものであり、刺繍の紋様により歴史を記録するものでもあった。西江社会では刺繍を販売することはあったが、交通が不便であったため、販売の対象は苗族社会内部における刺繍のできない女性に限られていた。すなわち、刺繍と関わるのは西江苗族社会内部の女性に限定されていたのである。1980年代以降は、刺繍を製作するのに必要な材料が販売されるようになり、1990年代以降は機械製の刺繍が現れ、さらに刺繍サンプルの出現なども登場したことによって刺繍に大きな転換期を迎えた。

手工製作の刺繍の製作過程が変化し、刺繍は単に衣装を装飾するだけのものではなく、苗族の文化を語るようなものとして博物館で展示され、芸術品としてファッションと融合し、コレクションの対象となるようになった。近年では、刺繍は民族商品として苗族社会内部だけでなく、外部の人からも購入されるようになっている。しかし、内部と外部の需要が拡大する一方で、手工製作の刺繍品は時間がかかるため量産できない。機械製のものもちろんあるが、外部の人が求めているのは手工製のものである。このような状況により、手工製作の刺繍品の価格は高騰の一途をたどっている。このような状況の中で刺繍品の価値をどのようにが見るのがか、研究の論争の焦点となっている。

これまでの研究では主に刺繍の経済的価値に関しては2つの観点がある。1つは、苗族社会の経済発展のために、刺繍の経済的価値を上昇させることが重要であるというものである[王・陳 2015:36-37、何 2016、段 2019:145-146]。もう1つは、刺繍の文化的価値を重視し、経済で刺繍を評価することを批判的に見ることである[李 2012:5-6、鄭 2012:190、張・劉 2013:66-80]。いずれにせよ、これは外部の視点であることは否めない。そこで改めて本論で重視しているのは現地の人々の観点から刺繍の「価値」について確認しておきたい。

現地の人々は刺繍品を販売することで、家計に経済的な貢献ができるため、この流れを概ね肯定的に見ている。1980年代以降は刺繍する人が激減し、1990年代において

は、苗族女性にとって手工製の刺繍品はありふれたものであり、古くなれば燃やしたり捨てたりするほどの価値として認識されていた。このように刺繍文化は衰退しつつあるような状況にあった。しかし、刺繍品が市場経済の中で取引されることにより、刺繍文化を復活させる兆しがみられるようになった。苗族女性もまた刺繍品の販売活動をしているうち、自民族の刺繍に対して改めて価値を見出すようになっていく。機械製作の刺繍も当然市場に溢れているが、苗族の女性のほとんどはやはり手工製作の刺繍の方により高い価値を置いている。

苗族外部の人は一般的に刺繍の技法、紋様や紋様の意味を重視し、刺繍の含んでいる文化的な価値で刺繍の美しさや良さを評価する傾向にある。しかし現地の女性は技法や紋様ももちろんであるが、刺繍の製作過程における糸の扱いや作り上げた刺繍の糸が綺麗であるかどうかで評価している。刺繍販売者である苗族女性は手工製作であるか、糸が綺麗であるかで、刺繍の価格を決める傾向がある。すなわち、彼女らは刺繍の意味や文化的価値によりも、紋様、技法、糸などでの精緻さで刺繍を評価しているわけであるが、それは換言すれば刺繍にどれだけの労力を費やしたかを目で確かめているためである。

また、市場経済の中で、現地社会のものであった刺繍の製作者・販売者である苗族女性たちは刺繍の需要やマーケットの拡大に対応し、個人の持っているネットワークを最大限に活用し、刺繍の製作や販売をとおして新たな社会関係を構築している。

以上見てきたように、市場経済の影響で衰退しつつあった刺繍は復活することができ、苗族の人は刺繍をとおして経済的な収入を求める過程において、市場の需要に応じて、西江苗族社会の刺繍技術者や刺繍関係者は自民族の手工芸である刺繍の価値を改めて認識するようになった。最初に刺繍の価値を重視したのは1990年代後半に西江を訪れた外国人や研究者であった。宋Hの語りによれば、その頃外国人たちが彼女の家で古い刺繍品を高い価格で購入していったという。同村の女性は刺繍は外部の人に高く売れることを知ってから、刺繍を買い集めて外部へ販売するようになった。さらに、観光客や研究者などの外部の人が手工製作の刺繍を高く評価するようになった。このような外部の影響を受け、西江苗族社会の女性たちは1990年代頃に古くなった手工製作の刺繍を薪替わりにしたこととは対比的に、2000年代以降は古くなくても大切に保管するようになった。すなわち、市場経済の中で、苗族の女性は刺繍の製作者・使用者・販売者などのいくつもの顔を持ち、さまざまな活動を通して、刺繍の文化的価値（技術や紋様の意味）や経済的な価値を高めている。刺繍品の販売によって苗族の女性は家族や近隣住民だけではなく、政府の人、観光客、研究者、さらに外国人との接触が可能になった。刺繍品の商売活動や刺繍技術の交流で、一部の苗族の女性は刺繍を省外国外へ持ち出すと同時に、外部の需要を現地に持ち帰り、刺繍品のデザイ

ンや用途など変えさせた。このように、市場経済化の中において刺繍が苗族社会の人間の社会関係を拡大させる一方、人間の需要に応じで刺繍そのものあり方（デザインや用途）にも変化が見られるようになった。

6. 社会の変容と刺繍の変容

1950年代、中華人民共和国が成立した後、貴州省黔东南州雷山県の西江苗族社会は人民公社、飢饉、文化大革命、改革開放、教育復興、出稼ぎブーム、市場経済の進入、観光開発、交通網の拡充などを経験してきた。このような急激な社会的変容に適応し、苗族の刺繍も変化を遂げてきた。

たとえば、1950年代において、刺繍は主に苗族女性の衣装を装飾するものであり、糸、布、繡片は基本的に苗族女性によって手作りされていた。1960年代、70年代の動乱期は製作するような状況ではなかったが、現地の女性は刺繍技術を守ろうとして、刺繍をする余裕がなかったが母娘伝承や同時代に生活している女性からの伝承などの方式をとおして、刺繍技術だけは習得していた。しかし、この時期に、刺繍製作をする期間であった坐家は衰退した。

1980年代以降は改革開放や交通網の発達に伴い、現地の人の経済状況は改善しつつあった。一方、教育の復興や出稼ぎなどで、技術の習得者が減少し、刺繍の存続は危うい状況に陥った。刺繍技術者の減少により、衣装を製作する主役が衣装着用者本人からその母親に変わった。このような状況で、衰退した坐家は完全に復活する機会を失うこととなった。苗族女性一般にみられた身体化された文化資本である刺繍技術は一部の人のみへの継承という形で衰退するようになった。その一方、技術を持たない女性のために、刺繍の衣装を手工製作してくれる人、贈ってくれる人、貸してくれる人がいることが重要視されるようになった。また、刺繍の製作過程からいえば、本来刺繍製作に使う糸や布も手工製作していたが、技術の革新や流通の発達などにより、既製の糸と布が西江社会にも現れ、刺繍の製作過程は大幅に簡略化されるようになった。

1990年代、出稼ぎで現地の人が外へ出、少数ではあるが観光者や研究者など外部の人が現地へ入るようになり、現地と外部の接触する機会が増えた。機械製作の刺繍の出現により、手工製作をする者はさらに少なくなった。2000年代以降、観光化が進み、刺繍が商品化することで、刺繍は苗族内部だけでなく、市場へ流通するようになり、商品として高い評価を得るようになった。このような市場の需要に対応する形で手工製作の刺繍が再興しつつある。

このように急激な社会的・経済的な変動により、各時代における苗族の刺繍のあり方が異なっていることは明白であろう。このように苗族の刺繍は変化しつつあるが、

これまでの研究は一貫にして刺繍品の製作者・使用者・販売者・消費者の視点から、すなわち人間を中心にして刺繍を見てきた。本研究では、人間から刺繍をみるだけではなく、刺繍から人間社会をみることを同時に試みてきた。苗族社会においては繰り返し糸が縫い付けられている物理的なモノとしての刺繍、すなわち時間を物質性として示せる刺繍以上に時間がかかるもの、時間を示せるものは存在しない。現地社会の人の視点から言えば、1980年代以前における刺繍は、文化資本（刺繍技術・刺繍品）の側面と社会関係資本（共同作業）の側面がともに苗族女性においては重要であったが、その後の社会変容により、文化資本としての刺繍の意義は衰退していった。ただ刺繍技術（文化資本）を持っている人が減少している中でも、時間をかけて手工製作してくれる人がいること（社会関係資本）が重視されるようになっている。すなわち、苗族の刺繍は所属する社会と密接に関係しており、社会の変化に適応していることが本論の検討をとおして明らかとなった。

むすび

本論冒頭でも触れたように、20世紀前半のモダニズム、後半のポストモダニズムはともに人間中心主義であった。このような背景において、人間の主体性から脱却し、モノが主体になり得ることを強調する脱人間主義のモノ論が提起された。この研究史に位置付ける形で、本論は刺繍をめぐる人とモノとの関係を論じてきた。本論で調査対象とした苗族の刺繍に関してこれまでの研究は刺繍を芸術品として、苗族文化を表す象徴として刺繍の技術や紋様の意味合いなどに注目し続けてきた。しかし、筆者の調査では苗族社会の女性は刺繍をみる時、紋様と技法よりも先に刺繍糸や刺繍製作に時間がかかることに注目することを指摘した。本研究は現地の女性の視点からモノである刺繍と人間が互いに主体と客体になり得る視座に立ち、刺繍の物質性から苗族と刺繍の関係を議論したものである。

筆者がフィールドワークを始めた時点で、西江苗族社会はすでに観光開発されていた。苗族の女性は刺繍の製作者であり、使用者であると同時に、2000年代以降刺繍の商品化により、一部の刺繍技術者である苗族女性は刺繍品を販売する商人として活躍している。これまで苗族の刺繍に関しては、その製作・使用さらに販売といった面では人間を中心にして議論されてきた。すなわち、刺繍がモノとしての主体性を見落とされてきたのである。

本研究は刺繍が物質として活躍し、社会関係を構築・再構築する媒介であることについて論じた。このような社会関係の構築・再構築は変動しつつある社会と切り離して考察することはできない。社会の変容に伴い、刺繍の製作、用途、価値なども変化している。すなわち、刺繍のあり方は社会の変容に適応するものであることが明らか

となった。

刺繍は苗族の女性の手によって作られ、苗族の女性によって伝承されてきたわけだが、市場経済が浸透することによって、苗族の女性だけではなく、男性や観光客、外国人などが刺繍に関わるようになり、刺繍品を販売する過程において、市場の需要に応じ、刺繍のデザインや用途なども変化するようになった。また、苗族の女性は刺繍をとおして親族や姻族関係を構築するだけでなく、刺繍品の製作や社会内部を超え、外部世界との社会関係を持つようになったことが明らかになった。すなわち、本論の検討を通して、人間が刺繍を作っているが、逆に刺繍も人間社会を作っていることを明らかにした。

本論では苗族社会における刺繍と人間の双方向的な視点に立ち、モノ（刺繍）とヒト（苗族社会の人間・苗族社会以外の人間）の相互関係を検討した。刺繍を製作する素材である刺繍糸の特性により、刺繍の色彩構成が変わる。また、苗族社会において、刺繍以上に時間がかかるモノがないため、西江苗族社会の刺繍する女性にとって刺繍は時間を表すモノとなっている。というのは言うまでもなく刺繍を手工製作するには多大な時間が必要とするからである。1980年代以前刺繍技術者である苗族女性は時間をかけて刺繍を製作することで文化資本と社会関係資本を確認していたが、その後、社会環境や経済的環境の変化で、機械製の刺繍の普及や刺繍技術者が激減によって、刺繍の文化資本としての役割が弱まる一方で、改めて手工製作の刺繍が別の形で注目されるようになった。技術革新や市場経済の中で機械製の刺繍品が販売されるような状況においても、時間をかけて刺繍を製作してくれる人がいるという社会関係資本を示す役割が重要視されるようになったのである。すなわち、苗族女性が手工製作の刺繍の技法と紋様よりも刺繍にかかった時間を優先に考えるのは、苗族社会における刺繍が糸の繰り返しにより多大な時間にかかるという物質性を有しているためであり、1人の女性が身に着けるべき文化資本としての役割が衰退するような状況においても、モノとしての刺繍は時間を示せるという物質性から、社会関係資本を確認できるためである。

まとめよう。刺繍は言うまでもなく、人とモノとの協同によって作り上げられるものである。苗族社会において、これほど多大な労力と時間を、物質として示せるものは他に存在しない。これまでの研究においては、このモノからの視点で苗族の刺繍を議論したものは皆無であった。本論で明らかになったのは、この苗族の刺繍が当該社会において（また当該社会を越えて）、どのように人間に利用されてきたか（あるいは刺繍が人間を利用させてきたか）ということである。近代化以降、手工製の刺繍は学校教育の普及や機械製の刺繍の普及により、一時衰退の危機に瀕したが、そのような状況においても刺繍のもつ特異な物質性、それは多大な労力と時間を布の上を示す

ということだが、によって意義を持ち続けた。1950年代から苗族社会は大きな社会変化に見舞われたが、刺繍はその特異な物質性ゆえにその意義を持ち続けてきた。本論はそれを人及びモノの両面から明らかにしたものである。

参考文献

中国語文献（著者名の中国語読みアルファベット順）

安麗哲

2010 『符号・性別・遺産—苗族服飾の芸術人類学研究』 知識産権出版社

白世録

2014 「貴州苗族刺繡文化内涵初探」 『科学中国人』 pp. 31-32

曹端波・傅慧平・馬静

2013 『貴州東部高地苗族的婚姻 市場与文化』 知識産権出版社

陳嵐

2009 「浅談貴州苗族刺繡的文化内涵」 『貴陽学院学報（社会科学版）』
pp. 27-29

陳舒

2015 「論民族地域文化对少数民族服飾的影響—以貴州苗族刺繡為例」 『貴州民族研究』 pp. 58-62

陳婷

2011 「貴州郎德上寨 西江苗族刺繡中魚紋樣浅析」 『大舞台』 pp. 153-154
p. 16

陳芸方・龍英

2007 「貴州苗族刺繡藝術的裝飾意味—兼談貴州苗族刺繡的文化意蘊」 『美術学・民間美術』 pp. 112-113

戴平

1994 『中国民族服飾文化』 上海人民出版社

丁榮泉・龍湘平

2003 「苗族刺繡發展源流及其造型藝術特徵」 『中南民族大学学報（人文社会科学版）』 pp. 25-28

段春華

2019 「浅談貴州苗族民間刺繡工藝的現狀及応用」 『広東蚕業』 pp. 145-146

范明三・楊文斌・藍采如

2018 『苗族服飾研究』 東華大学出版社

范明三・楊文斌

1993 「黔東南苗族刺繡藝術」 『蘇州絲綢工学院学報』 pp. 35-37

費孝通

1982 「談深入開展民族調查問題」 『中南民族学院学報（哲学社会科学版）』 第3期 pp. 2-6

傅慧平·張金成

- 2015 「浅析清水江苗家的婚姻圈与群体划分」 『貴陽市委党校学報』 第1期
pp. 50-53

高婕

- 2014 「苗族服飾的傳統文化功能及其在当代旅遊場域中的變遷【A】」 『中国博物館協會服装博物館專業委員會 服装歷史文化技芸与發展—中国博物館協會第六届會員代表大會暨服装博物館專業委員會學術會議論文集』 [C]
中国博物館協會服装博物館專業委員會：中国博物館協會服装專業委員會
第9期 pp. 130-138

貴州人民出版社（編）

- 2015 『中国貴州民族民間美術精粹刺繡』 貴州人民出版社

貴州省雷山縣人民政府·中国民族博物館（編）

- 2004 『中国·雷山苗族服飾 Costumes of Miao Ethnic Group in Leishan · China』
民族出版社

貴州民族學院歷史系（編）

- 2002 『貴州民族論叢』 貴州民族出版社

韓振剛

- 1997 「苗族刺繡的造型意識」 『美術大觀』 p. 12

何聖倫·金科

- 2015 「苗族刺繡中龍紋圖案的生態文化意義解讀」 『裝飾』 pp. 92-95

何曉丹

- 2016 「文化消費与苗族刺繡藝術的資本化—以貴州台江縣為例」 廣西民族大學

何媛

- 2015 「貴州苗族刺繡与蠟染圖案的文化內及傳承—以貴州苗族背孩帶為例」 『民族歷史文化研究』 pp. 471-480

何晏文

- 2005 「一部雄渾、壯美的歷史畫卷——試論苗族傳統服飾藝術」 『中国苗族服飾研究』 民族出版社 pp. 200-214

華思寧

- 2016 「苗族服飾文化內涵探析」 [J] 『四川戲劇』 第3期 pp. 101-104

黃菁

- 2011 「苗族裝飾圖案色彩構成解析及應用研究」 中南民族大學美術學院

黃玉冰

- 2007 「浅析黔东南雷山縣西江鎮苗族刺繡的藝術性」 蘇州大學
2011 「西江苗族刺繡的技法研究」 『絲綢』 第48期 pp. 43-49

李国章

2006 『雷公山苗族传统文化』 貴州民族出版社

李潔

2010 「文化人類学視角下貴州苗族服飾芸術的文化価値」 『美与時代』 pp. 50-53

2014 「貴州苗族服飾の審美功能与文化価値」 『美術大觀』 第10期 pp. 80-81

李一如

2016 「苗族服飾研究范式的反思」 『苗学論叢（一）苗学研究回顧与展望』 知識產權出版社 pp. 28-40

李迎喜

2011 「試論女性主義視角下貴州苗族刺繡的文化內涵」 『山東女子学院学报』 第4期第2号 pp. 45-48

李廷貴・張山・周光大

1996 「苗族的婚姻、家庭与姓氏」 『苗族歷史与文化』 中央民族大学出版社 pp. 380-390

李廷貴・張山・周光大

1996 「苗族的服飾芸術」 『苗族歷史与文化』 中央民族大学出版社 pp. 204-246

李欣欣

2017 『消解与重構 現代性体験与苗族鄉村婦女的家庭生活』 上海三聯出版社

李彦

2012 「貴州苗族刺繡文化內涵及保護研究—以台江縣施洞為例」 『大觀週刊』 pp. 5-6

廖婧琳

2018 「平等或從属：旅遊参与与女性家庭權力—以西江千戶苗寨為例」 『西南民族大学学报（人文社会科学版）』 pp. 42-48

劉孝蓉

2007 「貴州民族工艺品傳承と旅行商品開發探討——以台江縣施洞鎮銀飾 刺繡為例」 『貴州師範大学学报』（自然科学版） pp. 325-328

劉曉春

2016 「苗族傳統刺繡紋樣初探」 『上海工藝美術』 pp. 70-72

龍湘平

2003 「苗族刺繡造型特徵」 『裝飾』 p. 47

龍葉先

2005 「苗族刺繡工藝傳承的教育人類学研究」 中央民族大学

2008 「論苗族刺繡傳承的文化意義」 『貴州学院院報（社会科学版）』 pp. 101-104

龍英

2011 「貴州苗族刺繡中的母体崇拜」 『貴州民族研究』 pp. 79-81

羅曉明·馬靜

2013 「從『礼物』解讀清水江流域苗族婚俗變遷——以三穗縣 L 村為例」 『貴州大學學報(社會科學版)』 pp. 97-105

馬靜·葦秀勳

2015 「地域與婚姻：清水江流域苗族婚俗研究」 『河西學院學報』 第 31 期第 3 號 pp. 57-62

馬麗亞·王先桃

2016 「貴州苗族服飾刺繡藝術淺析」 『貴州大學學報·藝術版』 pp. 117-120

馬蓉

1992 「苗族刺繡圖案中的原始宗教情感」 『南京藝術學院學報(美術與設計版)』 pp. 53-58

美術資料組編

1978 『苗族 佈依族服飾資料』 百泉出版社

蒙甘露

1995 「苗族刺繡藝術的意蘊」 『中央民族大學學報』 第 6 期 pp. 36-41

孟金砂

2009 「試論苗族刺繡圖案中的文化象徵蘊意」 『柳州師專學報』 pp. 19-22

『苗族簡史』 編集組

1985 『苗族簡史』 貴州民族出版社

納日碧力戈·張曉

2017 『苗學論叢(一) 苗學研究與展望』 知識產權出版社

鳥居知子(著)·蔣玉秋(譯)

2011 『一針一線 貴州苗族服飾手工藝』 中國紡績出版社

聶羽彤

2014 「苗族女性服飾傳承與變遷的心理闡釋——以黃平 鎮寧及貞豐服飾的比較研究」 『貴州大學學報·藝術版』 pp. 88-100

潘定智

1984 「從黔東南苗族婚姻歌看古代苗族婚姻」 『貴州民族學院學報(社會科學版)』 pp. 115-122

潘定智·楊培德·張寒梅

1997 『苗族古歌』 貴州人民出版社

岐從文

1983 「貴州苗族服飾的源流及其形式美」 『貴州民族研究』 pp. 78-89

1983 「初探貴州苗族刺繡之源流」 『裝飾』 pp. 52-53

2004 「措施洞苗繡的原始思維」 『中國苗族服飾研究』 民族出版社 pp. 119-126

齊玉瑩

2018 「貴州苗族地區女性家庭地位與經濟發展初探」 『改革與戰略』 pp. 25-28

齊玉瑩·張曉

2018 「生產性保護視域下黔東南苗繡產業化發展初探」 『中國集體經濟』
pp. 27-29

錢若雲

2019 「貴州苗族刺繡圖案中的人物造型分析」 『大眾文藝』 pp. 95-96

任宜海

2019 「貴州省黔東南苗族女性服飾的文化生態研究」 貴州大學

田魯

2003 「苗族刺繡中的象徵符號」 『南京藝術學院學報』 pp. 72-73

田園

2012 「富民芭蕉箐苗族的婚姻圈與婚姻交往」 雲南大學

王振豪·翟李融·梁靜

2014 「論貴州苗族刺繡在現代生活中的傳承和發展」 『2013年福建省傳播學
年會論文集』

王孔敬

2008 「論苗族刺繡工藝文化的保護 傳承與開發」 『湖北民族學院學報（哲學
社會科學版）』 第23期 pp. 38-41

王良范

2002 『千家苗寨的故事』 中國文聯出版社

汪祿

1983 『苗族侗族服飾圖案』 四川人民出版社

王至強·陳海紅

2015 「苗族刺繡的傳承與現狀」 『凱里學院學報』 pp. 36-37

魏莉

2014 「苗族刺繡工藝審美取向初探」 『紡績導報』 pp. 116-118

韋蘇

2013 「潘家園民族工藝品市場中的貴州苗族刺繡」 『貴州民族大學學報（哲學
社會科學版）』 pp. 163-166

伍新福

1990 「略論苗族支系」 『中南民族學院學報（哲學社會科學版）』 pp. 87-91

1995 「苗族婚制考」 『民族論壇』 pp. 49-54

吳建偉

1990 「黔東南苗族婦女服飾辯析」 『貴州民族研究』 pp. 74-77

吳榮臻·吳曙光

- 2007 『苗族通史（一）』 民族出版社
- 2007 『苗族通史（二）』 民族出版社
- 2007 『苗族通史（三）』 民族出版社
- 2007 『苗族通史（四）』 民族出版社
- 2007 『苗族通史（五）』 民族出版社

吳平

- 2006 「貴州苗族刺繡文化內涵及技藝初探」 『貴州民族學院學報』 p. 118-124

吳正光

- 1993 「歷史——穿在人身上」 『裝飾』 pp. 41-42

吳育標

- 2013 『中國世界遺產戰略管理模式研究——以西江千戶苗寨例』 人民出版社

吳育標·馮國榮

- 2014 『西江千戶苗寨研究』 人民出版社

吳澤霖

- 1991 『民族研究文集』 民族出版社 1991 年
- 1991 「貴州省清水江流域部分地區苗族的婚姻」 1958 年 『民族研究文集』
民族出版社 pp. 247-386

吳澤霖·陳國鈞

- 2004 『貴州省苗夷社會研究』 民族出版社

席克定

- 2003 「試論苗族婦女服裝在苗族婚姻中」 『貴州民族研究』 第 23 期第 93 号
pp. 87-95
- 2005 『苗族婦女服裝研究』 貴州民族出版社
- 2009 「苗族婚姻集團的標志——苗族女性服裝的類型和特殊功能」 『苗侗文壇』
貴州大學出版社 pp. 387-398
- 2015 「試論苗族婦女服裝在苗族婚姻中的作用和意義」 『貴州民族研究』
pp. 87-95

薛定衡

- 1996 「苗繡初探」 『民族藝術研究』 pp. 58-67

楊昌國

- 1997 『苗族服飾：符號與象徵』 貴州人民出版社 1997

楊菲

- 2016 「雷山苗族服飾的文化意義與其民族認同」 『中國民族博覽』 pp. 36-38

楊菲·張寒梅

- 2017 「苗族婦女研究回顧與展望」 『苗學研究回顧與展望』 知識產權出版社
pp. 41-49

- 楊夫林
2004 『西江溯源』 黔東南州彩色印刷
- 楊建紅
2002 「苗族刺繡技法介紹」 『浙江工藝美術』 pp. 14-15 pp. 26-29
2003 「苗族刺繡傳統工藝的保護和發展」 『浙江工藝美術』 pp. 2-3
- 楊廷碩
1998 「關於苗族支系的研究」 『貴州民族研究』 pp. 72-74
- 楊正文
1998 『苗族服飾文化』 貴州人民出版社
- 楊鬚·王良范
2009 『苗侗文壇』 貴州大學出版社
- 楊毅
2014 「苗族服飾的民族文化學考論」 『貴州民族研究』 第35期 pp. 53-56
- 楊鵬
1994 「龍崇拜新解——由苗族刺繡龍紋樣說開去」 『湖北民族學院學報(社會科學版)』 pp. 54-58
- 楊再偉
2010 「貴州苗族原生形態刺繡圖案的藝術特徵」 『藝術與設計(理論)』 pp. 282-283
- 易志學·顧欣·熊永花
2014 「雷山縣氣候特徵及氣象災害風險分析」 『安徽農業科學』 pp. 8653-8654
- 袁潔
2011 「神聖化到世俗化的交換與財產權——對於黔東南台江苗族婚姻制度的思考」 『湖北民族學院學報(哲學社會科學版)』 pp. 46-50
2012 『社會繼承制度變遷中的苗族女性研究——以貴州黔東南雷山縣郎德上寨為個例』 博士論文 中央民族大學
- 張朶朶·劉兵
2013 「當代少數民族手工藝技術變遷中的文化選取分析——以貴州苗族刺繡為例」 『科學與社會』 p. 66-80
- 張建春
2005 「論苗族刺繡旅遊產品的開發」 『黔東南民族師範高等專科學校學報』 第23卷第2期 pp. 72-74
- 張泰明
1995 「苗族刺繡的歷史踪跡」 『貴州民族研究』 pp. 141-144
2004 「苗族刺繡的歷史踪跡」 『中國苗族服飾研究』 民族出版社 pp. 175-183
- 張勝蘭
2014 「苗族服飾與苗族自我認同意識——以清朝至民國時期的貴州苗族改裝運

動為中心」 『民俗學刊』 pp. 25-33

張曉

1997 『西江苗族婦女口述史研究』 貴州人民出版社

2000 「婦女小群體與服飾文化傳承—以貴州西江苗族為例」 『貴州大學學報(藝術版)』 pp. 41-47

張曉·張寒梅·潘璐璐

2017 『貴州苗族代表性服飾』 知識產權出版社

曾麗·曾憲陽

2017 『苗繡 MIAO EMBROIDERY』 貴州人民出版社

鄭莉紅

2012 「論貴州民族文化在旅遊開發過程中的傳承和發展」 『科技風』 p. 190

周夢

2011 『黔東南苗族侗族女性服飾文化比較研究』 中國社會科學出版社

2017 「貴州省苗族女性民族傳統服飾的文化功能研究」 『紡績導報』 pp. 103-105

周相卿·劉嘉寶

2014 「民國時期雷公山地區的苗族婚姻習慣法制度」 『貴州師範大學學報(社會科學版)』 pp. 76-79

鐘一葦

2018 「從清代清水江地區的社会變遷看當地權利觀念的形成」 『河北法學』
第36期第2號 pp. 152-161

日本語文献（著者名の五十音順）

青木啓将

2019 『現代日本刀の生成 物質性をめぐる人類学的研究』 言叢社

イヴァン,イリイチ

1984 『ジェンダー 女と男の世界』 玉野井芳郎(訳) 岩波現代選書

今堀恵美

2006 「市場経済におけるカシュタチ（刺繍屋）事業の誕生」 『社会人類学年報 VOL. 32』 pp. 57-84

2008 「持参財を飾る刺繍，販売する刺繍—ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区のカシュタ制作を事例に」 『国立民族学博物館調査報告』 第78巻 pp. 451-480

2019 「人類学的フィールドワークからみるウズベク女性の刺繍づくり」 『東海大学紀要文化社会学部』(1) pp. 151-163

インゴルド,ティム(著)

2014 『ラインズ 線の文化史』 工藤晋(訳) 管啓次郎解説 左右社

インゴルド,ティム(著)

2017 『メイキング:人類学・考古学・芸術・建築』 金子遊・水野友美子・小林耕二(訳) 左右社

檜永真佐夫

2000 「市場経済の中の伝統染織物生産：ベトナム黒タイ村落の事例」 『民族学研究』 第65巻第3号 pp. 252-267

鎌田佳伸・宮川昌子・渡辺瞳・箕輪真理子・江端美和

2007 「刺繍ミシンにおける縫糸切断機構」 『実践女子大学生生活科学部紀要(44)』 pp. 119-125

鎌田佳伸・森島玲子・田中美和子

2008 「ミシン刺繍における光沢と糸状態との関係」 『一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集59』 pp. 271-271

鎌田佳伸・森島玲子・亘麻希・江端美和・関伸一郎

2009 「ミシン刺繍の光沢に与える刺繍糸の影響」 『実践女子大学生生活科学部紀要』 第46巻 pp. 117-123

金谷美和

2005 「布のつくるヒンドゥーとムスリムの社会関係—インド グジャラート州カッチ県のオダニー（被り布）の事例より」 『文化人類学』 第70巻第1号 pp. 77-98

2006 『布がつくる社会関係—インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』 思文閣出版

川口素子

2011 「トルコの伝統刺繍について：19世紀後期—20世紀中期の庶民の衣装と

- 装飾品」 『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』 第10巻
pp. 53-68
- 黒田末寿
2019 「ものが生まれ出ずる製作の現場—鉄と道具と私の共同作業」 『ものの人類学2』 京都大学学術出版会 pp. 29-43
- 諸橋轍次
1993 『座右版 中国古典名言事典』 講談社
- 栗本慎一郎
1995 『経済人類学を学ぶ』 有斐閣
- 佐藤若菜
2014 「衣装がつなぐ母娘の『共感的』関係」 『文化人類学』 79(3)
pp. 305-327
- 鈴木正崇
2012 『ミャオ族の歴史と文化の動態 中国南部山地民の想像力の変容』 風響社
- 鈴木正崇・金丸良子
1985 『西南中国の少数民族』 古今書院
- コリガン, ジーナ
2003 『中国ミャオ族の織』 近藤修(訳) デザインエクステンション株式会社
- 曾士才
2001 「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から」 『民族学研究』 第66巻第1号 pp. 87-105
- 田口理恵
2002 『ものづくりの人類学 インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』 風響社
- 鐘瑋・植田憲・張夏
2016 「手工芸の地域性と現代生活用品の再デザイン:中国四川省汶川羌族刺繍に関する現地調査に基づいて」 『日本デザイン学会研究発表大会概要集』 第63号 p. 264
- 床呂郁哉
2016 「ひとと『もの』の関係性を探る——人間と非人間の境界の揺らぎと越境をめぐって」 『Field+ : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp. 2-3
- 床呂郁哉・河合香吏編
2010 『ものの人類学』 京都大学学術出版会
2019 『ものの人類学2』 京都大学学術出版会

都甲由紀子・朝比奈はるか・菊池多絵

- 2018.03 「アジアの染色・刺繍・民族衣装装着体験プログラムの実践報告：ひらめき☆ときめきサイエンスプログラム 2015-2017」 『大分大学高等教育開発センター紀要』 2018.03 pp. 137-144

鳥居龍蔵

- 1976 『鳥居龍蔵全集(第十一巻) 苗族調査報告』 朝日新聞社 (1907年『苗族調査報告』東京帝国大学)

鳥丸貞恵・鳥丸知子

- 2010 『中国貴州省苗族染織探訪 18年 布に踊る人の手』 西日本新聞社

鳥丸知子

- 2017 『ミャオ族の民族衣装 刺繍と装飾の技法』 誠文堂新光社

中川敏

- 1992 『交換の民族誌』 世界思想社

中谷文美

- 2000 「『女の手仕事』としての布生産：インドネシア,バリ島における手織物業をめぐって(〈特集〉「布と人類学」)」 民族学研究 第65巻第3号 pp. 233-251

- 2003 『女の仕事のエスノグラフィ：バリ島の布儀礼ジェンダー』 世界思想社

中根千枝

- 2004 『社会人類学 アジア諸社会の考察』 講談社学術文庫

橋本裕之

- 1998 「物質文化の劇場—博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション」 『民族学研究』 第62巻第4号 pp. 53-562

初雪

- 2018 「民族服装の衰微及び再興とその原因に関する一考察：中国貴州省西江ミャオ族を対象に」 首都大学東京 pp. 1-63

ブルデュー, ピエール

- 1990 『ディスタンクシオン I』 石井洋二郎(訳) 藤原書店

ベイン・シェイラ

- 2003 『インドとパキスタンの刺繍 (大英博物館ファブリック・コレクション)』 近藤修(訳) デザインエクスチェンジ

宮脇千絵

- 2010 「民族衣装の既製服化—中国雲南省のミャオ族衣装の変化の様相—」 『総研大文化科学研究』 pp. 41-64

- 2017 『装いの民族誌 中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐると実践』 風響社

ラトゥール, ブルーノ

2008 『虚構の「近代」 : 科学人類学は警告する』 川村久美子 (訳) 東京 : 新評論

2019 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』 伊藤嘉高 (訳) 法政大学出版局

レヴィ=ストロース, クロード 馬淵東一・田島節夫監訳 花崎皋平ほか訳

1977 『親族の基本構造』 番町書房

安井清子

1991 「針と糸をもったかたりベーモン族の針仕事」 『季刊民族学』 第15巻第4号 pp. 62-72

2000 「スカート刺繍に縫いこむ思い——ラオスの山の民ブルーモン」 『季刊民族学』 第24巻第2号 pp. 69-81

楊梅竹

2018 「苗族刺繍の母娘伝承を再考する: 中国貴州省黔東南苗族侗族自治州西江鎮を事例として」 『東アジア研究 (16)』 pp. 23-40

吉田憲司

1998 「民族誌展示の現在——表象の詩学と政治学」 『民族学研究』 第62巻第4号 pp. 518-536

吉本菜々子

2017 「生家にとどまる既婚女性」 『社会人類学年報』 第43号 pp. 125-144

ワイナー, アネット, B. シュナイダー, ジェーン

1995 『布と人間』 佐野敏行訳 ドメス出版

英語文献 (著者名のアルファベット順)

- Appadurai, Arjun (ed.)
1986 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, New York:Cambridge University Press.
- Ball, Jenifer L.
2006 “A Double-Headed Eagle Embroidery: From Battlefield to Altar, ” *Metropolitan Museum Journal*, Volume. 41, pp. 59-64, p. 10
- Berman, Marshall,
1982 *All That Is Solid Melts Into Air: The Experience of Modernity*. Second ed. London: Penguin
- Blanchard, Mary W.
2002 “Embroidery, Enterprise, and the Modernist Vision in Gilded Age America, ” *American Quarterly* 54(4), pp. 661-679
- Bounia, Alexandra
2012 “Philanthropy, art and the museum, ” *Journal of the History of Collections* 24 (1) , pp. 105-116
- Buruma, Anna
2009 “LIBERTY & THE BUSINESS OF EMBROIDERY, ” *The Journal of the Decorative Arts Society 1850 - the Present*, No. 33, *DECORATIVE ART AND THE WORLD OF FASHION* , pp. 74-89
- Ejeimi, Sahar, D. Sparks, and R. N. Yan
2018 “Revival of Hejaz embroidery: a collaborative design process engaging Saudi female academics, ” *Research Journal of Textile and Apparel*, RJTA-06-2017-0023
- Fursova, E. F.
2008 “ZOOMORPHIC IMAGES IN EASTERN SLAVIC EMBROIDERY OF SOUTHWESTERN SIBERIA, ” *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia* 36 (4), pp. 0-106
- Gell, Alfred
1998 *Art and Agency*, Oxford University Press
- Grönwoldt, Ruth
1989 “An Unknown Trecento Embroidery, ” *Textile History*, Vol. 2, pp. 245-247
- Hofverberg, Hanna , and D. O. Kronlid
2017 “Human-material relationships in environmental and sustainability education—an empirical study of a school embroidery project, ” *Environmental Education Research*, pp. 1-14.
- Jalal Kamali, Fattaneh and Hassani Sa’ di, Batool
2017 “Role of Iranian Traditional Needlework in People’s Social and Family Life: A Study of Pateh Embroidery in Kerman, ” *Modern Applied Science*, Vol. 11, No. 1, pp. 253-263
- Lévi-Strauss, Claude
1949 *Les structures élémentaires de la parenté*, Paris, Presses Universitaires de France

- Latour, Bruno
 2005 *Reassembling the social: An introduction to Actor-Network-Theory*,
 Oxford, OUP.
- Liao, Jiangbo, C. Ren, and X. Yang
 2016 “Research on Grass Cloth Art Embroidery of Characteristics and Handmade,”
Asian Social Science 12 (9), pp. 44–50
- Liu, Wen
 2011 “Traditional “Nv Gong” (Embroidery) Culture’ s Implication to the
 Design of Modern Costume,” *Advanced Materials Research*, Vols. 175–176,
 pp. 963–967
- Liu, Yong Qing
 2013 “The Material and Technology of the Chu Embroidery,” *Advanced Materials
 Research* 796, ppp. 527–531.
- Malinowski, Bronislaw Kasper
 1922 *Argonauts of the Western Pacific*, London, G. Routledge & Sons; New York,
 E.P. Dutton & Co.
- Miller, Daniel
 1987 *Material Culture and Mass Consumption*, Basil Blackwell: Oxford
- Mondal, Sekh Rahim
 2009 *Jari Embroidery: A Study of a Traditional Craft and the Craftsmen of
 Bengal*, Kalpaz Publications, New Delhi
- Nofierni, IK Sriwan and Y. Septriani
 2017 “The model for estimation production cost of embroidery handicraft,”
IOP Conf. Series: Materials Science and Engineering 277, pp. 1–8
- Oberhumer, Edith , *et al.*
 2014 “One hundred boys, one hundred challenges: The examination and
 conservation of two Viennese folding screens decorated with a Chinese
 silk Embroidery,” *Studies in Conservation*, Vol. 59, pp. S119–S123
- Paine, Sheila
 1989 *Chikan embroidery: The floral whitework of India (Shire ethnography)*,
 Shire Publications
 2006 *Embroidery from Afghanistan*, British Museum Press
- Parker, Rozsika
 2010 *The Subversive Stitch: Embroidery and the Making of the Feminine*,
 Tauris Academic Studies
- Pollock MacAulay, Suzanne
 2000 *STITCHING RITES: Colcha Embroidery Along the Northern Ե՞ո Grande*,
 University of Arizona Press
- Radcliffe-Brown, Alfred Reginald
 1952 *Structure and function in primitive society*, Free Press
- Rusli, Rose Dahlina , and N. M. Nawawi
 2016 *Uniqueness of Malay Traditional Embroidery: Kelingkan. Proceedings of
 the 2nd International Colloquium of Art and Design Education Research
 (i-CADER 2015)*, Springer Singapore

- Sakiestewa, Ramona
 1989 "Pueblo Embroidery," *Museum Anthropology*, Vol. 13, No. 2, pp. 9–10
- Schneider, Jane
 1987 "The Anthropology of Cloth," *Ann. Rev. Anthropol.*, Vol. 16, pp. 409–448
- Segalo, and Puleng
 2018 "Women speaking through embroidery: using visual methods and poetry to narrate lived experiences," *Qualitative Research in Psychology*, pp. 1–7
- Silberstein, and Rachel
 2016 "Cloud Collars and Sleeve Bands: Commercial Embroidery and the Fashionable Accessory in Mid-to-Late Qing China," *Fashion Theory*, pp. 1–34
- S. Vasanthi
 2014 "MARKETING OF THE HERITAGE PUGUR HAND EMBROIDERY ART IN INDIA (An empirical study on the challenges faced by the Indian Toda Tribal women artisans in the Nilgiris District)," *Global Marketing Conference at Singapore Proceedings*, pp. 956–969
- Tamburini, Diego , *et al.*
 2018 "An investigation of the dye palette in Chinese silk embroidery from Dunhuang (Tang dynasty) ," *Archaeological and Anthropological Sciences*
- Torimaru, Tomoko
 2008 *One Needle, One Thread: Miao (Hmong) Embroidery And Fabric Piecework from Guizhou, China*, University of Hawaii Art Gallery
- Toth, and Márta
 2012 "Lessons learned from conserving metal thread embroidery in the Esterházy Collection, Budapest, Hungary," *Studies in Conservation*, Vol. 57, pp. S305–S312.
- Tyagi, Ruchi
 2012 "Meerut Embroidery Cluster: A Case Study," *South Asian Journal of Business and Management Cases* 1(2), pp. 185–202
- Wang, Xin , and R. R. Zheng
 2011 "The Inheritance and Innovation of Embroidery in Modern Silk Dress Design," *Advanced Materials Research* 175–176(2011):1030–1034.
- Weir, Shelagh
 2007 *Embroidery from Palestine (Fabric Folios)*, University of Washington Press
- Wilkinson-Weber, Clare M.
 1999 *Embroidering Lives: Women's Work and Skill in the Lucknow Embroidery Industry*, State University of New York Press
- Xu, Wu , *et al.*
 2017 "Research on the Digital Communication and Development of Yunnan Bai Embroidery," *IOP Conference Series Earth and Environmental Science*
- Zhang, Yan , and Y. Y. Liu

2014 "A Modeling Language and Color Application Analysis of the Miao Nationality's Embroidery Pattern of Southeast of Guizhou Province," *Advanced Materials Research*, Vol. 1048, pp. 285-289.

付録1 苗語表 (筆者作成)

	漢語	日本語	日本語発音	IPA 表記
1	刺绣	刺繡	アーフォ	a:fəu
2	绣片	紋様を縫い付けたもの	ガンリュウホオビエ	gan liəu həu bi'æ
3	红色	赤	シャオ	f ^h iao
4	颜色	色	ジャ シャオ	dʒ _Λ ': f ^h iao
5	黄色	黄色	ファン	f ^h an _Λ
6	蓝色	青	マン	man _Λ
7	绿色	緑	ヌオ	n _Λ uo
8	紫色	紫	チューディオ	tʃ' iũ d iə
9	蝴蝶	蝴蝶	ゲバシヨ	g ^h ε' b _Λ f ^h iə
10	一	一	アイ	a' i
11	二	二	ワン	wüan
12	三	三	ベイ	bei:
13	四	四	ソ	ð' ə
14	五	五	ザ	z' a
15	六	六	デュ	d' iu
16	七	七	シヨン	f ^h 'əŋ
17	八	八	ヤ	y _Λ '
18	九	九	ジョ	dʒ _Λ ' ə
19	十	十	ジュ	dʒ _Λ ' u
20	十一	十一	ジュ ゲエイ	dʒ _Λ ' u g _Λ ' ei
21	百	百	ビエ	b' iæ
22	千	千	ツ	tʃ' i
23	万	万	ユウエ	yu _Λ ε
24	你去哪里	君は何処へ行く	ム モオ ハオ ザイ	mu _Λ mou' hau z _Λ ' ai'
25	你	君	ム	mu _Λ
26	我回家	私は家に帰る	ジ ロオ ザイ	dʒ:i l _Λ ou z _Λ ' ai'
27	我	私	ジ	dʒ:i
28	去	行く	ムオ	mou'
29	我去买菜	私は野菜を買いに行く	ジ ムオ マ ワン	dʒ:i mou' ma wüan
30	我爱唱歌	私は歌うのが好きだ	ジ アイ グウアンシェイ	dʒ:i a' i g ^h uan f ^h :ei
31	苗歌	苗族の歌	チ エイ	tʃ'i ei:
32	我叫边博	私の名前は辺博だ	ジ ア ベイ ビエンボ	dʒ:i a: bei: b' iæ' n bo

33	我 28 岁 (了)	私は (もう) 28 歳だ	ジ ワン ジュオ ヤ ホオ (ジア)	dʒ:i wʌn dʒ'uɔ h' ɔ(dʒ:a)
34	已经	もう	ジア	dʒ:a
35	我是贵阳人	私は貴陽の人だ	ジ デュ グウィヤン ラ	dʒ:i d_iəu g_uei y_lɑ ŋ la'
36	人	人	ラ	la'
37	鱼	魚	ニイエ	n_lie
38	我想吃鱼	私は魚を食べた い	ジ ヒヤン ナオ ニエ	dʒ:i hi^h'an nau' n_lie
39	糖	飴	ダン	d_a`n
40	腊肉	ベーコン	アイ イン	a`i: y_lin
41	加煤	石炭を入れる	ディオ マイ	d_iɔ' ma`i
42	牛肉	牛肉	アイ ルウァン	a`i: lʌn
43	猪肉	豚肉	アイ ビェ	a`i: b^hiε^x
44	鸡肉	鶏肉	アイ ゲイ	a`i: gh`ei
45	肉	肉	アイ	a`i:
46	鸡	鶏	ゲイ	gh`ei
47	鸟	鳥	ナアオ	na`.aʊ
48	石榴	ザクロ	ザイ シ リュ	z_ai ʃ^hi' liū
49	果子	果物	ザイ	z_ai
50	红色的花	赤い花	ビェン シウエ	b_`iæ`n ʃ^h`ue
51	绿色	緑	ヌオ	n_luɔ`
52	蓝色	青	ヌオ	n_luɔ`
53	叶子绿了	葉っぱが緑色に なった	ヌオ ガ ナオ	n_luɔ` gh^a' n_lau'
54	叶子	葉っぱ	ガ ナオ	gh^a' n_lau'
55	蓝色的天空	青い空	フエイ ワ ヌオ	fwei' w^l' n_luɔ`
56	黑色	黒色	サー ジャ	sa: dʒa
57	黑人	黒色人	ナ サー ジャ	n^l sa: dʒa
58	白色	白色	ソオ	θ`ou
59	白种人	白人	ナ ソオ	n^l θ`ou
60	黄色	黄色	フェ イエ	fwe y_lie'
61	黄种人	黄色人	ナ フェ イエ	n^l fwe y_lie'
62	灰色	グレー	グァ ガ シイウ	g_`u^l ga' ʃ^h`ou
63	灰	灰	ガ シイウ	ga' ʃ^h`ou
64	烧灰	灰を焼く	ペイ ガ シイウ	p_lhei ga' ʃ^h`ou
65	柴灰	薪の灰	ガー シイウ ドウ	ga: ʃ^h`ou d_ou
66	柴	薪	ドウ	d_ou
67	煤灰	石炭の灰	ガー シイウ メイ	ga: ʃ^h`ou mei

68	捡	拾う	チョ	tʃhɔ̃ˀ˥
69	螺蛳	マキガイ	ゲイ	gh˥˥ei
70	捡螺丝	マキガイを拾う	チョ ゲイ	tʃhɔ̃ˀ˥ gh˥˥ei
71	摘	採る	ヌエ	n˥ue˥˥
72	野菜	山菜	ワン ゴオ	wan˥˥ gõ˥˥
73	菜	野菜	ワン	wan˥˥
74	吃	食べる	ナオ	nau˥˥
75	摘野菜吃	山菜を採って食べる	ヌエ ワン ゴオ ナオ	n˥ue˥˥ wan˥˥ gõ˥˥ nau˥˥
76	喝	飲む	ハオ	ha˥˥u
77	水	水	アオ	a˥˥u
78	房子	部屋	ゼ	ze˥˥
79	田	田圃	リ	li˥˥
80	谷仓	穀物倉庫	ロン	lon˥˥
81	土地	土地	ラ	la˥˥
82	泥巴	泥	ガー ディ	ga˥˥˥ d̥ei˥˥
83	挖地	土地を掘る	ワ ラ	wa la˥˥
84	红薯	薩摩芋	ホン ショオ	hɔ̃˥˥ n̥ ʃh˥˥ou
85	豆芽	もやし	ドアオ チャン	daũ tʃ˥˥an
86	发芽	芽を出す	チャン	tʃ˥˥an
87	碗筷	お碗とお箸	ディア ディウ	d̥ia˥˥˥ d̥io
88	猫	猫	バイ	bai˥˥˥
89	老鼠	ネズミ	ネイ	nei˥˥˥
90	煮饭	炊飯	フウイ ニア	huai˥˥˥ ni˥˥
91	饭	ご飯	ニア	ni˥˥
92	煮菜	野菜を煮る	フウイ ワン	huai˥˥˥ wũan
93	煮肉	肉を煮る	フウイ アイ	huai˥˥˥ a˥˥i˥˥˥
94	炒菜	野菜炒め	ギエ ワン	g̥ie wũan
95	种菜	野菜を植える	ザイ ワン	z̥ai wũan
96	看	見る	ニエ	niě
97	看不见	見えない	ニエ マイ ボオウ	niě mai˥˥˥ b̥ou˥˥˥
98	听	聞く	ハン	han˥˥
99	你听不听	聞くか	ハン マ ハン	han˥˥ ma˥˥ han˥˥
100	听不见	聞こえない	マイ ハン	mai˥˥˥ han˥˥
101	听见了	聞こえた	ハン ラ	han˥˥ la˥˥
102	看见了	見えた	ボオウ レ	b̥ou˥˥˥ l̥e
103	走路	歩く	ヒ イェ ギ	hi˥˥˥ y̥ẽ g̥i
104	跑步	走る	ワン ジウレ	wũan dz̥'ue
105	爬地	這う	ジ ベイ	dz̥i bei˥˥˥
106	上衣	上衣	ウー ギ ゴオウ	wu˥˥˥ g̥i˥˥˥ gõ˥˥˥

107	內衣	中に着る服	ウー ギ ニアン	wu: g__i: nian
108	裙子	スカート	ホウ	hou:
109	盛装	晴れ着	ウーベイ	wu: bei
110	便装	日常着	ウーゲン	u: g__ən
111	男, 公	男性、雄	ベイ	bei
112	裤子	ズボン	カ アオ	kʰa` au:
113	挑花绣	挑花繡	ホ ガン ナオ	hò g__an na
114	单针绣	单針繡	アン ディエン ジュ イ	a`n d` en` dz̩yɪ
115	双针绣	双針繡	ワン ディエン ジュ イ	wūan d` en` dz̩yɪ
116	打籽绣	打籽繡	チュウダドオ	tʃiu`dΛ`dɔ
117	黑色	黒色	ウー サ ジャ	wu: sΛ` dz̩` a:
118	破线绣	破線繡	パンフォレイ	pʰan fɔ lɛi
119	绕绣	繞繡	ヒョ ショ	hɥio` j` ɔ
120	辫绣	辮繡	ド ヒ	dʰo` hɪ
121	织	織り	ド ジェ	dʰo` dz̩` e`
122	马尾绣	馬尾繡	ガ デン マ イ	g__a` de ma` yɪ
123	绿色	緑色	ア モン ヌオ	a`m on n ɔ
124	飞龙	飛ぶ龍	ガン イエ	g__an y` e`
125	麒麟	麒麟	マ フェイ ワン	ma` f ei` wan`
126	枫树	楓の木	ダオ ニイエ	d_a`u nie`
127	飞到天上去	空へ飛ぶ	ダオ フェイ ニア	d_a`u f ei` niΛ
128	织锦	織錦	フェイ ネイ	fwei` nei:
129	深青色	深めの青色	ガー ナオリユ	ga: nau` liū
130	浅青色	薄めの青色	ゲイ ガー	gh`ei ga:
131	中青色	青色	ガー ノン	ga: non ⁹
132	粉色	ピンク	ディウ ビ	d_ɪo: bi`
133	黄绿色	黄緑色	フェイ ナオ	fwei` nau`
134	紫红色	紫紅色	ロウ オウ チ	lòu` oū tʃʰɪ
135	浅红色	薄めの赤色	ゲイ オウ ラン	gh`ei oū ran
136	凤	鳳凰	ダナオウ	dʰa`n ⁹ ou:
137	龙	飛	ウン	v__ən
138	花	花	バン	b__Λŋ
139	桃子	桃	ザイ ゼイ	z` ai: ɔzei:
140	数纱绣	数紗繡	ケガチャン	kʰe`ga`tʃʰan ⁹
141	堆绣	堆繡	ガリヤ	g__a`l` a`
142	捆金	捆金	コンジン	kʰõn ^x dz̩i ⁿ
143	平绣	平繡	オガン	ɔ`gan
144	皱绣	皺繡	ケオウ バン	kʰeo b__an
145	绞绣	絞繡	シュウ ハオ ジュ	ʃ ũ h ou` dz̩` ũ

146	貼花綉	貼花繡	ドード	d_o:dō
147	牛	牛	ルウアン	lua_n

付録2 李 YW (1939 年生、男性、羊排村) のライフヒストリー (筆者作成)

	年	経 歴	備 考
1	1939 年	出生	
2	1945 年	幼稚班入班	
3	1948 年	小学校入学	
4	1954 年	小学校卒業	記憶がある時から、国へ「公糧」を払っていた。家は 32 挑ぐらいの田圃を持っており、年に 500 kg 以上の米を供出していた。家には、父 (李 ZQ)、母、兄 (李 YF)、姉 (李 YM)、本人 (李 YW)、弟 (李 YR) と従兄 (李 YK) の 7 人が一緒に住んでいた。貧しかったので、満足に食べられなかった。
		人民助学金をもらい、雷山県の中学校入学	人民助学金：政府が学生に生活費を補助した。甲等月 7.5 元、乙等月 5.5 元。漢語を学び始めた最初の学生であった。学生は西江の者が半分を占めていた。他は凱里開懷からきていた。中学校卒業後、高校に進学したのは 1 人しかいなかった。高校は鎮遠にあった。
5	1956 年	長栄小学校 (西江) の教師になった	小学校 3 年と 4 年の国語、1 年と 2 年の算数を教えていた。
6	1957 年	西江民族小学校に勤務	整風運動が始まり、全県の教師が集まり会議をした。主に党風不正な教師を批判した。
7	1958 年	烏尧小学校に 2 年勤務	5 年生の国語を教えていた。人民公社が始まり、集体生産、10 数戸が 1 組となり、生産活動を行った。(人民公社初級社)
8	1959 年	黄里小学校に 3 日のみ勤務し、烏尧小学校に戻った	飢饉が起き、黄里小学校の 3 日間は、毎日山に行ってサツマイモを掘っただけである。3 日後、また烏尧小学校に戻った。

9	1960年	控拜小学校（西江区興龍郷）に勤務	<p>①飢饉のため、児童は学校に来なかった。教師の仕事は教えるのではなく、児童が学校に来るように家を訪ね勧めることであった。その頃、西江出身の女性が空腹にたえかねて、2人の子どもを殺して食べたという事件に遭遇した。</p> <p>②人民公社高級社：西江には4つの村があり、1つの村が1つの隊となり、村の境界線で分けられた。平寨隊、東引隊、羊排隊、南貴隊の4つであった。田圃の少ない平寨隊と東引隊が副業を担当し、賃金稼ぎが主要な仕事であった。田圃が多い羊排隊と南貴隊は農作業を担当した。</p> <p>③「大鍋飯」¹⁴⁷を食べていた時代であった。家にはほとんど米がなかった。本人は学校に務めていたので、月15kgの米が国からもらえた。</p>
		開覚小学校に勤務	児童がいなかった
10	1961年	結婚した。西江に戻り、しばらく休憩をとった。 教育局が現地の教師を集め、西江の教育を回復させようとした	凱里の脚高糧食管理所に就職した。糧食管理所といっても、米がなく、ご飯も食べられなかった。結局その仕事を辞めて、また西江に戻った。本人、李YZ、もう1人（名前を忘れた）の3人が西江小学校に入り、教育の回復のために力を尽くした。
11	1964年	凱里師範学院へ進学	主に、教育学、高校国語、小学校数学を勉強した。1年で学業を終わらせ、西江に戻った。
12	1966年	四清運動、丹寨に行った	公社の文書の整理、受領が主な仕事であった。同年、文化大革命が始まった。紅衛兵が反乱を起こした。本人が所属する工作隊は荷物を整えて各自のいたところに帰った。本人は西江の学校へ帰った。
13	1971年	西江で大きな火災があった	
14	1975年	1人っ子政策が始まり、学校に来る児童が減少した。	
15	1978年	改革解放	西江の生活が改善し始めた。生活が自由になった。

¹⁴⁷ 大鍋飯：人民公社の俗称。

16	1981年 /1982年	分田到戸	生活の保障がされるようになった。 「多種多得」。雑交水稻を植える技術もできるようになった。
17	1985年	北京全国校長会議が開催	学校が7年制（52制：小学校5年、 中学校2年）から9年制（63制：小 小学校6年、中学校3年）に変わった。
18	1990年	妻が病気で死亡した。 2か月後に宋Hと結婚した	宋Hには男児一人あり
19	1999年	退職	退職後、家で農作業をするのが主な 仕事となった。
20	2000年	家の土地、田圃を子どもに分けた	子供は6人。長男（李XP）、次男（李 JP1）は教育関係の仕事で雷山県にい る。3男（李JP2）は農業をしながら、 レストランを経営している。長女（李 LP）は幼稚園の教師、次女（李QP） 江蘇省でアルバイト、4男（李KP） は西江の旅行会社で就職している。 長男はホテルを建てて、外省人に年 20万元の家賃で貸している。
21	2008年	家で食堂を始めた	本人は野菜を作ることが主な仕事 で、普段は鳥を飼ったり、食堂の買 い物したりしている。

付録3 宋H（1963年生、女性、東引村）のライフヒストリー（筆者作成）

年代	年	経歴	備考
1	1964年	出生	
2	1970年	小学校入学	
3	1975年	小学校卒業	卒業後、進学せずに、家で農作業の手伝いをしていた。
4	15歳ごろ	刺繍を学び始めた	父が中学校に進学をさせようとしたが、勉強嫌いのため、進学をしなかった。家で農作業の手伝いをし、料理し始めた。15歳の頃、母から刺繍を学び始めた。
5	1985年	結婚	結婚後、自分で作った刺繍を雷山県の定期市に持っていき、販売していた。腕がいいので、買ってくれる客が多かった。一枚の刺繍を数十元ので売った。
6	1987年	息子を出産（現在の名前は李KP）	出産後も刺繍し、販売をしていた。
7	1990年	3歳の息子を連れて、李YW（1939年生まれ）と再婚した。	李YWと結婚後、夫の家の土地、田圃が多いため、刺繍する時間があまりなかった。刺繍できるのは農閑期の11月下旬から翌年の2月ぐらいまでであった。刺繍は主に日常着で、販売用の刺繍をする余裕がなかった。その状況は2000年に夫が土地を子どもに分けるまで続いていた。
8	2000年	夫が土地を子どもに分けた。	農作業にあてる時間が減少し、刺繍する時間が多くなった。
9	2008年	西江の観光客が激増し、食堂を始めた。	食堂は自家製の野菜、家畜がメインで、観光客の目を引く。食堂をしているうちに、刺繍の販売をするようになった。主に食事に来る客に刺繍を見せて販売をしている。
10	2016年	政府が西江苗寨を拡大するため、土地を接収した。	宋Hの家の畑が接収された。農耕できる畑が二つしか残っていなかったため、畑を政府に渡し、同じ広さの土地をもらい、家屋建築の許可を得た。実子の李KPの結婚用の家を建てた。

付録4 西江刺繍伝承の時代背景（筆者作成）

年代	時間	社会背景	刺繍に関して	技術	刺繍伝承の形式	
1960年代	1958年 ～ 1961年	飢饉	・現地の女性は刺繍する余裕がない	刺繍の製作： 糸紡ぎ、布織り、描画、 布の縫い付け、模様 の縫い付け、色合わせ、 刺繍	・母→娘（オバ→ 姪） ・同時代の女性	
	1966年	文化大革命、 四清運動	・刺繍は贅沢と思 われる			
1970年代	1971年	西江大火災	・坐家をしなくな る		刺繍	・母→娘（オバ→ 姪） ・同時代の女性
	1975年	一人っ子政 策				
	1978年	改革開放				
1980年代	1981年	分田到戸	・刺繍したものを 雷山県の定期市 で売る（宋H）	刺繍の製作： 描画、布の 縫い付け、 模様の縫い 付け、色合 わせ、刺繍	・母→娘（オバ→ 姪） ・同時代の女性	
	1982年	西江は貴州 省人民政府 により「貴州 省東線民族 風情旅行景 点」と指定さ れた				
	1985年	学校の制度 が七年制（五 二制：小学校 5年、中学校 2年）から九 年制（六三 制：小学校6 年、中学校3 年）に変わっ た。女子も学 校に行くよ うになった。	・子供が学校に行 くため、刺繍す る時間が減少			
		現地の若者 が出稼ぎ	・若者は刺繍を学 ばなくなった	刺繍の製作： 描画、布の 縫い付け、	・母→娘（オバ→ 姪）	
		結婚式が漢	・結婚の衣装が自			

1990年代		族化	分で作らない。 母の衣装を継承する、又は買うようになった ・民族衣装の着用が減少	模様の縫い付け、色合わせ、刺繍	・同時代の女性→同時代の女性
	1992年	貴州省が省レベルの文物保护单位と認定された			
	1990年代の末	現地の観光開発のため、土地が政府に接収され始め、農民は土地を持たなくなった。自給自足の生活はできなくなった。	・重い農作業から解放されたが、生計を維持するため、働きに出る。刺繍をする時間は少ない		
2000年代	2003年	「苗年文化週」が西江で行われ、メディアにより報道され、西江苗寨の観光開発を促進した	・西江苗族の刺繍が外来の人に知られ、知名度が高まった ・刺繍を観光商品として開発する	刺繍の製作： ①描画、布の縫い付け、模様の縫い付け、色合わせ、刺繍 ②刺繍サンプルを買う、色合わせ、刺繍	・母→娘（オバ→姪） ・同時代の女性→同時代の女性
	2004年	貴州省が初期村鎮の保護と建設の重点対象とされた	・刺繍サンプルが販売されるようになった		
	2005年	「中国民族博物館西江千戸苗寨館」建設			
	2009年9月24日	貴州省第十屆人民代表大會常務委員會第二十			

		九次会議により、「貴州省風景名勝区条例」制定			
	2008年	観光業が発展	・刺繍教室で刺繍を教えるという新しい伝承の方式が現れた		<ul style="list-style-type: none"> ・母→娘（オバ→姪） ・同時代の女性→同時代の女性 ・刺繍教室

付録5 宋Hの刺繍時間（筆者作成）

年	月 日	刺 繍 時 間
2015年	10月18日	
	10月19日	
2016年	2月26日	3時間
	2月27日	2時間
	2月28日	2時間
	2月29日	
	3月1日	
	9月3日	
	9月4日	
	9月5日	
	9月6日	
	9月7日	0時間（酒作り）
	9月8日	0時間（酒作り）
	9月9日	0時間（定期市）
	9月10日	0時間（酒作り）
	9月11日	0時間（米を干す、掃除）
	9月12日	0時間（農作業、雷山坪へ笋を買いに行く）
	9月13日	0時間（酒作り）
	9月14日	0時間（1年分の酸辣椒を作る）
	9月15日	0時間（甥の結婚式の手伝い）
	9月16日	0時間（甥の結婚式に来た親戚を招待し、宴会をする）
	9月17日	
	11月17日	0時間（苗年、晴れ着に銀飾りを縫い付ける）
	11月18日	0時間（苗年、晴れ着に銀飾りを縫い付ける。もち米を蒸して、「打糰粑」をする）
	11月19日	0時間（苗年）
	11月20日	0時間（苗年）
2017年	9月9日	
	9月10日	
	9月11日	
	9月12日	
	9月13日	
	9月14日	
	9月15日	
	9月16日	
	9月17日	
2018年	2月20日	
	2月21日	

	2月22日	
	2月23日	
	2月24日	
	2月25日	0時間（観光客接待など）
	2月26日	0時間（観光客接待など）
	2月27日	1時間
	2月28日	
	3月10日	
	3月11日	
	3月12日	
	3月13日	
	3月14日	
	3月15日	1時間
	3月16日	1.5時間
	3月17日	3.5時間
	3月18日	1.5時間
	3月19日	0時間（控拝村の刺繍試合を見に行った）
	3月20日	3時間
	3月21日	
	3月22日	

付録6 宋H夫婦の日常（筆者作成）

2018年3月16日	李YW	2018年3月16日	宋H
00:00～08:30	寝る。	00:00～08:15	寝る。
		08:15～08:30	洗面、髪をとかす。
08:30～09:00	起きて、洗面等をする。朝ごはんを食べる。	08:30～09:00	刺繍品販売店を開き、刺繍品や蠟染などを出す。簡単な朝食を用意する。
09:00～10:15	刺繍品販売店で見張りする。	09:00～15:30	村民組組合長であるため、雷山県政府により開かれる会議に参加しに行った。会議が終わって、ついでに雷山県で買い物する。
10:15～12:30	筆者に店の見張りをお願いし、畑に野菜を取りに行く。		
12:30～14:30	畑から帰り、野菜をおいて店頭で筆者と一緒に店の見張りをする。途中で観光客が来て、苗族の婚姻について話をした。		
14:30～15:30	宋Hが家にいないため、昼ご飯は筆者が作った。筆者と一緒にご飯を食べる。片付けも筆者がした。		
15:30～16:30	昼寝する。	15:30～16:00	雷山から帰り、雨のため、刺繍品販売店を閉めた。
16:30～19:00	1つの馬鈴薯を4等分し、黒い肥料で混ぜる。一日放置して、馬鈴薯の種として植える。	16:00～17:30	刺繍する。刺繍している打ち、昨年宋Hの家で食事をした観光客から電話があり、知り合い10人が西江に観光しに来たので、10人の食事を予約した。
19:00～19:45	観光客がきたため、接客をする。西江に関する事について観光客と交流する。	17:30～19:45	10人の観光客の食事の用意する。

19:45~21:45	観光客に誘われて一緒に食事をする。お酒を飲み、歌垣をしながら、愉快的雰囲気です。	19:45~21:45	観光客に誘われて一緒に食事をする。宋Hが歌垣をしながら、観光客にお酒を進める。お酒ばかり飲んでいたので、ご飯を食べられなかった。
21:45~00:00	観光客が去り、2階でテレビを見る。	21:45~22:00	観光客が去り、ご飯を食べる。
		22:00~22:15	食べきれなかった野菜やご飯などを冷蔵庫に収め、簡単に片付ける。お皿洗いや掃除などを翌日バイトの毛家慧にやってもらう。
		22:15~00:00	筆者を連れ、羊排寨の女性と一緒に経営している長卓宴のレストランに行った。そこで李WFなど現地の女性4人と男性1人と「五摸一」というトランプゲームをした。
		00:00~	家に帰り、寝る。
2018年3月17日	李YW	2018年3月17日	宋H
00:00~09:00	寝る。	00:00~08:15	寝る。
		08:15~08:30	洗面、髪をとかす。
		08:30~09:00	刺繍品販売店を開き、刺繍品や蠟染などを出す。
09:00~09:30	起きて、洗面等をする。鳥に餌をやる。	09:00~09:30	朝食を用意する。
09:30~10:00	朝ごはんを食べる。ご飯を食べているうち、村の男性が李YWに敬橋儀式の参加と昼食を誘いにきた。	09:30~10:00	朝ごはんを食べる。
10:00~10:30	村の祭り「敬橋」のところにいき、鼓蔵頭をはじめとする村の年配の男性が集まり、儀式を行う。李YWは顔を出す感じで、村の男性と30分ほど話して、儀式から離れ、山に行った。	10:00~12:30	前日のお皿などを洗う。刺繍品販売店の店頭で刺繍しながら、店を見張る。

10:30~12:30	その頃、降雨量が少なく、田圃には水がなく、稲の栽培に不利である。そのため、山に行き、自家の田圃に水を引く。山の中の山菜（蕨など）を取り、自家の畑の野菜を取って家に帰る。		
12:30~12:50	服を着替えて、敬橋儀式後の長卓宴に行く。その長卓宴に参加できるのは男性だけである。	12:30~13:30	刺繍する。
12:50~15:00	食事をし終わって、酔っている状態で家に帰る。	13:30~15:00	昼ご飯を作り、筆者と一緒に食べる。食べ終わって、片付ける。
15:00~17:30	彼の飼っている鳥に餌をやってから、昼寝する。	15:00~17:30	刺繍する。
17:30~00:30	敬橋儀式のところに行き、晩食もそこで食べる。儀式に誘われた男性と一緒にお酒を飲む。酔っ払って、村の男性に家まで送ってもらった。	17:30~20:15	現代的な要素と苗族刺繍や蠟染と結合して民族特色のある衣装をデザインし、刺繍品販売店で販売しようとしている。そのため、西江の衣装販売店を回し、参考になれるスタイルを探す。
		20:15~21:30	晩食を用意し、筆者と食べる。食べ終わって、片付ける。
		21:30~00:30	李大砲（男性、60代）、李氏（現地の人に「缺牙子」と呼ばれている、50代、男性）、李氏（現地の人に「李老師」と呼ばれている60代）、龍XC（50代代、女性）と一緒に「五摸一」と呼ばれるトランプゲームを遊ぶ。
00:30~09:00	寝る。	00:30~01:00	展示した刺繍や蠟染を刺繍品販売店を閉める。
		01:00~08:30	寝る
2018年3月18日	李 YW	2018年3月18日	宋 H
00:00~09:00	寝る。	00:00~08:30	寝る。

09:00～09:30	起きて、洗面等して、鳥に餌をあげる。	08:30～08:45	起きて、洗面して、髪をとかす。
		08:45～09:15	刺繍や蠟染をだし、刺繍品販売店の開店準備をする。
		09:15～09:30	筆者の髪をとかし、西江苗族の髪型にする。
09:30～09:50	朝食する。	09:30～09:50	朝食する。筆者が朝食を買ったため、朝食の用意をしていない。
09:50～10:00	鍬などの生産道具などを出す。	09:50～10:00	鶏の糞便を桶に入れる。
10:00～14:00	畑に行き、馬鈴薯を植える。	10:00～14:00	畑に行き、馬鈴薯を植える。刺繍品販売店を筆者に頼み、店の見張りをしてもらおう。露天売店を出している龍頭翠（50代、女性）にも店を見てもらおうとお願いした。
14:00～15:00	畑から家に帰り、着替えをして、昼食する。	14:00～15:00	畑から家に帰り、着替えをして、昼食する。食事が筆者が用意した。
15:00～17:00	昼寝する。	15:00～16:00	昼寝する。
17:00～17:30	テレビを見る。	16:00～17:30	朝は白菜の種を畑に持って行くのを忘れたため、また畑に行こうとするが、雨で行けなかった。そして販売店の露天に出している商品にビニールをかけて、家で刺繍する。
17:30～19:30	刺繍品販売店の見張りをする。	17:30～19:30	雨が止んだので、筆者をつれて畑に白菜の種を蒔きに行った。家から畑まで歩いて50分くらいかかる。行きと帰りの途中で、筆者に姉妹の婚姻状況や、村のことについて語る。
19:30～21:00	テレビを見る。	19:30～20:00	ご飯を炊き、野菜を洗い、料理の準備をする。
		20:00～20:30	刺繍品販売店の露天に出している物を収め、閉

			店する。
		20:30～21:00	料理する。
21:00～22:15	食事をする。	21:00～22:15	龍頭翠を誘って、一緒に食事をする。お酒を出してみんなで飲む。
22:15～00:00	テレビを見る	22:15～22:45	食事が済、皿洗いや掃除などをして片付ける。
		22:45～23:50	筆者を旅館まで送り、旅館の経営者である友人の李 WF (1972年) と話をする。
		23:50～00:00	家に帰る。

付録7 録音資料 李 YW (1939 年生、男性、羊排村) と宋 H (1963 年生、女性、東引村) 夫婦との会話、中国語で会話した (2018 年 3 月 16 日)

行	時間	話者	中国語	日本語訳
1	00:00	筆者	“乌贝”，“贝”是公鸡哦？盛装叫“乌贝”呀？	「ウーベイ (wu:bei)」、「べい」は雄の鶏ですか？晴れ着は「ウーベイ」というのですか。
2	00:06	李 YW	这衣服它是男人穿的，现在改为女人穿。	この衣装は男性の服でしたが、現在は女性の服になりました。
3	00:14	宋 H	所以叫做“乌贝”嘞。	だから「ウーベイ」というのです。
4	00:16	李 YW	“贝”就是公的意思。	「貝 (bei)」は雄の意味です。
5	00:16	宋 H	贝，贝给，“贝给”就是公鸡。	「貝 (bei)」、「貝给 (bei gei)」、「貝给 (bei gei)」は雄の鶏の意味です。
6	00:20	筆者	“贝给”是公鸡啊？“贝给”公鸡，那盛装是男人穿的。	「貝给 (BEI GEI)」は雄の鶏ですか。じゃ、晴れ着はもともと男性の服ですね。
7	00:28	宋 H	嗯，以前是男人穿的。	そうです。昔は男性の服でした。
8	00:44	筆者	(对这宋 H)你不怕锥到你的脚啊？	(宋 H に向いて) 足が刺されることに怖くないですか？
9	00:47	李 YW	这个衣服是男人穿，过去是母系社会的时候，母系社会的时候嘞，就是男人穿这个衣服，现在把这个衣服变成女人穿了。那个苗名呢就是“乌贝”，“贝”是公的意思，“乌”就是衣服的意思。懂不懂这个？	これは男性の服で、昔母系社会の時代に、これは男性の服でした。現在女性の服に変えました。苗語では「ウーベイ」といって、「貝」は雄で、「ウー」は衣装の意味です。分かりましたか。
10	01:13	筆者	乌，那我们平时穿的这个就叫“乌”啦是不是啊？	「ウー」、じゃ我々日常的に着るものは「ウー」というのですか。
11	01:16	宋 H	嗯，这叫做“乌”。	そう。これは「ウー」です。
12	01:19	筆者	羽绒服叫什么？	ダウンジャケットは何と言いますか。
13	01:20	宋 H	没有叫羽绒服啊。	(苗語には) ダウンジャケットはないです。
14	01:21	筆者	哦，就叫“乌”啦。裤子呢？	そうですか。じゃ「ウー」といっていいですね。ズボン？
15	01:24	宋 H	“加凹”。	「カアオ」
16	01:25	筆者	裤子“加凹”，加凹，裤子衣服，乌，加凹。银饰怎么说啊？	ズボンは「カアオ」、「カアオ」、ズボン、衣装、ウー、カアオ、銀飾りは何と呼びますか。

17	01:40	宋 H	银饰“乌尼”。	銀飾りは「ウーニ (wu:ni') 」と いいます。
18	01:41	筆者	乌尼啊？	「ウーニ」ですね。
19	01:45	宋 H	“尼”，“尼”就是银。	「ニ」、「ニ」は銀です。
20	01:45	李 YW	“尼”就是银子。	「ニ」は銀ですね。
21	01:47	宋 H	一套的盛装就叫做“乌尼”。	晴れ着の銀飾りセットで「ウーニ」 というのです。
22	01:48	李 YW	银，银衣服。	銀、銀の衣装。
23	01:54	筆者	哦。银衣服啊。	なるほど、銀の衣装ですね。
24	02:01 ～	宋 H、李 YW	(苗语对话)	(苗語の会話)

付録8 録音資料 穆XH(40代、男性、控拝村)との対話、中国語で会話した(2018年3月19日)

行	時間	話者	中国語	日本語訳
1	00:00	控拝村の人	(苗語対話)	(苗語の会話)
2	01:46	筆者	你没有参加银匠比赛啊?	銀飾り作りの試合に参加していますか?
3	01:50	穆XH	估计要等他们人多一点。	参加する人が増えるとよいですが。
4	01:52	筆者	你报名了吗?	あなたは応募しましたか?
5	01:54	穆XH	我来组织	私は組織者です。
6	01:55	筆者	你来组织啊?	そうですか。
7	01:56	穆XH	哦。	はい。
8	01:57~	現場にいる人	(苗語、漢語交流)	(苗語や漢語で交流する)
9	03:33	筆者	现在是自由活动啊?那个是属于什么?雕花啊?	今はフリータイムでしょうか?
10	03:35	穆XH	因为现在主要都是,我们人数,基本上都是出去了。那个安排那个活动太紧凑,所以说每一天都有活动,就是现在我们人啊,现在我把我们这个活动搞完,不完的话,明天他们下一个活动又来。	今はほとんどの人は出たので。あのスケジュールはちょっときついです。だから、毎日イベントがあります。今ここにいる人はですね、このイベントを早く終わらせなければなりません。そうじゃないと、明日また他のイベントがありますし。
11	03:53	筆者	又进行不下去是吧?	また進めないことになるのですね。
12	03:54	穆XH	诶,所以说给他替换一下活动,那个晚的时候,但是那时候人数太多,又做起来的时候,那时候肯定是热闹,但是就是他人数太紧凑了,我们也没办法。	ええ。だからイベントの時間を変えました。元々夜に行いますが、その時人が多いから、やり始めるときっと賑やかですよ。しかし、人が多いから、仕方がないです。
13	04:10	筆者	哦哦。他那个是什么嘛?那个是雕花啊?	なるほど。あれはなんでしょう?彫花ですか?
14	04:13	穆XH	那个是雕。	そうです。
15	04:14	筆者	那个是自己设计啊?	自分でデザインしたのですか?
16	04:16	穆XH	这个也是雕刻的。属于雕刻类的。	あれも彫刻です。彫刻の範囲に属します。
17	04:20	筆者	属于雕刻。	そうですか。
18	04:21	穆XH	这边是花丝类的。	これは花糸です。
19	04:22	筆者	那边是花丝类的哦。	あれは花糸ですね。

20	04:23	穆 XH	嗯，那边是锤打的。	そう。あっちは錘打です。
21	04:24	筆者	哦，那个是锤打的。不同的类别比赛不一样哦。	はい。あっちは錘打ですね。種類が違いますね。
22	04:27	穆 XH	3 个组，人数还比较少。	3 組みです。参加者はちょっと少ないです。
23	04:33	筆者	好多都出去了哦？	みな村から出たのですね。
24	04:34	穆 XH	诶。现在都不在家。等到鼓藏节的时候，还要过四五年，还有四五年，那时候我们(听不清)，因为这一次的话呢有点紧张，每一个人都要忙，回不来。	そう。今ほとんど家を留守にしています。鼓蔵節の時にになれば、みんな帰って来ると思いますが、後 4、5 年ですね。あの時（聞き取れなかった）、今回のイベントはですね、ちょっと時間的にきついため、みんな忙しくて、参加することはできないです。
25	04:54	筆者	好多银匠都出去挣钱去了哦？	銀匠たちはみんな出稼ぎに行っていますね？
26	04:56	穆 XH	但是那时候我们也具体指定人数必须回来，提前做好工作，今年我们的海报贴得很晚。	その時（鼓蔵節）になれば我々もみんなに帰ってもらうように、前もって手配します。今年はポスターを貼るのが遅かったです。
27	05:06	筆者	哦哦，我在西江看到的海报，所以赶紧来看看。你什么时候开始学的啊？	そうですか。私は西江でポスターを見て、みたいと思って（控拝）にきました。穆さんはいつから銀飾りの技術を学び始めたのですか？
28	05:12	穆 XH	我那个早就学了，因为我们家基本上都是这个，你看现在的年轻人都慢慢慢慢的	あれは早くからできるようになりました。家はほとんど全員銀飾りを作っています。今の若者は（学ぶのが）遅いです。
29	05:19	筆者	哦，都不爱学了。	そうですね。みんな勉強する意欲が少ないですね。
30	05:21	穆 XH	现在主要是要以年轻人为主才行，但是实际上年轻人……	今は若者に勉強してもらわなければなりません。しかし、実際若者たちは……
31	05:30	筆者	都是老年人做得比较多了哦。	するのは年配者のほうが多いですね。
32	05:32	穆 XH	对啊。	そうです。
33	05:33	筆者	做的这个会不会就是说雕的花呀这些会不会跟衣服上这些花配呀？	この銀飾りにある紋様を衣装の紋様に合わせることはありますか。

34	05:41	穆 XH	懂得文化的人，如果有这种文化，有这种文明的，才是真的懂得苗族文化。不会这个人呢，他就基本上是现代。	文化を知っている人、もしこのような文化、このような文明があれば、苗族の文化を理解することはできます。これができなければ、現代的ですね。
35	05:53	筆者	哦哦哦，现在打的那些花呀这些都是原来老一辈打的那个东西，照着打。或者是女人的刺绣的衣服上的那个。	そうですね。今の銀飾りの紋様は前の銀飾りの紋様を真似していますか。女性の刺繍の衣装の紋様を参照にしますか。
36	06:01	穆 XH	实际上我们打的一些图案，这里就是有一些刺绣都是相结合的。	実際我々がデザインした紋様には刺繍に合わせるところがあります。
37	06:07	筆者	这样的啊。哦。我还以为没有关系嘞。那还是可以啊。	そうですね。関係ないかと思っていました。銀飾りは刺繍を参考にすることもありますね。

付録9 録音資料 宋 H (1963 年生、女性、東引村) との会話、中国語で会話した (2016 年 2 月 29 日)

行	時間	話者	中国語	日本語訳
1	08:24	筆者	我们那边还有绣那种菩萨呀, 绣来裱起来, 然后供起来	私の実家では観音菩薩を刺繍したり、刺繍したものを表装して供えることがあります。
2	08:47	宋 H	哦。今天星期天哦？	そうですか。今日は日曜日ですか。
3	08:49	筆者	星期天, 嗯。明天星期一了。	日曜日です。明日は月曜日です。
4	08:54	宋 H	看他们通不通知绣花, 一般绣花就是星期一和星期二。	明日みんな集まって刺繍するかどうか連絡を待ちましょう。普通刺繍するなら月曜日と火曜日です。
5	09:02	筆者	那你去绣花的话这边 (餐馆与刺绣店面) 怎么办? 大叔看啊?	刺繍に行ったら (食堂と刺繍品販売店) はどうしますか? おじさん (李 YW) に見てもらえますか?
6	09:07	宋 H	这边就, 嗯, 他看。	こっちは彼に見てもらいます。
7	09:09	筆者	他知道这些价钱不啷?	価格とかはわかりますか?
8	09:11	宋 H	有些我写价钱, 有些没有那么多人来要, 有人要的话他就打电话给我。	価格は書いたものもあります。そんなに買う人はいないです。もし買う人がいれば、連絡してくれます。
9	09:17	筆者	哦。这些绣花的线啊这些的, 是到集市上买的吗? 还是	そうですか。この刺繍の糸は市場で買うのですか。それとも。
10	09:29	宋 H	诶, 到集市上买。	そう。市場で買います。
11	09:32	筆者	原来这些绣花的布都是你们自己织吧?	本来ならこの布も自分で織っていたのでしょう。
12	09:36	宋 H	嗯, 黑布才是自己织, 绸缎不是, 绸缎也是买的。	そうです。黒い布は自分で織りませ、絹織物は違います。絹織物は買っています。
13	09:42	筆者	嗯, 就这种布是自己织的是不是啊?	そうですか。このような布は自分で織るのですか。

14	09:44	宋 H	这个也是买的, 有些是织的。	これも買っています。織る人もいますが。
15	10:58	筆者	绣一会儿要裹一下啊。	刺繍しながら巻くんですね。
16	11:00	宋 H	嗯, (不然) 它要松来了。	そうしないと緩くなってしまいます。
17	11:06	筆者	这也是就是那个培训班里面那个老师教的啊? 老师是哪里的啊?	これはあの刺繍クラスの先生に教えてもらったのですか。あの先生はどこ出身ですか。
18	11:12	宋 H	雷山的。	雷山県の出身です。
19	11:13	筆者	雷山来的啊?	雷山から来たんですね。
20	11:30	筆者	我看那边好多那个房子都贴了那些住宿啊, 你们这边当地的好多都搞这个。	あの辺のたくさんの家の壁には民宿という紙が貼ってあると見ましたが、西江では民宿を經營する人が多いのでしょうか。
21	11:39	宋 H	诶, 有些他有点条件, 那个淡季没有多少, 到那个旺季, 黄金周啊这些, 有些找不到嘛, 他就慢慢的找 (民宿)。	そう。家の状況がいいです。シーズンオフの時は民宿をする家も減ります。最盛期やゴールデンウィークだと観光客はホテルを予約できないから、民宿を探します。
22	11:50	筆者	哦。家里面那种民宿还是有的哈? 其实那种民宿可能还好一点哦, 我觉得苗族的人还是蛮热情的, 又可以和他们聊聊天啊, 比住酒店好。	そうですか。自分の家を民宿に使うのがありますね。正直、そのような民宿の方が魅力的ですね。私は苗族の皆さんはとても親切だと思っています。話もできるし、ホテルよりはるかによいと思います。
23	12:14	宋 H	是, 比酒店好嘛。	そうです。ホテルよりいいですよ。
24	12:16	筆者	肯能家里面环境是没有酒店好, 但是住这种家里面好一些。	家の民宿はもちろん泊まるにはホテルほど便利ではありませんが、家のほうがよいと思います。
25	12:22	宋 H	是啊。	そうです。
26	12:49	筆者	像这边一般不太准修房子了哈?	西江では家を建てることは簡単なことではないでしょう。
27	12:52	宋 H	诶。	ええ。
28	12:54	筆者	就不准了吧应该是。	許可はもらえないでしょう。
29	12:57	宋 H	现在政府又不许拆那个老房子, 那个古老的。	現在政府は古い建物を壊すことを禁じています。

30	13:04	筆者	嗯。可不可以修新的呢？就是自己找块地皮自己再修新房子。	そうですか。新しく建てるのはどうですか。自分で土地を探して、新しい家を建てることは可能ですか。
31	13:11	宋 H	那个也得要由那个政府批准你才能够修，他批你就建，他不批你就建不成，他不让你拉材料。	それも政府の許可をもらわなければできないです。政府がいいと言ったら、建てることはできますが、ダメと言われたら建てることはできません。材料を村の中に運ぶことができないからです。
32	13:53	筆者	你们现在还穿一点汉族的衣服，原来你们每天都穿你穿的里面这种（常服）啊？	今西江の女性は漢族の衣装も着ることもあります。もともと毎日このような服（ウーゲン）を着ていたのですか。
33	14:04	宋 H	诶。	ええ。
34	14:05	筆者	你喜欢穿你们苗族的还是穿汉族的啊？	苗族の衣装と漢族の衣装どっちが好きですか。
35	14:09	宋 H	两种都穿。	両方着ます。
36	14:11	筆者	两种都穿啊？	両方もですね。
37	14:12	宋 H	嗯。但是我们出去吃酒啊这些的都一点要穿我们苗族的。	そうです。でも食事会や宴会に参加するときには必ず苗族の衣装を着ます。
38	14:22	筆者	一定要穿啊？	必ずですね。
39	14:23	宋 H	因为喜爱。	好きだから。
40	14:28	筆者	为什么啊？	なぜでしょうかね。
41	14:29	宋 H	没什么，她是自己喜欢自己爱好嘛。	理由は特にありませんが、自分で好きですね。
42	14:48	筆者	你为什么要剪了啊？	これを（縫い付けたところ）なぜ切るのですか。
43	14:49	宋 H	因为我钉错一针了，穿到那个线了，拉不出来了。	ここで針を通すのは間違いましたから。糸に挟まれて抜け出せません。
44	15:48	筆者	这个打疙瘩怎么整？	糸を止めるときはどうしますか。
45	15:50	宋 H	打了只能穿这个。这样穿。	この場合はこうするしかありません。このように。
46	15:54	筆者	哦，是这样子穿的啊。	そうですか。
47	15:58	宋 H	你们还打吗？	あなたたちの場合、糸の結び目を作りますか。
48	16:00	筆者	要打。我们要打这个。	作ります。このように。
49	16:01	宋 H	怎么打啊？	どんな感じですか。
50	16:02	筆者	不过绣十字绣的时候也不打	十字刺繍は結び目をしませんがね。

51	16:05	宋 H	也不打啊。	そうですか。
52	16:06	筆者	嗯，不过这个	そう。でもこれ。
53	16:15	宋 H	上面才打。	上のほうに結び目をします。
54	16:17	筆者	弄完了才打。	糸がなくなってから。
55	16:18	宋 H	对对对。	そうです。
56	17:44	筆者	这边就是苗族小伙子啊小姑娘啊谈恋爱啊这些是要唱歌哈？要对歌	西江の若い男女は恋愛するとき歌いますか・
57	17:53	宋 H	不像以前那么对啦。	以前のように歌い合いはしないですね。
58	17:55	筆者	现在不对了啊？你们原来你是对歌的吧？	今はしないのですね。もともとあなたの世代は歌をしていましたか。
59	18:04	宋 H	以前我们对一点点，也不像那些老人，那些老人爱对。	昔は少しはしていました。高齢の方ほどではなかったです。年配の人たちは歌が好きですよ。
60	18:09	筆者	你们对歌是怎么唱啊？	年配の方はどのような感じで歌いますか。
61	18:10	宋 H	那是唱苗歌。	全部苗語の歌です。
62	18:13	筆者	苗歌啊，是用苗语唱的呀？	苗歌、苗語で歌うのですね。
63	18:18	宋 H	就是苗语唱。	そうです。
64	18:22	筆者	我一定要把苗语学会。	私も苗語を勉強しなければなりません。
65	18:26	宋 H	那你一定要学吧。	あなたは勉強してね。
66	20:48	筆者	有这个（刺绣）做起，每天时间过得好快。	刺繡をすると時間が経つのが早いですね。
67	20:50	宋 H	诶。有时好懒不想做。	ええ。たまには怠けたくて刺繡したくないです。
68	20:56	筆者	偶尔肯定会有的。	それはありますよ。
69	20:57	宋 H	做这个好慢，不想做。	これを作るのは時間がかかるのです。やりたくはないです。

付録10 録音資料1 宋H (1963年生、女性、東引村) との対話、中国語で会話した (2016年9月6日) (録音番号 030_160906_1510A0) (筆者作成)

行	時間軸	話者	内容	日本語訳
			
1	06:37	筆者	这个好看, 这个肯定很贵。	これは綺麗。高いでしょう？
2	06:41	宋H	嗯。要好几千。	そう。数千円しますよ。
3	06:45	筆者	这个啊？这个这么大。	これ？これ大きいですね。
4	06:47	宋H	嗯。至少都3千。	そう。少なくとも3千元ぐらいします。
5	06:54	筆者	这是什么啊？这是绣啊？	これは何？刺繍ですか？
6	07:02	宋H	这个绣也是很好。	この刺繍はいいですよ。
7	07:12	筆者	这种可能就是专门绣来卖的吗？	これは販売するために刺繍したものでしょう？
8	07:15	宋H	这个好多花。你看, 全部都是绣, 这个边边。	これは花が多いです。見てごらん、全部刺繍です、周りの縁も刺繍です。
9	07:24	筆者	这种拿来垫东西就可惜了。	これを敷物にするのはもったいないですね。
	07:27	宋H	这种就拿来表, 她们就拿来表。表起来。	これは表装ボックスにします。
11	07:36	宋H	这个1200, 我要的1200。	これは1200円で、私は1200元で買いました。
12	07:49	筆者	这个是什么(刺绣种类)？(指着一副刺绣)	これはなんですか(刺繍の種類を指す)？(1つの刺繍をさしながら)
13	07:51	宋H	马尾。	馬尾繡です。
14	07:52	筆者	这是什么？	これは？
15	07:54	宋H	打籽(绣)	打籽繡です。
16	07:55	筆者	中间呢？	真ん中は？
17	07:56	宋H	这个是打籽。	これは打籽繡です。
18	07:57	筆者	旁边呢？	周りの方は？
19	07:58	宋H	旁边是马尾	周りには馬尾繡です。
22	08:28	筆者	哦, 太抽象了这个。我发现你们这边的刺绣都好抽象, 要不就是动物要不就是植物哈？	そうですね。これは抽象的ですね。ここの刺繍の紋様はみんな抽象的ですね、動物であったり植物であったりですね。

23	08:34	宋 H	嗯。这个是背带，背小孩子的。	そう。これは背帯 (beidai) です。子供を背負うためのものです。
24	08:40	筆者	应该还有其他部分吧？	他の部分はまだあるでしょう？
25	08:44	宋 H	嗯，还有要接两根绳子。	そう。2本の紐をつけます。
26	08:48	筆者	这个可能也卖得贵。	これも高いでしょう？
27	08:50	宋 H	这个啊？这个要好几千，至少要5千以上。	これですか？これは数千元、少なくとも5千元以上します。
28	08:52	筆者	5千啊？一看这里都是几万的，是吧？	5千元ですか？じゃこちらの方は数万元ぐらいするでしょう？
29	09:00	宋 H	嗯	そう。
30	09:02	筆者	哈哈，土豪啊。	お金持ちですね。
31	09:03	宋 H	我就全部攒的钱都在这里，就没有钱，一得点钱就是收（刺绣），喜欢收。	私の金は全部ここにあります。お金（現金）はないです。お金があれば、すぐ（刺繍を）買い求めに行きます。刺繍を収集することが好きです。
32	09:15	筆者	收来可以卖嘛。	これは売れますね。
33	09:16	宋 H	这个等到有一天就很值钱	これはいつか将来きっと高価になります。
34	09:18	筆者	真的啊	そうですね。
35	09:20	宋 H	现在还不知道，没有，所以是不知道要干嘛，但是对这个呢我是很有兴趣，知道会有一天是赚钱的	今はまだわからないですが、何をするのかもわかりません。しかし、私はこれにとっても興味があります。いつかこの刺繍はお金になると信じています。
	……			
36	25:34	筆者	这是什么？	これは何ですか？
37	25:35	宋 H 慧	背带，背小孩子用的。	「背帯」、子供を背負う時に使うものです。
38	25:40	筆者	这个颜色好看。	この色はいいですね。
39	25:53	筆者	这个好宽啊。（指着背带的肩带部分）	これは広いですね。（肩帯のあたりを指しながら）
40	25:57	宋 H 慧	这是绑小孩子用的。	これは子供を固定させるものです。

41	25:59	筆者	那直接用这个绑了，就不用加什么其他东西了。	これで結ぶだけでいいのですか？他に何もいらぬのですね。
42	26:01	宋 H	对，不用加了。	そうです。これだけでいいです。
43	26:12	宋 H	她搞这个配得也好看。下雨的时候，刮风的话，那就用这个挡着小孩子的头上。	この人のデザインも綺麗です。雨や風の時に、これを子供の頭にかけます。
44	26:21	筆者	哦，这样子啊。	そうですか？
45	26:22	宋 H	不下雨，不刮风，它就装饰。	雨や風がない時、これは飾りになります。
46	26:28	筆者	这上面的都是绣出来的吧？	これは全部刺繍ですね？
47	26:30	宋 H	嗯，全是绣，这里就是织（织锦），是织出来的（指着背带织锦部分），这里就是绣（指着刺绣的部分），好哦	そう。全部刺繍です。この部分は織錦で、ここは刺繍です。これはいいものですよ。
48	26:44	宋 H	绣一个那个背带，花了多少时间，是不是啊。	このような背帯を作るには、どれほどの時間を掛かったか、想像してごらん。
49	26:53	筆者	嗯，这个可能要两三个月吧？不止哦。	これは、2、3ヶ月かかるだろう？いや、もっとかかるでしょう？
50	26:56	宋 H	不止啊，有时候要一两年，好几年啊。绣，不会很忙的时候两三年。	2、3ヶ月はありえないですよ。1、2年はかかります、何年もかかることがありますよ。刺繍は、あまり忙しくなくても、2、3年はかかります。
51	27:00	筆者	对啊，你还要做农活嘛。	そうですね。農作業もありますよね。
52	27:02	宋 H	有些人家小孩子五六岁她就开始绣了。	子供が5、6歳のごろかろもうこの背帯を作り始めさせる家もあります。
	(关于为了给儿子建婚房存钱) ……			(息子の結婚用の家を作るためにお金を貯めることについての話)
53	33:15	筆者	这边也是背带啊？	これも背帯ですか？
54	33:19	宋 H	这也是背带，你看嘛，各有各不同的背带。	そうです、見て、同じ背帯ですが、それぞれ模様が違うでしょう。

55	33:23	筆者	这又是另外一种感觉的嘞。我觉得这一条背带好看诶。	これはまた違う感じの背帯ですね。この背帯が綺麗ですね。
56	33:28	宋 H	好吧，这些好看吧，这些都是一针一线绣的。	そうですね、綺麗でしょう。これは全部針1本で刺繍してきたものですよ。
57	33:34	筆者	这种你说我绣的话，我能绣这个不？这是平绣吧？	これは私も出来るでしょうか？これは平繡ですね？
58	33:36	宋 H	嗯，用力绣嘛，慢慢的绣也能绣出来。	そう。力を入れて刺繡すればいいです、ゆっくりしてやればできるでしょう。
59	33:39	筆者	那我绣这个吧，我这段时间就在这里绣这个了。一个月能绣出来吗？我好喜欢这多花。	じゃ私はこれを刺繡したいです。ここにいる間、これ作ってみましょうか。1ヶ月でできそうですか？この花紋様はとても気に入りました。
60	33:48	宋 H	嗯嗯，很好看啊。	綺麗ですね。
61	33:50	筆者	真的太漂亮了，我特别喜欢花。	本当に綺麗です。花がとても好きです。
62	33:54	宋 H	所以你才叫“边博（苗语名字发音，意为含苞待放的花朵）”	だから「边博（ビツ anbo）、筆者の苗語の名前で、咲きかけの花という意味」という名前をつけてあげました。
63	33:58	筆者	我真的特别喜欢花。	ほんとに花が大好きです。
64	34:00	宋 H	给你这个名字不错啊。	じゃこの名前はぴったりじゃないですか。
65	……（筆者的个人爱好）			
66	34:27	筆者	我把它描下来，把它绣出来能绣吗？	これをコピーして、刺繡してみたいです。できるかな？
67	34 : 30	宋 H	但是要用力，一定要慢慢的绣才能绣成的。	力を入れて、ゆっくり刺繡しないとできないと思いますよ。
68	34 : 34	筆者	要绣得很紧哈？	丈夫に刺繡しないといけないですね？

69	34 : 35	宋 H	嗯，我绣得很紧，那么就一针一线的慢慢绣，必须是慢慢绣，不是乱绣就成的。	そう。私はしっかり締めるようにしています。しっかり1本の針で少しずつしていかないと、適当に刺繍するのであればできないと思いますよ。
70	34:41	筆者	天，这朵花太漂亮了。	この花は本当に綺麗ですね。
71	34:47	宋 H	她们绣这个要好几年。	彼女たち（背帯を作った女性）がこれを刺繍するには何年もかかりますよ。
72	34:49	筆者	这个啊？（指着另一条背带）	これですか？（もう1つの背帯を指す）
73	34:50	宋 H	嗯。至少也。有空的话都是一年多，没空的话两三年。	そう。少なくとも。時間があれば、1年～2年で、時間がなければ、2～3年ぐらいはかかります。
74	34:56	筆者	这朵花可能绣出来都需要个把月？	この花であれば、1ヶ月ぐらいいい必要ですか？
75	34:58	宋 H	嗯，绣快的话也是一个星期也绣好，能绣好，绣快的话。	そうです。早ければ1週間でできます。早い場合ですよ。
76	35:03		（看刺绣）	（刺繍を見る）
77	35:19	筆者	这种感觉就特别华贵的这种	この背帯はとても豪華な感じがします。
78	35:23	宋 H	华贵啊，到了过年啊这些，我们苗族就背这些背带去看跳芦笙啊，过年过节的时候就像比赛一样，比你的好啊，还是谁的好啊。然后哪一个的背带好，就像富贵家一样。	豪華ですよ。お正月の時、私たち苗族はこの背帯で子供を背負って、蘆笙舞を見に行きます。お正月や祭りの時、まるで試合をしているみたいです。背帯をみて、どの人のがいいかを見比べます。もし誰かの背帯が良いと認められたら、その人は裕富な家を持っているように思われます。
79	35:39	筆者	哦哦，就是暗中比斗。	なるほど、その時は勝負ですね。
80	35:42	宋 H	对对对。	そうそう。

81	35:44	筆者	像你们这边的这种背带，在我们（家）那边是几代人背过的才好。比如说背过爷爷奶奶啊，爷爷奶奶用过的背带给孙子，老一辈人用过的背带再背孙子就特别好。	この背帯は私の実家では、多くの世代にわたって使われれば使われるほどよいと思われます。たとえば、おじいさんおばあさんの使った背帯を孫が使えば、孫によいです。
82	36:03	宋 H	是，苗家也是这样的。	苗族もそうです。
83	36:08	筆者	这中间这里是怎么绣的？	この真ん中はどう刺繍していますか？
84	36:09	宋 H	这个也是锁绣。	これも鎖繡です。
85	36:11	筆者	这个是锁绣哦。	鎖繡ですね。
86	36:13	宋 H	嗯，这差不多像我们那个，上次你来看绣的那种，	そう、この前私が刺繍したあれと一緒にです。
87	36:18	筆者	双针绣啊？	双針繡のことですか？
88	36:19	宋 H	嗯	そうです。
89	36:24	筆者	锁绣加马尾绣哈？	これは鎖繡と馬尾繡ですね。
90	36:25	宋 H	嗯。	そう。
91	……			
92	36:40	筆者	这个好看，这个也特别华贵哈。	これは綺麗。とても豪華ですね。
93	36:44	宋 H	这个比喻就像是那个青蛙，你看它的手脚啊，表示意思的图案就叫做青蛙，这里有手，脚，现在这里有那个眼睛啊，头啊，那里意思（指着背带图案）	これは蛙です。この蛙の手、足を見て、この紋様は蛙だとわかるでしょう。ここに手、ここに足、ここは目、頭です。（背帯の紋様を指す）
94	36:06	筆者	哦哦，动物啊，这就是青蛙哦。但是好抽象啊这个，脚这里就是青蛙，这是不是蝴蝶的那个触须？（指着背带图案）	なるほど、動物ですね。これは蛙ですね。しかし、ちょっと抽象的ですね。これは蝶の触角ですか？（背帯の紋様を指す）
95	37:18	宋 H	诶，是这个。	そう。
96	37:26	筆者	我要是能学会就好了。这个有点松了。	私も刺繍できればいいですね。これはちょっと緩くなっています。
97	37 : 29	宋 H	这个是叠起来所以就松了。	たたんだから緩くなってしまいました。
98	37 : 38	筆者	但是这个人确实绣得好，线拉得特别紧。	この人は腕がいいですね。糸をしっかり布に縫い付けています。

99	37:46	宋 H	<p>这个背带至少都是五六十年了。有些宝贝都是一百多年，因为她那个一年才背一两次啊，走亲戚背一点啊，过年过节背一点啊，那个她就保存得好</p>	<p>この背帯は少なくとも 50、60 年経っています。ここにある宝物は百年以上のものもあります。彼女たちは 1 年に 1 回 2 回しか使わないので。親戚のところに行ったり、お正月や祭りの時にちょっとだけ使ったりするぐらいです。だからよく保存されています。</p>
			

付録11 録音資料 李 a との会話 (1970 年生、女性、平寨)、中国語で会話した、2019 年 2 月 26 日 (筆者作成)

行	時間	話者	中国語	日本語訳
1	01:02	筆者	绣的好好哦。	刺繍が上手ですね。
2	01:03	李 a	绣裙子。	スカート (コーテェイ) の刺繍を作っています。
3	01:04	筆者	绣裙子。是绣给你自己穿吗?	スカートですね。自分で着るの?
4	01:08	李 a	给女儿。	娘に。
5	01:09	筆者	女儿多大啦?	娘さんはいくつでしょうか?
6	01:12	李 a	女儿二十多岁啦。	娘は 20 代になりました。
7	01:14	筆者	二十多岁, 要结婚了是不是?	20 代ですね。もうすぐ結婚しますか?
8	01:16	李 a	没有结, 还没毕业。	まだ。今まだ卒業していません。
9	01:19	筆者	那绣来结婚的时候穿哦。绣的这是什么花呀?	じゃこれは (娘が) 結婚する時に着るものですね。これは何の紋様ですか?
10	01:24	李 a	那是鱼呀。	あれは魚ですよ。
11	01:25	筆者	鱼啊, 我可以照一下吗?	魚か。写真を撮ってもよろしいでしょうか?
12	01:40	筆者	女儿在读高中, 是西江中学啊?	娘は高校で、西江中学校ですか?
13	01:42	李 a	嗯, 是西江中学	そうです。西江中学校です。
14	01:46	筆者	哦, 就一个女儿啊?	子供は娘 1 人だけですか?
15	01:48	李 a	我女儿啊? 女儿现在准备毕业啦。	娘はですね、もうすぐ卒業しますよ。
16	01:55	筆者	准备毕业了, 要考大学了哈? 你是哪个寨子的啊?	そうですか。そろそろ大学の入学試験を参加しますね。あなたはどの寨の人でしょうか?
17	02:02	李 a	我是这个寨子的啊。	私はこの寨ですよ。
18	02:04	筆者	平寨啊?	平寨ですか?
19	02:05	李 a	东引。	東引です。
20	02:06	筆者	东引的呀。	東引ですか。
21	02:08	李 a	你知道吗?	知ってますか?
22	02:09	筆者	我知道。我干妈原来也是东引的。她是东引嫁到羊排。	知ってますよ。私の親子の義を結んだ母は元々東引の出身です。東引から羊排へ嫁に行きました。
23	02:16	李 a	东引嫁到羊排啊?	東引から羊排へか。
24	02:17	筆者	嗯, 宋家。你东引那边那是姓宋还是姓董啊?	そう。宋家です。あなたは東引の人なら苗字は宋ですか。それとも董ですか。
25	02:27	李 a	姓宋也有, 我啊? 我是姓李。	宋の姓もあります。私はね、李です。

26	02:32	筆者	姓李啊？哦。	李ですね。なるほど。
27	02:36	李 a	那个东引村我们家在街上旁边那里。	うちは東引村の町の隣にあります。
28	02:41	筆者	街上啊？离街比较近是吧，我以为在坡上，后面去了。	町ですか？町に近いですね。すっかり山の上にあるかと思いました。
29	02:54	筆者	哦。那你也是嫁到，就是东引嫁到东引嘛？	じゃ李さんは東引から東引へと嫁になったのですね。
30	03:00	李 a	不是啊。我是平寨嫁到东引。	違いますよ。私は平寨の出身です。
31	03:06	筆者	平寨嫁到东引哦，哦。几个孩子？两个孩子？	平寨から東引ですね。子供何人いますか？2人ですか？
32	03:10	李 a	两个。	2人です。
33	03:11	筆者	一儿一女哈？	息子1人娘1人ですか？
34	03:12	李 a	对呀。	そうです。西江中学校です。
35	03:13	筆者	儿女双全，真好。你这个做得快差不多了吗？这个就是，裙子，你做了多少张了？这个。	いいですね。この刺繍はもうすぐ出来上がるですか？これはスカートにつけるものですね。何枚作りましたか？これ。
36	03:25	李 a	哎哟，做了两三年诶。	これは2、3年も作りましたよ。
37	03:27	筆者	两三年啦？	2、3年も？
38	03:28	李 a	嗯。	そうです。西江中学校です。
39	03:30	筆者	还没有做完啊？	まだ完成していないですか？
40	03:31	李 a	你看一针一针做呀，好麻烦呀，不简单呀。	ほら、みて、これは1針1針でやらないと、ややこしいですよ。簡単ではないですよ。
41	03:40	筆者	我也会绣一点点。	私も少しできます。
42	03:41	李 a	你会绣一点点啊？	あなたもできますか？
43	03:42	筆者	跟那个干妈学的。	あの親子の義を結んだ母に学びました。
44	03:45	李 a	那现在你家在哪里啊？	あなたの家はどこですか？
45	03:47	筆者	我是贵阳的。	私は貴陽の人です。
46	03:48	李 a	你是贵阳的哦。	貴陽の人ですか。
47	03:49	筆者	嗯。	そう。
48	03:50	李 a	结婚了没有啊？	結婚しましたか？
49	03:51	筆者	还没有。我看你们绣这个绣得好好哦。	まだです。これはとても上手に刺繍していますね。
50	03:58	李 a	不好啊。	いやいや。
51	03:59	筆者	你是跟你妈妈学的吗？	母に学びましたか？
52	04:02	李 a	是啊，妈妈教的呀。	そうですよ。母に教えてもらいました。
53	04:03	筆者	你家有几姊妹啊？妈妈教的，几姊妹都一起学啊？	何人キョウダイですか。母の教えてもらったですね。姉妹と一緒に学びましたか？

54	04:07	李 a	对啊。	そうです。
55	04:08	筆者	你几个姐姐啊？	姉が何人いますか？
56	04:09	李 a	我是老大。	私は長女です。
57	04:10	筆者	你是老大呀？那你会不会教你妹妹她们啊？	長女ですか。じゃ妹たちに刺繍を教えたりしますか？
58	04:14	李 a	她自己学呀。	彼女ら自分で学びますよ。
59	04:15	筆者	她自己学？	自分で？
60	04:16	李 a	对呀。看到就学会呀。	そうです。見ながら学びます。
61	04:19	筆者	看到就会学哈。你绣的这个是平绣哈？	見ればわかるですね。李さんが今作っているのは平繡ですね。
62	04:25	李 a	对。	そうです。
63	04:28	筆者	我也只会绣这个，其他的好复杂。	私もこれしかできないですよ。他の技法は難しいです。
64	04:32	李 a	对。	そうです。
65	04:33	筆者	你会几种啊？平绣啊，邹绣啊？	李さんは何種類できますか。平繡とか、皺繡とか。
66	04:37	李 a	平绣啊，填绣啊，还有哪一种	平繡や、填繡や、あとは何だっけ。
67	04:42	筆者	邹绣啊，辫绣，打籽绣啊这些。会吗？	皺繡や、辮繡や、打籽繡など、できますか。
68	04:50	李 a	邹绣？会几种。	皺繡。何種類かできます。
69	04:52	筆者	会几种哈？你所有的全部是你妈妈教你的吗？	そうですか。全部母に教えてもらったですか。
70	04:56	李 a	对呀。	そうですよ。
71	04:58	筆者	那你妈妈手工好好哦。	お母様の腕が良いですよ。
72	05:01	李 a	她教一点点，自己学一点点呀。	母は少し教えて、自分でも少し学びます。
73	05:03	筆者	她教一点，自己学一点哈。	そうですか。
74	05:06	李 a	对呀。	そうですよ。
75	05:11	李 a	绣的好了，一张这里呀。	ここに一枚完成したのがあります。
76	05:13	筆者	啊，真的吗，我照一下可以吗？	あ、本当ですか。写真撮ってもいいですか。
77	05:17	李 a	照吧。	いいですよ。
78	05:18	筆者	哦，好漂亮。	綺麗です。
79	05:45	筆者	这是鱼，旁边是水，这个是草是不是？	これは魚で、隣は水、これは水草でしょう。
80	05:48	李 a	对呀。它泡水呀，还有那个草呀。	そうです。（魚は）水の中にいて、あの草も。
81	06:37	筆者	那你衣服做出来了吗？	服（ウーベイ）は出来上がりましたか。
82	06:39	李 a	衣服啊？做好了呀。	服ね、出来上がったですよ。

83	06:43	筆者	衣服都做好了呀？你做那件衣服你花了多长时间啊？	服は出来上がるまでどのぐらい時間かかりましたか。
84	06:52	李 a	也是两三年。	それも2、3年ですよ。
85	06:53	筆者	也是两三年哈。那这个裙子要绣，要绣好多诶，我看。	2、3年ですね。このスカートにつける刺繍は結構の量ですね。
86	06:58	李 a	是啊，要一百。	そうですね。百枚以上です。
87	06:59	筆者	要绣几十张诶哈？	数十枚（の刺繍）が必要でしょう。
88	07:02	李 a	一百多张。	百枚以上ですよ。
89	07:03	筆者	要绣一百多张啊？一条上面要三张差不多是不是？	百枚も？1本には3枚でしょう。
90	07:20	筆者	那每天摆摊就绣一下哈。	毎日お店で刺繍しますね。
91	07:22	李 a	对呀，没事做啊，然后就绣一点点啊。	そうです。やることがないですし。少しずつ刺繍します。
92	07:27	筆者	生意好不好嘛，这里？	よく売れますか。
93	07:30	李 a	哎呀，没有什么好，一般般的。	あまりよくないですよ。まあまあです。
94	07:40	李 a	不会做什么，就随便做一点。	私何もできないので、適当にやっています。
95	07:43	筆者	嗯，我都好想学做这个。我绣这个，绣一下就烂了，	私もこれを学びたいですよ。刺繍したら、下手でおかしくなっています。
96	07:51	李 a	不会绣就这样的。	あまり刺繍しなければそうなります。
97	07:56	筆者	那你儿子，你儿子去读大学了吗？	息子さんは大学に行っていますか。
98	07:59	李 a	儿子是高中。	息子は高校です。
99	08:02	筆者	儿子要小一点是吧。	息子が下の方ですね。
100	08:03	李 a	对。儿子，我女儿比那个儿子大五年。	そうです。娘は息子より5年上です。
101	08:09	筆者	大五年啊？大五年，那你女儿也是读高中，儿子也是读高中啊？女儿读书比较晚是不是？	五年ですね。娘も高校で、息子も高校だとすれば、娘は学校に入ったのは遅かったですね。
102	08:18	李 a	女儿就大学呀。	娘は今大学です。
103	08:20	筆者	哦，女儿已经读大学了。	そう。娘さんが大学ですね。
104	08:21	李 a	对呀。	そうです。
105	08:22	筆者	她是在外地读大学吗？	どこの大学でしょうか。
106	08:26	李 a	嗯，在你们贵阳那里上学。	貴陽の学校に行っています。
107	08:28	筆者	贵阳，贵大？师范？	貴陽ですね。貴州大学ですか。师范大学ですか。
108	08:31	李 a	贵师的，大四。	师范大学です。四年生です。

109	08:35	筆者	师大咯嘛，原来我高中就在师大对面。	师范大学ですか。私の高校は師範代学区の向こうにあります。
110	08:41	李 a	哦，那个我不知打在哪里，我们家那个在，诶在什么地方，在花溪那里，上学。	そう。それはどこにあるか知らないが、家の子は、どこだっけ、花溪だそうです。
111	08:49	筆者	花溪，哦，我知道，都搬到大学城那边去了。	花溪ですね。知ってますよ。今大学はほとんど大学城へ引っ越したそうです。
112	08:52	李 a	对。	そうです。
113	08:55	筆者	那你还要享福了。	これからは良くなりますよ。
114	08:57	李 a	哎呀，现在好多大学诶。	それは、今大学生は多いですよ。
115	09:01	筆者	好多大学，那出来，师大出来就当老师嘛。	师范大学の学生は学校を出たら教師になりますよ。
116	09:14	李 a	不是师大啊，我们那个是医学啊。	师范大学ではないですよ。家の子は医学大学です。
117	09:19	筆者	艺术是不是？	芸術ですか。
118	09:21	李 a	医学院。	医学学院です。
119	09:22	筆者	那更好啊。	それはもっといいのではないですか。
120	09:25	李 a	更好，有什么好？	なにがいいのですか。
121	09:26	筆者	学医很好的。学医真的很好的。以后医院这些肯定工资什么的会比一般的老师这些高很多。	医学はいいですよ。本当に。これから医者給料は教師より高いでしょう。
122	09:38	李 a	现在不知道怎么考得上嘞。	就職できるかどうか今はまだ分かりません。
123	09:41	筆者	考肯定是考得上的。现在医生紧俏得很，很多医院医生都不够。	きっと出来ますよ。今医者は少ないので、多くの病院では医者が必要です。
124	09:48	李 a	哦。	そうですか。
125	09:56	筆者	你每天每天都绣吗？	あなたは毎日刺繍しますか。
126	09:58	李 a	对呀。	そうです。
127	09:59	筆者	每天每天绣都花两三年才绣出来啊？	毎日刺繍しても2,3かかるのですか。
128	10:02	李 a	是啊。	そうです。
129	10:05	筆者	哦，那你绣得好细啊。	うん。細かく刺繍していますね。
130	10:11	筆者	你的这个，你的手是创可？是布条啊？	これ、手にあるのはばんそうこうですか。布ですか。
131	10:19	李 a	这个啊？这个是抵，抵那个针呀。	これですか。これは指貫です。針を押すに使います。
132	10:23	筆者	就用布抵的是不是？	布で押すのですね。
133	10:24	李 a	对呀。针扎手。	そうです。針は手を刺してしまうの

				で。
134	10:26	筆者	那你们一天抵这个好痛哦。	これを毎日するのは手が痛いでしょう。
135	10:30	李 a	不抵, 不抵那手都变烂咯。	指貫を使わないと、手が傷だらけになるでしょう。
136	10:32	筆者	是啊。我上次做了一个多小时, 手痛得受不了, 指甲那里, 很痛的。	そうです。私この前1時間刺繍したら、手が痛くて痛くてたまりませんでした。特に爪が痛いですね。
137	11:06	李 a	你是, 干妈是姓宋, 是不是那个肥肥, 胖胖的那个啊?	あたなの知り合いの人は宋というのですか。ちょっと太く見えますか。
138	11:12	筆者	嗯, 肥肥的, 不算肥诶。	うん、そうです。そんなに太くはないですが。
139	11:14	李 a	不算肥啊?	太くはないですね。
140	11:15	筆者	嗯, 她妹妹也是嫁到, 就嫁到东引的。	彼女(宋H)の妹も東引に嫁いだのです。
141	11:20	李 a	妹妹也是嫁到东引啊?	妹さんも東引へ嫁いだのですね。
142	11:22	筆者	嗯。	そう。
143	11:24	李 a	东引, 是嫁到东引啊?	東引、東引へ嫁いだのですか。
144	11:26	筆者	嗯, 东引。她家就是东引的, 她妹妹嫁到东引的。	そうです。東引です。彼女は東引の出身で、妹さんは東引へ嫁ぎました。
145	11:30	李 a	妹妹也是嫁到东引。	妹さんは東引の嫁になりました。
146	11:32	筆者	嗯, 就坡顶上有一家, 好大, 那个房子, 就是东引那边不是有一棵坟吗, 你知道吗? 那个坟上去一点点就是她妹妹家。	そうです。山の頂上あたりにある家です。あの家は大きいです。東引では墓があるところってご存知ですか。あの墓からちょっと行ったところにあるのは彼女(宋H)の妹さんの家です。
147	11:45	李 a	哦, 哦。哦。不清楚。不知道是谁家的。	そうか、そうか。よくわかりませんが、どの家か知らないですね。
148	12:07	李 a	哦, 妹妹嫁到东引, 是不是那个她们家在那里嘛。	そうか。妹さんが東引へ嫁いで、家は東引ですか。
149	12:10	筆者	对对对。她们家原来也是东引的。	そうです。彼女は東引の出身です。
150	12:14	李 a	东引, 她们现在嫁到羊排。羊排哪里啊?	東引で、今は羊排へ嫁いだのですね。羊排のどこですか。
151	12:18	筆者	哦, 对对对。就在苗王食府后面那里呀。	そうそうそう。苗王食府(食堂)の後ろです。
152	12:21	李 a	啊?	ええ。
153	12:22	筆者	苗王食府后面那里。	苗王食府の後ろです。
154	12:25	李 a	哦哦, 是那个, 是那个, 原来是那个村。	なるほど、あそこですね。あの村ですね。
155	12:28	筆者	凹保。凹保。	「凹保」、「凹保」といいます。

156	12:31	李 a	哦哦哦，是那个，我认识。	ああ、その人ですか。知っています。
157	12:40	筆者	你认识哦，我刚跟她老公一起出来的，就干爹嘛。	知っているのですね。先宋さんの旦那と一緒にいたのです。
158	12:43	李 a	哦，这样。	そうですか。
159	12:44	李 a	然后他在那里逗鸟，我就过来看看。	彼（李 YW）はあそこで闘鳥していますので、私はこちらに来ました。
160	12:47	李 a	哦哦。原来就是那个哦。那个我认识的。	そうかそうか。あの人ですか。知っています。
161	12:54	筆者	你认识哈，我想着你们应该认识的。	でしょうね。知っているかと思いました。
162	13:01	李 a	哦，你说她们也是嫁到东引，她以前。	東引へ嫁いだとおっしゃったが。
163	13:07	筆者	她妹妹是嫁到东引。	妹さんが東引へ嫁ぎました。
164	13:08	李 a	不是，她也是东引，不是嫁到东引，她也是嫁到羊排，她去她们家娘家那里砌一个大房子。她们家娘家有地盘嘛。	違います。彼女も東引の人です。東引へ嫁いだのではなく、彼女も羊排へ嫁ぎました。彼女は実家で大きな家を建てました。実家は敷地がありますから。
165	13:23	筆者	哦，是这样啊。	そうですか。
166	13:25	李 a	让她们一个地基砌了一个大房子。	敷地があるから、大きな家を建てました。
167	13:35	李 a	她妹妹，肥一点哦。	彼女の妹さんは太っているでしょう。
168	13:38	筆者	嗯，她妹妹好像是，她姐姐也有一点胖。	そうですね。妹さんも姉さんもちょっと太っています。
169	13:42	李 a	不算很胖。	それほど太くはないです。
170	13:43	筆者	姐姐是嫁到乌尧。嗯，有点矮，不算特别胖。	姉のほうが烏尧へ嫁ぎました。背がちょっと低くて、そんなに太くもないです。
171	13:47	李 a	哦。一般般的。她可能是五十多岁。	そう。まあまあです。歳は50すぎでしょう。
172	13:53	筆者	嗯，对。五十多。	そうです。50すぎです。
173	13:57	李 a	去她们家看绣花你才认识她吗？	彼女の家へ刺繍を見に行った時に知り合ったのですか。
174	14:00	筆者	啊？	え。
175	14:01	李 a	你去她们家看绣花你才认识她啊？	あなたは彼女の家へ刺繍を見に行った時に知り合ったのですか。
176	14:03	筆者	嗯，对，我是专门喜欢弄这些刺绣嘛，我特别喜欢看，所以我就去，我都认识她有四五年啦。	そうです。私も刺繍を研究していて、とても刺繍が好きですよ。だから、彼女の家を訪ねました。知り合ってからもう4、5年ぐらいでしょう。
177	14:17	李 a	四五年啊？	4、5年もですか。

178	14:18	筆者	嗯，我们暑假啊寒假我就过来。	そうです。私は夏休みや冬休みに西江に来るのです。
179	14:19	李 a	现在你还上学吗？	今はまだ学校ですか。
180	14:21	筆者	嗯，我还在上学。	そうです。まだ学校です。
181	14:22	李 a	你还在上学。	そうですか。
182	14:24	筆者	嗯，我现在在外面读博士嘛。	そう。今は博士課程です。
183	14:29	李 a	哇，那么好啊。	うわ。すごいですね。
184	14:32	筆者	不好呀，一天写不出来东西啊，要来跟你们学一下。	そうでもないです。論文を書けないです。だから勉強しに来ました。
185	14:38	李 a	学这个有什么意思。	こんなのを学んで何の意味があるのですか。
186	14:41	筆者	有的。	ありますよ。
187	14:52	李 a	那你也是经常来的？	じゃあなたもよく来るのですね。
188	14:55	筆者	我啊，经常，我经常来要住好几天，后天，哦不是，星期五还要跟她们出去玩，去是那个凯里，盘古寨，和她们去玩，她们好像那个东引的还是羊排的有聚餐。	私ですか。よく来ます。来てここでちょっと泊まります。明後日、いや、金曜日に彼女らと凱里へ遊びに行きます。盤古寨というところです。東引か羊排かの食事会があります。
189	15:17	李 a	哦，这样。	そうですか。
190	15:19	筆者	嗯，我来羊排的人都认识我啦，她们都叫我边博。	そうです。ここではみんな私を「辺博（ビツ an Bo）」と呼んでいます。
191	15:24	李 a	肯定，经常来就认识了。	それはありますね。よく来たら、みんな知っているのですね。
192	15:41	筆者	像你会不会给你儿子也做一件呢？会不会？	このような服を息子にも作ってあげますか。しますか。
193	15:45	李 a	会呀，但是没有时间了呀。	しますよ。でも時間がないのです。
194	15:48	筆者	没有时间给他做哈。	作る時間がないですか。
195	15:50	李 a	对呀，那不管他，儿子有没有无所谓，那女儿一定有嘛。	そうです。息子はいいです。あるかどうか構わないです。娘は必ず作ってあげます。
196	15:55	筆者	哦，女儿一定有哈。儿子的话有时间可以做是吗？	そうですか。娘には必ず作ってあげますね。息子は時間があれば作ってあげてもいいということですか。
197	15:58	李 a	对。（对这游客）看一下吗，阿姨，随便看一下有没有喜欢的呀。	そうです。（観光客に向けて）見えますか。好きなのがあれば御遠慮なくご覧下さい。
198	16:45	筆者	你们这边，就是这种衣服，一般你会不会给媳妇做呀。	ここではこのような服を嫁のために作る場合はありますか。
199	16:51	李 a	会呀。给媳妇做啊，做裙子啊这些，但是做不做也是无所谓。	ありますよ。嫁のために作ります。スカートとかを作ります。でも作ってもいいし、作らなくてもいいです。

200	17:03	筆者	做不做无所谓, 但是也可以做咯嘛。	どっちでも構わないということですね。つまり、作っても構わないですね。
201	17:05	李 a	可以做啊, 做了给了媳妇了更开心呀。	作っていいですよ。嫁に作ってあげたら喜んでくれます。
202	17:08	筆者	哦, 我还以为就是说一般婆婆不会给媳妇做裙子啊, 做衣服这些。	そうですか。姑は嫁のために服やスカートを作ってあげないと思いました。
203	17:13	李 a	可以啊。但是有点想, 有点想就说媳妇呀她有她妈做啊。	作っていいですよ。でも考えたら、嫁の母親は作ってくれます。
204	17:24	筆者	哦, 这样子。	そうですか。
205	17:26	李 a	做不做也是无所谓呀, 要是她嫁到我们家没有(盛装)就可以给她做呀。	作ってあげてもあげなくても大丈夫ですが、もし嫁が家に来て(晴れ着を)持っていなければ、作ってあげてもいいですよ。
206	17:32	筆者	哦, 这样子啊。有没有那种就是你家儿子结婚了, 然后媳妇来做衣服, 然后就直接把这个送给媳妇吗?	そうですか。このような場合があるでしょうか。たとえば、息子が結婚して嫁がお宅に来てから、姑が衣装を作り始めました。作り上げた衣装を直接に嫁にあげることが可能ですか。
207	17:54	李 a	对呀。	あります。
208	17:56	筆者	哎哟, 划到手啦?	あら、手に傷つけてしまいましたか。
209	17:58	李 a	没有, 那个刀断了。	いや、そのカミソリの刃が折れてしまいました。
210	18:01	筆者	哦, 注意点, 这个很快的。	そうですか。気をつけてね。これがすごく鋭いですよ。
211	18:04	李 a	嗯, 你看, 好快哦, 一刮到线都断啦。	うん。見て、これ鋭いですよ。ちょっとだけ掠ただけで糸が全部切れてしまいました。
212	18:09	筆者	那怎么办。	どうしよう。
213	18:10	李 a	不知道怎么办呀。你看都断啦。那个刀片很快嘞。	わかりません。折れてしまいました。あの刃が鋭すぎですよ。
214	18:16	筆者	是嘞。刀片特别快。	そうです。あれはとても鋭いです、
215	18:17	李 a	就是, 我们苗家什么做不做, 也要做衣服。	そうです。我々苗族は何もしなくても、衣装だけは作らなければなりません。
216	18:24	筆者	要做衣服哈。	衣装を作るのですね。
217	18:26	李 a	对, 她家呢我们一定要摆一件。	そうです。必ず1着を持たなければなりません。
218	18:32	筆者	一定要摆一套啊?	必ず1着を持たなければなりませんね。

219	18:34	李 a	对呀, 要是不会就没有办法啊。会就做一套。	そうです。できなければそれは仕方がないですが、できれば1着を作ります。
220	18:42	筆者	这都是媳妇她妈妈给她准备嘛, 娘家也要给她准备一套嘛。	これは嫁の母親が用意するものですか。実家が1着を用意するのですね。
221	18:47	李 a	肯定准备呀。	それは当たり前ですよ。
222	18:49	筆者	这样子啊。	そうですか。
223	18:50	李 a	对啊。准备的是它是她妈的名下。也是可以帮她做一件吧。	そうです。用意するのは母親で、作ることもあります。
224	19:01	筆者	哦。可能以后你给你女儿做完, 也会给媳妇做咯?	そうですか。あなたは娘の衣装を作り上げたら、嫁のためには作りますか。
225	19:05	李 a	对呀。	作りますよ。
226	19:11	筆者	那以后这种, 媳妇, 她, 我说是如果哈, 如果哪一家的结婚了, 然后婆家给她准备的这个衣服, 她媳妇和她儿子离婚的话, 那她带走吗?	このような場合、嫁さんが、もしもの場合ですよ、姑が彼女のために衣装を準備しました。その嫁が息子と離婚する場合、この衣装を持って行きますか。
227	19:28	李 a	那, 那就不知道啦。	それは、わかりませんね。
228	19:30	筆者	我还说那个是娘家给她, 不是, 是婆家给她(所以不能带走)。	あれが嫁ぎ先からもらったものだから(持っていくことはできない)と思いました。
229	19:35	李 a	哎呀, 那个早穿得旧了。	あれは、古くなったものです。
230	19:36	筆者	穿旧了啊?	古くなったのですね。
231	19:37	李 a	对呀。	そうですよ。
232	19:41	筆者	一般穿旧了就不要了哦?	普通なら古くなったものはいらないですか。
233	19:43	李 a	穿旧了谁还想要? 什么东西也是想要新的呀。	古いものは誰がいるのですか。みんな新しいものが欲しいですもの。
234	19:49	筆者	哦。这样子啊。	そうですか。
235	20:03	筆者	等你家女儿结婚了, 抱孙孙啊这些, 又给他做哈?	お宅の娘さんが結婚して、孫さんがうまれたら、また孫のために衣装を作るのですか。
236	20:07	李 a	对呀。做衣服啊, 还有。	そうです。衣装とか、また。
237	20:10	筆者	一辈子都在做哈。	一生作っていますね。
238	20:11	李 a	对呀。	そうです。
239	20:13	筆者	不是有那种, 机子买的那种吗?	ああいうのがあるのではないですか、機械で作ったのが。
240	20:16	李 a	那种不好诶。	あれはよくないです。
241	20:17	筆者	那种不好啊?	よくないですか。
242	20:18	李 a	对呀。一点都不好。	そうです。少しも良くないです。

243	20:21	筆者	是嘛？那个不好看啊？	そうでしょうか。綺麗ではないですか。
244	20:24	李 a	不好看，但是做也是不细致。	綺麗ではないです。細かくしていません。
245	20:28	筆者	不细致哈。	細かくはないですね。
246	20:29	李 a	对呀。做啦粗粗糙糙。那就不好啊。所以手工才贵啊。	そうです。雑です。あれは良くないです。だから手作りが高いのです。
247	20:37	筆者	这样子哈。	そうですか。
248	20:49	筆者	这种边边的这个叫什么东西，这个？	この縁のところは何というのですか。
249	20:53	李 a	这是金边啊。	これは金辺です。
250	20:54	筆者	金边哈，苗语怎么说？	金辺ですね、苗語では何と言いますか。
251	20:56	李 a	也是这样说嘛。	苗語もこう言います。
252	20:57	筆者	金边啊？哦。	金辺ですか。そうでしょうか。
253	21:02	筆者	这个也是你自己编的呀？	これはあなた自分で編みましたか。
254	21:04	李 a	对呀。	そうですよ。
255	21:05	筆者	哦，好厉害。	すごいですね。
256	21:10	筆者	你的这个线好多，这种线是在哪里买的啊？	この糸の種類が多いですね。どこで買ったのですか。
257	21:15	李 a	街上买啊。	町で買いました。
258	21:16	筆者	街上有卖啊？	街にはありますか。
259	21:17	李 a	有。	ありますよ。
260	21:20	筆者	多少钱一把啊这个？	これを1組でいくらでしょうか。
261	21:22	李 a	哎呀，就是一块多才十多根。	これは十数本で1元（日本円で約15円）位です。
262	21:30	筆者	一块多十多根啊？	1元で十数本ですね。
263	21:32	李 a	对呀。就是一圈，这样长，你看那个嘛，都跟那个线。	そうです。これを1周まわって、これほど長いです。あれを見てご覧、あの糸と一緒にです。
264	21:51	筆者	哦，有专门卖这种线的哈，原来不是没有吗，原来是自己做吗？	この糸を売るところがあるのですね。元々はなかったでしょう。自分で作っていたのですか。
265	21:55	李 a	有。	ありました。
266	21:57	筆者	你小时候，你现在差不多四十多哈？	あなたが子供の頃。あなたは今40代でしょう。
267	22:01	李 a	嗯，差不多五十岁啦。	そうです。50歳に近いですよ。
268	22:03	筆者	差不多五十啦？那跟我爸妈，我妈49。	50歳に近いですか。家の両親と近いですね。うちの母が49です。
269	22:09	李 a	那肯定是差不多的呀。你妈是属什么的呀？	それは近いでしょう。お母さんは何ぞしですか。
270	22:14	筆者	属鸡。	鶏年です。
271	22:16	李 a	属鸡，我是属狗。	鶏ですね。私は犬年です。

272	22:17	筆者	哦，那你跟我爸一样，我爸是属狗的。	ああ。うちの父と同じです。父が犬年です。
273	22:20	李 a	哦。	そうですか。
274	22:21	筆者	那你比我妈小一岁。	母とは1歳の違いですね。
275	22:24	李 a	那你妈还比你爸爸大一点？	じゃお母さんはお父さんより年上ですか。
276	22:26	筆者	她大一点点，大半岁。他们是同学。	はい。ちょっと、半年上です。両親はクラスメートです。
277	22:32	李 a	你多大啦？	あなたはいくつですか。
278	22:34	筆者	我 28。	違い 28 歳です。
279	22:35	李 a	28 哦。	28 ですね。
280	22:36	筆者	嗯，他们结婚结得早。	そうです。親が結婚したとき若かったです。
281	22:38	李 a	哦。	そうですか。
282	22:58	筆者	(电话响了) 推销的吗？	(携帯が鳴った) セールスマンですか。
283	23:01	李 a	骚扰电话。	迷惑電話です。
284	23:02	筆者	骚扰电话哦。	そうですか。
285	23:13	筆者	你们结婚是爸爸妈妈介绍的，还是？	あなたは親の紹介で結婚したのですか。それとも。
286	23:16	李 a	自己呀。	自分で知り合いました。
287	23:17	筆者	自己认识的啊？唱歌认识的吗？	自分で知り合ったのですね。歌垣で知り合ったのですか。
288	23:19	李 a	哎呀，一个喜欢一个就嫁了。	えと、お互い好きだから結婚しました。
289	23:22	筆者	一个喜欢一个就嫁了。	お互い好きだからで結婚したのですね。
290	23:24	李 a	哎呀，一首都不唱。	1 曲も歌わなかったです。
291	23:26	筆者	一首都没唱啊？我听说你们要去那个什么游方哈。	1 曲もですか。ユーフェとかもすると聞きましたが。
292	23:32	李 a	对啊。	そうですよ。
293	23:33	筆者	游方然后唱歌，跳马郎。	ユーフェして、歌いもして、跳馬郎しますね。
294	23:37	李 a	我不唱。	私は歌わなかったです。
295	23:38	筆者	不唱啊。	歌わないですか。
296	23:39	李 a	不会唱。	歌えないです。
297	23:40	筆者	哦。那就这样自然认识，然后就，就那个（结婚）啦？	そうですか。じゃ自然に知り合って、そして結婚したのですね。
298	23:48	李 a	我们现在，我们这帮人很少唱歌，唱歌都是以前以前啦，像我妈那样子才能唱歌的。	私たちは今、私たちの世代はあまり歌わないですよ。歌うのは昔のことです、うちの母みたいなのは歌います。

299	23:59	筆者	你妈妈她们会唱哦。你妈妈现在还健在吗？	お母さんが歌いますね。今お母さんは健在でしょうか。
300	24:04	李 a	早都死咯哦。	とっくになくなりました。
301	24:05	筆者	去世了啊？不好意思。	亡くなられたですか。申し訳ございません。
302	24:07	李 a	爸爸妈妈都没有。	父も母もいないです。
303	24:10	筆者	哦，年级大了哦。	そうですか。年を取ったからでしょう。
304	24:13	李 a	也不算大，但是不知道身体不好。	そんなに年配ではないです。なぜか分からないが、体調は良くないです。
305	24:18	筆者	不能生病啊，现在就是。	病気してはいけませんよ。今では。
306	24:21	李 a	生一点才死，不生病怎么死呢。	ちょっと病気してなくなります。病気をしなければ死ぬことはないでしょう。
307	24:25	筆者	是啊。	そうですね。
308	24:37	李 a	那你比我女儿大一点点。	じゃあなたはうちの娘より年が上ですね。
309	24:41	筆者	大一点点。我应该要大几岁吧。	ちょっとです。何歳かうえでしょう。
310	24:46	李 a	24 岁。	娘が 24 歳です。
311	24:48	筆者	大好几岁呢，大四岁嘞。	4 歳も上です。
312	24:53	李 a	那你上学，上到博士。	あなたは学校に行って、今博士ですね。
313	24:56	筆者	读博士。	博士課程です。
314	24:57	李 a	博士啊，肯定你要大一些啊。	博士ですね、じゃ年が上ですよ。
315	25:00	筆者	嗯，她还读大学嘛，还小。	そうです。彼女はまだ大学です。まだ若いですよ。
316	25:09	筆者	你结婚的时候你妈妈给你做了衣服吗？	あなたが結婚するとき、お母さんが衣装を作ってあげましたか。
317	25:12	李 a	哎呀，以前穷，以前没钱。	昔は貧しかったし、お金がなかったですよ。
318	25:16	筆者	没钱啊？	お金がなかったですね。
319	25:17	李 a	对呀。	そうですよ。
320	25:18	筆者	那你结婚的时候穿的是什么？	結婚したとき何を着ていましまか。
321	25:19	李 a	穿的是那个便衣的。	日常着を着ていました。
322	25:21	筆者	便衣的那种哈。哦，便衣也是妈妈做的是吧？	日常に着る服ですね。その日常着はお母さんが作ったのですか。
323	25:27	李 a	自己做呀。	自分で作りましたよ。
324	25:28	筆者	你自己做啊？	自分で作ったのですか。
325	25:29	李 a	对呀。	そうです。
326	25:30	筆者	你从几岁开始学的啊？	何歳から刺繍を学び始めたのです

				か。
327	25:31	李 a	十五六岁可以学啊, 刚开始学呀。	15、16 歳から学び始めました。
328	25:36	筆者	你就开始学啦?	その時から始めたのですか。
329	25:38	李 a	十多岁。	10 代のとき。
330	25:39	筆者	那你结婚的衣服就是自己做啊, 那你好厉害。基本上这边是不是好多人都是自己做啊?	結婚の時着る衣装も自分で作っていたのですね。すごいです。基本的にこの人はみんな自分で作るのですか。
331	25:46	李 a	对呀, 自己做。现在我女儿不会做了, 就帮她做。	そうです。自分で作ります。今うちの娘はできないから、作ってあげます。
332	25:54	筆者	哦, 原来一般都是自己做, 现在是她不会做了哈。	そうですか。元々は自分で作っていたが、今若い人はみんなできないでしょう。
333	25:57	李 a	以前我们那帮人很少上学。	以前私の世代の人はみんな学校に行きませんでした。
334	26:00	筆者	很少上学哈, 都是在家学, 做农活?	学校に行っていなかったですね。ほとんど家において、農作業とかするのですか。
335	26:01	李 a	对呀。做农活, 种田种地啊, 帮妈妈爸爸种田种地啊这些的。	そうですよ。農作業をします。田圃や畑仕事で、母と父を手伝って田圃と畑の仕事をします。
336	26:10	筆者	那什么时候刺绣嘞?	じゃいつ刺繍しますか。
337	26:13	李 a	十多岁。	10 代の時。
338	26:14	筆者	十多岁, 然后种完田种完地回来就绣吗?	10 代に、畑仕事が終わったら、家に戻って刺繍しますか。
339	26:18	李 a	哎呀, 都没有时间绣。	あれは時間がなかったのですよ。
340	26:21	筆者	这样子啊。	そうですか。
341	26:22	李 a	对呀, 你看天天去种田种地呀, 割草啊, 喂牛啊, 这些, 很累。	そうですよ。毎日田圃や畑に行って、草取りとか、牛に餌をやるとか、こればかり、疲れますよ。
342	26:28	筆者	很累哈。	それは疲れるでしょう。
343	26:29	李 a	对呀, 你看天黑才从山上来, 来就累啦, 又想睡觉了, 就没有时间。	そうですよ。黒くなって山から家に戻って、家についたら疲れてしまいます。眠くなってしまって、時間がないです。
344	26:38	筆者	又想睡觉了哈。	寝たいでしょう。
345	26:43	李 a	以前我们这帮人最苦, 最苦。	以前我々の世代は最も苦しかったのですよ。最も苦しかったです。
346	26:46	筆者	是, 那个年代是好穷。	そうですね。あの時代は貧しかったですね。

347	26:49	李 a	对呀。	そうです。
348	26:54	筆者	那你还有时间，有时间绣那个，绣出结婚的衣服。	それでもあれを刺繍する時間があるのですね。結婚の時に着る衣装の刺繍を作りましたね。
349	27:01	李 a	啊？	あれ。
350	27:02	筆者	我说你还有时间绣结婚的衣服。	結婚の時の衣装を刺繍する時間があったのですねって。
351	27:04	李 a	我啊。	私はですか。
352	27:06	筆者	你多少岁结的婚啊？二十多？	何歳で結婚しましたか。20代の時ですか。
353	27:09	李 a	二十多岁。	20代の時でした。
354	27:10	筆者	哦，应该是，二十三四岁。	ああ、それは23、24歳の時ですか。
355	27:12	李 a	嗯，二十四岁。	うん。24歳の時です。
356	27:15	筆者	哦，你女儿都二十四岁了。	うん。娘さんが24歳ですものね。
357	27:16	李 a	对呀。	そうです。
358	27:19	筆者	慢一点，这个。原来你们学刺绣的时候你们那个线啊这些都是去买来的啊？	お気をつけて。これ。昔あなたが刺繍を学ぶ時の糸とかは買っていましたか。
359	27:32	李 a	啊，对啊，都去买啊。以前很穷很穷的，都没有。	ああ。そうですよ。買っていました。以前は貧しくて貧しくて、何もなかったですよ。
360	27:37	筆者	在哪里买啊？	どこで買うんですか。
361	27:38	李 a	就在我们家街上啊。	家に近い町です。
362	27:40	筆者	街上啊？有专门卖这个的呀？那像老一辈的她们可能都是自己，自己做线了是不是啊？	町ですね。これ売る専門店があるのですか。年配の方の世代は自分で糸を紡いだでしょう。
363	27:49	李 a	也是买的。	買っていました。
364	27:51	筆者	也是买的啊？	買ってましたか。
365	27:53	李 a	那做衣服那个是自己做的。蓝染的那个衣服嘛，以前就是穿那个蓝染的。	衣装を作るに使うのは自分で作っていました。藍染のあの衣装は、昔は藍染の衣装を着ていました。
366	28:02	筆者	哦，这样子啊。	ああ、そうですか。
367	28:03	李 a	全部穿那蓝染的。她自己要那个棉花，要什么啊，要那个来做线啊，做线才做布啊这些的。现在改时代啦，不会做啦，只会一点点绣花。	全部藍染の衣装を着ていました。彼女たちは自分で綿やなんとかで糸を紡いだり、糸を紡いで布を織るとか。今時代が変わりました。できなくなっています。刺繍だけはできます。
368	28:23	筆者	这样子啊。原来会做布啊，会纺线啊这些，你妈妈会吗？	そうですか。昔は自分で布や糸などは自分で作っていましたね。お母さんはできますか。
369	28:31	李 a	会呀。	できますよ。

370	28:32	筆者	她会哦。你们就不太会纺线了哦。	できますね。あなたの世代はあまり糸紡ぎはできなくなったのですね。
371	28:35	李 a	哎呀，不懂啦，一点都不懂了。	そうですよ。分からないです、全然分からなくなりました。
372	28:36	筆者	一点都不懂啊？没教你们啊？	全然分からないって、教えてもらわなかったですか。
373	28:39	李 a	现在也是不穿那种，很少穿那种，就不感兴趣啦，不知道做那个，哎呀做那个也是很麻烦的呀。	今はああいうのを着ないし、着るのは少ないから、興味がなくなります。あれを分からなくなります。まあ、あれを作るのもややこしいですね。
374	28:49	筆者	是吧。	そうですね。
375	28:50	李 a	要好多东西，现在全部出钱去买。	たくさんのお金が必要です。今は金で買えます。
376	29:05	筆者	哦，你绣这一片花了多长时间啊？	そうですか。この刺繍1枚を刺繍するにはどのぐらい時間がかかりますか。
377	29:08	李 a	一个星期。	1週間。
378	29:09	筆者	这一片花了一个星期啊？这条鱼。	この1枚で1週間ですか。この魚。
379	29:11	李 a	对啊。	そうですよ。
380	29:12	筆者	哇塞。还全都基本上是平绣哈。一条裙子（コーテェイ）要绣一百多片啊？	すごいですね。これはほとんど平繡ですね。スカート（コーテェイ）を作るには100枚以上の刺繡が必要でしょう。
381	29:20	李 a	对呀，你看。有五层，五层。	そうですよ。見れご覧。5段あります。5段。
382	29:21	筆者	哇，一百多片。	うわ。100枚以上ですね。
383	29:26	李 a	一层27张。五层，有多少啦？	1段には27枚があつて、5段だと、いくらになるでしょう。
384	29:29	筆者	哦哦。	そうかそうか。
385	29:31	李 a	一层有27张，五层呀。	1段に27枚で、5段ですよ。
386	29:35	筆者	哦哦，一条我看一下，一，二，哦，那是要差不多诶哈。	そうかそうか。一本には、1、2、そうですね、本当にそのぐらいは必要ですね。
387	29:39	李 a	对呀。	そうですよ。
388	29:40	筆者	27呀？	27枚ですね。
389	29:41	李 a	27，一层，一层就圈圈那种。	27で、1段、1段は1周回るといような感じです。
390	29:45	筆者	一圈嘛，一圈就是27。	1周ですね。1周は27枚です。
391	29:46	李 a	对呀。	そうですよ。
392	29:47	筆者	天，一百多张，那就是700多天嘞。一张要一个星期的话，	すごいです。100枚以上で、というのは700日以上もかかるということ

			那是要两三年哈。	すね。1枚は1週間かかるというのと、それは2、3年もかかるというのですか。
393	29:56	李 a	对呀。所以卖得贵呀。	そうですよ。だから高いのです。
394	30:02	筆者	你这个肯定不卖了嘛？	あなたのこれは売らないでしょう。
395	30:04	李 a	不卖，我绣都绣不好哦。	売りません。刺繍を仕上げるには大変だから。
396	30:12	筆者	那你女儿好幸福哦。现在好多她都懒得绣了。	娘さんが幸せですね。今多くの人は刺繍したくないですよ。
397	30:16	李 a	是啊，她也不会绣。	そうですよ。彼女も自分でできないから。
398	30:18	筆者	是吧，好多人会绣她都不绣了。	でしょう。刺繍ができてでも刺繍したくない人も多いです。
399	30:21	李 a	对呀。	そうです。
400	30:22	筆者	她都去买了。有做这个衣服来卖的呢。	みんな買うのです。衣装を手作りして売る人もいますね。
401	30:27	李 a	有。	います。
402	30:28	筆者	但是你们怎么不去买一套呢，就是那种卖，做手工卖的那种。	ところで、なぜ買いに行かないのですか。ああいう手作りのを。
403	30:37	李 a	哎呀，做不好，人家也是不喜欢要。	あれは良くないですよ。みんな好きではないです。
404	30:39	筆者	哦，这样子。	ああ、そうですか。
405	30:40	李 a	对呀。有些做得很好的，才有人要的要。做没有那么好，人家也，不想要嘛。花钱，她肯定要好的呀。	そうですよ。よく刺繍したのもあります、あれは買う人はいると思います。そんなによく刺繍していないのは、誰も欲しくないでしょう。お金を出したら、やはりいいものが欲しいですもの。
406	30:57	筆者	你们寨子上有没有去买给女儿的呀？	あなたのいる寨では娘のために買いに行く人はいますか。
407	31:00	李 a	有啊。	いますよ。
408	31:02	筆者	她是不会做吗？	できないからですか。
409	31:03	李 a	会做她就不买啦。	できれば買わないでしょう。
410	31:05	筆者	不会做就买哈。会做的也都还是要做一下吗？	できないから買うのですね。もしできるのであれば、やはり作りますね。
411	31:08	李 a	有一些，对呀。有一些也是没有时间做，会也是没有时间做那样子。	まあ、そうですね。作る時間がない人もいます。刺繍ができるとしても、作る時間がないというような。
412	31:15	筆者	哦，现在这个，这个旅游搞得很好，很忙是吧。	ああ、今観光業がよく発展していますので、みんな忙しいでしょう。

413	31:18	李 a	哎呀, 有一些也是, 有一些赚钱也要忙, 有一些不会赚钱就是去打工啊, 才有钱用啊。不打工啦都没钱用啦。	まあ、一部の人も、一部はお金を稼ぐには忙しいです。一部は金稼ぎが上手ではないので出稼ぎに行きません。それでお金があります。出稼ぎに行かないとお金がないです。
414	31:33	筆者	哦, 像你这个图案, 你是自己画的吗?	そうですね。この紋様はご自分で描いたのですか。
415	31:37	李 a	哎, 这个也是, 嗯, 有一些会画就画, 没会画就去买呀。	ええ、これも。絵図ができる人は自分で描きますが、できない人は買いに行きます。
416	31:46	筆者	有买的, 你是买的还是画的啊?	買う人もいますね。あなたは買ったのですか、自分で描いたのですか。
417	31:48	李 a	我也是买的。	私も買いました。
418	31:49	筆者	你也是买的啊? 嘿嘿。	あなたも買ったのですね。
419	31:50	李 a	不会画。	描けないからです。
420	31:52	筆者	不会画啊? 像买, 你在哪里买? 我知道那边就是有一个姓宋的, 还是姓什么的, 一个男的, 是不会说话, 听不见那个。	描けないですね。買うとすれば、どこで買いますか。私は知っているのはあそこで宋という男がいて、話せないし、耳も聞こえないあの人です。
421	32:03	李 a	啊, 就跟他买啊。	ああ、彼から買うのです。
422	32:04	筆者	你就跟他买的啊?	あなたも彼から買うのですか。
423	32:05	李 a	嗯, 跟他买啊, 是那个男的, 不会说话, 又会画画。	うん、彼から買います。あの男です。話せないが、絵が上手です。
424	32:06	筆者	那个男的嘛, 不会说话, 聋哑的那个, 画画画得好好啊。我都找他买了两张。	あの男はですね、話せない、聞こえないが、絵がすごい上手です。私も買いました。
425	32:14	李 a	对呀。你呀? 一张多少钱嘛?	そうですね。あなたも。1枚はいくらですか。
426	32:18	筆者	我之前买的那个有一个图是十块钱嘛。	この前買った時は1枚10元(日本円で約150円)でした。
427	32:22	李 a	哦。	うん。
428	32:23	筆者	大的那个。像这种小的多少钱啊? 这是一个一个的卖吗? 买来自己描是不是啊?	大きい方が。このような小さいのはいくらですか。こういうのは1枚1枚で売っていますか。あるいは1枚だけを買って、複写するのですか。
429	32:30	李 a	对, 自己来剪。	そうです。買って自分で切ります。
430	32:32	筆者	就买来, 然后剪是吧?	買ってきて、そして切るのですね。
431	32:35	李 a	剪啊, 钉啊, 这些自己弄的。	切るとか、縫い付けるとか、これは全部自分でやります。
432	32:39	筆者	是啊, 你是从吧这个图案钉上去开始算要一个多星期哦。	そうですね。つまりあなたは紋様を切って縫い付けることから刺繍して1週間かかるということですね。

433	32:44	李 a	对呀。	そうです。
434	32:46	筆者	那你这个还是天天在这里守摊子, 然后还有时间弄。	あなたは毎日店を見張るので、刺繍する時間があるのですね。
435	32:51	李 a	对呀。	そうです。
436	32:52	筆者	不然要是忙其他的话都没有(时间弄)。你现在还种地吗?	でないとはほかのことなら忙しくてする時間がないです。今は畑仕事をまだやっていますか。
437	32:56	李 a	种啊。	やっていますよ。
438	32:57	筆者	你家还有地啊?	まだ畑を持っているのですか。
439	32:58	李 a	有啊。	ありますよ。
440	33:01	筆者	宽不? 你家土宽不, 现在? 种来都大部分够家里面吃的那种哈?	広いですか。お宅の畑が広いですか。自分で植えたものは自給自足できそうですか。
441	33:09	李 a	对啊。	できますよ。
442	33:28	筆者	那你们一天在这里坐着要绣个花还好一点, 没事情做一天守这个也很累的了。	1日ここで刺繍したほうがいいですね、何もしなければお店を見張るだけなら逆に疲れるでしょう。
443	33:35	李 a	对。很累啊。守着。	そうです。疲れます。見張るだけでは。
444	33:39	筆者	又冷, 尤其是冷的时候哈。	寒いし。特に寒い時にはですね。
445	33:52	筆者	你这些东西进货都是到凯里进是吧? 原来我也会做这个娃娃。	ここで売っているものは凱里から仕入れたのでしょう。私もこの人形を作ったことがあります。
446	33:57	李 a	你也是会做这个啊?	あなたもこれを作ることができますか。
447	33:58	筆者	原来我家, 我家小姨她们就专门做这个娃娃来卖的。她们就专门生产, 然后包括钻那个木, 用机子钻。	うちのおばさんは昔この人形を作って売っていました。生産して、木を切ったりすることをしていました。
448	34:18	李 a	你们家有几姊妹啊?	あなたは何人キョウダイですか。
449	34:20	筆者	就我一个。	私1人です。
450	34:21	李 a	就你一个啊?	あなたの1人ですか。
451	34:23	筆者	独生子女啊, 那时候不让生嘛, 没办法啊。还是你们这边好。	一人っ子です。あの頃は生むことは禁じされたから、仕方がないですよ。こっちの方がよほどいいですね。
452	34:33	李 a	但是你们家, 你爸爸妈妈也是参加工作了吗?	でもあなたの家では父と母も仕事しているでしょう。
453	34:35	筆者	嗯, 我爸爸在, 在政府上班。我妈妈现在没有工作, 她原来是医生。	うん。父がしています。政府で。母は今仕事していませんが、もともとは医者です。
454	34:42	李 a	哦, 退休啦?	うん、定年したのですか。
455	34:43	筆者	嗯, 对, 没有上班啦。	うん、そうです。今は仕事していま

				せん。
456	34:46	李 a	那就好咯。一家人都好，一家人都好。还是可怜我们。	それはいいですね。ご家族はみんないいですね。我々は大変ですよ。
457	34:54	筆者	哪里，你们现在，现在比我们好啦。	そんな。今あなたたちは私たちよりいいのですよ。
458	34:59	李 a	哪里比你们好啊，怎么比你们好啊？你看我现在来摆一点摊，你看你在这里陪久了，你看有没有人要嘛？	どこがいいですか。毎日店を出して、あなたがここにいる間、誰も買ってくれませんでしたのよ。
459	35:08	筆者	这两天是没有多少人嘛，游客少了。生意好的时候可能一天有个几百千把块钱有没有？	それは今ここに来る観光客が少ないからです。よく売れる時に1日数百円（日本円で約1万円）から千元（日本円で約2万円）があるでしょう。
460	35:17	李 a	没有哦，几十块。	ないですよ。数十円（日本円で約千円）しかないです。
461	35:18	筆者	没有啊？那你们摆这个摊要交摊位费吗？	ないですか。ここで店を出すには家賃を払いますか。
462	35:23	李 a	要啊，怎么不要啊。	払いますよ。払わないわけないです。
463	35:25	筆者	多少钱一天？多少钱一个月啊？	1日いくらですか。1ヶ月いくらですか。
464	35:27	李 a	嗯，就是一千块。	うん、月千元（日本円で約2万円）です。
465	35:29	筆者	一千块一个月啊？那还是有点贵的呢。	月千元ですか。それはちょっと高いですね。
466	35:35	李 a	一千是一年的。	千元で1年です。
467	35:36	筆者	一千一年啊？那还可以哈。	千元で1年ですか。それならいいですね。
468	35:39	李 a	它本来是，应该是空的嘛，不知道那政府也是。	元々は空いているし、政府は何を考えているのか知りませんが。
469	35:46	筆者	应该帮扶一下的呀。	扶助して欲しいですね。
470	35:47	李 a	是啊。还收钱哈。	そうですね。お金を払うなんて。
471	35:49	李 a	是呀，还定期的呀。	そうですね。それに時間制限があります。
472	35:54	筆者	那你们也是，哎。	それは大変ですね。
473	35:55	李 a	自己门口也是被那个领导管。	自宅の玄関のあたりも政府のリーダーに管理されています。
474	36:03	筆者	哦。现在你们是比我们好诶，现在有点地种，我们那边没地种啦。	うん。今あなたたちは我々よりいいですよ。また畑があります。私のところではもうないです。
475	36:09	李 a	没有地种，你们有钱啊，有工作啊。	畑がなくても、お金があるでしょう、仕事もありますし。
476	36:12	筆者	有什么钱？	そんなことがないです。

477	36:13	李 a	一个月有一个月的钱用啊。	毎月毎月給料があるでしょう。
478	36:16	筆者	哎哟，那还不是差不多的。现在摆摊一个月也有。	まあ、あれはみんな一緒です。お店を出すのも収入があります。
479	36:22	李 a	那你不辛苦啊。你种田种地很辛苦的呀。	あなたたちのほうが楽です。畑仕事は疲れるのですよ。
480	36:25	筆者	那不是一种辛苦嘛。现在就上班的这种身体不好呀。	違う疲れだけです。今出勤して体には良くないですよ。
481	36:30	李 a	你看，出了好多汗才得了一点。	考えてみて、汗をいっぱいかいたのに、収入が少ししかいないです。
482	36:35	筆者	但是这种运动，每天有点事情做，像有时候我爸妈他们有时候在家呀，出去啊这些，身体不好啊。现在，动得少了。	でもこれは1つの運動ですし、毎日動いています。家の両親みたいに毎日家にいて、健康が良くないです。今すごい運動不足です。
483	36:46	李 a	你妈你爸爸啊？	ご両親ですか。
484	36:47	筆者	嗯，身体不好。年纪轻轻的，看着还没你们健康。像你们身体好，吃的都是自己种的，原来我们家也有土嘛，全部被征占了，然后就没有那个，自己不能种菜啊，都是买来吃，生活成本又高，又贵，现在那菜，贵的要死，而且那种菜不好吃。不像你们这里，菜又好吃，自己种的嘛，又甜，又好吃。	うん。体が弱いです。まだ若いのに、あなたたちのように体が丈夫ではありません。この人は自分で植えたものを食べているからですね。昔家も畑を持っていたんですが、徴用されてしまって、自分で野菜を植えることができなくなりました。買うしかないですね。高いし、おいしくないです。ここでは自分で植えているし、野菜が美味しいのですよ。
485	37:18	李 a	那你家贵阳也是没有多少种田种地哦。有没有农村啊？	じゃ貴陽では畑や田圃がないですよ。農村がありますか。
486	37:27	筆者	我家原来也是农村的啊，就是土地全部都被征占完了嘛，然后现在住的那个房子又窄，看你们现在每家住的房子，好宽哦。	家は農村にありますよ。畑や田圃が全部徴用されて、今住んでいる家は狭いですよ。この家はみんな広いです。
487	37:39	李 a	你也不知道我们家，我们也是一样的，我们是有一间多房，我们家也是很苦的。	あなたはうちの状況を知らないですよ。うちも同じ、部屋が1つしかなくて、大変ですよ。
488	37:48	筆者	那都是过苦日子过来的嘛。	それはこれからよくなりますよ。
489	37:50	李 a	对呀，我们有找得一块，早就没有了（？），像他们家有大房子租啊，一年几十万，哎呦我们家哦，靠打工。	そうですね。ほかの家のように大きな家があるから、家賃だけで年間数十万円（日本円で約数百万円）の収入があります。うちはバイトの収入しかありません。
490	38:04	筆者	那是哈，靠打工。那你丈夫是在这边工作还是？	そうそれは確かに。バイトだけだと。ご主人がここで何の仕事をしている

				ますか。
491	38:10	李 a	我丈夫也是种田种地啊，现在也是不方便，也是身体不好嘛。	うちの旦那は畑仕事ですよ。今は不自由で、体が良くないですよ。
492	38:17	筆者	哦，这样子啊。	ああ、そうですか。
493	38:18	李 a	脚手都不方便呀。	手足が不自由です。
494	38:20	筆者	是风湿吗？还是？	リウマチですか。それとも。
495	38:21	李 a	对呀，是风湿的。	そうです。リウマチです。
496	38:23	筆者	那风湿有一点那个的嘞，我们那边有一个得风湿的，他都已经那个动不了啦。就是已经瘫，差不多就是下不了地了。	リウマチはちょっと大変ですね。実家ではリウマチをかかった人がいて、もう動けないですよ。ベッドを離れることはできません。
497	38:33	李 a	对呀，下不了地呀，什么都不能干。	そうです。何もできませんよ。
498	38:35	筆者	这么严重啊？	そんなに深刻ですか。
499	38:37	李 a	嗯，严重啊。	そうですよ。
500	38:39	筆者	是严重得他收已经肿得，就是那种变形了。	深刻しすぎて腫れています。もう外見や形が変わってしまいました。
501	38:42	李 a	嗯，对对。	うん、そうそう。
502	38:44	筆者	哦，那他这个是有有点严重，风湿又治不好。	うん、これはちょっと大変ですね。リウマチは今では治れない病気ですね。
503	38:47	李 a	诶，叫什么，痛风那种啊。	ええ、なんというですか、痛風というような。
504	38:49	筆者	痛风，痛风。那是痛起来是很难受的。	痛風、痛風です。あれは痛い時はつらいですよ。
505	38:55	李 a	对呀。一直起不来啊，就是肿了。	そうです。腫れていて、起きられないです。
506	38:58	筆者	就是起不来。我们那边也是，那天我遇到嘛，天，都下不了床，天气好就好一点。	起きられないですね。実家の人も同じです。この間あの人と出あって、それは、ベッドから離れることもできないそうです。天気良ければ良くなりますが。
507	39:04	李 a	嗯，对，天气变化了就痛啦。	うん、そうです。天気が変わると痛くなります。
508	39:09	筆者	那你还是辛苦诶。	じゃあなたは大変ですよ。
509	39:10	李 a	你看我，自己种地自己吃。我说我嫁到你们家应该你喂我，哎呀，我来还是转来我喂你。	私を見て、自分で植えて、自分で食べます。「あなたの家に嫁いだ、あなたにご飯をしてもらうはずですが、逆に私があなたにご飯をたべさせている」と夫に言いました。
510	39:25	筆者	慢慢就好啦，儿子女儿长大了就好了。	これから良くなりますよ。息子さんも娘さんも大きくなります。

511	39:28	李 a	哎, 长大, 现在那个小孩啊, 不像你们那种啊, 好顽皮啊。	ああ、大きくなるなんか、今うちの子は、あなたのような子ではないですよ。わがままです。
512	39:34	筆者	好顽皮。	いたずらっ子ですね。
513	39:37	李 a	想吃懒得煮。	食べたくてもご飯を作らないんです。
514	39:40	筆者	嗯, 现在小孩是有点懒。都不爱自己做。	うん、今の若いひとはちょっとなまけものですね。自分で作るのはいやです。
515	39:45	李 a	哎呀, 你坐, 蹲起累不累啊?	あら、おかけになってください。しゃがんでいて、疲れるでしょう。
516	39:47	筆者	没事, 我站一下, 我今天一天都在坐着。	いや、大丈夫です。ちょっと立ちたいです。今日は1日座ったままでしたので。
517	39:57	李 a	哎呀, 农村人, 你看我啊, 一点书都不懂。	まあ、農村の人だから、私のように、何も分からないです。
518	40:00	筆者	你们原来没有上学嘛, 你们那个年代女生很少上学了。	あなたの世代は学校行っていなかったからですよ。あの頃女の子はみんなあまり学校に行けなかったですね。
519	40:05	李 a	对呀。	そうです。
520	40:07	筆者	你有几姊妹啊?	何人キョウダイですか。
521	40:09	李 a	我们娘家啊?	実家ですか。
522	40:10	筆者	嗯。	うん。
523	40:11	李 a	五姊妹。	5人キョウダイです。
524	40:12	筆者	五姊妹你是老大, 都是女儿吗? 有几个弟弟?	5人キョウダイで、あなたは長女ですか。全員娘ですか。弟とかいますか。
525	40:17	李 a	有三个女, 两个弟。	3人が女の子で、2人は男の子です。
526	40:21	筆者	哦, 三个女, 两个弟弟哦。弟弟是老三还是老幺?	うん。3人の女の子で、2人の男ですね。弟さんは3番目ですか、一番下ですか。
527	40:28	李 a	弟弟就是, 诶, 老三啊。	弟は3番目です。
528	40:31	筆者	老三, 老幺?	3番目、一番下ですか。
529	40:33	李 a	老三, 还有那个妹妹是老四。	3番目です。妹は4番目です。
530	40:35	筆者	妹妹是老四。老五是?	妹は4番目です。5番目は。
531	40:38	李 a	老五是弟弟。最小的弟弟。	5番目は弟です。一番下は弟です。
532	40:41	筆者	哦。	うん。
533	40:53	筆者	那你确实好辛苦。	あなたは確かに大変ですね。
534	40:56	李 a	嗯, 真的好辛苦的, 最辛苦的就是我。	うん。本当に大変ですよ。一番大変なのは私です。
535	41:01	筆者	慢慢就好啦。	まあ少しずつ良くなっていきますよ。

536	41:04	李 a	自己找自己吃，还要喂小孩。	自分で金を稼いで、子供も負担しなければなりません。
537	41:07	筆者	那也好啦。你还能找到自己吃，有些他自己都找不到吃的。	それはあなたは自分で稼げるからまだいいのですよ。自分で金を稼げない人もいます。
538	41:08	李 a	小孩读书。	子供を学校に行かせないと。
539	41:13	李 a	太辛苦了嘛。人家有人养嘛，我没人养啊，就辛苦一点。自己喂自己，还要喂小孩。种田种地。好辛苦。	大変ですよ。そういうのは養ってくれる人がいるから、私は誰も手伝ってくれないから、大変です。自分で稼いで、子供を養います。畑仕事もします。大変ですよ。
540	41:29	筆者	那也没办法啦。只能一点点来了。	それは仕方がないですね。少しずつして行くしかありません。
541	41:31	李 a	命苦啦。像人家说的命苦嘛，没有办法。	運命ですよ。人のいう運が悪いとのことですよ。仕方がないです。
542	41:38	筆者	慢慢会好的。	少しずつ良くなります。
543	41:41	李 a	好的早就好咯。不好一辈子就不好。	なればとつとよくなったのですよ。良くなければ一緒そのままです。
544	41:44	筆者	等你女儿以后工作啦，儿子出来了就好啦。是不是啊？	娘さんが仕事し始めて、息子も学校を卒業したら、きっとよくなります。そうじゃないですか。
545	41:50	李 a	哎哟，不知道有没有咯，有才好啦，没有也是，哎呀也是辛苦要了大把钱，可能是一大袋满，一大袋钱咯。	あら、それは知らないですよ。よくなればいいんですが、なれなくてもいいです。こんなに苦労してたくさんのお金が欲しいです。袋にいっぱい入れるほどのお金です。
546	42:07	筆者	钱多多哈。	たくさんのお金ですね。
547	42:08	李 a	对呀。	そうです。
548	42:12	筆者	不过这个摊位费一年一千那也还好嘞，不是特别贵啦。有个小门面嘛，相当于是。	ところでこの店の家賃が1年い千元というのはほんとうにいいですね。そんなに高くはないです。小さな店を持っているということです。
549	42:22	李 a	就是不知道今年是，今年抽到啦，不知道明年抽到不到。	それは今年はできますが、今年抽選に当たったので、来年はまだわかりません。
550	42:26	筆者	这是抽的呀？	これは抽選で決めているのですか。
551	42:28	李 a	对呀，四个村呀，来抽呀，来抽签呀，一个小组才有两个摊位，你看，一个小组有四十多个，四十户，才抽两个摊位呀。	そうですよ。4つの村で、みんな抽選します。1つの組みには2戸しか当たらないです。1つの組みは40数戸もあるのですよ。40戸に2戸しか当たりません。
552	42:43	筆者	四十户才抽两个人啊？哦，是	40戸に2人ですか。そうか、こうい

			这种的呀。	うもんですか。
553	42:47	李 a	对呀。	そうですよ。
554	42:52	筆者	那还是。	それは。
555	42:53	李 a	难做。	難しいですよ。
556	42:55	筆者	你要没有这个摊,你摆每天都得收出来有收回去哈,麻烦。	この店がなければ、露天の店だと、毎日出したり収めたりするのもややこしいでしょう。
557	43:01	李 a	对呀。没有摊位人家也是不让你们乱摆。	そうです。それに勝手に露天店を出すこともできないですよ。
558	43:08	筆者	是嘛。	そうですか。
559	43:09	李 a	但是要是没有摊位就去跟别人打工的呀。	この店がなければ、アルバイトをしなければなりません。
560	43:13	筆者	是啊。你去帮别人打过工吗?	そうですね。どこでアルバイトしますか。
561	43:17	李 a	我到处都做。	どこでもします。
562	43:20	筆者	到处都做啊,给人家餐馆里面?	どこでもって、食堂とかですか。
563	43:22	李 a	也是做啊。	それもやります。
564	43:25	筆者	那还是辛苦。	それは大変でしょうね。
565	43:26	李 a	嗯,洗碗洗菜啊这些。	うん、皿洗いや野菜洗いなどします。
566	43:30	筆者	是哦。	そうですか。
567	43:32	李 a	那个打扫卫生那个房间啊,也是做啊。跟砌房子啊,挑水泥啊,什么都做。	部屋の掃除とかも、しますよ。建築のアルバイトもあります。たとえば、コンクリートを担ったり、なんでもします。
568	43:42	筆者	你啊,这么多啊,挑水泥好重哦,很辛苦的。	あなたですか。こんなに。コンクリート思いでしょう。あれはつらいでしょうね。
569	43:47	李 a	是啊,腰酸背痛。	そうです。腰や背が痛いんです。
570	43:51	筆者	哎哟,那你也要注意身体嘞。	あら、お気をつけてね。
571	43:53	李 a	好辛苦,要是抽到摊位,要好一点。	大変です。抽選に当たったら、ちょっと楽になりますが。
572	43:59	筆者	就好一点哈。	それはそうですね。
573	44:00	李 a	没有摊位就是到处都做。	抽選に当たらなければ、私はなんでもします。
574	44:13	筆者	慢慢的好起来吧。	まあ、だんだんよくなります。
575	44:16	李 a	啊?	なに。
576	44:17	筆者	我说慢慢的好起来。	だんだん良くなるよって。
577	44:18	李 a	哎,命苦啦,好早都好啦,不好就一辈子都苦。	まあ、運が良くないから。よければとっくに良くなったのですよ。良くなければ、それは一生です。
578	44:26	筆者	那要看你怎么想啦。现在儿女	まあ、それはどう考えているかにも

			双全，两个孩子都争气。	よりもすが。今娘も息子もいるし、2人ともよく頑張っています。
579	44:33	李 a	诶，那小孩子不是要乖一点啊心好一点，小孩子要是不乖啊，心，压力也是好大。	まあ、子供がいい子にしてくれたらまだいいですよ。いい子にしてくれなければ、それもストレスですよ。
580	44:43	筆者	小孩子马上高考了是不是啊？	子供はすぐ大学入試でしょう。
581	44:46	李 a	嗯，还是高二。马上高考了嘛。	うん。今高2です。そろそろ大学入試ですね。
582	44:47	筆者	高二哈，还有一年。一年多。那你出来摆摊，做饭啊什么的，谁做呢？又跑回去做啊？	高2ですか。後1年ですね。じゃ店に来たら、家で誰がご飯を作るんですか。戻って自分で作るのですか。
583	45:01	李 a	哎呀，自己做呀。	自分で作ります。
584	45:03	筆者	又跑回去做啊？	家に帰ってですか。
585	45:04	李 a	不做又是随便吃，什么都，一碗粉啊，随便过。	作らなければ適当に食べます。なんでもいいから、ビーフンとか、適当に。
586	45:11	筆者	那你真的好辛苦。	それは大変ですね。
587	45:20	筆者	你怎么不卖其他东西呢？有规定必须卖这些吗？	なんかなぜ別のを売らないですか。これしか売ってはいけないですか。
588	45:25	李 a	对呀。他不让摆其他的呀。	そうですよ。他の物を売ることにはできないです。
589	45:28	筆者	这样子啊。	そうですか。
590	45:29	李 a	对呀。	そうです。
591	45:30	筆者	那这个东西在这里不好卖嘛。	これはよく売れますか。
592	45:32	李 a	不好卖也是没有办法啦，他这里又不当路。在那个旁边，人都还不来到。	よく売れないですが仕方がないですね。ここは町の中心でもないし、みんな来ないですよ。
593	45:46	筆者	不像人家那些想卖什么，什么好卖就去进什么来卖哈，你们这个我就看好像大家都差不多。	ほかの人のように売りたいものを売っているとは違います。なにがよく売れたら、それを仕入れますね。あなたの店を見たら、この街の店みんな同じものを売っていますね。
594	45:52	李 a	每一家都是一样。	みんな一緒ですよ。
595	45:53	筆者	都一样的。不好卖呀。又冷哈。	一緒ですか。それはよく売れないでしょう。寒いですし。
596	46:01	李 a	对呀。	そうですよ。
597	46:02	筆者	烧着火没有哦？	暖をとるものがありますか。
598	46:03	李 a	烧一点点。	少しあります。
599	46:04	筆者	哦，那还稍微好一点，要是风大下雨什么的，真的好冷。今	それならまあいいですが。風や雨の時は、本当に寒いですよ。今日も

			天又有点下雨，没有昨天天气好。	ちょっと雨が降ったし、昨日の好天気ではないですね。
600	46:14	李 a	今天也是算好的，有一段时间下雪更冷。	今日はまあまあですよ。雪を降っていた頃、それは寒かったですよ。
601	46:22	筆者	一月份的时候哈。	1月の時ですね。
602	46:23	李 a	对。	そうです。
603	46:26	筆者	今天销出去没有嘛？今天开张了没有？	今日は売れましたか。
604	46:29	李 a	还没开张呢。几十块。不比人家拿菜来卖。	まだです。数十元（日本円の約千円）しかないです。野菜を売ったほうがましです。
605	46:39	筆者	那倒是。	それは確かに。
606	46:40	李 a	在这里一下子你知道吗？好辛苦，所以才说啊，小孩子你们上学的时候努力，不像妈妈也是好吃亏的，那个小孩说：“你天天也是说那样，天天也是说那样。”	ここではですね、知ってますか。大変ですよ。だから子供に「子供の頃勉強しなければ、大きくなったらお母さんのように苦労しますよ」と言ったのです。子供が「毎日そう言われても、結局なにもかわらないじゃん」って言いました。
607	47:07	筆者	嗯，那还不然说什么啊，是不是？	うん。それはわかります。でしょう。
608	47:09	李 a	对呀。	そうです。
609	47:14	筆者	你们摆到几点呢，一般，下午？	普通ここは何時までですか。午後ですか。
610	47:17	李 a	下午，天黑就收啦。	午後ですね。黒くなったらもう閉店します。
611	47:18	筆者	天黑就收，没有灯哈，这里。	黒くなってからですね。ここは照明がないですか。
612	47:21	李 a	灯也是有，但是没人嘛。	照明はあるんですが、人がいません。
613	47:23	筆者	是，晚上没有什么人了。	そうか。よるは人が少ないですね。
614	47:26	李 a	天气冷，人家吃好饭就回家睡觉。	寒いから、みんな食事の後に帰宅して寝ます。
615	47:31	筆者	是是。我看他们进这个卖，像这种，他摆得有特色啊这些，要好卖一点，你是这个摊是不是？两个吗？	そうそう。なんかこれを仕入れて売っているのがすごく綺麗に並んだら、よく売れるよになるんじゃないですか。あなたの店はどうですか。この2つですか。
616	47:49	李 a	对呀，对呀。	そうよ、そうよ。
617	48:05	李 a	那你认她，认识她是干妈你也是常来吗？	あなたが知っている人、その人が知っているから、よくこっちに来られますか。
618	48:10	筆者	嗯，对，我经常来。隔个几个	うん。そうです。よくきます。数ヶ

			月又来住十来天。我放假就来。	月ごとにここに来て10数日泊まったりします。休みの時に来ます。
619	48:19	李 a	你一来到就是去她们家的吗？	来て彼女に家に行きますか。
620	48:22	筆者	她家现在在修房子，我都住她旁边那里有酒店嘛，就住酒店然后就在她家吃饭。	今彼女の家は改築していますので、私は隣にあるホテルに泊まっています。食事は一緒にしています。
621	48:30	李 a	这样。她家也是翻修啦？	そうですか。彼女の家も改築しているのですね。
622	48:32	筆者	翻修嘛，然后把老房子仓库那里拆了，然后就修个小三层。	改築だから、昔の倉庫を崩して、3階の家を建てます。
623	48:40	李 a	这样啊。	そうですか。
624	48:46	筆者	她绣花也绣得很好很好。	彼女は刺繍がとても上手ですよ。
625	48:48	李 a	肯定啊。	それはそうですよ。
626	48:51	筆者	她绣花绣得可好了。	彼女が作った刺繍がとても綺麗です。
627	48:52	李 a	我看也是啦。她是妇联主任。	私も思います。彼女は婦女主任をしているらしいですね。
628	48:57	筆者	哦，对对对，好像是。	うん。そうそうそう。そうみたいです。
629	49:09	李 a	她老公也是老干部啊。	彼女のご主人もなんかのリーダーらしいですよ。
630	49:11	筆者	嗯。老师嘛。原来是老校长。她（宋慧）也命苦啊。现在稍微好一点，不过每个人都有每个人的。	うん。学校の先生でした。元々は校長先生でした。彼女（宋H）も大変だったですよ。今は良くなっていますが、1人1人自分の人生があります。
631	49:28	李 a	苦处哦。	大変ですよ。
632	49:29	筆者	对对对。	そうそうそう。
633	49:33	李 a	没有哪一个随时好。	誰も一生幸せとは限らないですよ。。
634	49:35	筆者	就是。每个人都不容易。开开心心反正也是过，是不是呀。有饭吃。	そうです。みんな大変ですよ。楽しくて生活を送ることができますから、ね。ご飯があればいいです。
635	49:42	李 a	对呀。反正好不好也是嬉皮笑脸，随便过，天天也是想那个苦，那个没用，越想越苦，看开心也是开一点点。	そうですね。いいといっても良くないといっても、生活が続きます。毎日苦しいことばかりを考えても仕方がないですもの。苦しく思えば思うほど苦しくなります。楽しく思えば思うほど楽しくなります。
636	50:01	筆者	就是。今天人太少了。	そのとおりです。今日は人が少ないですね。
637	50:13	李 a	没人，都看不到人。你来几天啦？	いません。誰もいません。あなたはここに来て何日ですか。

638	50:19	筆者	我昨天到的。	昨日着いたばかりです。
639	50:28	筆者	这边, 那在这一排做生意的都是当地人了哈。	ここで商売しているのは全部西江の人ですね。
640	50:32	李 a	对, 都是当地人。当地也是才有一些人抽到, 不是都抽不到。	そうです。全部現地の人です。現地の人しか抽選に参加することができませんので。
641	50:41	筆者	不是当地的他都不让你抽了哦。	現地の人じゃなければ、抽選できないですね。
642	50:43	李 a	是呀, 不是当地的呀, 户口不在当地, 不让抽。	そうです。現地の人でなければ、戸籍がここに登録していなければ、抽選できません。
643	50:50	筆者	嗯。	うん。
644	50:58	筆者	今天赶集你去赶了吗?	今日は定期市に行かれましたか。
645	51:00	李 a	哎, 不知道买什么。	うん、何を買うのかわからないです。
646	51:02	筆者	就买点菜。我一会儿去赶集那里看一下。	ちょっと食材を買うとか。後でちょっと見に行きたいと思います。
647	51:08	李 a	去吧。	行ってらっしゃい。
648	51:09	筆者	你先忙, 我一会再找你玩。	お邪魔しました。後でまた来ます。
649	51:11	李 a	好的。	はい。

謝 辞

苗族の刺繍について研究し始まったのは修士課程の頃でした。修士課程の頃の私には現地調査のやり方、データのまとめ方、論文の書き方なども知りませんでした。今になって思えば、あっという間に、5年間という月日が経ちました。その目にも見えず、手にも触れることができない5年間の間に、私がやってきたことをまとめたのがこの博士論文というモノです。今思えば、刺繍の研究をし始めてから、学校の先生方、調査地の方々、家族からご支援、ご協力、ご助言、ご鞭撻をいただいたからこそ、そして多くの時間をかけてデータを整理し、1本1本の論文に仕上げてきたからこそ、博士論文を完成することができたと感じます。これはまさに1着のウーベイ(晴れ着)を製作することと一緒にではないかと実感しました。刺繍技法や紋様について同時代の女性の間で行われる相互学習、意見の交換、母親や姉妹との共同作業などを得て、糸の繰り返しによって1枚1枚の繡片が完成します。そしてその繡片を縫い付けていき、数年をかかってやっと1着のウーベイが作り上げられます。このように、膨大な時間の蓄積を要し、周りの人からの協力を得て完成することを考えれば、博士論文と苗族の刺繍服とは同じようなモノです。

この博士論文を作成するにあたり、多くの方々からご協力とご支援を賜りました。謹んで御礼を申し上げます。

まず修士過程の頃の私の副指導教員であり、博士課程の主指導教員である人文学部の小林宏至先生に真摯に感謝の意を申し上げます。修士課程から今まで小林先生から学問面の指導だけではなく、健康、生活、心理面などの多くの面で暖かく見守っていただく一方でした。研究が進まず心が折れた時も、自分の研究に自信を持ってない時も、身体的に辛い時も、いつも小林先生から励ましの言葉をいただいたおかげで、不完全である自分を受け入れ、何回倒れてもまた立ち直ることができました。博士課程に入る前にほとんど研究成果がなかった私を引受、在学中に学会発表や査読論文の投稿などを計画よく、終始丁寧かつ懇切なご指導をいただいたからこそ、この成果を達成できたと思っております。

また、本研究の検討にあたり、私の副指導教員である人文学部の高橋征仁先生、谷部真吾先生からたくさんのご教示と激励をいただきました。心から御礼を申し上げます。さらに、基盤演習において、森野正弘先生、馬彪先生、更科慎一先生、富平美波先生、柏木寧子先生、プロジェクト演習において、尾崎千佳先生、高木智見先生、横田尚俊先生、和田学先生、田中晋作先生から細かく、数多くのご意見とご教示をいただきました。深く感謝の意を申し上げます。

そして、本論文の審査にあたり、主指導教員、副指導教員、横田尚俊先生、馬彪先生、外部審査の吉野晃先生からご意見とご助言をいただきました。改めまして感謝の意を申し上げます。

続きまして、交換留学の頃からお世話になってきまして、博士論文の作成にあたりご意見をいただいたり、生活面にいろいろ心配をしてくださったり、暖かく見守ってくださった修士課程の師である坪郷英彦先生に真摯に感謝の意を申し上げます。留学の10年近くの間、学校外で日本文化を体験できる場を提供し、いつも美味しいお茶と暖かい慰めの言葉をくださった茶道の師である金谷玲子先生にも、この場を借りて「ありがとうございます」と感謝の言葉を申し上げたいです。

そして、フィールド調査にあたり、西江現地の李 YW さん、宋 H さん、李 WF さんなど多くの方々から調査のご協力をいただきました。調査中においては女性1人での調査地における安全、健康などにも気を使っていたきまして、真摯に感謝の意を申し上げます。

また、査読論文を投稿する度に、本論文を提出する際に、ネイティブ・チェックをしていただいた大谷泰子さんに心から感謝の気持ちを申し上げます。

最後に、長い間に異国への留学を理解してくださり、経済的な面でも、精神的な面でも支えていただいた家族に、また私の勉学を暖かく見守っていただいた親友たちに厚く感謝の意を申し上げます。